

# 福岡県の装飾古墳

福岡県文化財調査報告書 第288集

(下 巻)

2025

福岡県教育委員会



# 目次

## (上巻)

<b>I はじめに (大庭)</b> .....	1
1. 調査の経緯 .....	1
2. 調査の基本方針 .....	5
3. 調査の組織 .....	10
<b>II 調査の方法と範囲 (岸本)</b> .....	13
1. 装飾古墳の定義 .....	13
2. 図文の分類 .....	13
3. 凡例 .....	15
<b>III 福岡県の装飾古墳 (進村・吉田)</b> .....	21
(1) 福岡地域 .....	21
(2) 北九州地域 .....	43
(3) 小郡市・朝倉市郡地域 .....	77
(4) 久留米・うきは地域 .....	99

## (下巻)

(5) 南筑後地域 .....	177
(6) 筑豊地域 .....	215
(7) 京築地域 .....	239
<b>IV 福岡県の装飾古墳に関する基礎研究</b> .....	263
1. 装飾古墳研究史 (吉村) .....	263
2. 装飾古墳保存管理史 (吉村) .....	269
3. 古墳築造技術に基づく装飾横穴式石室墳の時期変遷 (小嶋) .....	276
4. 装飾古墳関連データ (吉田) .....	290
<b>V 総括 (大庭)</b> .....	305
1. 装飾古墳と非装飾古墳 .....	305
2. 福岡県内の装飾古墳の分布と特徴 .....	306
3. 装飾古墳の保存活用 .....	309

## 挿図目次

図 373	南筑後地域分布図 (国土地理院 1/200,000 地形図『熊本』に加筆) ……………	177
図 374	萩ノ尾古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『大牟田』に加筆) ……………	178
図 375	「筑後三池郡東米生古墳石室実測圖」(『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第二冊 P40 第八図) ……	178
図 376	萩ノ尾古墳墳丘測量図 (1/600) (大牟田市第 74 集『萩ノ尾古墳Ⅱ』第 9 図) ……………	179
図 377	萩ノ尾古墳石室実測図 (1/120) (大牟田市第 74 集『萩ノ尾古墳Ⅱ』第 15 図) ……………	179
図 378	奥壁図文拡大 (1/20) (大牟田市第 74 集『萩ノ尾古墳Ⅱ』第 16 図) ……………	179
図 379	萩ノ尾古墳石室奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	180
図 380	萩ノ尾古墳保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	180
図 381	萩ノ尾古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	181
図 382	倉永古墳・倉永茶臼塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『大牟田』に加筆) ……………	182
図 383	倉永古墳壁画残欠実測図 (大牟田市 1965『大牟田市史』上巻 P334) ……………	182
図 384	倉永古墳壁画残欠 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	183
図 385	倉永茶臼塚 1 号墳墳丘測量図 (1/400) (大牟田市第 15 集『倉永茶臼塚』第 4 図) ……………	183
図 386	倉永茶臼塚 1 号墳主体部実測図 (1/80) (大牟田市第 15 集『倉永茶臼塚』第 7 図) ……………	184
図 387	北壁線刻文様実測図 (1/15) (大牟田市第 15 集『倉永茶臼塚』第 8 図) ……………	184
図 388	北壁線刻文様 (大牟田市第 15 集『倉永茶臼塚』図版 5-(2)) ……………	185
図 389	石櫃山古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『大牟田』に加筆) ……………	186
図 390	石櫃山古墳墳丘測量図 (1/600) (大牟田市第 19 集『石櫃山古墳』第 3 図) ……………	186
図 391	石櫃山古墳主体部全景 (『新大牟田市史テーマ特講編』P137 図Ⅳ (4)-7) ……………	186
図 392	石櫃山古墳 1 号石棺 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	187
図 393	石櫃山古墳 2 号石棺 (大牟田市所蔵写真) ……………	187
図 394	1 号石棺実測図 (1/60) (大牟田市第 26 集『船形石棺保存処理Ⅱ』第 3 図) ……………	187
図 395	2 号石棺実測図 (1/60) (大牟田市第 25 集『船形石棺保存処理Ⅰ』第 4 図) ……………	187
図 396	丸山塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『八女』に加筆) ……………	188
図 397	丸山塚古墳全景 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	188
図 398	丸山塚古墳墳丘測量図 (1/400) (九州歴史資料館所蔵) ……………	189
図 399	丸山塚古墳石室袖石裝飾実測図 (1/30) (九州歴史資料館所蔵) ……………	189
図 400	丸山塚古墳石室実測図 (1/60) (九州歴史資料館所蔵) ……………	190
図 401	丸山塚古墳奥壁全景 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	191
図 402	乗場古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『八女』に加筆) ……………	192
図 403	「吉田村奈良山之圖」(矢野一貞 1853『筑後将士軍談』卷之第五十二) ……………	192
図 404	乗場古墳墳丘測量図 (1/1,600) (八女市第 5 集『立山山窯跡群』Ⅳ・総集篇第 36 図) ……………	192
図 405	乗場古墳石室実測図 (1/80) (八女市第 5 集『立山山窯跡群』Ⅳ・総集篇第 37 図を改変) ……………	193
図 406	乗場古墳奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	194
図 407	乗場古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	195
図 408	乗場古墳石室 e-Heritage 画像 (東京大学池内研究室 e-Heritage プロジェクト) ……………	196
図 409	稻荷山横穴群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『八女』に加筆) ……………	197
図 410	稻荷山横穴群第 18 号墓入口 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	197
図 411	稻荷山横穴群第 18 号墓玄室 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	197
図 412	線刻文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	198
図 413	稻荷山横穴群第 18 号墓正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……………	198
図 414	成合寺谷古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『野町』に加筆) ……………	199
図 415	埋戻し前の消毒 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	199
図 416	石棚前縁拡大 (九州歴史資料館所蔵写真) ……………	199

図 417	成合寺谷古墳石室実測図 (1/100) (瀬高町第 17 集『成合寺谷 1 号墳』第 6 図) .....	200
図 418	成合寺谷古墳石室全景 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	201
図 419	石神山古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『柳川』に加筆) .....	202
図 420	石神山古墳墳丘測量図 (1/800) (『みやま市史』資料編上巻 P274 図 2) .....	202
図 421	石神山古墳石棺・石人配置図 (福岡縣 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯 P35 挿図を もとに大正 15 年『三池郡誌』P267 作成図) .....	203
図 422	石神山古墳石棺 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	203
図 423	石人山古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『八女』に加筆) .....	204
図 424	「同郡一條村南岡石人圖」(矢野一貞 1853『筑後将士軍談』卷之五十一) .....	204
図 425	「石人村古墳石棺圖」(矢野一貞 1853『筑後将士軍談』卷之五十一) .....	205
図 426	「一條石人山之圖」(矢野一貞 1853『筑後将士軍談』卷之五十一) .....	205
図 427	石人山古墳墳丘測量図 (1/600) (広川町教育委員会所蔵データ) .....	206
図 428	「石棺及石槨実測圖」(昭和 12 年) (福岡縣 1937『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第十二輯第一図) .....	207
図 429	石人山古墳石人 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	207
図 430	「調査前ノ石棺前面」(福岡縣 1937『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第十二輯第四図) .....	208
図 431	石人山古墳石槨保存施設 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	208
図 432	石人山古墳石棺 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	209
図 433	石人山古墳石棺 (福岡縣 1933『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第八輯) .....	210
図 434	弘化谷古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『八女』に加筆) .....	211
図 435	弘化谷古墳墳丘測量図 (1/800) (広川町第 8 集『弘化谷古墳』第 4 図) .....	211
図 436	弘化谷古墳石室実測図 (1/100) (広川町第 8 集『弘化谷古墳』第 7 図) .....	212
図 437	石屋形壁面実測図 (1/50) (広川町第 8 集『弘化谷古墳』第 9 図) .....	212
図 438	弘化谷古墳石屋形 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	213
図 439	奥壁赤外線フィルム写真 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	213
図 440	石屋形天井部 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	214
図 441	弘化谷古墳の調査 (昭和 60 年) (九州歴史資料館所蔵写真) .....	214
図 442	筑豊地域分布図 (国土地理院 1/200,000 地形図『福岡』に加筆) .....	215
図 443	川島古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『飯塚』に加筆) .....	216
図 444	川島古墳墳丘測量図 (1/400) (飯塚市第 14 集『川島古墳』第 3 図) .....	216
図 445	川島古墳全景 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	216
図 446	川島古墳石室実測図 (1/100) (飯塚市第 14 集『川島古墳』第 5 図) .....	217
図 447	川島古墳奥壁実測図 (1/40) (飯塚市第 14 集『川島古墳』第 6 図) .....	217
図 448	川島古墳後室奥壁・石棚 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	218
図 449	城腰遺跡 1 号横穴墓位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『飯塚』に加筆) .....	219
図 450	城腰遺跡遠景 (穎田町第 7 集『城腰遺跡Ⅱ』巻頭図版 1) .....	219
図 451	1 号横穴墓奥壁線刻 (穎田町第 7 集『城腰遺跡Ⅱ』巻頭図版 2 一上) .....	219
図 452	奥壁線刻画実測図 (1/6) (穎田町第 7 集『城腰遺跡Ⅱ』第 21 図) .....	220
図 453	左側壁線刻画実測図 (1/3) (穎田町第 7 集『城腰遺跡Ⅱ』第 22 図) .....	220
図 454	1 号横穴墓実測図 (1/60) (穎田町第 7 集『城腰遺跡Ⅱ』第 20 図) .....	220
図 455	山王山古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『飯塚』に加筆) .....	221
図 456	山王山古墳全景 (飯塚市第 45 集『山王山古墳』図版 1-1) .....	221
図 457	奥壁文様実測図 (1/30) (飯塚市第 45 集『山王山古墳』第 7 図) .....	221
図 458	山王山古墳石室実測図 (1/100) (飯塚市第 45 集『山王山古墳』第 5 図) .....	222
図 459	山王山古墳玄室奥壁 (飯塚市第 45 集『山王山古墳』巻頭図版 1) .....	223

図 460	山王山古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) .....	223
図 461	経塚横穴墓群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『田川』に加筆) .....	224
図 462	経塚横穴墓群 110 号墓前室左袖側浮彫 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	225
図 463	後室奥壁屋根表現 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	225
図 464	経塚横穴墓群 110 号墓正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) .....	225
図 465	西郷横穴群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『大隈』に加筆) .....	226
図 466	西郷横穴群位置図 (『碓井町誌』P50 - 図 11) .....	226
図 467	発見当時の第 1 号横穴 (『碓井町誌』P49 - 右下) .....	226
図 468	発見当時の第 1 号横穴線刻 (『碓井町誌』P49 - 左上) .....	227
図 469	西郷横穴群遠景 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	227
図 470	西郷横穴群近景 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	227
図 471	西郷横穴群の他の横穴墓室内 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	227
図 472	王塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『飯塚』に加筆) .....	228
図 473	発見当時の王塚古墳 (桂川町教育委員会『王塚古墳ハンドブック』P9) .....	228
図 474	福岡縣社寺兵事課による調査 (左端: 伊勢幸平 右端: 西岡二馬) (桂川町教育委員会 『王塚古墳ハンドブック』P10) .....	228
図 475	「玄門部裝飾見取圖」(福岡縣第十一輯『筑前王塚古墳』図版第一二) .....	229
図 476	「玄門部内側裝飾見取圖」(福岡縣第十一輯『筑前王塚古墳』図版第一二) .....	229
図 477	「石室内観見取圖」(福岡縣第十一輯『筑前王塚古墳』図版第一二) .....	229
図 478	双脚輪状文の一例 (福岡縣第十一輯『筑前王塚古墳』図版第六一) .....	230
図 479	靱の一例 (福岡縣第十一輯『筑前王塚古墳』図版第六二) .....	230
図 480	盾の一例 (福岡縣第十一輯『筑前王塚古墳』図版第六三) .....	230
図 481	「王塚古墳石室裝飾模写圖 - 西南壁面」(京都帝国大學文學部 1940『筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳』 京都帝国大學文學部考古學研究報告 第十五冊 図版第九) .....	230
図 482	「王塚古墳石室裝飾模写圖 - 主室奥壁面」(京都帝国大學文學部 1940『筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳』 京都帝国大學文學部考古學研究報告 第十五冊 図版第一一 - 下) .....	231
図 483	「王塚古墳石室裝飾模写圖 - 主室前壁面」(京都帝国大學文學部 1940『筑前国嘉穂郡王塚裝飾古墳』 京都帝国大學文學部考古學研究報告 第十五冊 図版第一二) .....	231
図 484	王塚古墳墳丘実測図 (1/600) (『特別史跡王塚古墳の保存』考古学的調査 - 第 1 図) .....	232
図 485	王塚古墳石室実測図 (1/80) (桂川町第 13 集『国指定特別史跡王塚古墳』付図) .....	233
図 486	奥壁石屋形・石棚 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	234
図 487	玄門部 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	234
図 488	玄室前壁 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	235
図 489	伊勢幸平「王塚古墳羨室右壁壁画」(昭和 10 年) (桂川町所蔵油絵 伊勢幸平 1935 作) .....	235
図 490	王塚古墳石室 e-Heritage 画像 (東京大学池内研究室 e-Heritage プロジェクト) .....	236
図 491	王塚古墳模型 (玄室石屋形) (桂川町所蔵写真) .....	237
図 492	京築地域分布図 (国土地理院 1/200,000 地形図『福岡』『大分』『中津』に加筆) .....	239
図 493	皆見大塚古墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『行橋』に加筆) .....	240
図 494	皆見大塚古墳全景 (東九州道 17 集『皆見大塚古墳』図版 3-2) .....	240
図 495	皆見大塚古墳墳丘測量図 (1/300) (東九州道 17 集『皆見大塚古墳』第 6 図) .....	241
図 496	皆見大塚古墳石室実測図 (1/100) (東九州道 17 集『皆見大塚古墳』第 57 図) .....	241
図 497	玄室玄門 (東九州道 17 集『皆見大塚古墳』図版 12) .....	242
図 498	玄室玄門背面 (東九州道 17 集『皆見大塚古墳』図版 13) .....	243
図 499	玄室左側壁 (東九州道 17 集『皆見大塚古墳』図版 19) .....	243
図 500	玄室発泡ウレタン吹付状況 (九州歴史資料館所蔵写真) .....	244

図 501	皆見大塚古墳現況 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	244
図 502	皆見大塚古墳正射投影画像 (1/120) (科研費 (基盤研究 (A) 「VR 画像を活用した日本装飾古墳 デジタルアーカイブの構築」 (1922026) 2007 ~ 2010 年) ……	244
図 503	三ツ塚古墳群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『行橋』に加筆) ……	245
図 504	奥壁線刻文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	245
図 505	側壁線刻文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	245
図 506	三ツ塚古墳群 2 号墳全景 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	246
図 507	三ツ塚古墳群 2 号墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵写真) ……	246
図 508	黒部古墳群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『椎田』に加筆) ……	247
図 509	黒部古墳群 6 号墳石室実測図 (1/100) (玄洋開発株式会社 1979 『黒部古墳群』 第 24 図) ……	247
図 510	左側壁線刻実測図 (1/6) (玄洋開発株式会社 1979 『黒部古墳群』 第 28 図) ……	248
図 511	黒部古墳群配置図 (1/3,000) (玄洋開発株式会社 1979 『黒部古墳群』 第 2 図) ……	249
図 512	黒部古墳群 6 号墳石室 (玄洋開発株式会社 1979 『黒部古墳群』 図版 8 - (2)) ……	249
図 513	左側壁線刻分解図① (1/5) (玄洋開発株式会社 1979 『黒部古墳群』 第 25 図) ……	249
図 514	左側壁線刻分解図② (1/5) (玄洋開発株式会社 1979 『黒部古墳群』 第 26 図) ……	249
図 515	穴ヶ葉山古墳群・穴ヶ葉山南古墳群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『土佐井』に加筆) ……	250
図 516	穴ヶ葉山古墳群地形測量図 (1/1,200) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 第 2 図) ……	250
図 517	穴ヶ葉山古墳測量図 (1/500) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 第 6 図) ……	251
図 518	穴ヶ葉山古墳全景 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	251
図 519	穴ヶ葉山古墳石室実測図 (1/120) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 第 7 図) ……	252
図 520	墓道線刻拓本 (1/6) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 第 9 図) ……	252
図 521	羨道の木葉文拓影 (1/6) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 P79 第 4 図) ……	252
図 522	石室全景 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	253
図 523	木葉文拡大 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	253
図 524	飛翔する鳥 (1/2) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 P81 第 6 図右) ……	253
図 525	枝と鳥拡大 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	253
図 526	木葉の先端と虫 (1/2) (大平村 10 集『史跡穴ヶ葉山古墳』 P81 第 6 図左) ……	253
図 527	穴ヶ葉山古墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵写真) ……	254
図 528	穴ヶ葉山 3 号墳墳丘測量図 (1/400) (大平村 3 集『穴ヶ葉山古墳群』 第 7 図) ……	255
図 529	穴ヶ葉山 3 号墳石室実測図 (1/120) (大平村 3 集『穴ヶ葉山古墳群』 第 8 図) ……	255
図 530	玄室線刻拓影 (1/10) (大平村 3 集『穴ヶ葉山古墳群』 第 9 図) ……	256
図 531	穴ヶ葉山 3 号墳全景 (昭和 59 年) (大平村 3 集『穴ヶ葉山古墳群』 図版 5 - 上) ……	256
図 532	穴ヶ葉山 3 号墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ) ……	256
図 533	穴ヶ葉山南 3 号墳全景 (大平村 2 集『穴ヶ葉山南古墳群』 図版 4 - (2)) ……	257
図 534	穴ヶ葉山南 3 号墳石室実測図 (1/100) (大平村 2 集『穴ヶ葉山南古墳群』 第 9 図) ……	257
図 535	穴ヶ葉山南 3 号墳石室線刻拓影 (1/8) (大平村 2 集『穴ヶ葉山南古墳群』 第 11 図) ……	257
図 536	百留横穴墓群位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『土佐井』に加筆) ……	258
図 537	百留横穴墓群配置図 (1/800) (上毛町第 13 集『百留横穴墓群』 第 2 図) ……	258
図 538	百留横穴墓群 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	259
図 539	1 号墓実測図 (1/80) (上毛町第 13 集『百留横穴墓群』 第 3 図) ……	259
図 540	1 号墓入口全景 (九州歴史資料館所蔵写真)……………	259
図 541	6 号墓実測図 (1/80) (上毛町第 13 集『百留横穴墓群』 第 9 図) ……	260
図 542	6 号墓入口拡大 (上毛町第 13 集『百留横穴墓群』 図版 5 - 左下) ……	260
図 543	山田 1 号墳位置図 (国土地理院 1/25,000 地形図『土佐井』に加筆) ……	261

図 544	山田 1 号墳全景 (九州歴史資料館所蔵写真).....	261
図 545	文様拡大① (九州歴史資料館所蔵写真).....	261
図 546	山田 1 号墳石室正射投影画像 (1/100) (九州歴史資料館所蔵画像データ).....	262
図 547	文様拡大② (九州歴史資料館所蔵写真).....	262
図 548	『筑後将士軍談』に記された重定古墳石室の図面.....	263
図 549	『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』.....	264
図 550	王塚古墳実測図 (梅原・小林 1940).....	264
図 551	移築された日岡古墳の明治期の覆屋.....	270
図 552	日岡古墳の保護施設 (明治期の覆屋と遮蔽扉).....	270
図 553	『特別史跡王塚古墳の保存』.....	271
図 554	鳥船塚古墳覆屋 (昭和 58 年).....	271
図 555	筑後川流域装飾古墳同時公開のチラシ.....	273
図 556	九州における横穴式石室墳の築造範型分類と近縁関係.....	277
図 557	横穴式石室墳分類と横穴式石室分類の対応関係 (1/250).....	279
図 558	福岡県の装飾古墳分布図.....	280
図 559	南筑平野の装飾古墳.....	282
図 560	両筑平野の装飾古墳.....	284・285
図 561	筑後 B 型若宮・屋形系列の石室と彩色壁画の連動変遷 (石室 S=1/240, 壁画縮尺任意).....	286
図 562	筑前・豊前の装飾古墳.....	288
図 563	装飾古墳ではないと判断された古墳 (筑紫野市 上の浦古墳) (九州歴史資料館所蔵写真).....	305
図 564	敲打による装飾 (久留米市 益生田古墳群 A 群 12 号墳) (九州歴史資料館所蔵写真).....	305
図 565	日輪寺古墳石障の文様拡大 (九州歴史資料館所蔵写真).....	306
図 566	日岡古墳の具象文 (舟) (九州歴史資料館所蔵写真).....	307
図 567	多重同心円文 (久留米市 下馬場古墳) (九州歴史資料館所蔵写真).....	307
図 568	西館古墳後室奥壁 (九州歴史資料館所蔵写真).....	308
図 569	田代太田古墳 (佐賀県鳥栖市) (九州歴史資料館所蔵写真).....	309
図 570	王塚古墳石室内の支柱 (九州歴史資料館所蔵写真).....	310
図 571	実物大模型 (可動式) (筑紫野市 五郎山古墳館) (九州歴史資料館所蔵写真).....	311

## 表目次

表 3	藤本四八撮影 装飾古墳写真フィルム一覧 (長野県飯田市美術博物館所蔵 福岡県内装飾古墳のみ).....	293・294
表 4	榊晃弘撮影 装飾古墳写真一覧 (デジタル化分 福岡県内装飾古墳のみ).....	294
表 5	九州歴史資料館所蔵 装飾古墳写真フィルム一覧.....	295
表 6	九州歴史資料館・九州国立博物館所蔵 装飾古墳写真パネル一覧.....	296
表 7	熊本県立装飾古墳館撮影・所蔵 福岡県内装飾古墳写真一覧.....	297
表 8	日下八光福岡県内装飾古墳模写絵一覧 (国立歴史民俗博物館所蔵).....	298・299
表 9	伊勢幸平・藤野不二男 王塚古墳模写絵一覧.....	300
表 10	東京大学池内研究室 e-Heritage プロジェクト調査古墳一覧 (福岡県内装飾古墳のみ).....	300
表 11	九州歴史資料館所蔵 福岡県内装飾古墳写真デジタルデータ一覧 (DWPKNB).....	300・301
表 12	写真計測による正射投影画像製作一覧.....	301
表 13	彩色系装飾古墳の色調所見一覧.....	302・303
表 14	彩色系装飾古墳の顔料分析詳細所見一覧.....	304

(4) 南筑後地域



图 373 南筑後地域分布图 (1/200,000)

## 55 萩ノ尾（はぎのお）古墳

**立地** 福岡県の南部、熊本県との県境に近い位置にある古墳である。諏訪川中流域右岸の庄原台地と呼ばれる台地の西端部、標高 41m の場所に位置しており、眼下に諏訪川下流域を一望できる眺望に優れた場所にある。萩ノ尾古墳が立地する小丘は「萩ノ尾弁天山」とも称される。

庄原台地は阿蘇山の噴火に伴う火砕流堆積物によって形成され、周囲には凝灰岩が分布する。西側 600m の位置には石製表飾を有したことで知られる熊本県荒尾市三ノ宮古墳がある。

**経緯** 開口の時期は不明だが、遅くとも元禄年間までには開口し、里人の信仰の場として奥室に石造観音像が祀られていたようである。観音像の台座には元禄五年（1692）在銘の刻字が見える。（『熊本縣 1925』）には「辨才天古墳」として取り上げられ、「複合室の奥壁に朱の装飾紋を施せる」と施文について解説がある。同書には池上年による石室実測図の掲載もある。（『三池郡教育会 1926』）には「玉川村萩尾の古墳」として紹介され、肥後の古墳型式を採用し、朱に蛇ノ目形に似た文様がある点などは「郡中唯一」と強調される。『三池山夜話』には「三池郡玉川村萩尾穴観音」として項目が立てられ、元禄五年観音像設置による霊窟再興の経緯や、肥後形式の石室で石棚・彩色壁画を有すること等が詳述される。

昭和 36 年 4 月に国の史跡に指定され、翌 38 年 3 月には開口部を保護するための覆屋が設置された。後室内の観音像はこの時に石室外へと移され、現在は古墳南側隣接地の覆屋に置かれている。昭和 50 年には石室密閉工事が施工された。

平成 11・12 年度には墳丘規模の確認を目的としたトレンチ調査、令和 3～5 年度には墳丘・石室内の詳細確認調査が大牟田市教育委員会によって実施された。

**名称** 辨才天古墳（『熊本縣 1925』） 玉川村萩尾の古墳（『三池郡教育会 1926』）  
 萩尾古墳（通俗に穴観音）（『大牟田市役所 1944』） 萩ノ尾古墳（『大牟田市 1965』）  
 萩ノ尾古墳（『大牟田市教委 2001』）

**所在地** 大牟田市東萩尾町

**指定** 国指定史跡 昭和



図 374 萩ノ尾古墳位置図（1/25,000）

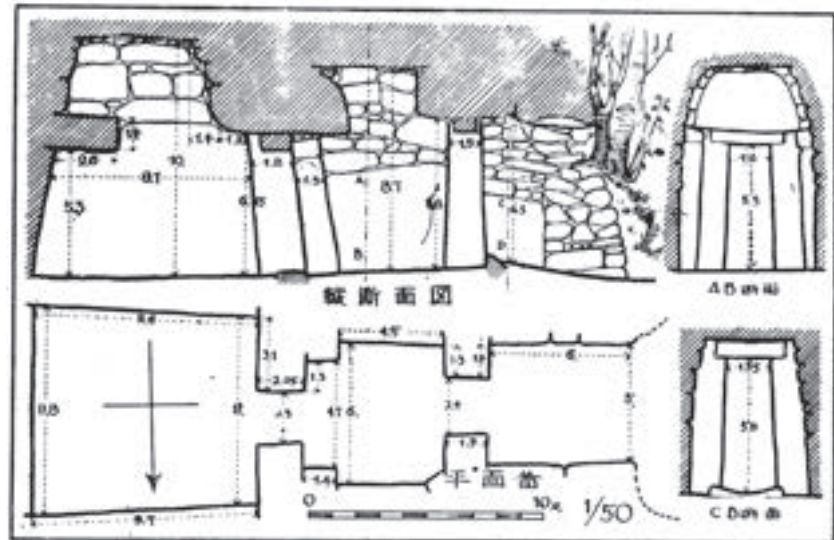


図 375 「筑後三池郡東米生古墳石室実測圖」（『熊本縣 1925』）



図 376 萩ノ尾古墳墳丘測量図 (1/600)

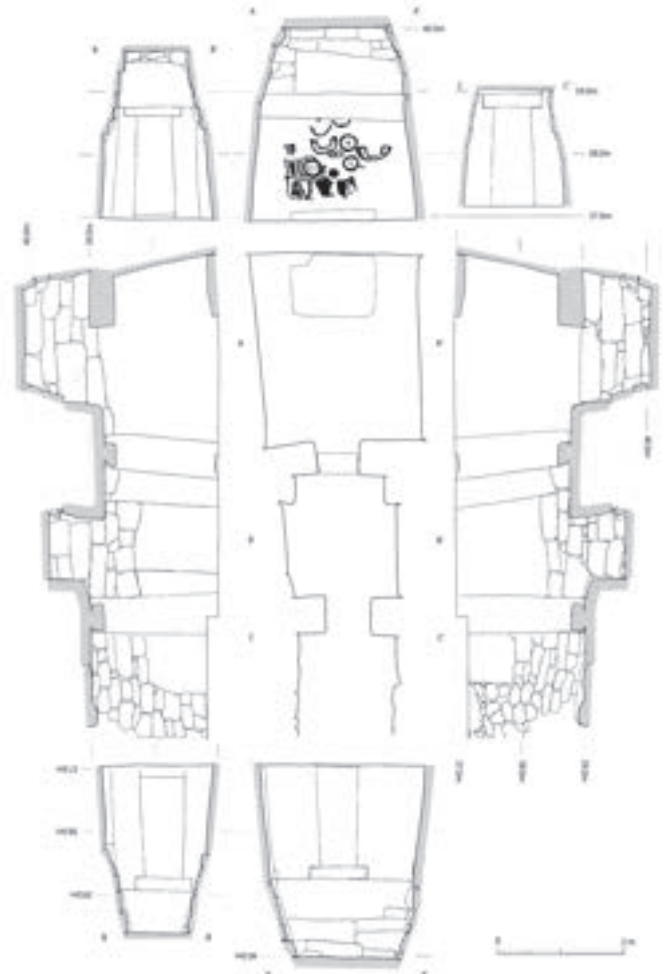


図 377 萩ノ尾古墳石室実測図 (1/120)

36年4月5日

**墳丘** 円墳（径22m、高4.4m 二段築成・周溝未検出）

**主体部** 横穴式石室（複室構造・西側に開口・石棚・阿蘇熔結凝灰岩切石使用）全長7.9m、後室長2.95m、後室幅2.68m、後室高3.05m

**装飾** 現状では奥壁石棚下の壁面のみ認められるが、三十余年前までは右壁にも認められたという（1965『大牟田市史』上巻）。描画は赤一色で描かれる。奥壁の描画構成は二つの群に分かれる。右上の一群は7つの図文からなる。中心に赤点を配した同心円が2点、上下に並び、その左右にゴンドラ形の舳・艫の高い大型船が各1点、さらに左の大型船の上には小型船が2点、またその右下には楕円形の文様が描かれる。

左下の一群は9つの図文からなる。上段には小型の盾状、中段には左から大型の盾、大型円形文、塗りつぶされた小型円形文との三つが並ぶが、中央の円形文の左右には弓ともみられる描線が各



図 378 奥壁図文拡大 (1/20)



図 379 萩ノ尾古墳石室奥壁

1点ある。下段には左から、塗りつぶされた三角形文と線描のみの三角形文が交互に並び、次に圭頭状と平頭状のどちらも塗りつぶされた描画がある。この下段にのみL字状の線が左端に描かれている。

**顔 料** 朱（『熊本縣 1925』）

赤（「山崎一雄 1951・1974」）

赤（鉄丹色）（『大牟田市教委 1968』）

赤（『大牟田市教委 2024』）

**遺 物** 石室内出土品は残っていない。

平成 11・12 年度、令和 3～5 年度墳丘周辺確認調査時に須恵器・土師器出土（大牟田市教育委員会）

**年 代** 6 世紀末～7 世紀初頭

**調査歴** 大正 14 年頃 池上年による石室内実測調査

昭和 43 年頃 三島格・渡辺正気による墳丘測量・石室内実測調査

平成 11・12 年度 墳丘規模確認調査（大牟田市教育委員会）

令和 3～5 年度 墳丘規模確認、墳丘測量・石室内実測調査（大牟田市教育委員会）

**整備歴** 昭和 37 年 保存屋設置工事（石室入口部分に柵設置）

昭和 50 年 石室密閉工事（石室入口部分にアルミ扉設置、保存屋観察窓封鎖、扉設置）

昭和 61 年 保存屋扉・石室入口扉更新

**現 況** 石室入口に覆屋設置、石室内にガラス扉設置後、現状保存



図 380 萩ノ尾古墳保存施設

**図面等** 石室内実測図  
 (『熊本縣 1925』池上年  
 実測)

墳丘実測図・石室内実測  
 図 (『大牟田市 1965』三  
 島格・渡辺正気実測)

平成 11・12 年度 墳丘  
 周辺トレンチ図 (大牟田  
 市教育委員会)

令和 3～5 年度 墳丘周  
 辺トレンチ図、石室実測  
 図、壁画実測図

(写真計測) 大牟田市教  
 育委員会 2022. 1. 21 計測  
 (写真計測) 九州歴史資  
 料館 2023. 1. 26 計測

**写 真** 九州歴史資料館  
 1975 撮影 4×5 カラー  
 ネガ 2 点、カラーリバー  
 サル 6 点

九州歴史資料館撮影 6×  
 7 カラーネガ 18 点

九州歴史資料館 03. 9. 30 撮影 35mm カラーリバーサル 4 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 19 点、カラーネガ 15 点

九州歴史資料館 2023. 1. 26 撮影デジタル写真データ

大牟田市教育委員会平成 11・12 年度調査時撮影写真

大牟田市教育委員会令和 3～5 年度撮影デジタル写真データ

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 12 点 (No. 0299～0301、0934～0938、1432～1435)

**パネル** 九州歴史資料館 1 点 (132×165) 九州国立博物館 1 点 (127×158)

**文 献** 熊本縣 1925『熊本縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第二冊

三池郡教育会 1926『三池郡誌』名著出版 1973 復刻

本木榮 1934『三池山夜話』(平成 23 年秀功社復刻版)

大牟田市役所 1944『大牟田市史』

大牟田市史編集委員会 1965『大牟田市史』上巻 大牟田市

大牟田市教育委員会 1973『大牟田市の文化財』

大牟田市教育委員会 2001『萩ノ尾古墳』大牟田市文化財調査報告書第 54 集

大牟田市教育委員会 2024『萩ノ尾古墳Ⅱ』大牟田市文化財調査報告書第 74 集



図 381 萩ノ尾古墳石室正射投影画像 (1/100)

## 56 倉永（くらなが）古墳壁画残欠

## 57 倉永茶臼塚（くらながちやうすづか）1号墳

**立地** 福岡県の南部で、熊本県にも近い大牟田市の北部にある。隈川と白銀川との間に挟まれた、甘木山（123m）を最高所とする甘木山丘陵の東麓に位置する。付近には他に3基の古墳が確認されており、計4基で「倉永茶臼塚古墳群」を形成する。また、これとは別の古墳で線刻石材が採取された「倉永古墳」という名称の古墳がある。

倉永茶臼塚1号墳は標高77.9mの丘陵頂部に占地し、2・3号墳は少し離れて標高84.1mの丘陵頂部に占地する。そのうち、線刻が確認されたのは倉永茶臼塚1号墳である。

**経緯** 『大牟田市役所1944』には「倉永地方には、茶臼塚と称する大古墳あり。之当地方の最貴き人の墓所なるべし。茶臼塚は円塚より念入りに構造せられたる前方後円塚の一種にして、貴人の為に築造するものなり。…この塚は、未だ発掘せられたる痕跡なきは、有りがたきことと思ふ。夫より少し上方に向ひて登れば、無名の古墳あり。已に発掘せられ、石槨壊れ、頂上の松等已に枯れ、哀れげに見ゆ。」とある。倉永茶臼塚古墳群1～3号墳と照合すれば、未発掘の前方後円塚と表現されているのが2・3号墳で、損壊を受けている円墳が1号墳に比定される。

昭和30年1月10日、西鉄倉永駅より県立甘木公園に至る道路の拡張工事の際に古墳が破壊され、石室構築石材に線刻が確認されたため、石材が保護されたようである。不時発見のため石室は既に破壊されて10数個の石を残すのみだったが、小規模な横穴式石室を主体部とする円墳で、石材は奥壁左側の石材とも推定されるが詳細は不明。線刻のある石材はその後、覆屋で保護された状態で屋外に保管されていたが、現在は大牟田市立三池カルタ・歴史資料館に展示・保管中である。

倉永茶臼塚1～3号墳については損壊の進行が懸念されたため、昭和53年に大牟田市教育委員会が保存目的の発掘調査を実施した。3基の古墳のうち1号墳の石棺系竪穴式石室北側壁面に線刻文様が確認されたため、装飾古墳の可能性が指摘された。

**所在地** 大牟田市大字倉永

<倉永古墳壁画残欠>

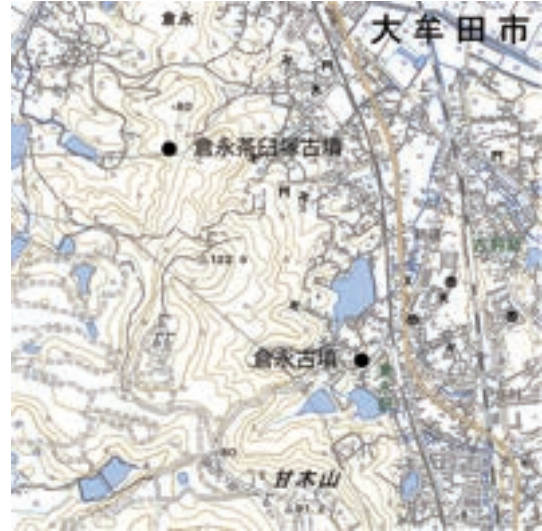


図 382 倉永古墳・倉永茶臼塚古墳位置図 (1/25,000)

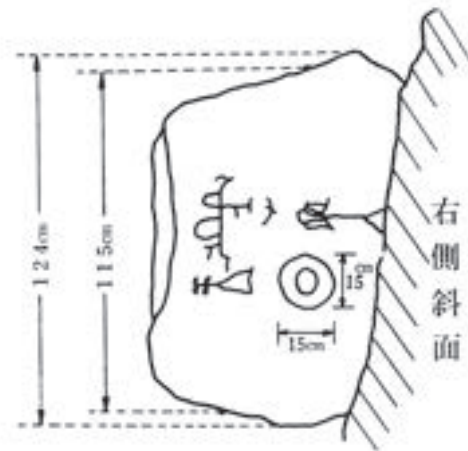


図 383 倉永古墳壁画残欠実測図 (『大牟田市 1965』)

**名称** 倉永古墳 (『大牟田市 1965』)

倉永古墳壁画残欠 (昭和 57 年 4 月 1 日  
指定名称)

**指定** 県指定文化財 (考古資料) 「倉  
永古墳壁画残欠」 昭和 57 年 4 月 1 日

**墳丘** 円墳 (破壊後確認・詳細不明)

**主体部** 横穴式石室 (破壊状態で確認さ  
れたため詳細不明・花崗岩石材使用)

**装飾** 非常に彫りが浅く識別困難なも  
のが多い。

上段右に艫舳 (ともへ) が高く荷を積  
んだと考えられる船が描かれ、その下に  
開脚した人物らしき文様が描かれる。下  
段右にも開脚状の図があるが、この上部  
左右に弧状の線が数条みられる。その左  
側に二重の円文があるが、他の装飾と比  
較して彫りが深く沈線の幅も広い。コン  
パスを使用した円ではなくややいびつで  
ある。外円の上には弧状の沈線がある。

**年代** 6 世紀後半以降 (石材から類推)

**現況** 大牟田市立三池カルタ・歴史資  
料館に移築保存後、展示

**図面等** 石材・線刻壁画実測図 (『大牟  
田市 1965』掲載)

**写真** 隣接地の道路建設時に撮影され  
た 35mm モノクロ (大牟田市教育委員会)  
九州歴史資料館 1980 撮影 4 × 5 カラー  
リバーサル 2 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバー  
サル 13 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース  
6 点 (No. 0298、No. 0929 ~ 0933)

**パネル** 九州歴史資料館 1 点 (125 ×  
110)

< 倉永茶臼塚 1 号墳 >

**名称** 倉永茶臼塚古墳群 1 号墳 (『大  
牟田市教育委員会 1978』)

**墳丘** 円墳 (径 25m、高 5m)



図 384 倉永古墳壁画残欠



図 385 倉永茶臼塚 1 号墳墳丘測量図 (1/400)

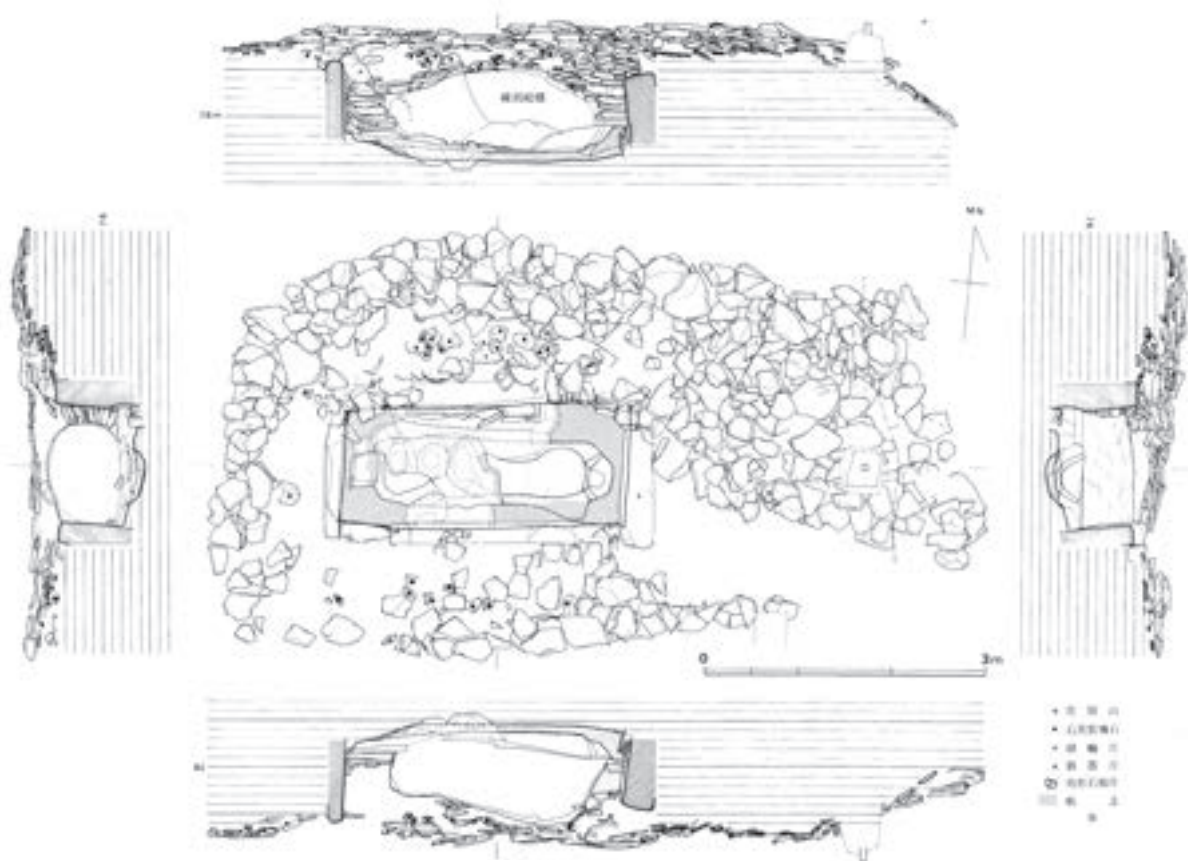


図 386 倉永茶臼塚1号墳主体部実測図 (1/80)

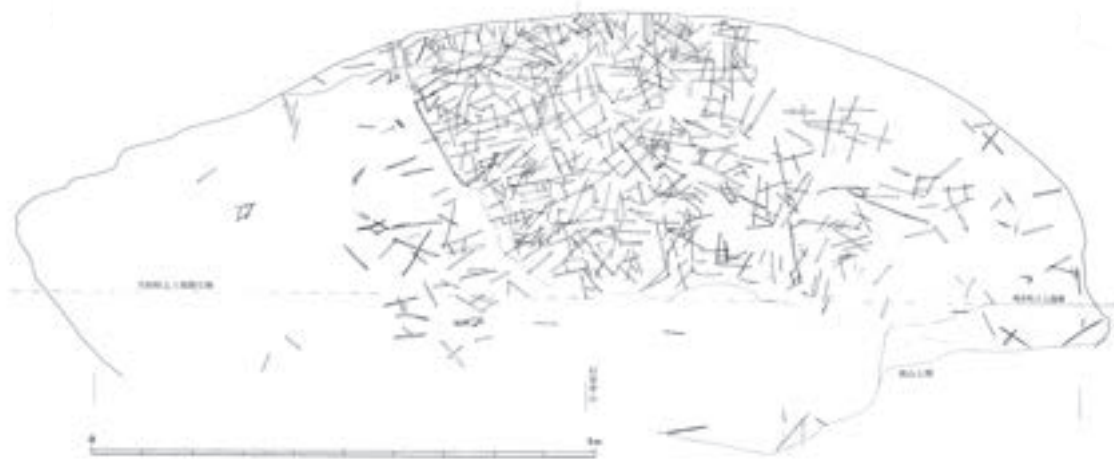


図 387 北壁線刻文様実測図 (1/15)

**主体部** 石棺系竪穴式石室 (3.0m × 1.3m・内部に阿蘇熔結凝灰岩製舟形石棺を安置)

**装飾** 石室右側(北壁)の板状石材に線刻文様

線刻文様は石材の全面にわたって配置される。具体的な形象物はなく、幾何学的な文様と不規則な直線で構成される。調査時には後世の悪戯書きによるものかとも考えられたが、線刻の一部が床面の粘土下に及んでいることや、線刻内の数箇所赤色顔料が認められたことから、石室構築当時の線刻文様として判断された。



図 388 北壁線刻文様

なお、『甘木市教委 1979』には倉永茶臼塚1号墳に関する記述があり、意味不明の多数の直線あるいはその組み合わせからなる単純な図形である点や、線刻の一部が床の粘土で覆われており、石材を据え付ける以前に設置後は見えなくなる部分にまで線刻が施されている点に小田茶臼塚古墳との共通性が見出され、装飾古墳と「同列に扱うには問題がある」とされている。

**遺物** 土器・埴輪・鉄製品（大牟田市教育委員会）

**年代** 5世紀前半

**調査歴** 昭和53年 保存目的の発掘調査（大牟田市教育委員会）

**現況** 発掘調査後、埋め戻して現状保存

**図面等** 昭和53年度 墳丘測量図・石室実測図、装飾石材拓本（大牟田市教育委員会）

**写真** 大牟田市教育委員会 1978 調査時撮影 35mm モノクロ・カラーリバーサル

九州歴史資料館 1977 年度撮影 4×5 カラーリバーサル 6点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 17点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 4点 (No. 0302～0305)

**文献** 大牟田市教育委員会 1973 『大牟田市の文化財』

甘木市教育委員会 1979 『小田茶臼塚古墳』 甘木市文化財調査報告書第4集

大牟田市教育委員会 1981 『倉永茶臼塚』 大牟田市文化財調査報告書第15集

大牟田市史編さん委員会 2019 『新大牟田市史』 テーマ別特講編 大牟田市

(参考5) 石櫃山(いしびつやま)古墳1・2号石棺

**立地** 石櫃山古墳は福岡県の南部、熊本県との県境に近い大牟田市内にある。隈川と白銀川に挟まれた、甘木山丘陵と呼ばれる独立丘陵から南側に派生した標高42mの丘陵頂部に位置する。眼下に大牟田市街地が開け、有明海を見渡すことのできる眺望に恵まれた位置にある。周囲には複数の古墳群をはじめ、黒崎山古墳・蜜柑山古墳・高塚古墳など舟形石棺が出土した古墳が集中する。

**経緯** 昭和40年代頃に盗掘を受け、露出した石棺は破砕された状態で放置され、風化が進行したようである。大牟田市教育委員会では古墳ならびに石棺の保存対策上、必要な基礎調査を目的として、昭和57年10月に範囲内容確認調査を実施。その結果、1号～3号の3基の舟形石棺が検出された。

出土した石棺は調査後、大牟田市の収蔵施設に持ち込まれ、2号石棺の蓋・身については昭和59年度、1号石棺の蓋・身は昭和60年度、3号石棺の身は昭和61年度にそれぞれ保存修復事業が実施された。

調査の結果、1号石棺棺蓋の上方には直線を組み合わせた格子状の線刻文様を施文、2号石棺棺蓋の長軸側斜面部には直線を組み合わせた連続三角文、短軸側の縄掛突起周辺にも三角文が線刻されていることが確認された。

これらについては、具体的な図文が表現されている訳ではないため装飾古墳として認識されてこなかった経緯があるが、石棺系装飾古墳に類する技術、発想に基づいて施文されたものと解される。

**名称** 石櫃山古墳1～3号石棺 (『大牟田市教委1985・1987』)

**所在地** 大牟田市大字岬

**墳丘** 円墳(径26～28m、高3～6m)

**主体部** 3基の舟形石棺直葬(1号石棺：全長2.5m・幅0.8m・高0.4m、2号石棺：全長1.6m・幅0.45m・高0.3m、3号石棺：全長2.3m、幅0.77m)

**装飾** 1・2号石棺棺蓋に線刻による施文がある。

1号石棺棺蓋の上方には直線を組み合わせた格子状の線刻文様を施文する。2号石棺棺蓋の長



図389 石櫃山古墳位置図(1/25,000)

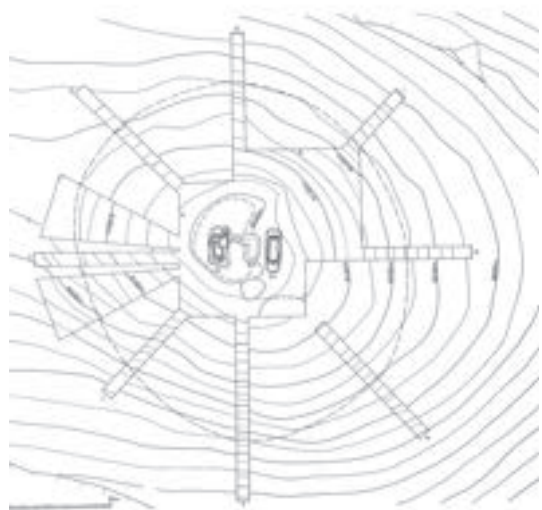


図390 石櫃山古墳墳丘測量図(1/600)



図391 石櫃山古墳主体部全景



図 392 石櫃山古墳 1号石棺



図 393 石櫃山古墳 2号石棺

軸側斜面部には直線を組み合わせた連続三角文、短軸側の縄掛突起周辺にも三角文が線刻される。

**遺物** 攪乱穴から土師器・銅鏡・装身具・武器

**年代** 5世紀前半

**調査歴** 昭和57年10月 範囲内容確認調査

**整備歴** 昭和59年度 2号石棺棺蓋・身の保存修理

昭和60・61年度 1・3号石棺棺蓋・身の保存修理

**現況** 調査後、古墳は消滅。1号石棺は九州国立博物館に貸出展示中。2号石棺は大牟田市立三池カルタ・歴史資料館に保管・展示。

**図面等** 墳丘測量図・1～3号石棺実測図（昭和57年度調査・昭和59～61年度保存修理）

**写真** 昭和57・59～61年度撮影 35mm カラーリバーサル・ネガフィルム（大牟田市教育委員会）  
 熊本県立装飾古墳館 2000.12.2 撮影（2号石棺）4×5 カラーリバーサル1点

**文献** 大牟田市教育委員会 1983『石櫃山古墳』大牟田市文化財調査報告書第19集  
 大牟田市教育委員会 1985『舟形石棺保存処理事業報告書Ⅰ』大牟田市文化財調査報告書第25集  
 大牟田市教育委員会 1987『舟形石棺保存処理事業報告書Ⅱ』大牟田市文化財調査報告書第26集

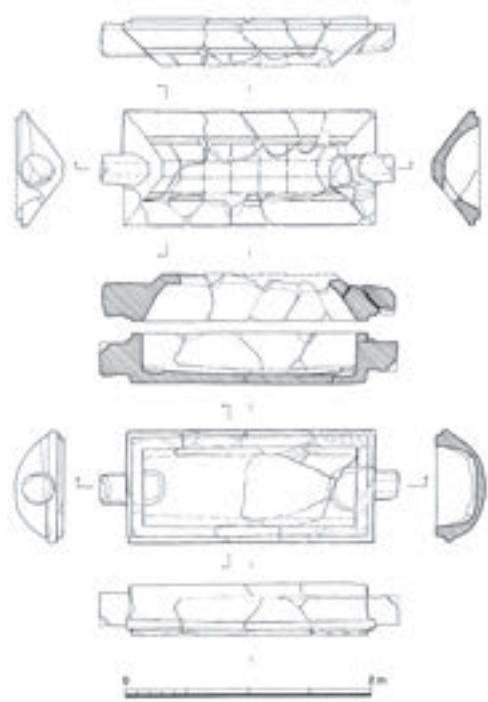


図 394 1号石棺実測図 (1/60)

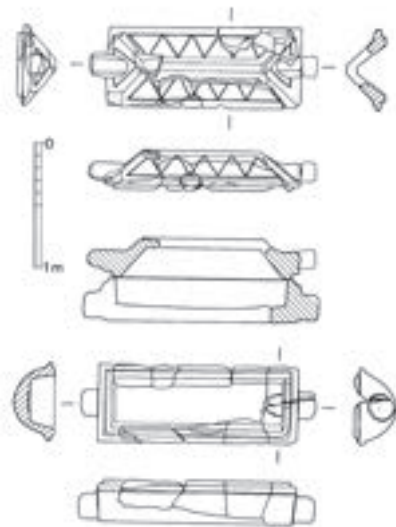


図 395 2号石棺実測図 (1/60)

## 58 丸山塚（まるやまづか）古墳

**立地** 福岡県の南部、八女市と広川町との境には、東西10数kmにわたって帯状に延びる八女丘陵がある。筑後平野を南北に二分するこの丘陵の頂部には大小300基以上の古墳が点在し、八女古墳群と総称される。

丸山塚古墳は、八女丘陵の東側、八女市宅間田に所在する宅間田古墳群と呼ばれる小群中の一基である。標高60mの丘陵南側斜面に位置する。

**経緯** 『福岡県1925』には、装飾のある古墳として「丸山塚」の名が掲げられており、その当時から既に装飾古墳として認識されていたことが分かる。『福岡県1928』の旧八女郡古墳一覧表中にも「装飾アリ」として記載がある。

公的な発掘調査は行われていないが、福岡県教育委員会が昭和52年に墳丘測量図・石室実測図を作成した。平成3年度に本古墳を含む周辺一帯の範囲が公園として整備され、墳丘には盛土保護・貼芝、古墳周辺には遊歩道や案内板が配置された。

**名称** 丸山塚古墳（『福岡県1925』） 丸山古墳（『講談社1973』） 丸山塚古墳（指定名称）

**所在地** 八女市大字宅間田

**指定** 国指定史跡「八女古墳群 丸山塚古墳」昭和53年3月24日

**墳丘** 円墳（径33m、高5.3m）もとは幅約10mの周堤帯が巡っていた（『八女市1992』）。

**主体部** 横穴式石室（複室・南西側に開口・後室中央付近に横方向の仕切石）全長8.4m、後室長3.6m、後室幅2.7m、後室高2.9m。

**装飾** 後室奥壁と後室左右の袖石、前室左右の袖石に描かれる。

奥壁は赤の横帯で3段に区切り、上段は一對の蕨手文を中心とし、外向きの蕨手文が連続して描かれる。中段と下段は連続三角文などが描かれたようだが判然としない。

袖石の文様は入口から見える側の2点に限られる。文様は連続三角文を赤・緑・黄の3色で塗り分け、部分的に割付の線が見られる。

**顔料** 赤（『講談社1973』斎藤忠） 赤（『講談社1974』乙益重隆）

赤・青・黄（『講談社1979』藤井功・石山勲） 赤・青・黄（『八女市1992』）

**年代** 6世紀後半

**整備歴** 平成3年度 公園整備（墳丘盛土保護・貼芝、遊歩道、案内板整備）

**現況** 墳丘は保護盛土上から貼芝が行われる。石室開口部は閉塞され石室内には進入できない。

**図面等** 昭和52年度 墳丘実測図・石室実測図（奥壁は施文部分のみ図化）（福岡県教育委員会）



図 396 丸山塚古墳位置図 (1/25,000)



図 397 丸山塚古墳全景

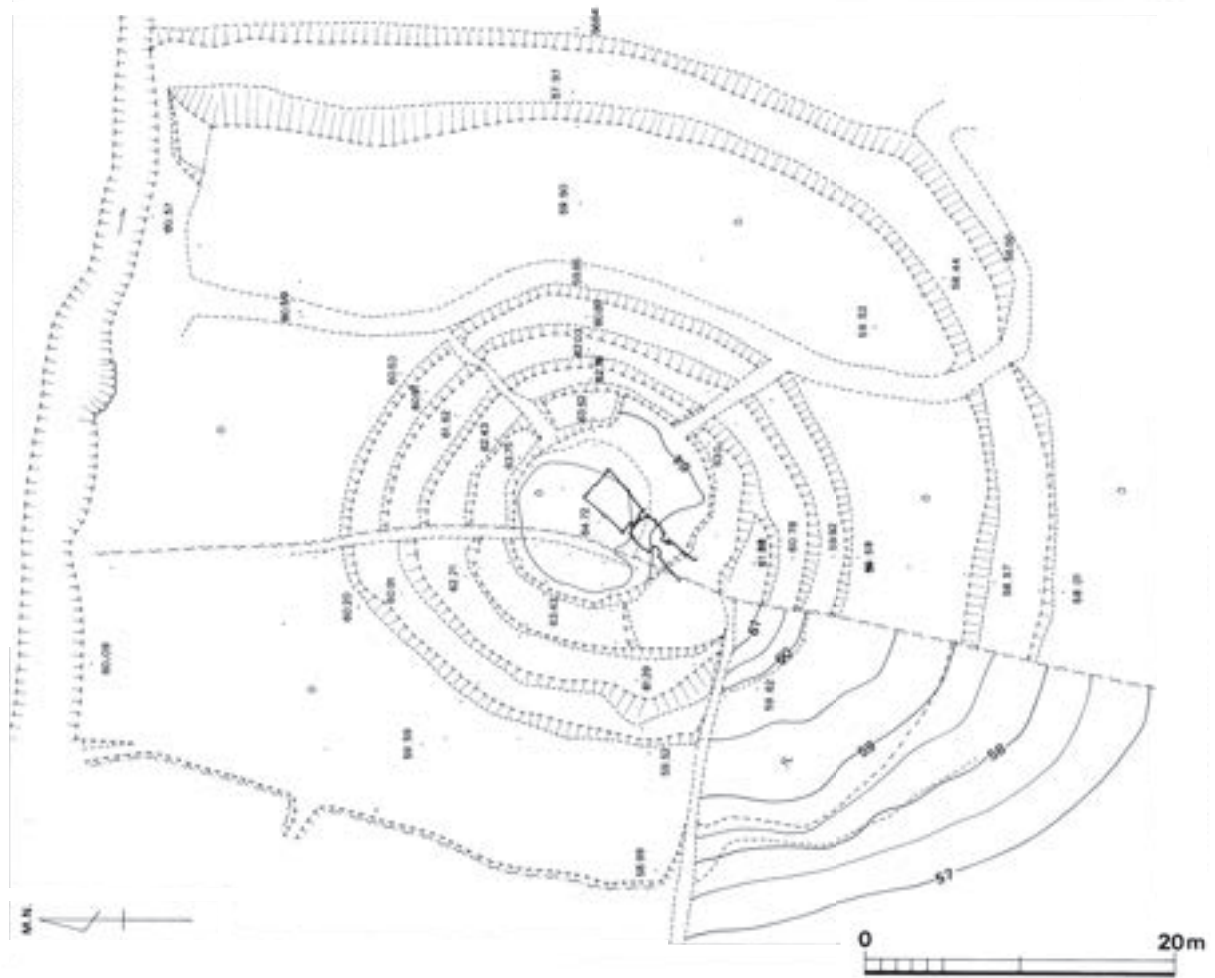


図 398 丸山塚古墳墳丘測量図 (1/400)

写真 九州歴史資料館 1977  
 撮影 4×5 カラーリバーサル  
 19点、カラーネガ 10点  
 九州歴史資料館 1977. 5. 9 撮影  
 35mm カラーリバーサル 52点  
 九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル「調査風景」「奥壁」他、10点  
 H14 北部九州装飾古墳画像  
 データベース 32点 (No. 0283  
 ~ 0297、No. 0912 ~ 0928)

パネル 九州歴史資料館 1  
 点 (127×167)

文献 福岡県 1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯  
 福岡県 1928『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三輯  
 講談社 1979『装飾古墳』日本の原始美術 10  
 八女市史編さん専門委員会編 1992『八女市史』上巻 八女市

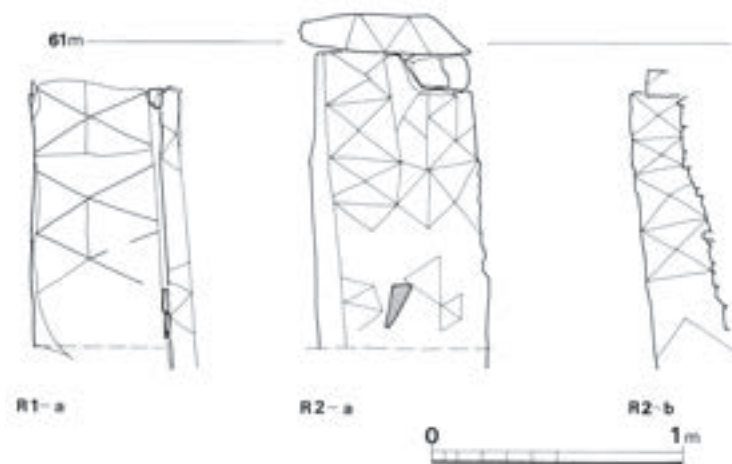


図 399 丸山塚古墳石室袖石装飾実測図 (1/30)

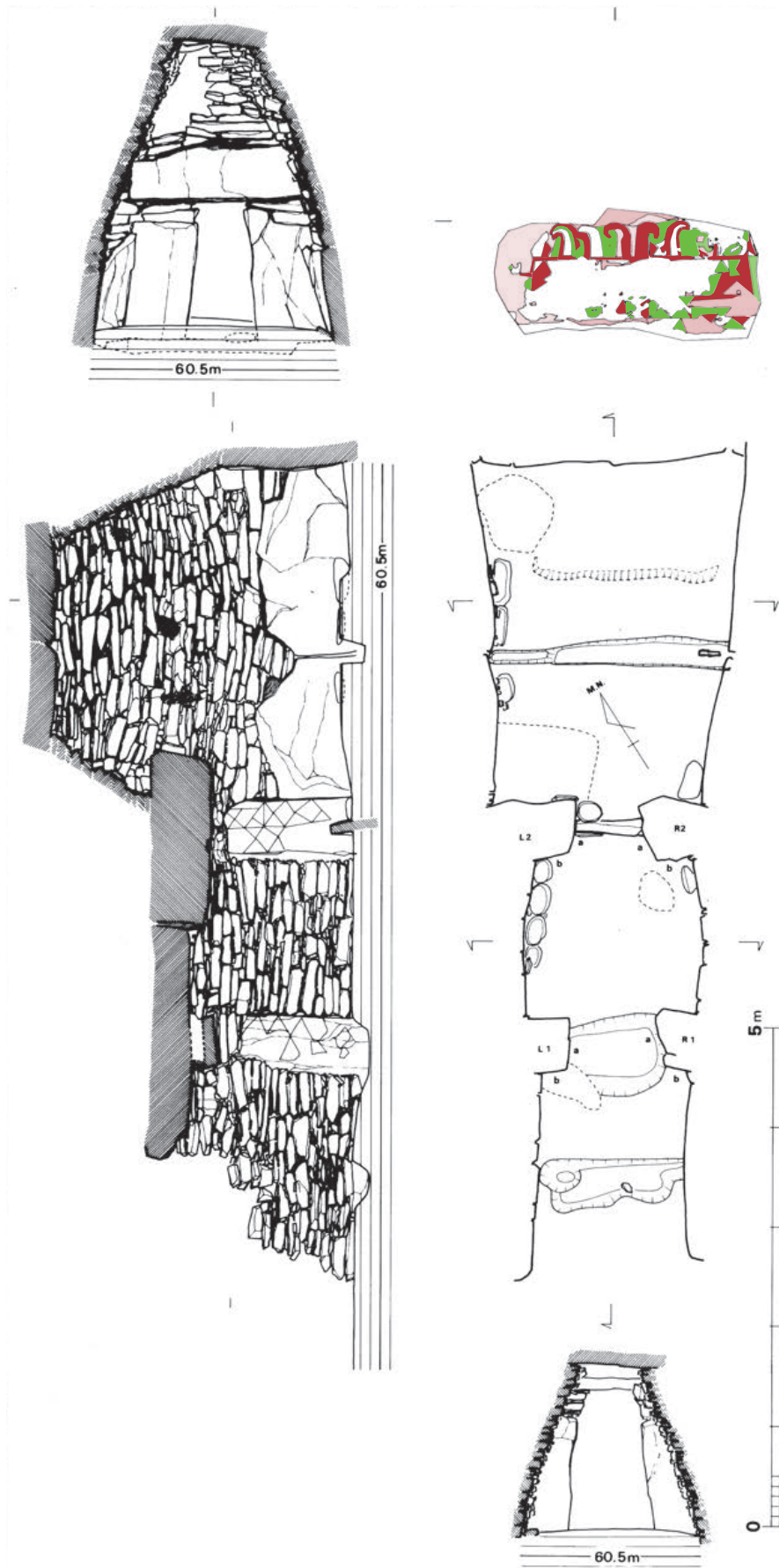


图 400 丸山塚古墳石室実測图 (1/60)



图 401 丸山塚古墳奥壁全景

## 59 乗場（のりば）古墳

**立地** 福岡県の南部、八女市と広川町との境を東西に伸びる八女丘陵上にある古墳である。標高は54mを測り、岩戸山古墳から国道を挟んで500mほど東方にある。道路建設や宅地開発のため周囲を大きく削平されており、独立丘陵上にあるかのような景観を呈している。

**経緯** 江戸時代には既に墳墓として知られ、『筑後将士軍談』では「吉田村奈良山」として挿図と共に古墳の紹介がある。図には石人の所在をうかがわせる記載や全周しないが堀の形が認められ、古甕が甚だ多いこと等が記されるが、当時はまだ開口していなかったらしく、石室に関する記載はみえない。

『福岡縣 1925』には「裝飾あるもの」として本古墳の紹介がある。この時点で既に前方部は墓地として開墾され一部削平が及んでいたことが記されている。観覧者が多いため、壁画の識別が困難となっている、ともある。

開口の時期については不明だが大正 11 年 3 月に国指定を受けていることから、それ以前の明治～大正年間に開口したらしい。「八女郡古墳調査表」（『福岡縣 1928』）には「明治 34 年 1 月発掘」とあることから、この記述が開口時期を指すものかと思われる。

昭和 30 年代頃、古墳の北側に隣接する県立福島高校への通学通路設置のため、古墳を辛うじて残すまでに丘陵北側が掘削、また、西側や南側も宅地開発のため丘陵を削平されてしまったため、直立崖上に佇立する古墳の景観を呈すに至った。もとは周溝を巡らせていたが、周辺の削平時に失われてしまったようである。周堤上には円筒埴輪が並ぶ状況も観察された。

八女市教育委員会を事業主体とし、小田富士雄らを調査員として昭和 40 年代に実施された八女古窯跡群の調査の際には、八女古墳群の研究の一環として昭和 47 年 7 月に乗場古墳石室の実測調査が実施された。その成果は過去に出土した出土品とともに『八女市教委 1972』に報告されている。



図 402 乗場古墳位置図 (1/25,000)

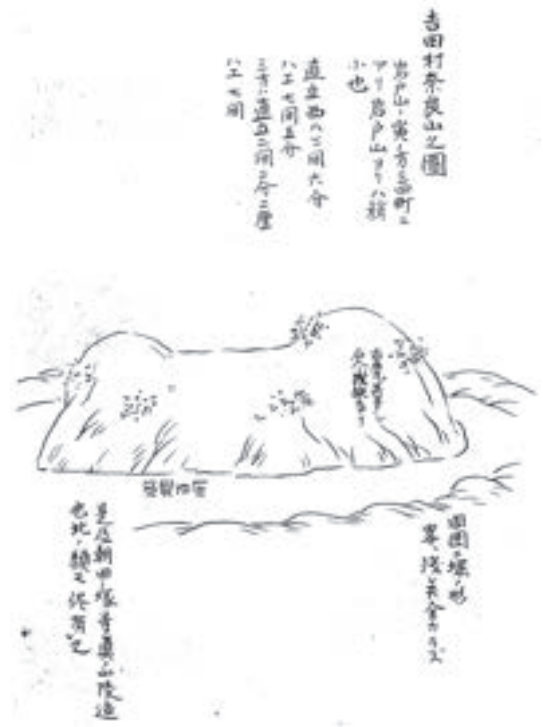


図 403 「吉田村奈良山之圖」(1853『筑後将士軍談』)

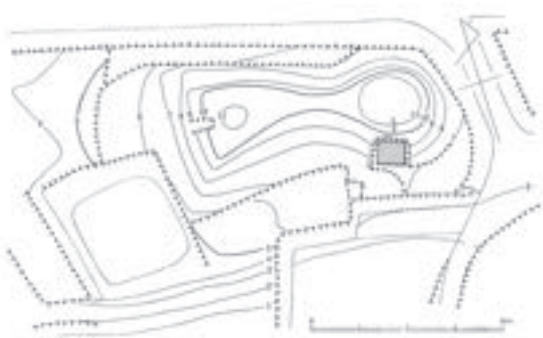


図 404 乗場古墳墳丘測量図 (1/1,600)

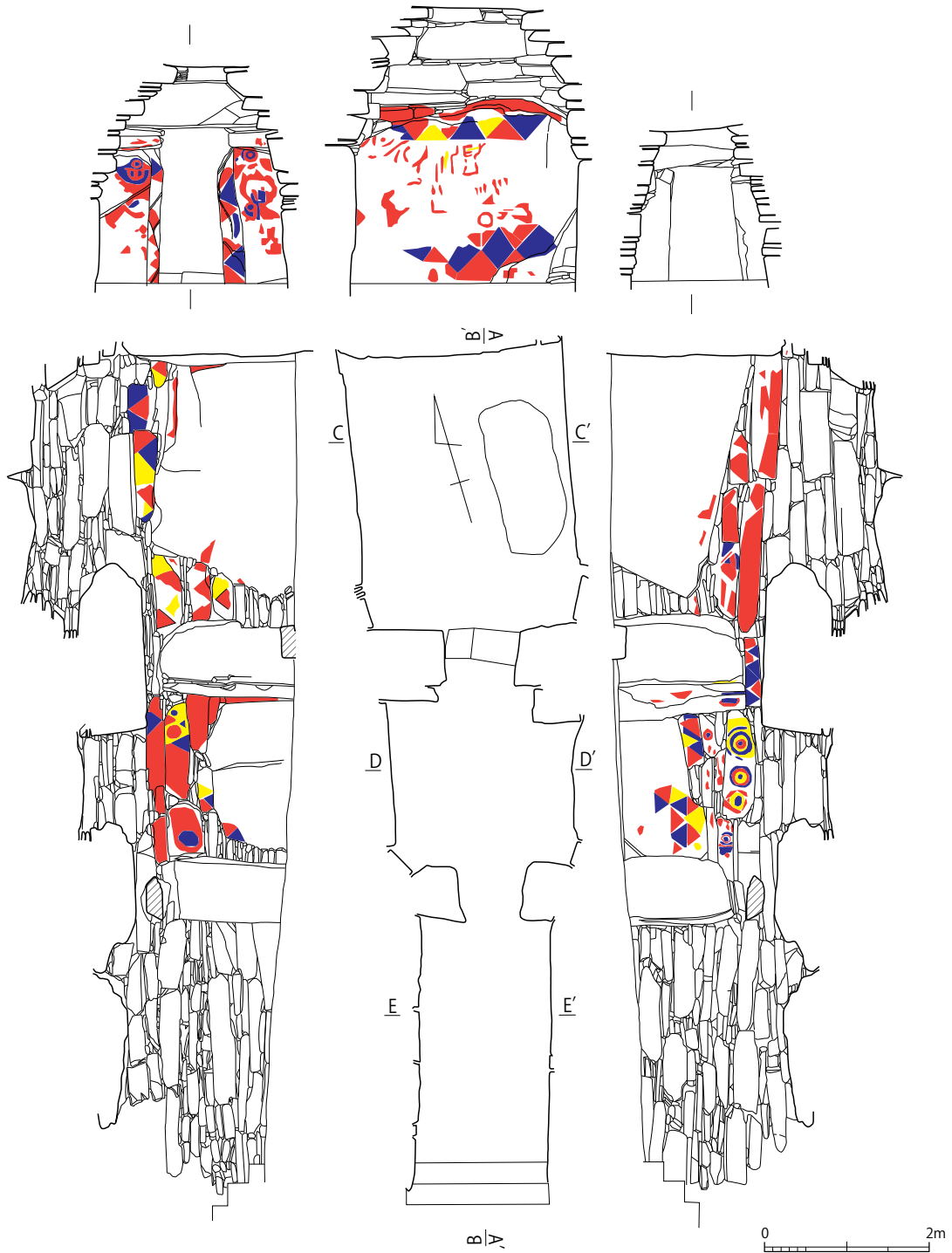


图 405 乘場古墳石室実測图 (1/80)



図 406 乗場古墳奥壁

**名称** 吉田村奈良山（『筑後将士軍談』） 乗場古墳（指定名称）

乗場古墳（別称奈良山古墳）（『福岡縣 1925』）

**所在地** 八女市大字吉田

**指定** 国指定史跡「乗場古墳」 大正 11 年 3 月 8 日

統合・追加・名称変更「八女古墳群 乗場古墳」 昭和 53 年 3 月 24 日

**墳丘** 前方後円墳（全長約 70m、後円部径約 30m、前方部幅約 35m、後円部高約 5m）周溝・周堤帯は削平のため消滅

**主体部** 横穴式石室（複室構造・南側に開口・結晶片岩石材使用）全長約 10m、奥室長 3.3m、奥室幅 2.7m、奥室高 3.2m。

**装飾** 前室・後室の両側壁と奥壁、玄門部袖石の正面・側面の下半に赤・黄・青の 3 色で彩色壁画が描かれる。

前室は両側壁の腰石面に左右方向の連続三角文を 3 色で描く。顔料の剥落が進むが恐らく四段に重ねた連続三角文が壁面全体を埋めていたものと推測される。一部は腰石上の石材にまで描画が及ぶ。右側には 3 色による同心円文 3 つを並列し、それに接して赤・青 2 色の縦方向の連続三角文が見られる。特に左側には全体に赤色を塗布したのではないかと思われる部分もある。左側には黄色による全面地塗り後に赤・青の同心円文や三角文を描いたのではないかと思われること



図 407 乗場古墳石室正射投影画像 (1/100)

ろがある。

後室袖石正面には赤・青 2 色で連続三角文を描いており、きわめて浅い線刻による図割が確認できる。上方には同心円文、蕨手文がある他、翳状の図形がある。側面では右側がわずかに残り、左側は不明。添え石上部には長形状に青を塗布した外郭を赤で囲った図形があり、靱を描いたのではないと思われる。袖石の上に架構された平石の側面には赤・青・黄の連続三角文が描かれ、ここでも図割の線刻が確認される。

奥壁は顔料の剥落が進むが、特に赤色の保存が良い部分がある。奥壁の上縁と下縁に連続三角文が左右に並び、中央に赤で形象画を描くが画題は不明。上縁の三角文は 3 色を交互に使用して一段に並べる。下縁の三角文は赤・青の 2 色で 2 段に並べ、上、下段は頂点で接する三角形を赤で、その間にできる方形区画を青で塗り分ける。連続する三角文帯で挟まれた中央には、円文・三角文・靱かと思われる図形を並列して赤で描いたようである。奥壁左端に赤色の三角形が残ることから、本来この中央部の形象画群を囲んで上下・左右に連続三角文があったのではないかとみられる。

顔 料 朱・白・青 (「島田寅次郎 1923」) 赤・白・緑 (『福岡縣 1925』)

赤・青・黄 (『平凡社 1964』渡辺正気) 赤・鼠 (『朝日新聞社 1967』日下八光)

赤・青・黄 (『八女市教委 1972』)

**遺物** 須恵器・土師器・武器・馬具・装身具・埴輪（東京国立博物館・九州大学考古学研究室・八女市教育委員会・九州歴史資料館岩崎光収集資料）

**年代** 6世紀後半

**調査歴** 昭和44年 実測調査（八女市教育委員会）

**整備歴** 昭和44年 開口部にコンクリート製覆屋設置、扉は金属製で密閉せず



図 408 乗場古墳 e-Heritage 画像

**現況** 開口部に覆屋設置後、現状保存

**図面等** 石室実測図（梅原末治原図）

昭和39年頃の墳丘測量図 福岡県文化財保護課指定資料中  
墳丘測量図・石室・壁画実測図（八女市教育委員会1972）  
（レーザ計測）東京大学池内研究室2009.2計測

（写真計測）九州歴史資料館2023.4.18計測

**写真** 九州歴史資料館1976撮影4×5カラーリバーサル19点、カラーネガ8点

九州歴史資料館1977.6.27撮影35mmカラーリバーサル35点

九州歴史資料館撮影35mmカラーリバーサル48点

熊本県立装飾古墳館2001.5.25撮影4×5カラーリバーサル10点、モノクロ5点

九州歴史資料館2023.4.18デジタル写真データ

H14北部九州装飾古墳画像データベース31点（No.0269～0282、No.0895～0911）

**パネル** 九州歴史資料館 パネル1点（151×191）

**文献** 矢野一貞1853『筑後将士軍談』卷之五十二墳墓碑塔部（筑後遺籍刊行会1927『校訂筑後国史 筑後将士軍談』下巻所収）

島田寅次郎1923「筑後地方に於ける古墳」（上）（廣義）『筑紫史談』第参拾集

福岡縣1925『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

福岡縣1928『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三輯

八女市教育委員会1972『立山山窯跡群』—八女古窯跡群調査報告IV・総集編一

## 60 稲荷山（いなりやま）横穴群第 18 号墓

**立地** 稲荷山横穴群は、福岡県の南端、矢部川中流域左岸にある。矢部川と辺春川とが合流し、河川が湾曲する地点を西に見下ろす位置にある。標高 55m の付近一带に、かつては合計で 27 基の横穴墓があったことが筑後考古学研究会により確認され、昭和 59 年には新たに 2 基の横穴墓が確認された。一部は既に消滅しており、現状では 10 数基の横穴墓が残っている。第 18 号墓は現存する横穴墓群中の一基である。

**経緯** 以前の分布調査では、27 基の横穴墓が確認された。横穴群は丘陵東斜面の中腹に築造され、2～5 基を単位として A～F の 6 グループに区分される。群中には「コ」字状の屍床を配置する肥後タイプの構造を採るものもみられる。この時の分布調査では墓室内の装飾は確認されていなかった。



図 409 稲荷山横穴群位置図 (1/25,000)

その後、蜜柑園造成により 10 基ほどが未調査のまま消滅したようである。昭和 59 年にはキウイ団地造成によって新たに 2 基の横穴墓が確認され、発掘調査が実施された。追加 1 号墓は複室構造で切妻屋根形天井、両側壁には軒先表現がある。床面奥壁側には屍床を設ける。追加 2 号墓は単室構造で奥壁側に屍床を設け敷石が行われる。



図 410 稲荷山横穴群第 18 号墓入口

第 18 号墓は以前から開口しており、その所在が知られていた横穴墓である。これまで正式な調査や報告は行われておらず、今回墓室内の確認を行った。墓室は両袖式の複室構造で天井部はアーチ形を呈し、前室右袖の羨道部側に舟状の線刻文様があることを確認した。出土遺物は伝わっていない。



図 411 稲荷山横穴群第 18 号墓玄室

**名称** 稲荷山横穴群第 18 号墓 (『立花町 1996』)

**所在地** 八女市立花町北山

**主体部** 横穴墓 (平面長方形、アーチ形天井、両袖式複室構造、片岩岩盤に彫り込み) 全長 7.8m、玄室長 3.1m、幅 2.1m、高 1.8m

**装飾** 前室右袖の羨道部側に、線刻による文様が確認される。文様は床面から高さ 30 cm の位置にあり、艫と舳先を持ち上げた一艘のゴンドラ状の舟が描かれる。舟の大きさは幅 43cm、高さ 12cm。線刻は太く深く刻まれており、線の幅は 7～8mm、深さは 2～3mm を測る。



図 412 線刻文様拡大



図 413 稻荷山古墳群第 18 号墓正射投影画像 (1/100)

年 代 6 世紀後半

調査歴 昭和 59 年 2 月 16・17 日 追加 1 号・2 号墓の発掘調査 (不時発見)

現 況 現状保存 (横穴墓群の一部は消滅)

図面等 (写真計測) 九州歴史資料館 2023. 4. 18 計測

写 真 九州歴史資料館 2023. 4. 18 撮影デジタルデータ

文 献 立花町史編さん委員会 1996 『立花町史』 上巻

「北山のあゆみ」編集委員会 2024 『北山のあゆみ』 北山地区地域振興会議

## 61 成合寺谷（なりあいじたに）古墳

**立地** 福岡県の南部、矢部川中流域に広がる南筑後平野の東端部で、標高 60m の丘陵端部に位置する。本古墳の北側 1 km には古代山城として知られる女山神籠石、北東 500m には国名勝清水寺本坊庭園で著名な清水寺がある。周囲には清水谷古墳群や高塚古墳群といった後期群集墳が分布する。

**経緯** 平成 13 年 9 月、砂防ダム建設時に古墳不時発見の報告が事業主体から瀬高町（現、みやま市）教育委員会にあり、平成 14 年 1 月から 3 月にかけて町教育委員会が調査を行った結果、壁面に彩色があることを確認した。そのような経緯から、古墳確認時点で既に墳丘は大きく削平され、周囲は地山面から 2m 程掘り下げられた状態だった。

調査時、石室内から中近世遺物が多数出土しているため、早くから開口していたことが分かる。

協議の結果、古墳については現状保存の方針で調整が整い、砂防ダム本体は建設工事が進められ、掘削された進入路等は埋め戻されて旧状に復旧された。

瀬高町教育委員会では翌年度に再度、県教育委員会を交えて詳細な調査を実施することとし、石室・壁画実測図の作成や床面掘削調査、顔料・生物の自然科学的分析調査等を実施した。

調査後は開口部を土嚢で閉塞、消毒・石室防水処置後に埋戻し作業が実施された。

**名称** 成合寺谷古墳（『瀬高町教委 2002』）

**所在地** みやま市瀬高町大字本吉

**指定** 県指定史跡 平成 25 年 3 月 29 日

**墳丘** 砂防ダム建設工事の際に大きく掘削されていたため墳丘の規模・形状等不明。直径 20m 前後の円墳と推測される（『みやま市 2017』）。

**主体部** 横穴式石室（複室構造・羨道部削平・石屋形・南西側に開口・結晶片岩石材使用）全長 6.3m、後室長 3.3m、後室幅 2.5m、後室高 3.2m。

**装飾** 前室・後室の奥壁と両側壁・袖石、楣石下面、石屋形天井石前縁部と袖石に赤・白の顔料を用いた描画を行う。

現状で図文として確認できるのは石屋形天井石前縁部のみである。この部分は、幅 2cm 程のノミ状工具で石材の表面を縦・斜方向に削って整え、その上から文様を描く。文様は赤色の三角文



図 414 成合寺谷古墳位置図 (1/25,000)



図 415 埋戻し前の消毒



図 416 石棚前縁拡大

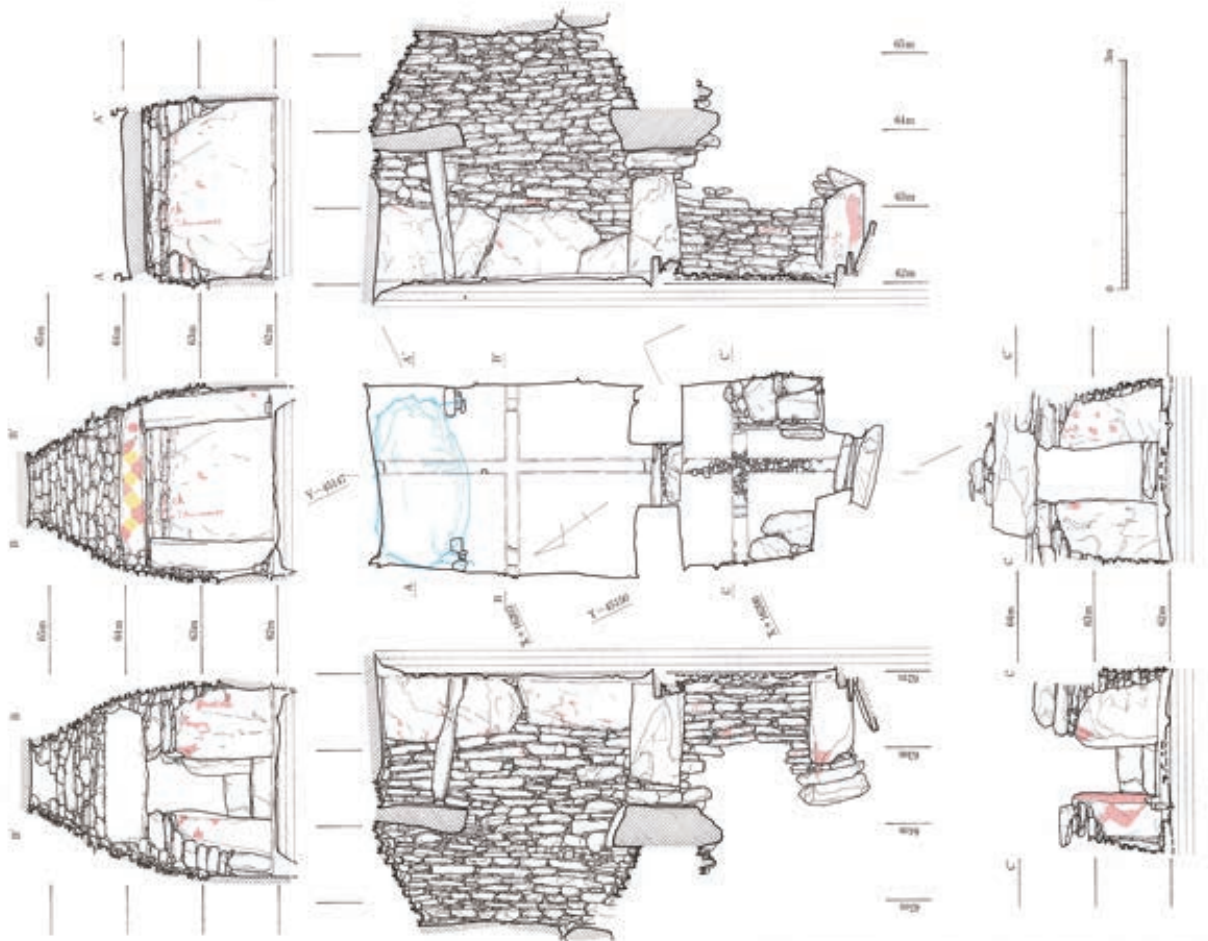


図 417 成合寺谷古墳石室実測図 (1/100)

と、それに隣り合う白色の菱形文、塗り残すことにより下地の緑色を活かした三角文によって構成され、赤・白・緑の幾何学文を交互に配することにより上下の連続三角文と中央の菱形文というパターン化した図文を構成する。

それ以外の部分については、確認できるのは赤色顔料のみで、しかも顔料の剥落が著しく図文の存在は認められない。

奥壁・側壁の上半部では彩色の痕跡は確認できず、少なくとも石室下半部を全面赤色で塗布した後、石室天井石前縁部のみに図文を描いたものとみられている。

**顔 料** 赤・白（赤はパイプ状ベンガラ（『瀬高町教委 2004』朽津信明））

**遺 物** 須恵器・武器・馬具・中近世遺物

**年 代** 6世紀後半

**調査歴** 平成14年1月8日～3月15日（瀬高町教育委員会）

平成16年1月5日～3月23日（瀬高町教育委員会・福岡県教育委員会）

**整備歴** 平成15年度調査後、開口部閉塞・防水処置を行い埋戻し

**現 況** 開口部閉塞・埋戻して現状保存

**図面等** 平成16年調査 石室・壁画実測図（みやま市教育委員会）

**写 真** 九州歴史資料館 2004.1～3 撮影 4×5 カラーリバーサル 12点

九州歴史資料館 2004.1～3 撮影 35mm カラーリバーサル 68点



図 418 成合寺谷古墳石室全景

文 献 瀬高町教育委員会編 2002 『成合寺谷 1 号墳』瀬高町文化財調査報告書第 16 集  
瀬高町教育委員会編 2004 『成合寺谷 1 号墳―壁面装飾確認調査―』瀬高町文化財調査報告書第  
17 集  
みやま市史編集委員会 2017 『みやま市史』資料編上巻

(参考6) 石神山(せきじんざん)古墳出土石棺

**立地** 石神山古墳は福岡県の南部、筑紫平野と呼ばれる広大な沖積平野の南端に位置する。標高224mの障子ヶ岳を最高所とし、そこから南西に向かって派生する丘陵の一つ、矢部川の支流である飯江川と楠田川に挟まれた標高50mの丘陵頂部に位置する。有明海の旧沿岸線からは2.5kmほど内陸側にあり、かつては眺望に優れた場所であったようだが現在は樹木が繁茂して眺望が制限される。南側斜面には上楠田天満宮が置かれている。

**経緯** 古くから墳丘上の石人を「石神様」と呼んで祀っていたようだが由緒の詳細は不明である。明治15年5月に山頂の石神(石人)を(上楠田)天満宮の社内に移したところ、疫病が流行したため元の位置に戻したという話もある。それより以前、石人は墳丘の上に仰向けに倒れていたらしく、背面の甲冑の保存状態が良好である。

明治44年5月に村民遊覧地を設置するため山頂部を開削したところ、地下約75cmから3基の石棺が発見され、そのうちの大型の棺上部に石人が立てられていたことを発見した、とある。石棺は既に毀損しており、これを原位置に戻して仮堂(保護施設)が設置されたい。また『二川地方誌』には「この石神の下には貴き人を葬り、其棺に種々の宝玉を蔵めありしが、肥前の者来りて奪ひ去れりと、昔より村民間に言傳へあり」と記される。

現在、石神山古墳の後円部墳頂には円柱の基部を欠失した石人が樹立され、保存施設によって保護されている。3基の石棺も後円部墳頂に置かれ、保存施設により保護が図られている。

**名称** 石神山古墳(『人類学雑誌』第三十一卷第七號) 石神山古墳(『福岡縣 1925』) 上楠田神楽田山(一名石神山と云ふ)の古墳(1936『二川地方誌』) 近年では、みやま市石神山古墳を「せきじんざん」、八女郡広川町石人山古墳を「せきじんざん」と呼称して区別するようになっている。

**所在地** みやま市高田町上楠田

**指定** 国指定史跡 昭和51年2月6日 (武装石人) 国指定重要文化財 昭和51年6月5日



図419 石神山古墳位置図(1/25,000)

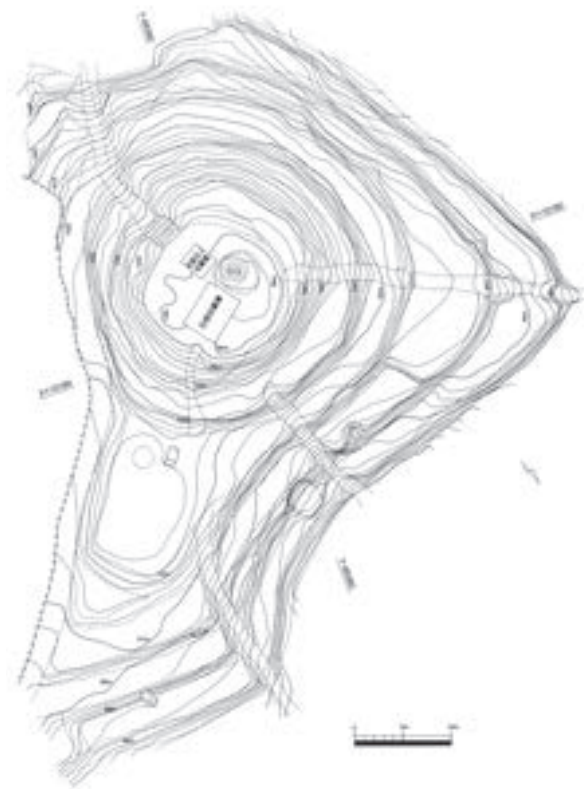


図420 石神山古墳墳丘測量図(1/800)

(石棺) 県指定有形文化財 昭和 34 年 3 月 31 日

**墳 丘** 前方後円墳 (全長 58.5 m) 後円部葺石、円筒埴輪・朝顔形埴輪

**主体部** 石棺 3 基直葬

**装 飾** 「柴田常恵 1916」では「此面 (傾斜面) に線彫で梯形が刻まれて居り、頂邊から底邊へ引かるゝ線は両側邊を合せて四線である。此彫刻は後世に加工されたものと思へぬから、石棺製作の当初に為されしものと考へられ、…単に一種の装飾品加工を為せしものと解し置くが穩當であるかと思ふ。」と記される。『福岡縣 1925』では、中棺について「四注形の蓋の横面には冥形の陰刻あり」とある。

**遺 物** 『福岡縣 1925』では発掘当時、中棺から「朱詰の人骨幾分、五寸餘の劍の破片と直径二寸の腕輪を附属せる銅釦一ヶ、及鍍銀せる銅器の破片を見出せし」とある。小棺については「齒二ヶ、劍の破片と甕一ヶ、鉄製刀子の残欠ありしといふ」とある。現在これらの遺物は伝わっていない。

**年 代** 5 世紀前半

**調査歴** 明治 44 年 5 月 村民遊覧地設置のため山頂部を開削し、石棺 3 基発見。

平成 15～17 年度 墳丘測量図・石人実測図作成、調査報告書作成 (高田町教育委員会)

**整備歴** 明治 44 年頃 石棺発見後に保存施設設置  
そのち武装石人保存施設設置 (時期不詳)

**図面等** 1 号石棺実測図 (1/10) 青焼 (九州歴史資料館) 墳丘測量図・武装石人実測図 (平成 15 年調査時作成)

**写 真** 『福岡縣 1925』に石棺・保存施設写真掲載  
九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 3 点  
熊本県立装飾古墳館 2000. 12. 2 撮影 4×5 カラーリバーサル 4 点、モノクロ 1 点

みやま市教育委員会平成 15 年度調査時撮影写真

**文 献** 柴田常恵 1916 「筑後三池郡上楠田の石神山」『人類學雜誌』第三十一卷第七號

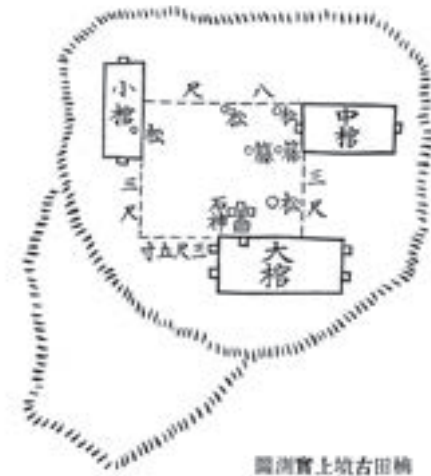
柴田常恵 1916 「筑後三池郡上楠田の石神山 (續)」『人類學雜誌』第三十一卷第九號

福岡縣 1925 『史跡名勝天然紀念物調査報告書』第一輯

内野喜代治 1936 『二川地方誌』二川小学校育友会 1984 復刻発行版

福岡縣高等学校教職員組合 1951 『北九州古文化図鑑』第二輯

みやま市教育委員会 2006 『石神山古墳』高田町文化財調査報告書第 9 集



高田町教育委員会提供

図 421 石神山古墳石棺・石人配置図  
(『福岡縣 1925』)



図 422 石神山古墳石棺

## 62 石人山（せきじんさん）古墳

**立地** 福岡県の南部、八女丘陵の西端付近、標高35m前後の丘陵頂部に造営された古墳である。300m東には彩色系装飾古墳の弘化谷古墳が位置する。岩戸山古墳のある八女市吉田から石人山古墳のある広川町一條までの一帯は「人形原（にんぎょうばる・古名ひとがたばる）」と呼ばれ、この間には石人石馬（石製表飾）の破片が散在していたという。

**経緯** 石室開口の時期は不詳だが、江戸時代後期には既に開口し、内部の家形石棺が露出していたようである。天明四年（1784）写すと奥付に記載のある『筑後國柳川原石人圖』には石人・石殿（家形石棺）が挿図と共に記されており、『筑後國風土記』に記載された筑紫君磐井の墓の別区にあるという石人や石蔵が、この石人や石殿（家形石棺）に対比できることを根拠に、石人山古墳を磐井の墓に比定している。同様の記述は本居宣長『古事記伝』『玉勝間』にも見られ、これ以降、昭和31年に森貞次郎が「筑後國風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」にて岩戸山古墳を磐井の墓として検証するまで永い間定説化することとなった。他方、矢野一貞は『筑後將士軍談』で吉田村古墳（岩戸山古墳）と一條村古塚（石人山古墳）とを取り上げ、墳丘の外観や石人石馬を挿図で紹介したが、そこでは吉田村古墳（岩戸山古墳）を磐井の墓としている。

『福岡縣 1925』では「石人あるもの」として石人山古墳を取り上げる。ここには「後円部の中央頂上より深さ七尺四寸の下に石棺を露せり」とあるが、装飾に関する記述は見られない。これは「八女郡古墳調査表」（『福岡縣 1928』）でも同様で、この頃、装飾については重要視されていなかったようである。

『福岡縣 1933』には石人山古墳に関する詳細な報告がある。昭和6年の文部省宗教局考証官古谷清の九州史跡視察に際して、福岡縣嘱託島田寅次郎と調査委員の武藤直治・石野義助が古墳を視察、翌7年1

月から福岡縣の命に依って、石野が石人山古墳等の墳丘測量調査を実施し、また武藤は石棺実測と装飾文様の拓本採取を行ったことが記されている。この報告では墳丘や石棺、石人に関する詳



図 423 石人山古墳位置図 (1/25,000)



図 424 「同郡一條村南岡石人圖」  
(1853『筑後將士軍談』)



図 425 「石人村古墳石棺圖」(1853『筑後将士軍談』)

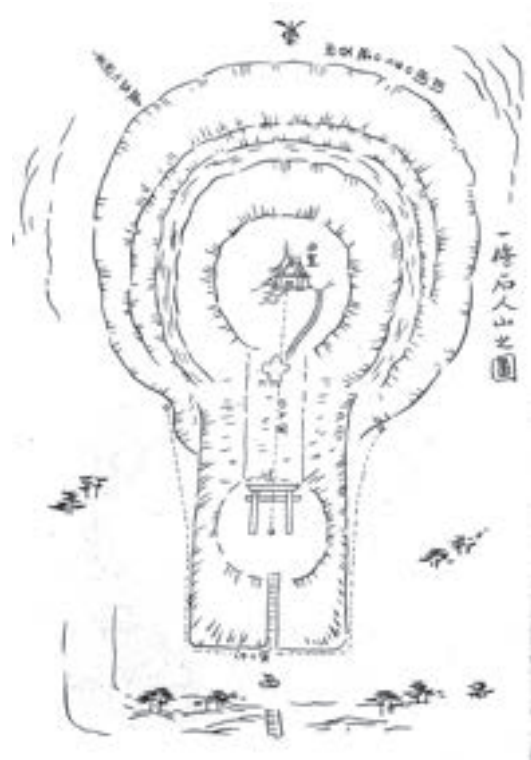


図 426 「一條石人山之圖」(1853『筑後将士軍談』)

細な検証に加えて関連文献の掲載もある。昭和 11 年度には武藤・石野の他、調査委員の鏡山猛（のち九州大学教授）が加わって、石棺上部の覆土を除去して内部調査を実施、その後、保存施設の設置が計画され、昭和 12 年 3 月 25 日からは発掘調査が実施された。石棺については詳細な実測図や写真が公表されており、石室や石人、出土埴輪についても写真をもとに説明が行われている。

昭和 13 年に国史跡に指定、昭和 39 年には石室・石棺を被覆する覆屋が設置された。平成 5・6 年には古墳を含む一帯が古墳公園として整備され、石人山古墳・弘化谷古墳のガイド施設を兼ねた広川町古墳公園資料館が公園に隣接して設置された。平成 25 年には広川町教育委員会により石人山古墳墳丘の測量が実施された。

石室・石棺を保護する覆屋に関しては、西側に鉄製柵が設置された構造を採用する。覆屋周辺の樹木管理のために間伐を行った際、直射日光が照射する状態となったことが原因で石棺の一部にコケが繁殖する状態となったため、令和 2 年 4 月には日光を遮るためのカーテンを設置する措置が講じられた。

**名 称** 一條村古塚（『筑後将士軍談』） 石人山古墳（『福岡縣 1925』）

石人山（せきじんやま）古墳（『森貞次郎 1985』）

近年では、みやま市石神山古墳を「せきじんざん」、八女郡広川町石人山古墳を「せきじんさん」と呼称して区別するようにしている。

**所在地** 八女郡広川町一條・筑後市一條

**指 定** 国指定史跡 昭和 13 年 8 月 8 日

名称変更「八女古墳群 石人山古墳」昭和 53 年 3 月 24 日

（武装石人）国指定重要文化財 昭和 51 年 6 月 5 日

**墳 丘** 前方後円墳（全長 107m、後円部三段・前方部二段、後円部径 53m、後円部高 12m、前方

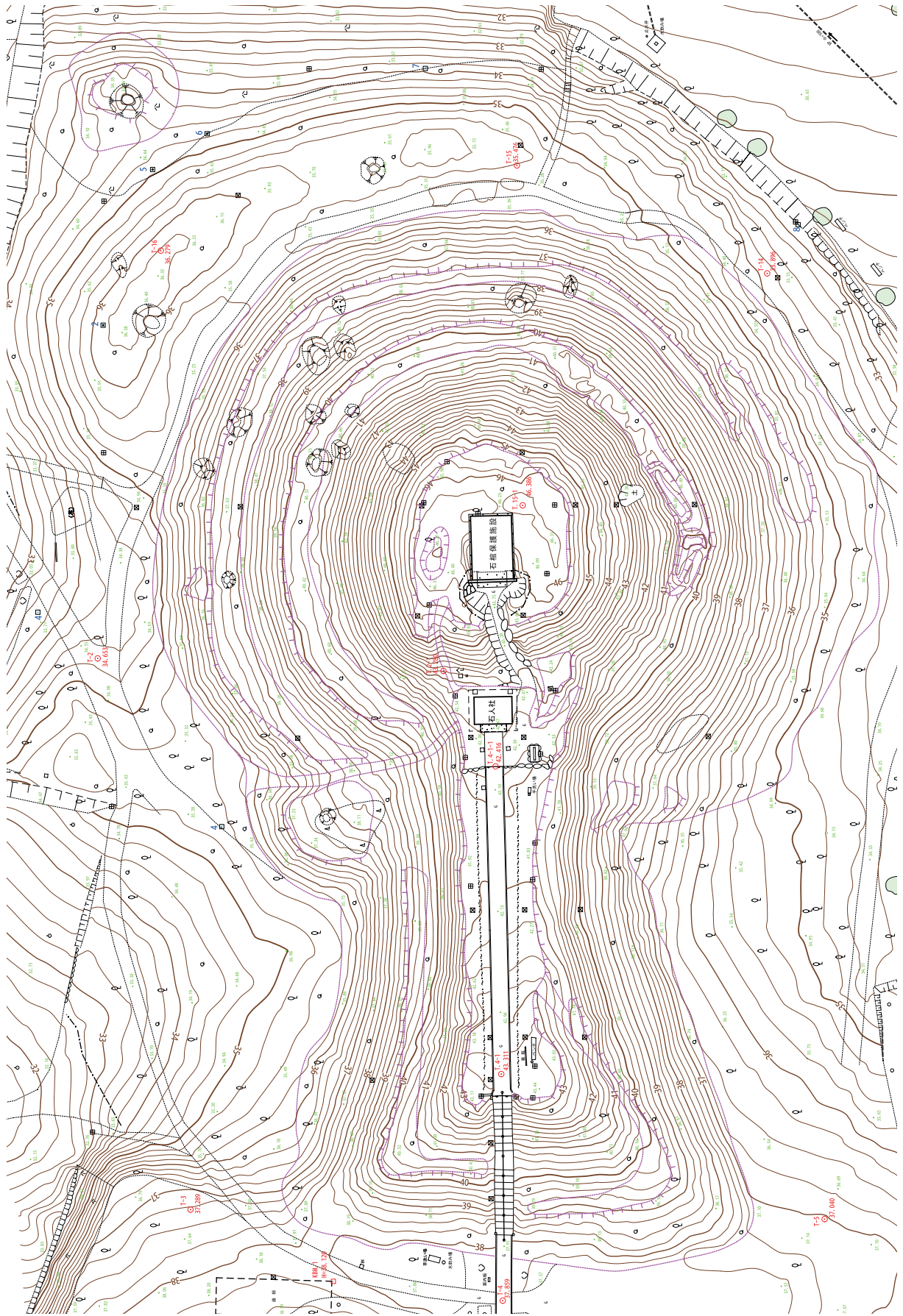


图 427 石人山古墳填丘測量図 (1/600)

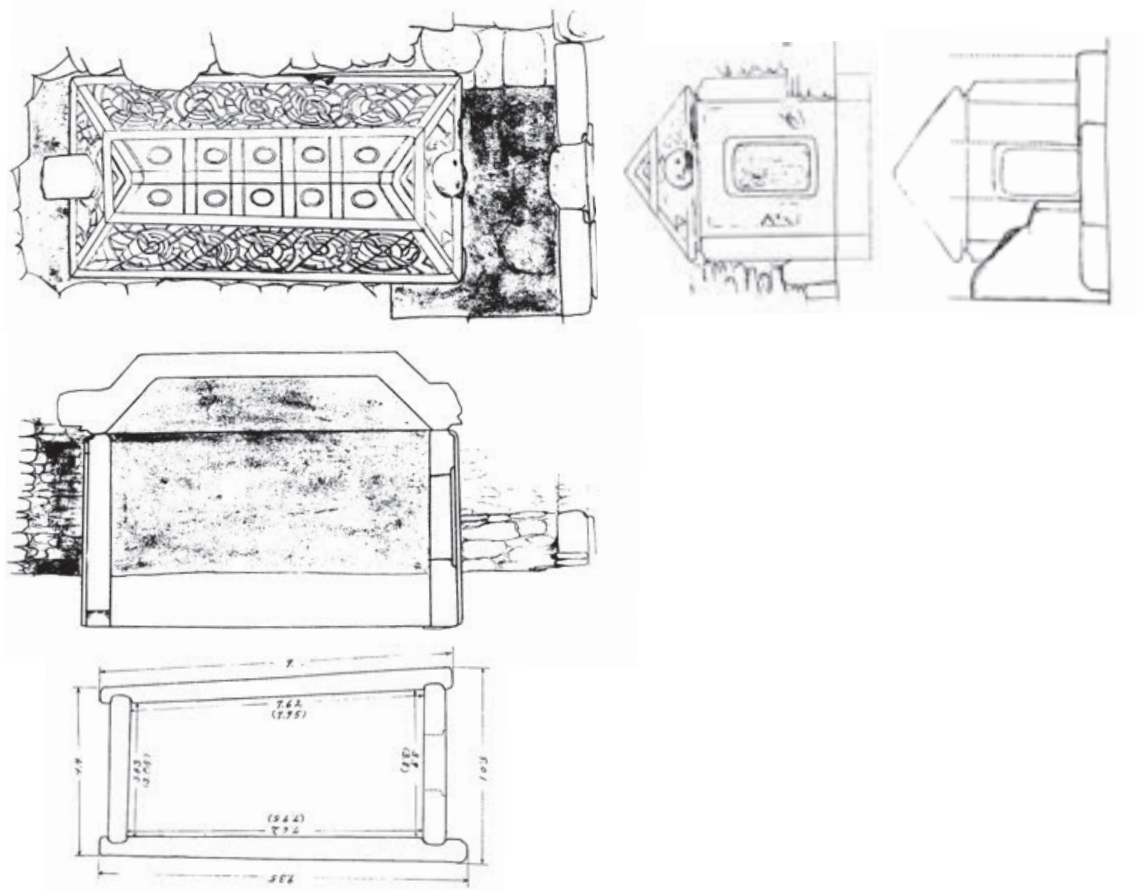


図 428 「石棺及石槨実測圖」(『福岡縣 1937』)

部幅 63m、前方部高 11m)

**主体部** 竪穴系横口式石室（天井石等上部石材欠失、緑泥片岩石材使用）長 3.9m、幅 2m

石室内に石棺設置（妻入横口式家形石棺、阿蘇熔結凝灰岩製石材使用、四枚の板石を組み合わせる四壁とし、削り抜き式屋根形の棺蓋を配置、底石無し、棺蓋の東西短辺に棒状繩掛突起、棺身西側短壁に開口部）石棺長 2.8m、棺蓋西端長 1.5m、棺蓋東端長 1.3m、高 2.0m。

**装飾** 石棺棺蓋と棺身の横口部外面に浮彫による装飾を行う。

蓋の頂部から 1/3 の辺りに横帯を四周に巡らせ、両長辺側側面には横帯上にさらに 4 条の縦帯を配して 5 つに区分し、各区の中央に二重の同心円文を施文する。同心円文および縦帯は 2 条



図 429 石人山古墳石人

の境界線で浮彫にされる。

横帯より下部には上の同心円文に対応して5つの対角線区が配置され、その交点を中心に直弧文が陽刻・陰刻される。両側面に配された合計10単位の直弧文は概ね同形だが細部に至っては全て同一の文様構成を採る訳ではなく差異が見られる。本来は石棺の蓋全面に赤色顔料が塗布されたものと思われ、同様に石室内壁にも赤色顔料が塗布されたものと思われる。

棺身入口の左右にも彫刻があるが、表面の摩滅が著しく判然としない。長方形区画の中に、石棺の妻側に見られる直弧文の崩れたような文様が浮彫される。

**顔 料** 朱（『福岡縣 1937』）

**遺 物** 石室・石棺内出土遺物は伝世していない。  
墳丘採集須恵器、円筒・形象埴輪（九州大学考古学研究室・広川町教育委員会）

**年 代** 5世紀前半

**調査歴** 昭和7年1月～ 墳丘測量・石棺実測調査（福岡県）

昭和12年3月～ 石室・石棺内発掘調査、石室・石棺実測図作成、拓本（福岡県）

平成25年3月 墳丘航空測量図作成（広川町教育委員会）

**整備歴** 昭和12年 石室・石棺覆屋設置工事

昭和39年 石室・石棺覆屋設置工事

令和2年 直射日光防止カーテン設置

**図面等** 寛延三年 周辺風景・石棺・石人図（『筑後國石人圖考』）

天明四年 石殿（石棺）周辺・石人図（『筑後國柳川原石人圖』）

嘉永六年 墳丘鳥瞰・遠景、石棺入口付近、石人図（『筑後將士軍談』）

明治26年 石人図（『故実叢

書 歴世服飾考』卷之一）

昭和8年 墳丘測量図・石棺実測図・石人実測図（『福岡縣 1933』）

昭和12年 石棺・石室実測図、石人図（『福岡縣 1937』）

昭和52年 墳丘測量図（九州歴史資料館）

（レーザ計測）東京大学池内研究室 2014.1 計測

HP用3次元計測アニメーション作成（石棺・武装石人）



図 430 「調査前ノ石棺前面」（『福岡縣 1937』）



図 431 石人山古墳石槨保存施設



图 432 石人山古墳石棺

(広川町教育委員会 2015)

**写 真** 九州歴史資料館 1977 撮影 4×5 カラー  
リバーサル 5 点

九州歴史資料館撮影 4×5 カラーリバーサル 8 点

九州歴史資料館 1977. 11. 10 撮影 35mm カラーリ  
バーサル 26 点

九州歴史資料館 2003. 4. 21 撮影 35mm カラーリ  
バーサル 8 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル 9  
点



図 433 石人山古墳石棺 (『福岡縣 1933』)

熊本県立装飾古墳館 2001. 5. 18 撮影 4×5 カラーリバーサル 7 点・モノクロ 5 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 13 点 (No. 0259～0261、No. 0862～0871)

**模 写** 日下八光 石棺蓋長・短側面 (模写) 2 点 (国立歴史民俗博物館)

**パネル** 九州歴史資料館 パネル 1 点 (206×186)・九州国立博物館 パネル 1 点 (158×127)

**模 型** 原寸大石棺模型 (広川町古墳公園資料館敷地内)

王塚装飾古墳館に 1/5 縮尺石棺・石室模型

**文 献** ※近世～近代の文献は『広川町教委 2013・2015』に詳しい。

緒方惟臣・杉山正仲 1751 『筑後國石人圖考』

谷川士清 1762 『日本書紀通證』

伊勢平蔵貞丈 1784 写了 『筑後國柳川原石人圖』

本居宣長 1798 『古事記伝』

本居宣長 1793～1812 『玉勝間』

伊藤常足 1841 『太宰管内志』

矢野一貞 1853 『筑後将士軍談』 卷之第五十一

田中尚房・尚久 1893 『故実叢書 歴世服飾考』 卷之一

福岡縣 1925 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第一輯

福岡縣 1928 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第三輯

梅原末治 1930 「筑後國一條石神山古墳の調査報告」 『史學』 第九卷第二號

福岡縣 1933 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第八輯 史蹟之部

福岡縣 1937 『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』 第十二輯 史蹟之部

福岡縣高等学校教職員組合 1951 『北九州古文化図鑑』 第二輯

森貞次郎 1956 「筑後国風土記逸文に見える筑紫君磐井の墳墓」 『考古学雑誌』 第 41 卷第 3 号

のち森貞次郎 1983 『九州の古代文化』 六興出版所収

広川町教育委員会 1997 『国指定史跡 八女古墳群 石人山古墳』 郷土の文化財 2

広川町史編さん委員会 2005 『広川町史』 資料編 広川町

広川町教育委員会 2013 『石人山古墳資料集・文献編』

広川町教育委員会 2015 『石人山古墳資料集・文献編第 2 集』

### 63 弘化谷（こうかだに）古墳

**立地** 福岡県の南部、八女丘陵の西側にある古墳である。標高 40m の丘陵頂部に位置し、西側 300m には石人山古墳がある。

**経緯** 昭和 45 年 3 月、ぶどう園造成工事の際に古墳の封土が削平された折、石室の石屋形に装飾文様のあることが確認され、郷土史家の岩崎光（福島高等学校教諭）から福岡県教育委員会あてにその旨、連絡が行われた。県教育委員会では広川町教育委員会に連絡後、現地へと急行し、地権者に対して工事の中止を要請、承諾を得て 4 月 2 日から発掘調査を実施した。調査に際しては県文化財専門委員の森貞次郎や文化庁調査官の指導を仰ぎ、4 月 20 日には現地説明会が開催され、調査成果の公表が行われた。



図 434 弘化谷古墳位置図 (1/25,000)

5 月 11 日には早くも史跡指定による保護の方針が関係者間で調整され、14 日には石室・石屋形の応急保存措置及び閉塞・埋戻しを実施、その後、昭和 52 年 7 月 19 日に国史跡に指定された。

史跡指定後の昭和 60 年に外部有識者からなる保存整備指導委員会が設置され、まずは 7 月に墳丘の樹木伐採と測量調査、8 月には周溝と墳丘規模確認のためのトレンチ調査が実施された。また、発見当時に石室前面部破壊のため運び出され、周辺に放置されていた 9 点の石材の略測も実施された。昭和 61 年度に基本設計・実施設計、昭和 62～平成 2 年度にかけて保存整備工事が実施された。現在は古墳公園として普及活用に使われている。

**名称** 弘化谷古墳（指定名称）

**所在地** 八女郡広川町大字 広川

**指定** 国指定史跡 昭和 52 年 7 月 19 日

昭和 53 年 3 月 24 日 名称

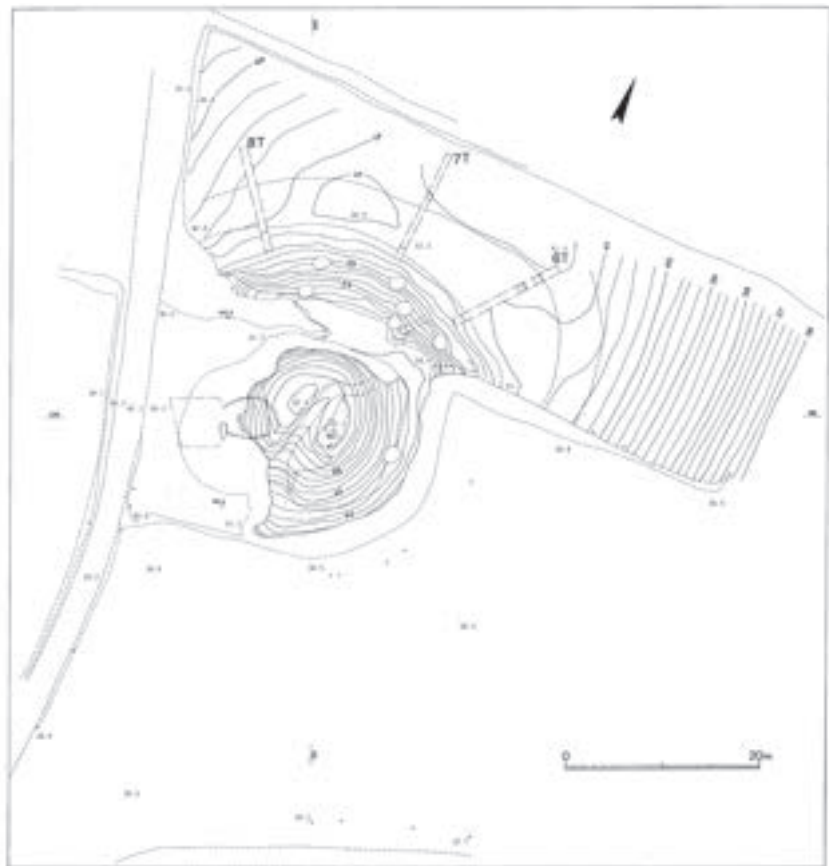


図 435 弘化谷古墳墳丘測量図 (1/800)

変更「八女古墳群 弘化谷古墳」

**墳丘** 円墳（墳丘径 39m、高 3.8m、周溝幅 6～7.2m、外堤幅 4～5m）造成工事で大きく損壊

**主体部** 横穴式石室（玄室前壁以前は削平のため不明、石屋形設置、南西側に開口、緑泥片岩割石使用）全長推定 9m、玄室長 4.6m、玄室幅 4.1m、玄室高 3.6m。

**装飾** 石屋形の奥壁・両側壁・上石の各内面 4 面、及び側壁壁・上石小口の計 3 面に、赤・緑の彩色を主とし一部線刻を併用して描画を行う。ほぼ全面に薄い赤色で地塗りが行われ、緑色は赤色の塗り残しによるもので緑泥片岩の地色の可能性もある。

奥壁には 5 段にわたって図文が配置される。全体的に右端部分の文様は残りが悪い。

最上段は左半分に頂点を上に向けた三角文を、赤と緑を交互に配置する。

2 段目は左端から輪郭を線刻した靱 7 点を並べ、右端に三角文を濃い赤色で描く。靱は凹字形の上半部に長台形の筒部がつく奴舩（やっこだこ）形で規格性が高い。これとは

対照的に、彩色部分は上半部内側をゴンドラ形に塗り分けたり、内側も濃い赤で塗りつぶす例と地色の薄い赤のままとするものが混在するなど多様である。

3 段目の左端には赤丸を緑で縁取った小型の同心円文を描き、その右側には 2 つの双脚輪状文を並べ、さらに赤と緑を交互に配した 4 重の同心円文を配置する。中央の赤は円の中心を外れている。これより右側は濃い赤が塗られているものの文様は不明。この他、2 段目の左から 4 番目

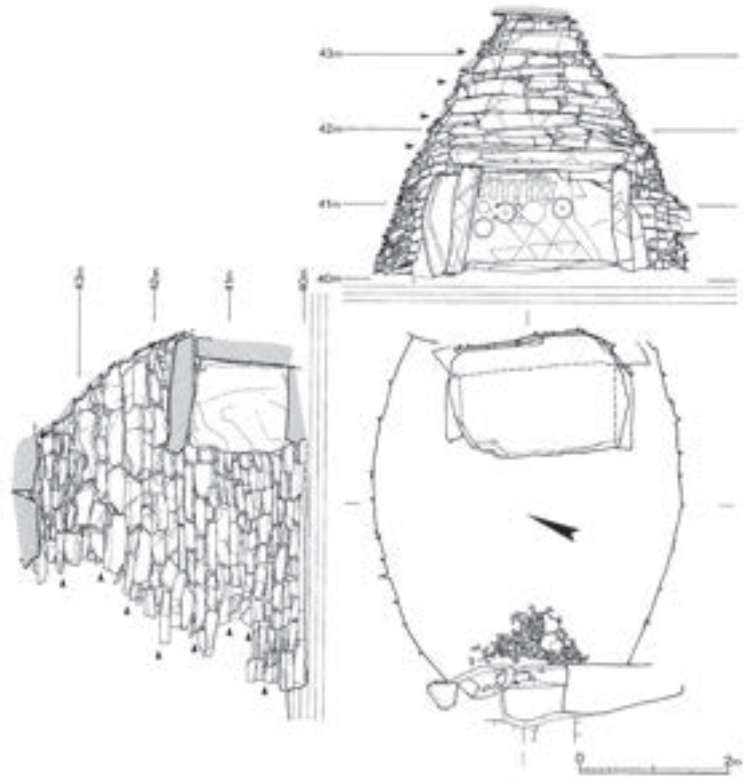


図 436 弘化谷古墳石室実測図 (1/100)

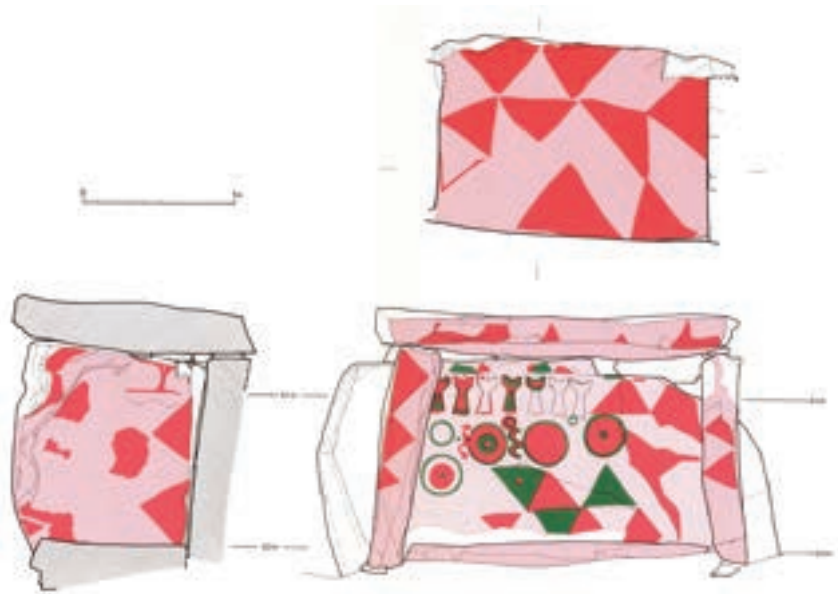


図 437 石屋形壁画実測図 (1/50)



図 438 弘化谷古墳石屋形

の靱と双脚輪状文との間には、赤・緑・赤と塗り分けた3重の同心円文が、右端の靱の左下には小円文が配されている。

4・5段目には赤と緑による三角文を2段にわたって連続させる。形状にはバラつきがあり、各段毎に一つひとつ三角形を塗り分けたものようである。4段目左側の緑色の三角文の中央には赤い円文が付け加えられている。4段目の左端には3段目にまたがるように4重の同心円文が描かれる。



図 439 奥壁赤外線フィルム写真

天井部内面は、内側に向けた大型の三角文を巡らせ、これらの頂点を結ぶ形でさらに三角文を連続させるが大きさは不揃いで規格性を欠く。左側壁内面には2点の三角文がある他、図形の識別が難しい。右側壁内面には釘で搔いたような落書きがある。他の面と同様に三角文を描いたものと推察されるが判断が難しい。上石・両側面小口の3面にも、地塗り後に三角文を連続して描く。

**顔 料** 赤・緑（地色の可能性もある）（『広川町教委 1991』）

**遺 物** 須恵器・武器・装身具等

**年 代** 6世紀中頃

**調査歴** 昭和45年（第1次調査）

広川町教育委員会

昭和60年（第2次調査）

広川町教育委員会

**整備歴** 昭和60～平成2年度 墳丘復原・保存整備・公園整備

**現 況** 古墳公園として保存活用に供される。

**図面等** 墳丘測量図、石室・壁画実測図（第1・2次調査）（広川町教育委員会）

（レーザ計測）東京大学池内研究室 2013.2 計測

**写 真** 九州歴史資料館 1990 撮影 4×5 カラーリバーサル 11点

九州歴史資料館 撮影 4×5 カラーリバーサル 6点

九州歴史資料館 1988 撮影 35mm

カラーリバーサル 15点

九州歴史資料館 1990 撮影 35mm

カラーリバーサル 56点

九州歴史資料館 1991 撮影 35mm

カラーリバーサル 3点

九州歴史資料館 1994 撮影 35mm

カラーリバーサル（外観）5点

九州歴史資料館 2003 撮影 35mm カラーリバーサル 4点

九州歴史資料館 撮影 35mm カラーリバーサル（赤外線、他）39点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 30点  
（No. 0262～0268、No. 0872～0894）

**パネル** 九州歴史資料館 2点（88×131、103×135）

**模 型** 広川町古墳公園資料館に原寸大石屋形模型

**文 献** 広川町教育委員会 1990 『国指定史跡 八女古墳群 弘化谷古墳』 郷土の文化財 1

広川町教育委員会 1991 『弘化谷古墳』 広川町文化財調査報告第8集

広川町史編さん委員会 2005 『広川町史』 資料編 広川町



図 440 石屋形天井部



図 441 弘化谷古墳の調査（昭和60年）

(6) 筑豊地域



图 442 筑豊地域分布图 (1/200,000)

## 64 川島（かわしま）古墳

**立地** 福岡県の中部、遠賀川上流域右岸に位置する古墳である。古墳が所在する丘陵は、遠賀川によって開析された丘陵の縁辺部にあり、遠賀川から500m程の距離にある。一帯には後期の円墳群が形成され、川島古墳群と呼ばれている。また、300m南には前方後円墳の寺山古墳があり、さらに1kmほど南には弥生時代の甕棺墓地群として著名な立岩遺跡がある。

**経緯** 昭和63年10月、市道改良工事に伴い古墳が発見され、連絡を受けた飯塚市教育委員会が現地を確認したところ、一部は既に削平を受けていたが横穴式石室を主体部とする古墳であり、昭和63年12月から1月にかけて発掘調査が実施された。この調査で奥壁に彩色壁画が確認されたため、工事計画を変更して古墳を保護するよう調整が図られた。

平成4年9月には県の史跡に指定され、これを受けて周辺の古墳群を含めた公園整備事業が計画された。飯塚市教育委員会では平成6年1月から3月に周辺の川島1・2・10号墳の範囲内容確認調査、翌7年度から9年度にかけて川島11号墳の保存整備工事及び周辺古墳群の保存整備・公園整備事業を実施し、平成10年度に川島古墳公園として一般公開された（川島1・2・10号墳は平成8年5月16日市指定史跡）。平成13・14年度には公園隣接地にある川島3・12号墳の確認調査も実施されている。

**名称** 川島古墳（『飯塚市教委1991』） 川島古墳（指定名称） 川島11号墳（『飯塚市教委1995』）

**所在地** 飯塚市大字川島

**指定** 福岡県指定史跡 平成4年9月2日

**追加指定** 平成27年3月17日

**墳丘** 円墳（工事により削平、径15m、高4m）

**主体部** 横穴式石室（複室・石棚・南側に開口・花崗岩石材使用）全長6.7m、玄室長2.4m、玄室幅1.9m、玄室高2.8m

**装飾** 玄室奥壁鏡石の中央部に彩色壁画が描かれる。壁画の遺存状態は悪く、形態も色調も不鮮明なところが多い。色調は現状では青味を帯びた黒色と



図 443 川島古墳位置図 (1/25,000)

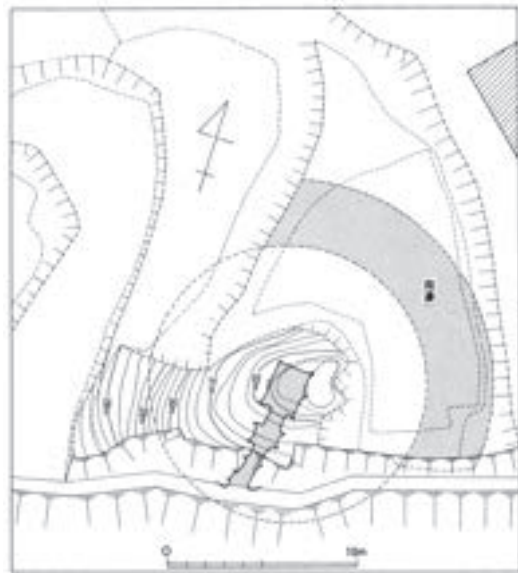


図 444 川島古墳墳丘測量図 (1/400)



図 445 川島古墳全景

赤色が認められる。

中央上部には三角形の冠状のものを被り両手を左右に伸ばして、右足をやや上げ左足を少し下げた立った人物を黒で描く。その右下に、両手を伸ばし両足を左右に開いた人物を黒で描く。その下には径 20 cm 前後のやや楕円形の円文を左上から右下の方向に黒で 5 点描く。完全な円形は 1 点で、残り 4 点は右下の一部が切れている。右側の縦連続三角文は黒で 2 点描かれる。その上にも何か描かれているようだが不明。左側には、棒状のものが黒で 2 本描かれており、上の 1 本の先端は水平に折れ曲がる。その左側にも黒色顔料が認められるが、剥落が著しく図文は不明である。さらに円文の下には垂直に伸びる線と斜めに下る線が左右に認められるが、やはり図文は不明。

赤色顔料は、左上の端から右下の縦連続三角文の右側まで広がり、上部は中央の人物の周辺まで、下部は垂直に伸びる線の下まで広がっており、黒色の図柄よりも広い範囲に認められるが、顔料の剥落が著しく明確な図柄を認めることはできないため、黒色の背景として塗布された彩色と考えられる。

なお、壁面の左上には部分的に、壁面を削って整えた跡が縦連続菱形文のように見える。

**遺物** 土師器・須恵器・武器・工具・馬具・装身具

**年代** 7世紀前半

**調査歴** 昭和 63 年度 不時発見に伴う発掘調査（飯塚市教育委員会）  
平成 5 年度 周辺古墳群調査（飯塚市教育委員会）

平成 13・14 年度 古墳公園周辺古墳群調査（飯塚市教育委員会）

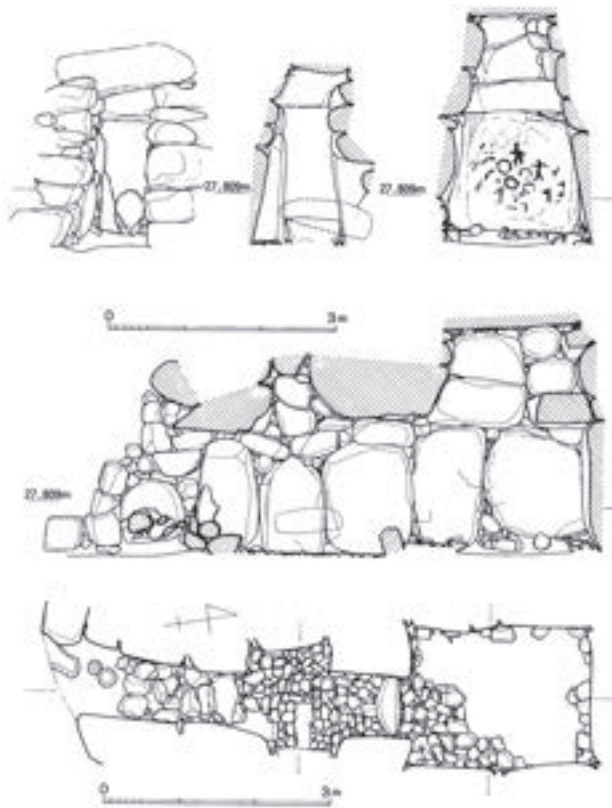


図 446 川島古墳石室実測図 (1/100)



図 447 川島古墳奥壁実測図 (1/40)



図 448 川島古墳後室奥壁・石棚

**整備歴** 平成 9 年度 川島古墳保存整備、周辺古墳群保存整備、公園整備

**図面等** 昭和 63 年度 墳丘測量図・石室実測図・壁画実測図（飯塚市教育委員会）

**写真** 九州歴史資料館 1988 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 4 点

九州歴史資料館撮影 4 × 5 カラーリバーサル 3 点

九州歴史資料館 1985. 11. 24 撮影 35mm カラーリバーサル 3 点

九州歴史資料館 1989. 1. 17 撮影 35mm カラーリバーサル 13 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル「川島 11 号墳、他」5 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 5 点（No. 0025・0026、No. 0536～0538）

飯塚市教育委員会昭和 63 年度調査時撮影 35mm カラーリバーサル・モノクロフィルム

**パネル** 九州歴史資料館 1 点（108 × 134）

**文献** 飯塚市教育委員会 1991 『川島古墳』飯塚市文化財調査報告書第 14 集

飯塚市教育委員会 1995 『川島古墳群』飯塚市文化財調査報告書第 21 集

飯塚市教育委員会 2002 『川島 3 号墳』飯塚市文化財調査報告書第 29 集

飯塚市教育委員会 2003 『川島 12 号墳』飯塚市文化財調査報告書第 30 集

飯塚市教育委員会 1999 『県指定川島古墳 市指定川島古墳群』飯塚市文化財整備報告書第 1 集

飯塚市史編さん委員会 2016 『飯塚市史』上巻 飯塚市

## 65 城腰（じょうのこし）遺跡 1号横穴墓

**立地** 福岡県の中中部、遠賀川上流域右岸にあり、遠賀川支流の一つである庄内川によって開析された標高 25m の丘陵東側斜面に位置している。周辺には複数の横穴墓が分布し、また、近隣には北ノ浦横穴墓群が所在する。1.5 km 北東には古代山城で知られる鹿毛馬神籠石がある。

**経緯** 平成 7 年 3 月、開発事業に伴う埋蔵文化財の有無が穎田町（現、飯塚市）教育委員会に照会され、伐採後に現地確認を行った結果、横穴墓らしき開口部を確認した。町教育委員会は事業者に対して試掘調査が必要である旨の回答を行い、平成 7 年 6 月に試掘調査を実施した。その結果、横穴墓だけでなく対象地内で弥生・古墳時代の遺構が確認されたため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

調査開始から間もない 7 月 28 日、1 号横穴墓の壁面で壁画らしき線刻が確認されたことから、町教育委員会では有識者等の指導・助言を仰いで価値の評価を図り、その見解をもとに保存に向けた調整を進めた。その結果、1 号横穴墓は破壊を免れ、現地に保存されることとなった。

**名称** 城腰遺跡 1 号横穴墓（『穎田町教委 1996』）

**所在地** 飯塚市大字佐與

**墳丘** 盛土は検出されていないが、墓室上部から幅 0.3m、深さ 0.1～0.2m の隅丸方形を呈して巡る溝があり、1 号横穴墓に伴う墳丘があったとみられる。

**主体部** 横穴墓（奥壁側に屍床、東向きに開口、ドーム型天井、壁面に軒先を意識した段状造り出し、天井部に棟の表現、玄室壁際・羨道部中央に排水溝設置、羨道部入口に閉塞石最下段のみ遺存）玄室長 2.8m、玄室幅 2.1m、玄室高 1.46m

**装飾** 墓室奥壁と左側壁の 2 ヶ所で線刻壁画が確認された。

奥壁には人物 2 体を並列して描いたものと思われる。左側の人物はいわゆる「コケシ」状を呈しており、頭部と体部の表現はあるが下半身と手の表現がない。頭部には目と口の表現があり、目には瞳と思われる表現が確認できる。右側の人物は頭部のみ表現したように見え、目と口らしき表現が確認できるが、下半には複数条の輪郭線が描かれているように見える。左側壁の中央、



図 449 城腰遺跡 1 号横穴墓位置図 (1/25,000)



図 450 城腰遺跡遠景



図 451 1 号横穴墓奥壁線刻



図 452 奥壁線刻画実測図 (1/6)

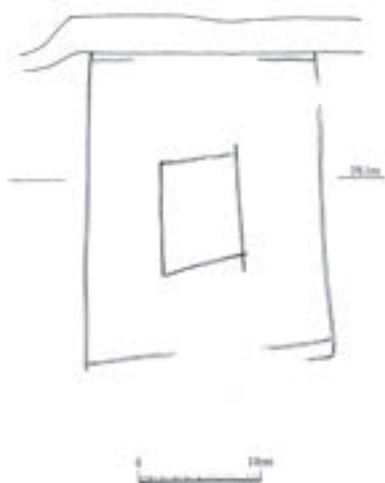


図 453 左側壁線刻画実測図 (1/3)

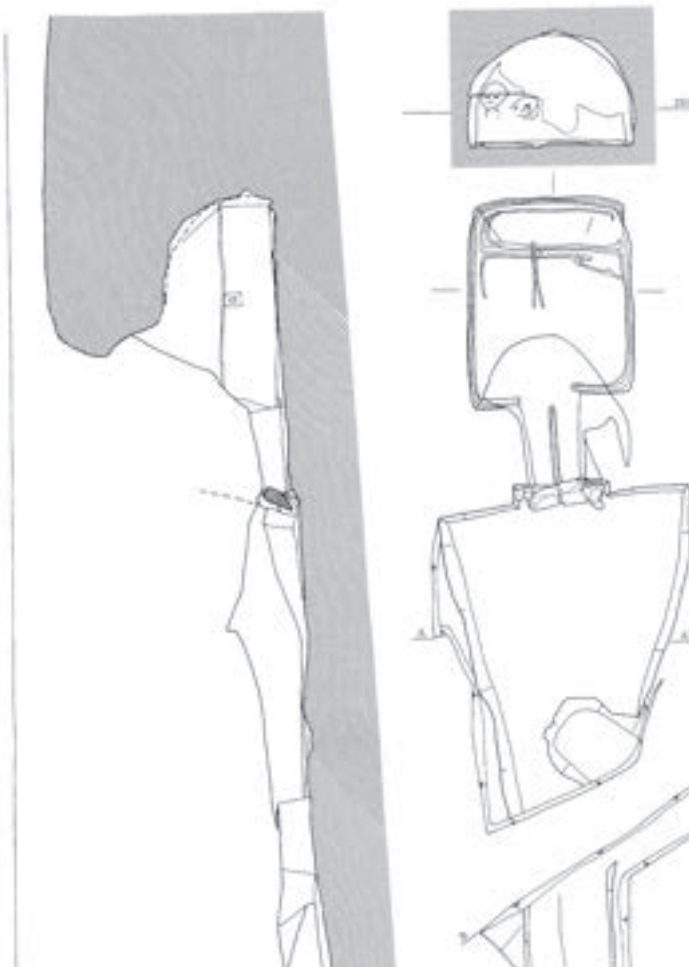


図 454 1号横穴墓実測図 (1/60)

軒先線の直下には漢字の「回」のような線刻が見える。

**遺物** 須恵器・武器等

**年代** 6世紀後半

**調査歴** 平成7・11・12年度 第1～3次調査(穎田町教育委員会)

**現況** 開口部を閉塞して現状保存

**図面等** 周辺地形測量図・横穴墓実測図・線刻壁画実測図(第1～3次調査時実測)

**写真** 九州歴史資料館 1995 撮影 4×5 カラーリバーサル 3点

九州歴史資料館 1995 撮影 35mm カラーリバーサル「城の腰古墳」32点

九州歴史資料館 撮影 35mm カラーリバーサル 3点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 6点 (No. 0027・0028、No. 0539～0542)

第1～3次調査時撮影写真(飯塚市教育委員会)

**文献** 穎田町教育委員会 1996『城腰遺跡』穎田町文化財調査報告書第3集

穎田町教育委員会 2002『城腰遺跡II』穎田町文化財調査報告書第7集

飯塚市史編さん委員会 2016『飯塚市史』上巻 飯塚市

## 66 山王山（さんのうざん）古墳

**立地** 福岡県の中部、遠賀川上流域左岸に位置する古墳である。

遠賀川と穂波川との合流点に近い、勝盛丘陵上の標高 40m 地点にあり、眼下に穂波盆地を見渡すことができる。付近には頭割古墳や片峰古墳、櫛山古墳、勝盛公園横穴墓群などの所在が知られるが、早くから市街地化が進んだため、自然景観をほとんど留めていない。

**経緯** 早くから開口しており、『筑前國続風土記附録』には「里民ハ山王山といふ」とある。

所在が知られていた一方で、本格的な発掘調査は行われてこなかったが、平成 19 年 2 月に土地所有者から土地売却の話が飯塚市教育委員会に寄せられ、市教育委員会では保存を目的とした範囲内容確認調査を平成 22 年 2 月から同年 6 月まで実施した。

調査の結果、奥壁に装飾らしき文様が確認され、装飾古墳の可能性が生じたことから、市教育委員会では有識者を招聘して価値の評価を仰ぎ、また、古墳調査の成果と装飾文様の発見の公表に努めた。同年 8 月には史跡指定による保護の方針が固められ、土地所有者等とその旨、協議が図られた。

平成 24 年 6 月には集中豪雨で墳丘の一部が崩壊したため、応急的に土砂除去作業を実施し、同年 9 月には植生土嚢等を用いた復旧作業を実施した。また、石室前と墳裾にトレンチを設定して範囲内容確認作業を実施した。

古墳の範囲や詳細な内容の確認を経て、平成 27 年 9 月には福岡県の史跡に指定され、行政の手による保護が図られている。

**名称** 山王山（『筑前國続風土記附録』）

山王山古墳（『飯塚市教委 2014』）

**所在地** 飯塚市西徳前

**指定** 福岡県指定史跡 平成 27 年 9 月 25 日

**墳丘** 円墳（径 20m 以上）



図 455 山王山古墳位置図 (1/25,000)



図 456 山王山古墳全景



図 457 奥壁文様実測図 (1/30)



図 458 山王山古墳石室実測図 (1/100)

**主体部** 横穴式石室（単室・南東側に開口・花崗岩・砂岩石材使用）玄室長 2.65m、幅 2.4m、高 2.4m。玄室天井石前面が露出し、「萬古洞」の陰刻がある。

**装飾** 奥壁腰石に装飾が確認された。文様は円文が主体で、中央に点を施したものや同心円の可能性のものもある。また、円がゆがんだり途切れたりするものもある。

腰石両端部には文様が見られず、また床面から 1.3m の高さより上位に文様が集中する。明瞭な円形は 12 点、不明瞭なものも合わせると 17 点の円形状の装飾が確認される。

**遺物** 須恵器・土師器・武器・馬具・装身具・埴輪

**年代** 6 世紀末～7 世紀初頭

**調査歴** 平成 22 年度 範囲内容確認調査（飯塚市教育委員会）

平成 24 年度 範囲内容確認調査（飯塚市教育委員会）

**整備歴** 平成 24 年度 墳丘崩落に伴う応急措置後、植生土嚢を用いた墳丘部分の復旧作業

令和 2 年度 板柵設置 令和 3 年度 墳丘裾部盛土 令和 4 年度 墳丘復元・石室内土砂除去

ロープ柵設置 令和 5 年度 法面整備 令和 6 年度 転落防止柵・階段・説明板・案内板設置

**図面等** 平成 22 年度 墳丘測量図・石室実測図・壁画実測図

（写真計測）九州歴史資料館 2024. 2. 26 計測

**写真** 飯塚市教育委員会平成 22・24 年度調査時撮影

飯塚市教育委員会令和 2～4 年度撮影



図 459 山王山古墳玄室奥壁



図 460 山王山古墳石室正射投影画像 (1/100)

九州歴史資料館 2024. 2. 26 撮影デジタル写真データ

文 献 加藤一純・鷹取周成 1799 『筑前國続風土記附録』

飯塚市教育委員会 2014 『山王山古墳』 飯塚市教育委員会第 45 集

飯塚市史編さん委員会 2016 『飯塚市史』 上巻 飯塚市

## 67 経塚（きょうづか）横穴墓群 110 号墓

**立地** 経塚横穴墓群は福岡県の中中部、田川盆地にある横穴墓群である。

遠賀川水系の一つである彦山川中流域の西岸、現況では沖積地に突き出た独立丘陵状を呈しており、英彦山山地から延びる古第三紀層を基盤とする丘陵が彦山川によって開析された、標高 45m 前後の丘陵東側斜面に形成される。

丘陵上部には 1～5 号の 5 基の古墳もしくは横穴墓に伴う盛土、斜面部には約 150 基の横穴墓が確認されている。丘陵上部には弥生時代終末～古墳時代前・中期の箱式石棺墓や石蓋土壙墓・土壙墓も分布する。100m ほど離れた丘陵斜面にも轟尾横穴墓群が形成される。



図 461 経塚横穴墓群位置図 (1/25,000)

線刻壁画のある 110 号墓は、経塚横穴墓群中の 1 基である。

**経緯** 経塚横穴墓群については、昭和 40 年代に福岡県教育委員会が実施した福岡県内の遺跡詳細分布調査で確認され、「経塚横穴墓群」として『福岡県教委 1977』に登載された遺跡である。この段階では 3 基の円墳と 50 基の横穴墓群として周知化が図られた。

平成 8 年度には中学校運動場整備工事、翌 9 年度には市道改良工事に伴い記録保存のための発掘調査を田川市教育委員会が実施（第 1 次調査）、平成 16 年度には崩壊の危険が高いと判断された丘陵先端部について発掘調査を実施し（第 2 次調査）、平成 18 年度には零細事業実施に伴う記録保存発掘調査を実施した（第 3 次調査）。

経塚横穴墓群 110 号墓は、過去の横穴墓群調査において浮彫の存在が確認された横穴墓で、現在まで本格的な発掘調査は行われていない。横穴墓上の丘陵頂部には径 24m を測る円形盛土があるが直上ではなく、当横穴墓が造営の契機となっている訳ではない。

**名称** 経塚横穴墓群 110 号墓

**所在地** 田川市大字伊田

**主体部** 横穴墓（複室構造、東側に開口、ドーム形天井、屋根表現、後室側が前室よりも 50 cm ほど高い）全長 4.5m、後室長 1.6m、幅 2.35m、高 1.5m、玄門幅 1.4m

**装飾** 開口部から入ってすぐの前室左袖部内側に、心葉形を帯で垂下したような形状の浮彫が 1 つある。文様の位置は軒先線から 20 cm 下、床面から 30 cm 上にある。文様の大きさは長軸 25 cm、短軸 20 cm、厚さ 2cm で周囲が削られているためかなり立体的に表現される。また、玄室奥壁の天井部付近に柱状の浮彫がある。

奥壁上方には、やはり浮彫による支柱と軒先の表現がみられる。天井部は三角形の屋根上を呈すが崩落が進む。後室の奥壁および両側壁には方形に彫り込まれているが、これは恐らく後世の所産と思われる。その他、壁面には多数の線刻が認められるが後世の所産とみられる。

**年代** 古墳時代後期～終末期



図 462 経塚横穴墓群 110号墓前室左袖側浮彫



図 463 後室奥壁屋根表現

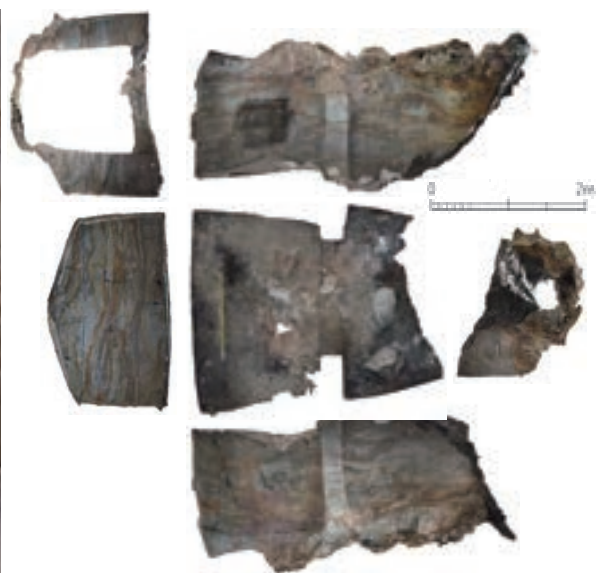


図 464 経塚横穴墓群 110号墓正射投影画像 (1/100)

現況 開口状態のまま現状保存

図面等 (写真計測) 九州歴史資料館 2024. 4. 25 計測

写真 九州歴史資料館 2024. 4. 25 撮影デジタル写真データ

文献 田川市教育委員会 1999 『経塚横穴墓群・古墳群』 田川市文化財調査報告書第 9 集

田川市教育委員会 2011 『経塚遺跡Ⅱ』 田川市文化財調査報告書第 13 集

## 68 西郷（にしのごう）横穴群第1号横穴

**立地** 福岡県の中部、遠賀川上流域左岸に位置する。琴平山から南東に連なる丘陵部には標高70m内外の舌状丘陵が各所にあり、西郷横穴墓群は琴平山の南東250mにある丘陵斜面に造営された、合計20基以上からなる横穴墓群である。北側に近接する独立丘陵上には全長50mを超える前方後円墳の竹生島古墳がある。

**経緯** 大正15年5月、山林開墾中に横穴墓群が発見され、地元青年団を中心に各組・小生徒などによって発掘が行われた。当時は皇国史観の台頭期でもあり、新聞やラジオで発見が喧伝されたようである。発掘作業は鳥居龍造や木下謙太郎の指導の下に行われ、同年8月には帝室博物館監査官、内務省考査官柴田常恵等の視察があり、「西郷百穴保存会」も結成されたらしい。発掘当時の横穴数は20基を数え、そのうちの第1号横穴の側壁に線刻による装飾が確認された。各横穴から多くの須恵器・土師器が出土し、人骨も出土したため、1号横穴の上に墓を設けて埋葬したと伝えられる。当時は「西郷百穴絵葉書」も作成された。

『福岡縣 1934』では調査委員の島田寅次郎が実見した県内横穴の一つに掲げられ、「宛然百穴の壯觀を呈している」と表現されている。第1号横穴の装飾については「書とも画とも判別し難き装飾あり、精査せざれば判定し難しとて考査官（柴田常恵）の首肯を得ざりし」と報告されている。

発掘された横穴群も、今では灌木や雑草に覆われ、崩落で埋没しているものが多い。第1号横穴の装飾も壁面の剥離により確認できなくなってしまったようである。

**名称** 西郷百穴第1号横穴（大正15年発見当時）

西郷横穴（『福岡縣 1934』）

西郷横穴群第1号横穴（『碓井町 1982』）

**所在地** 嘉麻市西郷

**主体部** 横穴群（詳細不明）全体の傾向として、方形の玄室に短い羨道を設けたものが多い。玄室の規模は一定ではなく、奥行2.9m、幅2.3mのものや、奥行1.2m、幅1.4m



図 465 西郷横穴群位置図 (1/25,000)



図 466 西郷横穴群位置図 (『碓井町 1982』)



図 467 発見当時の第1号横穴 (『碓井町 1982』)



図 468 発見当時の第1号横穴線刻（『碓井町 1982』）



図 469 西郷横穴群遠景



図 470 西郷横穴群近景



図 471 西郷横穴群の他の横穴墓室内

のものもあり、高さはほぼ 1.1m～1.4m である。羨道の奥行は 1.5m、幅 1.1m、高さ 1m のものが大きい方であり、全体的に短い。側壁は垂直で天井は弧状のものが多く、中には屋根形のものもある。底部には側壁に沿って設けられた排水溝の痕跡もある。

**装飾** 正面左側には長方形の外枠を描き、下部に横方向の平行線と斜線で文様帯を表現した文様がある。左側には神社の鳥居の内側にアーチを表現したような文様があり、右側にも同様の文様がみられる。右端は判然としないが正面左側の文様構成に類似し、長方形の外枠で下部に横方向の平行線、斜線で文様帯を表現したように見える。文様の内側や周辺には多数の雑な縦方向の線刻が見える。

**遺物** 発見当時、多数の須恵器・土師器が出土。現在は伝わっていない。

**調査歴** 大正 15 年 5 月～8 月 鳥居龍造・木下讃太郎の指導のもと、地元青年団を中心に発掘調査が実施された。

**整備歴** 調査後、開口部に扉を設置する等の整備が行われたことを示す写真がある。

**現況** 開口状態のまま現状保存。

**写真** 大正 15 年当時の出土品写真、第 1 号横穴入口写真（『碓井町 1982』掲載）

**文献** 福岡縣 1934『史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第九輯（史蹟の部）

弥常義徳編 1982『碓井町誌』碓井町

## 69 王塚（おうづか）古墳

**立地** 福岡県の中央部、嘉穂郡桂川町にある装飾古墳である。遠賀川中流域に形成された、嘉穂盆地と呼ばれる沖積平野の南西端部に位置し、遠賀川の一支流である穂波川の右岸、標高 35m の低丘陵上に築かれる。かつては産炭地として栄え、付近には大小多数の鉱山が点在したが、現在では炭鉱を思い起こすのも困難なほど景観が一変しており、周囲には宅地と田園が広がっている。

王塚古墳は寿命丘陵（金比羅山）と呼ばれる山塊の南西端部に位置し、寿命丘陵の尾根上には3基の前方後円墳（金比羅山古墳・宮ノ上古墳・大平古墳）があり、また南1kmにはやはり前方後円墳の天神山古墳がある。王塚古墳を中心に半径2km内に合計8基の前方後円墳が集中し、王塚古墳は累代首長墓群の一つとして捉えられる。

**経緯** 昭和9年9月30日、石炭採掘の影響で陥落した田地を復旧するため、台地の土砂を採取し運搬していたところ、偶然石室の一部が開口して古墳発見に至った。なお、これより数年前から前方部の一部は開削されて民家の敷地とされていたようである。

石室の副葬品は開口直後の夜の内に取り上げられてしまったため、原位置が分かるものは無く、また全ての副葬品が回収された訳ではないようである。その後、10月9日には縣社寺兵事課囑託の川上市太郎が来訪して調査を実施、立ち入り禁止措置を執った後、11月には国の仮指定措置が行われた。その時の調査所見については、同10年12月30日付で報告書が刊行された。12月2日には縣調査員の中山平次郎（九州大学教授）、12月22日には帝室博物館後藤守一が現地を訪れて調査を実施、翌10年1月4日には県の委嘱を受けた伊勢幸平・藤野不二男の両氏が壁画模写を開始し、2月7日に終了した。この間、1月9日には文部省調査官として黒板勝美も調査のため来訪している。

3月15日には石室入口の保護工事が竣工、昭和12年には古墳に玉垣や石段を設置する等、古墳の保存措置が講じられ、同12年6月15日に国の史跡に指定された。昭和10年12月末と、昭和13年冬には京都帝國大學文學部が調査を実施し、昭和14年12月にはその調査成果をまとめ



図 472 王塚古墳位置図 (1/25,000)



図 473 発見当時の王塚古墳



図 474 福岡縣社寺兵事課による調査  
(左端：伊勢幸平 右端：西岡二馬)



图 475 「玄門部裝飾見取圖」(『福岡縣 1935』)



图 476 「玄門部内側裝飾見取圖」(『福岡縣 1935』)

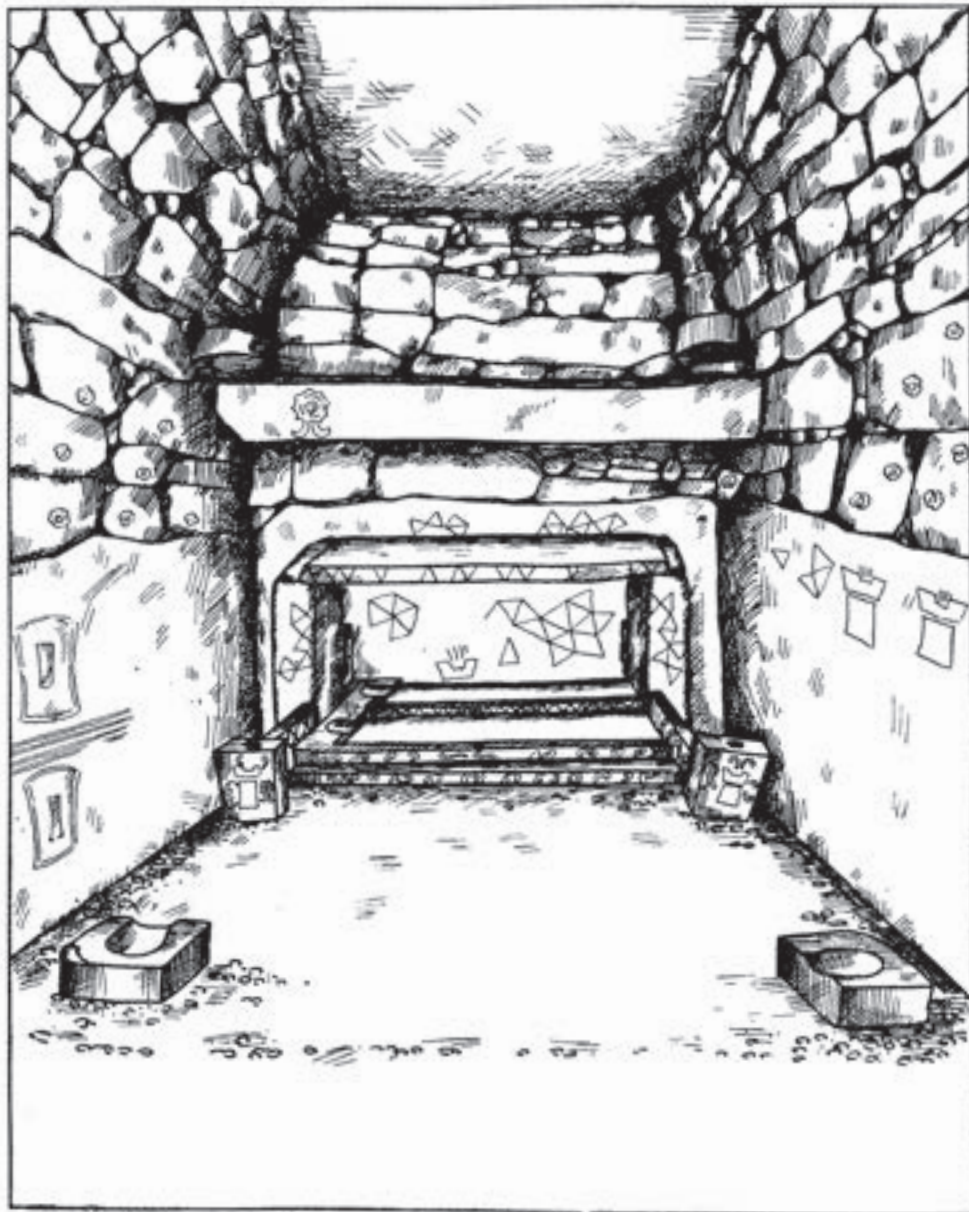


图 477 「石室内觀見取圖」(『福岡縣 1935』)



図 478 双脚輪状文の一例

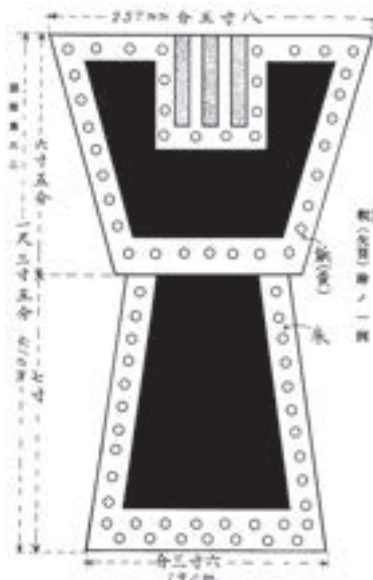


図 479 鞍の一例

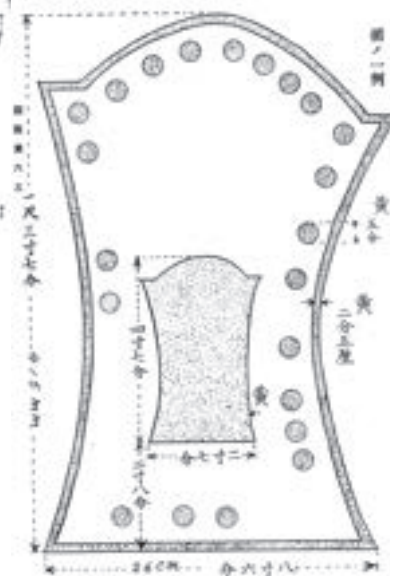


図 480 盾の一例



図 481 「王塚古墳石室裝飾模写圖 - 西南壁面」(『京都帝國大學 1940』)

た報告書が刊行された。

発見後、それほど間を置かずして保存工事が行われたにもかかわらず、石室内への漏水、菌類増殖、積石亀裂等の問題が保存工事後に発生、そのため昭和 17 年以降は、それらへの対処が長期に亘って続くこととなった。昭和 18 年 2 月には石室上面に盛土・芝張による防水工事が施工され、同年 3 月にはホルマリンによる燻蒸消毒が行われた。戦後の昭和 23 年 8 月には当該地区の石炭採掘計画が浮上し、古墳保護か石炭採掘かを秤にかけるような内容の報道も行われた。発見から昭和 40 年代までの間、王塚古墳に対して行われてきた諸々の措置については、古墳の近隣に居を構え、保護に並々ならぬ私的努力を払ってきた西村二馬が残した記録類に詳しい。



図 482 「王塚古墳石室装飾模写圖—主室奥壁面」  
 (『京都帝國大學 1940』)



図 483 「王塚古墳石室装飾模写圖—主室前壁面」  
 (『京都帝國大學 1940』)

昭和 44 ～ 46 年の間、王塚古墳の保存対策として文化庁・福岡県教育委員会が「装飾古墳保存対策研究会」に対して研究を委託、装飾古墳に対する科学的保存策が検討された。検討項目は石室内温湿度、壁画顔料、微生物、石材風化、顔料剥落防止の化学的処理、石室の構造力学、石室の崩壊要因、石室内環境調整など多岐に亘り、関連諸分野の専門家を招聘して各項目の調査研究が進められた。その成果は王塚古墳のみならず、それ以降に全国で行われることになる装飾古墳保護の科学的側面の端緒に位置付けられている。

桂川町教育委員会では昭和 57 年に王塚古墳保存整備調査委員会を設置、その検討内容に基づいて昭和 62 ～平成 5 年度に保存整備工事、平成 12 年～平成 14 年度には後円部復元工事及び石室浸水対策工事を施工し、その後も日常的な維持管理と保存整備工事を実施した。平成 6 年度には隣接地にガイダンス施設「王塚装飾古墳館」が開館し、普及活用の充実が図られている。

**名 称** 王塚古墳 (『福岡縣 1935』)

**所在地** 嘉穂郡桂川町寿命 (じゅめい)

**指 定** 昭和 9 年 11 月 9 日 国仮指定

昭和 12 年 6 月 15 日 国史跡指定

昭和 27 年 3 月 29 日 国特別史跡指定

昭和 52 年 7 月 2 日 追加指定

(出土品) 昭和 31 年 6 月 28 日 国重要文化財指定

**墳 丘** 前方後円墳 (全長 86m、後円部径 56m、高 9m、二段築成) 墳丘一部復元

**主体部** 横穴式石室 (複室構造、後室奥壁に石屋形・灯明台石・石棚、北西側に開口、粗粒砂岩・花崗岩・安山岩等 7 種類の石材使用) 全長 6.75m、後室長 4.4m・後室幅 3m・後室高 3.8m

**装 飾** 後室の全面と前室奥壁に、赤・黒・緑・白・黄・灰の 6 色の顔料を用いて壁画が描かれる。後室の腰石すべてに 6 色を使用した三角文が隙間なく連続し、その間に武器類の壁画を描く。靱は前壁と右側壁、奥壁に、弓は右側壁に靱とセットで、盾は右側壁に、大刀は前壁の各靱との間

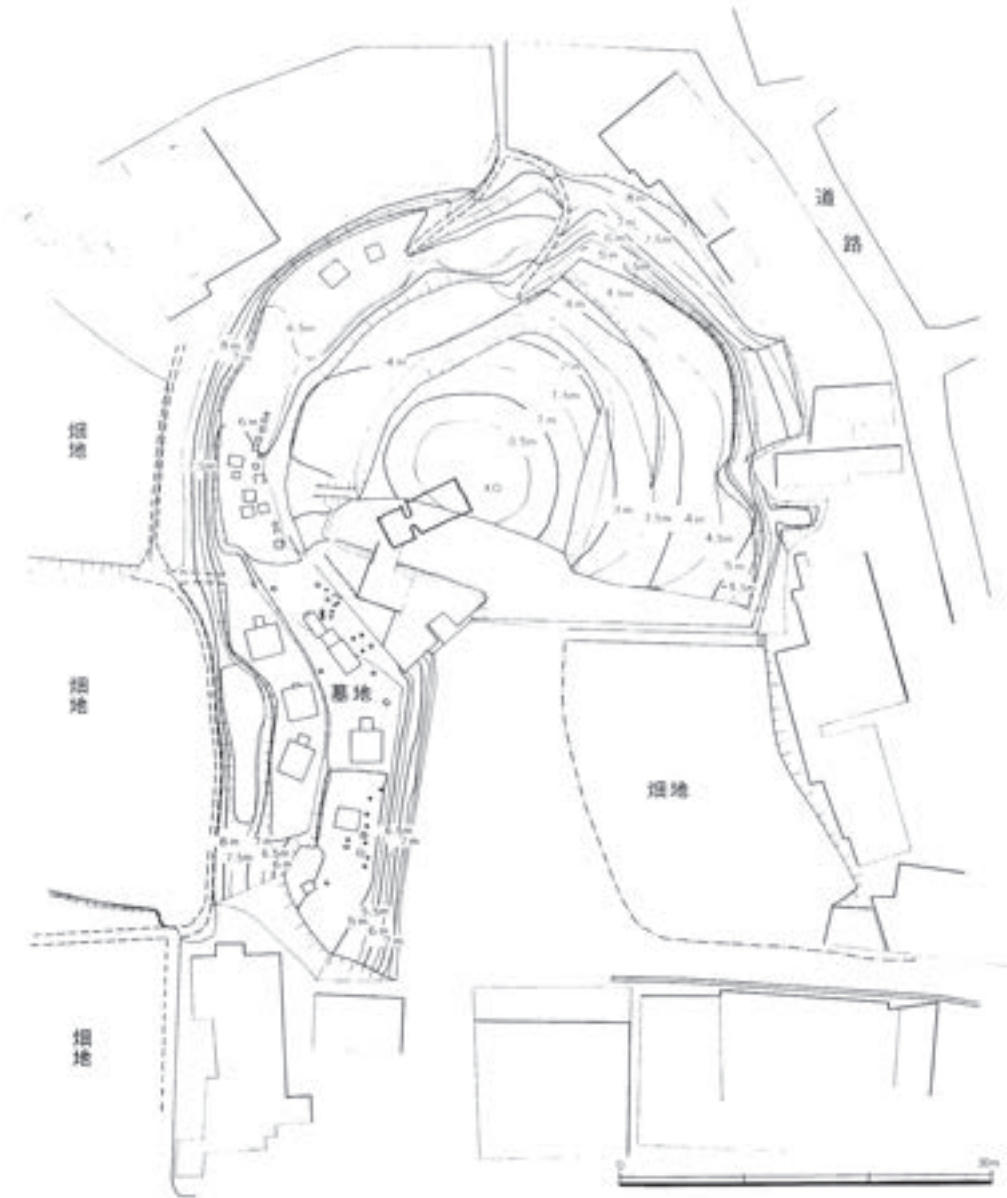


図 484 王塚古墳墳丘実測図 (1/600)

に描く。靱は複数種類の表現方法がある。腰石上部から天井石にかけては赤色の下地の上に珠文を描き、天井石にのみ小点を加えている。また、右側壁の腰石には中央上段の靱の周りに珠文を描く。楣石には三角文を連続して描く。

石屋形は蓋石と側石の内外面全てに三角文を隙間なく連続して描く。障石・棺床正面には蕨手文と三角文を描く。灯明台石は前面に靱、双脚輪状文、蕨手文、上面に三角文と同心円文を描く。

前室は後壁にのみ壁画を描く。騎馬像は玄門の袖石に、左側3頭、右側に2頭が、通路側に首を向けて四足を揃えて立った姿で描かれる。騎馬像の馬は黒色と赤色で描き分けられ、面繫・尻繫・鞍・障泥・手綱の馬装や牡馬の表現がなされる。騎馬像で乗馬する人物は赤・黒・黄・緑色で描き分けられるが、馬と比べて小さい。左側の袖石上部の騎馬像にのみ馭者が黒色で描かれる。騎馬像の周囲には同心円文・蕨手文・三角文を描く。楣石には上下を向いた蕨手文と同心円文を描く。右袖石と楣石の右端にわたって3点の双脚輪状文を縦方向に並べて描く。天井石に接する巨石には黄色の珠文を二段に分けて描く。

顔 料 赤・白・黒(1)・緑・黄(「山崎一雄 1951・1974」) 赤・黒・緑・黄(『平凡社 1964』)

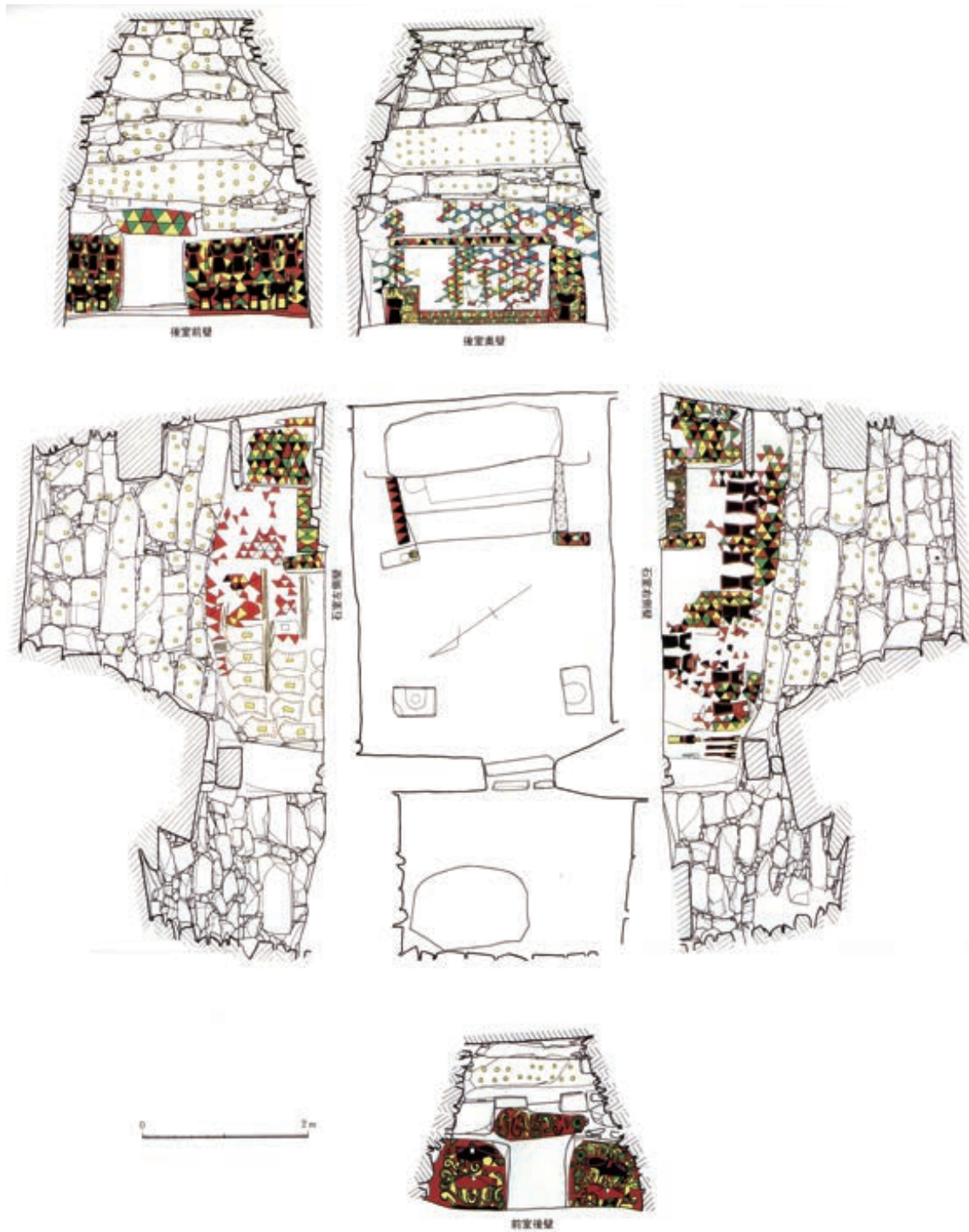


図 485 王塚古墳石室実測図 (1/80)

小林行雄) 赤・白・黒・青・黄等 (『講談社 1973』斎藤忠) 赤 ( $\alpha$ -赤鉄鉱を含む粘土またはその焼成物)・白 (白土 (白色粘土))・黒 (非晶質のマンガン化合物を含む粘土)・緑 (海緑石)・黄 (黄土 (黄色粘土) 含水酸化物を含む粘土) (『福岡県 1975』江本義理) 赤 (ベンガラ)・白 (白土)・黒 (非晶質のマンガン化合物を含む粘土)・緑 (海緑石)・黄 (黄土) 油様の展色材 (顔料の接着剤) 使用による塗布 (「永嶋正春 1999」) 赤・白・黒・灰・黄・緑 (「朽津信明・川野邊渉 2000」)

遺物 墳丘：須恵器・埴輪

石室：須恵器・土師器・武器・武具・馬具・装身具・鏡



図 486 奥壁石屋形・石柵



図 487 玄門部

年代 6世紀前半

調査歴 昭和9年10月9日～ 福岡縣学務部社寺兵事課（囑託 川上市太郎）

昭和11年11月下旬～ 京都帝国大学文学部考古学研究室（基本調査）

昭和13年冬 京都帝国大学文学部考古学研究室（実地再検討）

昭和27年 後円部北側の排水溝の調査（森貞次郎）

昭和39年 墳丘測量図と壁画実測図の修正（森貞次郎、他）

昭和40年 石室入口工事に伴う墓道部の調査（渡辺正気・小田富士雄）

昭和45年 石室実測図作成（森貞次郎・岡崎敬・小田富士雄）

昭和57～平成元年度 史跡整備に伴う発掘調査（桂川町教育委員会）

平成14年度 後円部復元・石室浸水対策工事に伴う墳丘北側発掘調査（桂川町教育委員会）

**保存環境調査・顔料調査・模写等**

昭和10年 模写（伊勢幸平・藤野不二男）

昭和17年 菌類被害状況調査（瀨瀨理一郎）

昭和23年 鉱害状況調査（鏡山猛・県石炭局・麻生鉱業立会調査）

昭和23年 漏水被害状況調査（森貞次郎）

昭和23年 石炭採掘に関する各関係者の現地立会調査

昭和26年 顔料調査（山崎一雄・森貞次郎）

昭和30～33年 模写（日下八光）

昭和44～46年度 温湿度・構造・微生物・顔料・地下水位等調査（装飾古墳保存対策研究会）

昭和58～62年度 石室・墳丘の保存整備に向けた環境調査（王塚古墳保存整備調査委員会）

昭和58年度～ 王塚古墳内外における気象観測（桂川町教育委員会）

昭和58年度 地下水位の調査（桂川町教育委員会）

昭和58年度 石材損傷調査（桂川町教育委員会）

昭和58年度 石室内微生物調査（桂川町教育委員会）

平成11年 顔料分析調査（東京文化財研究所 朽津信明）

平成14年 微生物調査（東京文化財研究所 佐野千絵）



図 488 玄室前壁



図 489 伊勢幸平「王塚古墳羨室右壁壁画」（昭和10年）



図 490 王塚古墳石室 e-Heritage 画像

平成 15 年 石室内レーザ計測（東京大学池内研究室・朽津信明、他）

**整備歴** 昭和 10 年 石室入口に覆屋設置

昭和 12 年 玉垣・石段工事

昭和 18 年 石室漏水防止工事

昭和 24 年 石室漏水防止工事

昭和 25 年 古墳入口通路、史跡碑設置

昭和 40 年 石室漏水防止工事

昭和 42 年 前年に石室石材に亀裂確認、石室内に鋼管支柱（34 本）を設置

昭和 47 年 石室漏水防止のため墳丘をシートで被覆

昭和 62～平成 5 年度 保存整備工事

平成 12～平成 14 年度 後円部復元工事及び石室浸水対策工事

令和 2 年度 保存活用計画策定委員会設置・保存活用計画策定

令和 4 年度 保存整備指導委員会設置・石室内環境の現況確認

令和 5・6 年度 鋼管支柱取り外し・取り換え

**現況** 保存整備工事後、現状保存。ガイダンス施設にて公開活用。

**図面等** 墳丘測量図・石室実測図・石室見取図（福岡縣 1935）

墳丘測量図・石室実測図・装飾模写図（小林行雄模写）（京都帝国大学文学部 1939）



図 491 王塚古墳模型（玄室石屋形）

墳丘測量図・壁画実測図一部修正（森貞次郎・宮小路賀宏・石松好雄・前川威洋 1964）

墳丘測量図・石室実測図・壁画実測図（九州大学文学部考古学研究室 1965）

（レーザー計測）東京大学池内研究室 2005. 2 計測

（写真計測）基盤研究（A）（1922026）2008. 3. 6 計測

（写真計測）桂川町教育委員会 2022. 12. 12～15、2023. 3. 18 計測

出土土器実測図（『嘉穂地方史編纂委員会 1973』）

**写 真** 古墳外観・墳丘断面・石室内装飾、他モノクロ写真（『福岡縣 1935』）

古墳遠景・近景・石室内モノクロ、装飾カラー、他写真（京都帝国大学文学部 1939）

藤本四八撮影 4×5 カラーリバーサル「彩画のある石屋形」（後室奥壁） 2A・2C・2D 3点、  
同 1 1点

同「壁面をおおいつくす彩画」（後室奥壁）A～C 3点、同「鏡」AB 2点

同「出土品」1・2 2点、同「騎馬像の彩画」（前室奥壁左右）A・B 2点

同「蕨手文の彩画」（前室奥壁上部）1・2A・2B 3点

同「彩画のある石屋形」（後室奥壁）1・2B 2点

同「靱と連続三角文の彩画」（後室右壁部分）1点、同「右側の灯明台石」1点

九州歴史資料館 1975 撮影 4×5 カラーネガ 8点、カラーリバーサル 44点

九州歴史資料館撮影 4×5 カラーリバーサルフィルム 22点

九州歴史資料館 1981 撮影 35mm カラーリバーサル（古墳周辺・石室支柱）215点

九州歴史資料館 1982 撮影 35mm カラーリバーサル（トレンチ調査）60点

九州歴史資料館 1986 撮影 35mm カラーリバーサル 174 点

九州歴史資料館 1989 撮影 35mm カラーリバーサル (閉塞部調査) 44 点

九州歴史資料館撮影 35mm カラーリバーサル (遠景・外観、他) 339 点 (棒焼付含)

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 136 点 (No. 0001 ~ 0024、No. 0424 ~ 0535)

**模 型** 桂川町王塚装飾古墳館に実物大模型 (平成 6 年度作成)

熊本県立装飾古墳館に実物大模型 (飯塚市歴史民俗資料館昭和 56 年 11 月作成。その後、平成 13 年に熊本県立装飾古墳館に寄贈)

**模 写** 伊勢幸平・藤野不二男 昭和 10 年製作模写 2 点 (桂川町保管)

伊勢幸平・藤野不二男 昭和 10 年製作模写 22 点 (東京藝術大学大学美術館所蔵)

日下八光 現状模写・復元模写 70 点 (国立歴史民俗博物館)

**映 像** 「王塚古墳」(10 分・RKB) 1970 頃製作 (桂川町王塚装飾古墳館)

「船と太陽」(50 分・TNC) 1969 頃製作 (桂川町王塚装飾古墳館)

「馬は見えるか」(50 分・TNC) 1987 頃製作 (桂川町王塚装飾古墳館)

「寿命地区の遺跡群」(4 分・KBC 映像) 2016 頃製作 (桂川町王塚装飾古墳館)

**パネル** 九州歴史資料館「玄門外から」1 点 (130 × 160)

九州国立博物館「玄門外から」1 点 (127 × 158)、「玄門中から」1 点 (127 × 102)、「双脚輪状文」1 点 (127 × 102)

王塚装飾古墳館「前室後壁左側袖石」1 点、「前室後壁」1 点「前室後壁右側袖石」1 点、「後室前壁」1 点、「後室右側灯明台」1 点

**文 献** 福岡縣 1935 『筑前王塚古墳』福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第十一輯

島田寅次郎 1935 「考古學上の嘉穂郡桂川村大塚 (或ハ王塚) 瞥見記」『筑紫史談』第六十四號

京都帝國大學文學部考古學研究室 1940 『筑前國嘉穂郡王塚装飾古墳』京都帝國大學文學部考古學研究報告 第十五冊

福岡縣高等学校教職員組合 1951 『北九州古文化図鑑』第二輯

古野日出男編 1967 『桂川町誌』桂川町

嘉穂地方史編纂委員会 1973 『嘉穂地方史』先史篇

福岡県教育委員会 1975 『特別史跡王塚古墳の保存—装飾古墳保存対策研究報告書—』

桂川町教育委員会 1976 『特別史跡王塚古墳保存の歴史と計画・保存管理策定書』

桂川町教育委員会 1994 『国指定特別史跡王塚古墳—発掘及び保存整備報告—』桂川町文化財報告書第 13 集

長谷川清之 2003 「壁画とカビ」—装飾古墳保存の現状と課題— 『地方史ふくおか』第 118 号

柳澤一男 2004 『描かれた黄泉の世界・王塚古墳』シリーズ「遺跡を学ぶ」010 新泉社

桂川町教育委員会 2021 『特別史跡王塚古墳保存活用計画』

(7) 京築地域



図 492 京築地域分布図 (1/200,000)

## 70 皆見大塚（あざみおおつか）古墳

**立地** 福岡県の東部、京都平野の南西端にある古墳である。祇川中流域右岸に形成された河岸段丘上に位置しており、周囲には同時期の古墳群は見られず単独で占地する。近隣のカワラケ田遺跡第2次・八ツ重第2次調査区では古代道路跡が検出されており、この付近がかつては交通の要衝だったことが分かる。1 km北側の祇川右岸自然堤防上には、弥生時代終末～古墳時代初頭の墳墓群や古墳時代後期の群集墳で知られる徳永川ノ上遺跡がある。

東九州自動車道建設に伴い発見され、その後、関係者間の協議により現状保存が図られた。そのため、現状では古墳の両側に橋脚が据えられ、上部には道路が架構されている。

**経緯** 東九州自動車道建設に伴い、福岡県教育委員会が平成21年5月から当該地区の発掘調査を開始したところ、重機による表土掘削の過程で、大部分が削平され天井石が露出した古墳が1基確認された。この古墳はそれまで未確認で個別名称が付されていなかったため、古墳の所在地名から「皆見大塚」古墳と命名された。皆見大塚古墳は同年9月9日から調査が着手され、調査途中の11月5日に、石室壁面に赤色顔料等による彩色文様が施文されていることが分かった。

発掘調査自体は平成21年度に終了し、翌22年度には古墳の保存に関する協議が関係者間で執り行われ、工法変更により高速道路下での保護が実施されることとなった。平成23年度には石室・壁画部分の保護を前提とした保存整備工事が実施された。並行して平成23年1月以降、県の史跡指定に向けた準備が進められ、平成24・25年度には保存後の管理活用方針について関係者間で協議調整が進められた。

現在では、京築地区で唯一の彩色系装飾古墳として、地域による管理活用が図られている。

**名称** 皆見大塚古墳（『九州歴史資料館2015』）

**所在地** 京都郡みやこ町大字皆見

**指定** 福岡県指定史跡 令和元年9月13日

**墳丘** 円墳（直径13m、二重周溝外端で約33m、墳丘は二段築成の可能性）

**主体部** 横穴式石室（複室構造、南西側に開口、花崗岩石材使用）全長7.0m、玄室長3.0m、玄室幅2.0m



図 493 皆見大塚古墳位置図 (1/25,000)



図 494 皆見大塚古墳全景

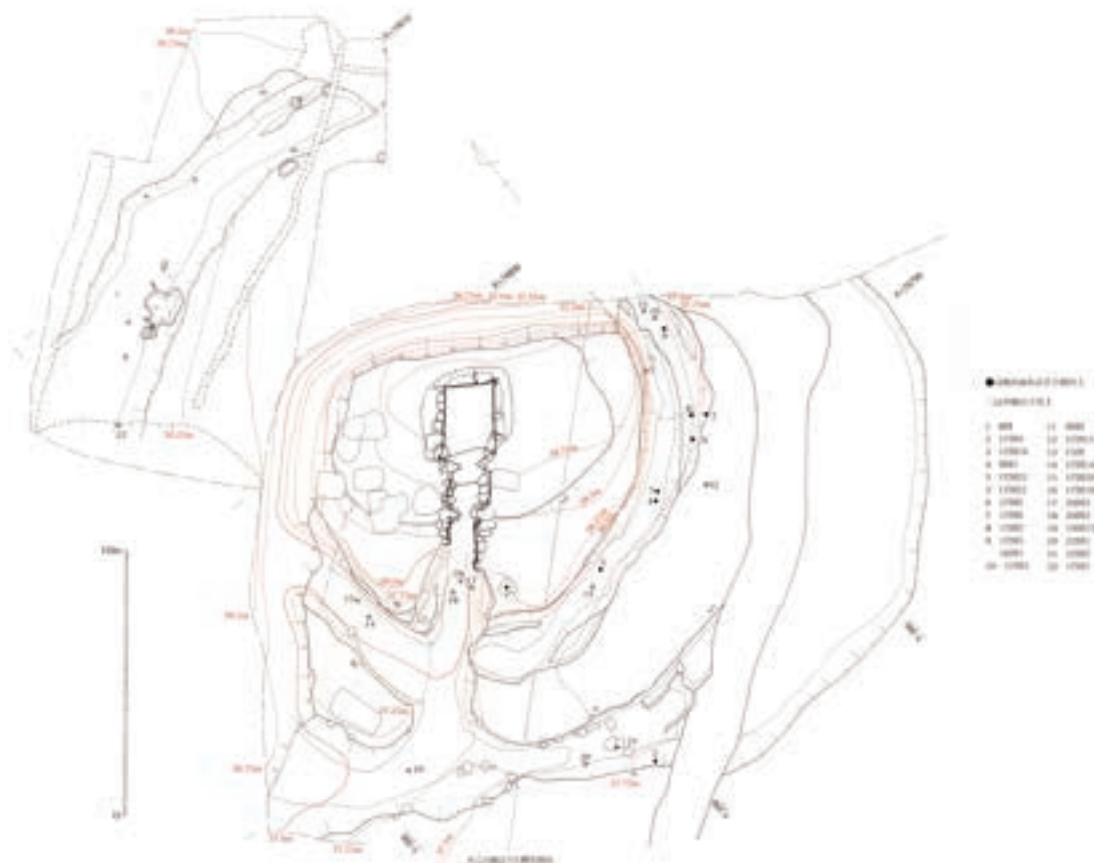


图 495 皆見大塚古墳墳丘測量図 (1/300)

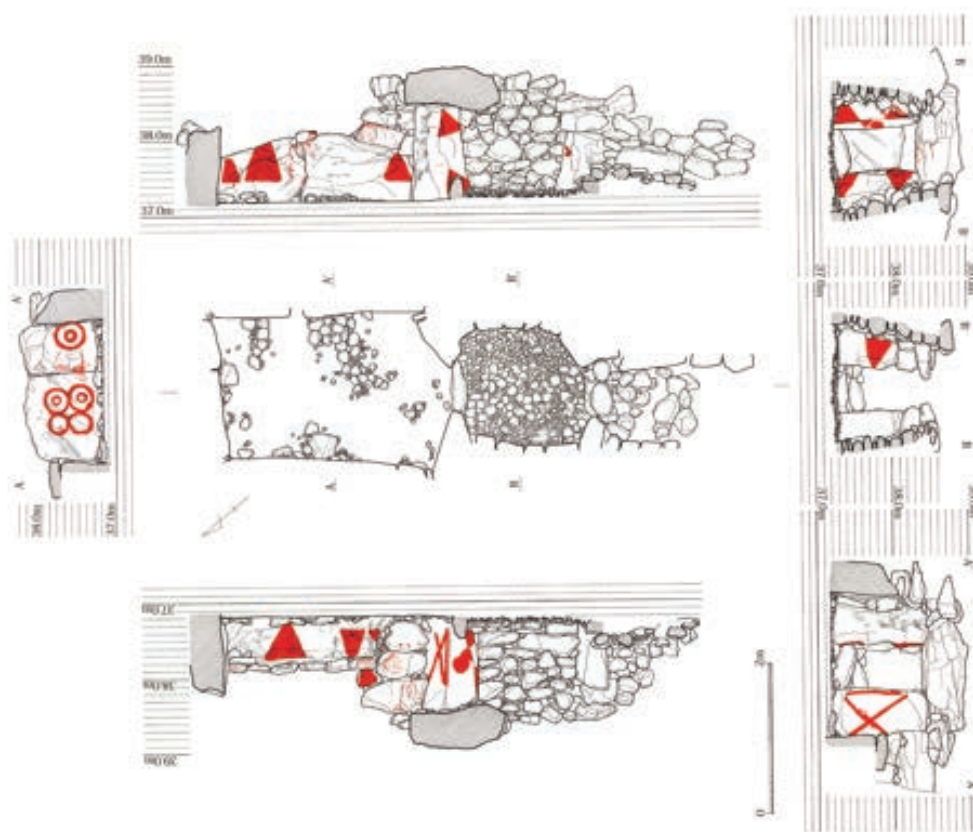


图 496 皆見大塚石室実測図 (1/100)



図 497 玄室玄門

**装飾** 玄室奥壁・両側壁、玄門部両袖石（前面・背面）に赤と黒の顔料を使用して描画が行われる。

玄室奥壁の右側には赤色で大型の二重同心円文、左側には複数の同心円文が描かれているようだが不鮮明である。

玄室左側壁には複数の大型三角文が赤色顔料を用いて描かれる。赤色顔料以外にも黒色の顔料を用いて描画されるようだが、文様構成は不明。玄室右側壁にも赤色顔料で複数の三角文を描くが、明瞭ではない部分もある。また、黒色顔料の塗布も認められるが明瞭ではない。

玄門左袖石は前面・側面・背面の3面に施文が認められる。前面側には2つの三角文が赤色で描かれ、側面側には円文・三角文が赤色で描かれる。背面側には赤色の直線を用いて描画された×字状文があるが、本来は三角文を描いた可能性もある。

玄門右袖石には前面・背面の2面に施文が認められる。前面側は二つの三角文が描かれる。これらの間には黒色の部分が認められるが、これが文様を構成するのかどうかは不明である。背面側にははっきりとした文様は確認できないが、わずかに赤色顔料が残る。

その他、玄室楣石にも赤色顔料の付着が認められるが、文様ではなく石材内側に塗布された可能性が想定されている。

**顔料** 赤（ベンガラ・人為的な加熱を施した可能性あり）・黒（マンガン土）（『九州歴史資料館 2015』 朽津信明・中牟田義博 2010）

**遺物** 須恵器・土師器・武器・工具・馬具・装身具

**年代** 6世紀後半

**調査歴** 平成 21 年度 東九州自動車道建設に伴う記録保存発掘調査

平成 23 年度 古墳保存に向けた計画変更に伴う発掘調査



图 498 玄室玄門背面



图 499 玄室左側壁



図 500 玄室発泡ウレタン吹付状況



図 501 皆見大塚古墳現況

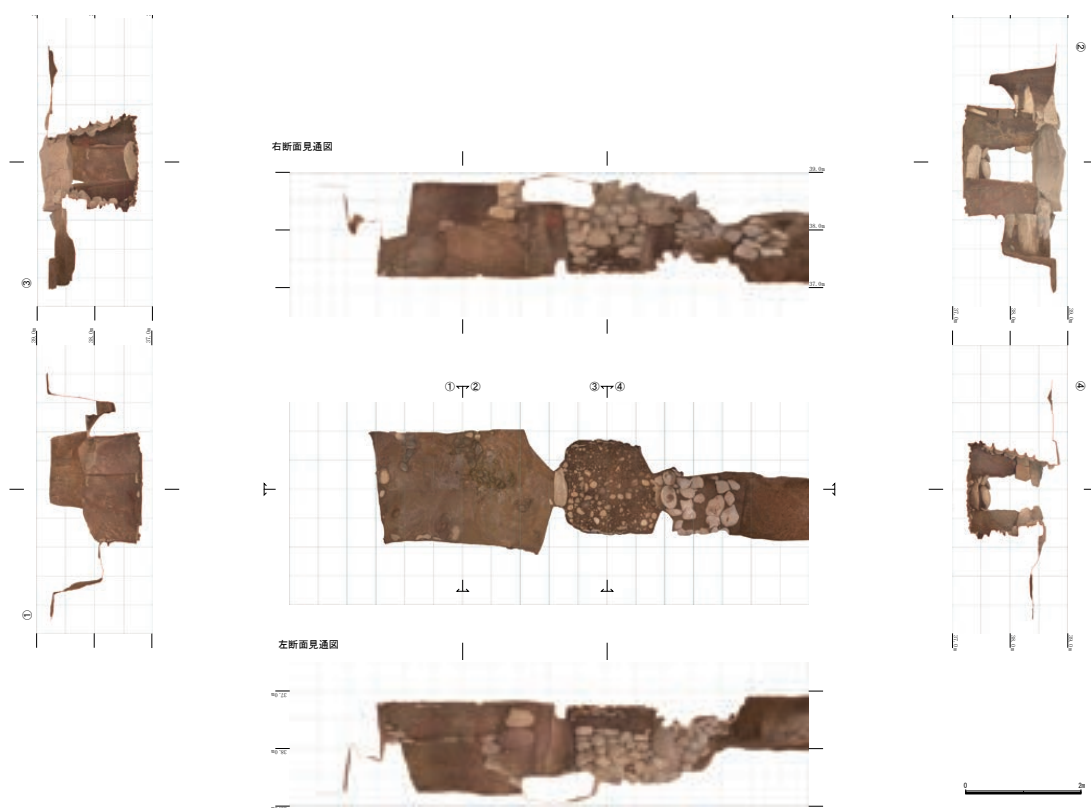


図 502 皆見大塚古墳正射投影画像 (1/120)

**整備歴** 平成 23 年度 壁面保存処理工事、真砂土・土嚢による埋戻し保存

**現況** 石室は保護措置後に埋戻して保存。古墳は橋脚下に現状保存後、案内板等設置。

**図面等** 平成 21・23 年度発掘調査時、周辺地形測量図、古墳実測図、石室・壁画実測図作成（福岡県教育委員会）

（写真計測）基盤研究（A）（1922026）2010. 2. 15～17 計測

**写真** 福岡県教育委員会による発掘調査時撮影 4×5 カラーリバーサル・モノクロ、35mm カラーリバーサル・モノクロ、デジタル写真データ

**文献** 九州歴史資料館 2015『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告』17

## 71 三ツ塚（みつづか）古墳群 2号墳

**立地** 福岡県の東部、京都平野の南東に位置する古墳である。祓川と城井川に挟まれる形で形成された低丘陵地の北東端部にあり、標高は38 mを測る。小字名にあるとおり、三ツ塚古墳群は3基の古墳からなり、線刻が確認されたのは群中の2号墳である。

現在は航空自衛隊築城基地内にあり、通常は立ち入ることができない。3号墳は造成により消滅したが、古墳が所在した場所は表示されている。1・2号墳はどちらも開口しており、墳丘まで含めて良好な状態で遺存する。基地内には三ツ塚古墳群を紹介する案内板が設置されている。

**経緯** 『福岡県教委 1976』には三ツ塚古墳群として掲載され、周知の埋蔵文化財包蔵地として周知化が図られてきたが、通常は立ち入りが制限される基地内であることもあり、古墳群の詳細な調査はこれまで行われてこなかった。

平成10～12年度に豊津町教育委員会が実施した現地踏査にて、2号墳の石室に線刻が確認されたが、その所在が広く知られることなく現在に至っている。

今回の装飾古墳調査に際し、築城基地の許可を得て令和6年7月25日に現地を訪問し、写真測量による計測作業を実施した。

**名称** 三ツ塚古墳群 2号墳

**所在地** 京都郡みやこ町大字皆見

**墳丘** 円墳（径11.6 m～9.5 m、墳丘高1.7 m）

**主体部** 横穴式石室（両袖・凝灰岩石材使用）現状全長3.8 m、奥室幅1.7 m、奥室高1.7 m



図 503 三ツ塚古墳群位置図 (1/25,000)



図 504 奥壁線刻文様拡大



図 505 側壁線刻文様拡大

**装飾** 奥壁・右側壁に線刻による施文を行う。左側壁は確認できなかった。

奥壁鏡石の上方には縦横方向に複数の直線による線刻が確認できる。また、同様に鏡石の一つ上の石材にも縦横方向の直線がある。鏡石から数えて二つ上の石材には縦線と弧状の線で木葉状の文様を施文するように見える。他に2本の縦線と「人」状の線が確認できる。

右側壁の奥壁に接する石材では、奥側に四角形の線刻がある他、直径5cm、深さ2cm程度の窪みが複数確認され、敲打によるものとも考えたが断定するまでには至っていない。奥壁側から数えて2列目の石材には多くの線刻文様が確認できる。一番下の石材には複数の縦方向の線が見える。下から2番目の石材には木葉状の線刻と複数の縦横方向の直線による線刻があり、とりわけ幅5mm程度の幅の広い縦方向の線刻が見える。下から3番目の石材には上向きに開いた弧状の線刻と、敲打による可能性がある窪みが確認できる。下から4番目の石材には弧線からなる木葉状の線刻があるが、葉脈は描かれていない。右袖石の木葉状の線刻にもやはり葉脈はない。

**年代** 7世紀前半

**調査歴** 昭和49年以前 分布調査により三ツ塚古墳群を把握（福岡県教育委員会）

平成10～12年度 分布調査にて線刻を確認（豊津町教育委員会）

令和6年度 現地確認・写真計測（九州歴史資料館）

**現況** 航空自衛隊築城基地内にあるため通常は立ち入り禁止。古墳周辺は張芝がなされ、草刈り等の管理が行われている。傍らには古墳群を紹介する案内板が設置される。

**図面等**（写真計測）九州歴史資料館 2024. 7. 25 計測

**写真** 九州歴史資料館 2024. 7. 25 撮影デジタル写真データ

**文献** 福岡県教育委員会 1976『福岡県遺跡等分布地図』（行橋市・京都郡編）

豊津町教育委員会 2001『豊津町内遺跡等分布地図』豊津町文化財調査報告書第25集



図 506 三ツ塚古墳群 2号墳全景



図 507 三ツ塚古墳群 2号墳石室正射投影画像（1/100）

## 72 黒部（くろべ）古墳群 6号墳

**立地** 黒部古墳群は福岡県の東部、周防灘沿岸に位置する。犬ヶ岳、求菩提山系から長く続く丘陵の先端で標高 25～40m の舌状台地上にあり、海岸からは 300m ほどしか離れておらず海域が見渡せる位置環境にある。同一丘陵上の東側には 6 基の円墳と 1 基の方墳からなる黒部古墳群、西側には別群を構成する黒峰尾古墳群が分布し、これまでに約 20 基が確認されている。両古墳群は本来は一つの古墳群で、かつては 50 基を超える古墳が存在したとされる。

線刻文様のある黒部古墳群 6 号墳は群中の南側、標高 35m 付近に位置する円墳である。

**経緯** 昭和 49 年に福岡県教育委員会が実施した県内遺跡分布調査の結果、一帯に分布する群集墳が確認され「灰の木古墳群」として登録された。

昭和 53 年、宅地開発に伴う記録保存発掘調査により円墳 6 基、方墳 1 基、周溝墓 1 基の発掘調査が行われた。そのうち 6 号墳については線刻が確認されたため、開発業者と調整の結果、方墳の 2 号墳や円墳の 3 号墳と共に現状保存されることとなった。

昭和 55 年には「黒部古墳群」の名称で福岡県の史跡に指定、のちに完全に埋め戻され、造成地内に歴史公園として整備された。

**名称** 灰ノ木古墳群（1974 福岡県分布調査名称）  
黒部古墳群 6 号墳（1979 『黒部古墳群』） 黒部古墳群黒部 6 号墳（2000 『豊前市内遺跡分布地図』）

**所在地** 豊前市大字松江

**指定** 福岡県指定史跡「黒部古墳群」（3 基） 昭和 55 年 3 月 1 日

市指定有形文化財（考古）平成 14 年 2 月 12 日「黒部古墳群出土遺物」（古墳群出土品一括 50 点）

**墳丘** 円墳（径 16m）

**主体部** 横穴式石室（複室・南東側に開口・花崗岩石材使用）全長 8.2m、玄室長 1.7m、玄室幅 2m

**装飾** 玄室左壁と左右玄門の 3ヶ所に線刻による装飾が認められる。

玄室左壁の線刻は石面のほぼ全面、高さ 68 cm、幅



図 508 黒部古墳群位置図 (1/25,000)

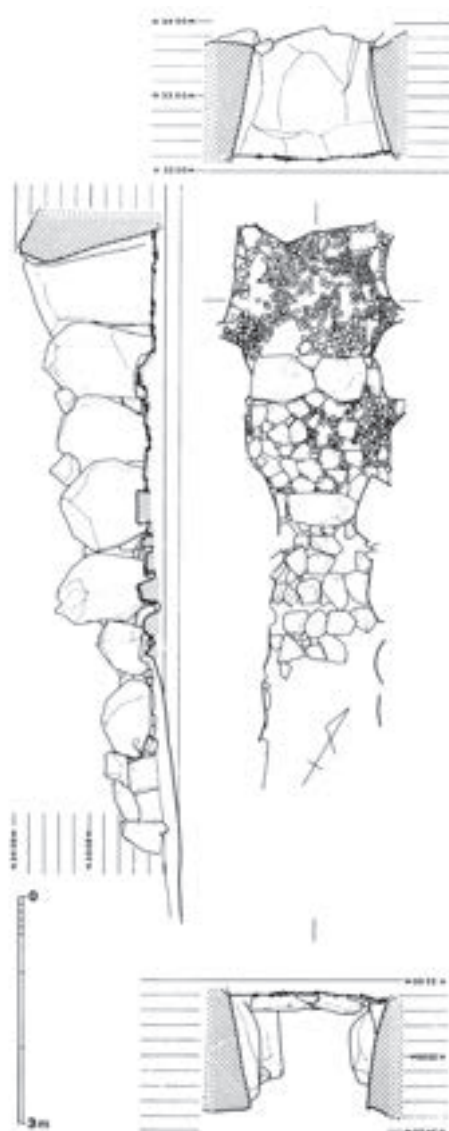


図 509 黒部古墳群 6 号墳石室実測図 (1/100)

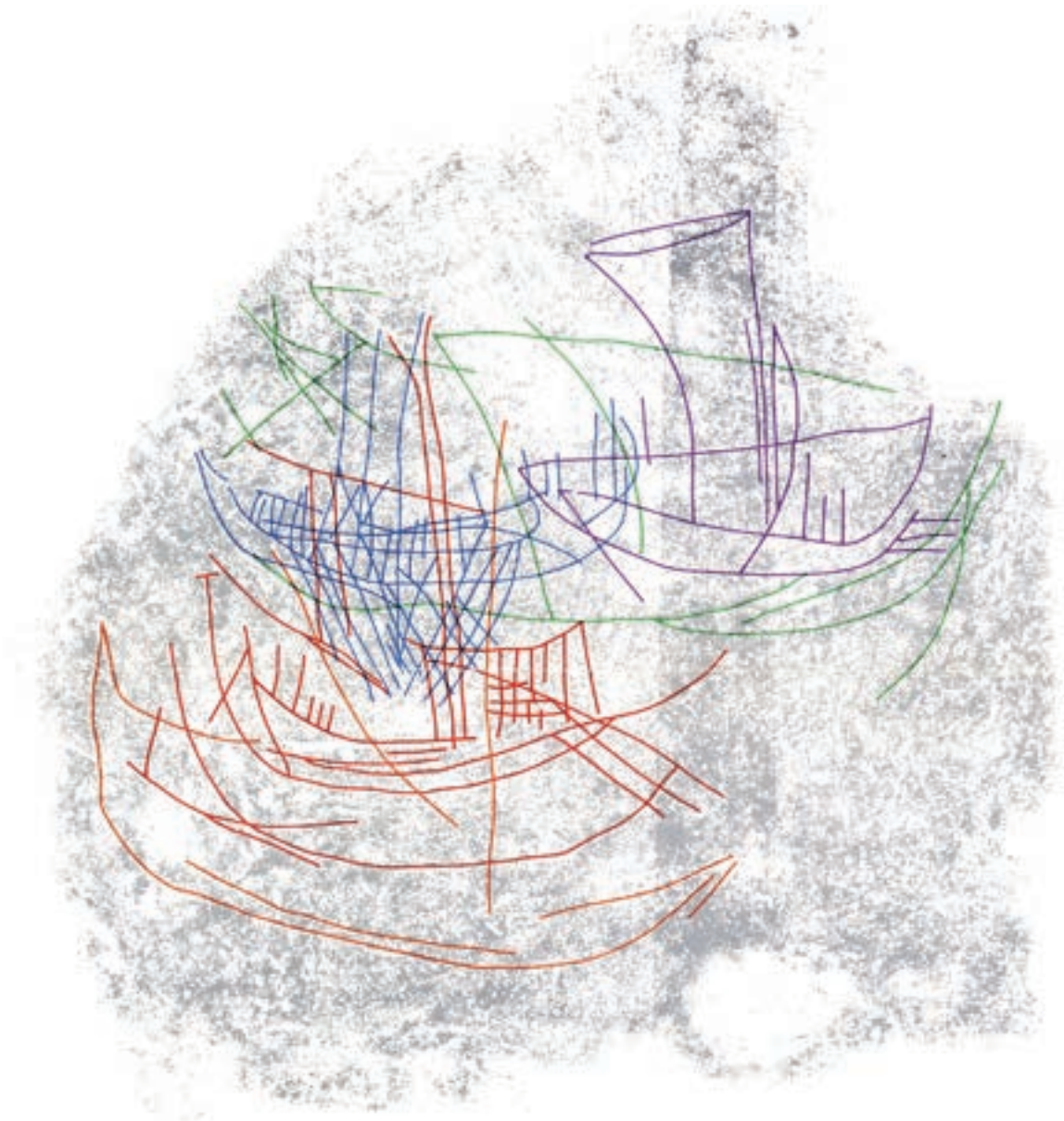


図 510 左側壁線刻実測図 (1/6)

80 cmの範囲内にあり、施文は重複して描かれる。図柄は5艘の船が描かれていると解釈されており、そのうち左上に描かれる線刻については、ゴンドラ風の船で船首と船尾を描き分け帆柱と多数の櫂があり、さらに船室様の刻み込みがある。右上の船は一部、先述の左上の船と重複する。帆を張り帆柱の弓なりになった具合からは帆走中といった感がある。左下の船は帆柱が先述の左上の船にまで突き抜ける。ゴンドラ風の船首はT字形になり、櫓と船室様の刻みがある。帆柱左のI字形刻みはこの船に関連するとすれば横幅広の帆となる可能性がある。

左玄門部の線刻は高さ50 cm、幅40 cmの範囲内にあり、玄室と比べて線の数が少ない。不明瞭だが大型船と小舟を描き分けているようである。円文が1ヶ所ある。

右玄門部は盗掘に際して割られており、線刻文様も一部を残すのみである。帆のある船のようにも見えるが、これを靱として解釈する見解もある。

**遺物** 須恵器・土師器・武器・装身具（豊前市教育委員会）

**年代** 7世紀中頃

**調査歴** 昭和53年度 発掘調査（玄洋開発株式会社が福岡県教育委員会に委託）



図 511 黒部古墳群配置図 (1/3,000)

**整備歴** 昭和54年度(玄洋開発株式会社)  
**現況** 埋め戻し・墳丘復元整備後に現状保存。

**図面等** 古墳群周辺地形測量図、墳丘測量図、石室実測図、線刻拓本・線刻分解図 (1979『黒部古墳群』掲載、一部豊前市教育委員会)

**写真** 報告書掲載写真 (豊前市教育委員会)

**文献** 玄洋開発株式会社 1979『黒部古墳群』

豊前市史編纂委員会 1993『豊前市史』考古資料 豊前市

豊前市教育委員会 2000『豊前市内遺跡分布地図』



図 512 黒部古墳群 6号墳石室



図 513 左側壁線刻分解図① (1/5)



図 514 左側壁線刻分解図② (1/5)

73 穴ヶ葉山（あながはやま）古墳

74 穴ヶ葉山3号墳

75 穴ヶ葉山南3号墳

**立地** 福岡県の東部、大分県との県境を流れる一級河川山国川の中流域左岸にあり、英彦山から東に派生した瓦岳（624.5 m）や大平山（597.4 m）を頂部として北東へと続く山稜の端部、標高45～70 m付近に「穴ヶ葉山古墳群」と総称される横穴式石室を主体部とする古墳の一群がある。また、隣接する南側の丘陵頂部には「穴ヶ葉山南古墳群」と呼ばれる後期群集墳がかつて所在していた。以前は同一丘陵上に100基を超える古墳群が存在していたが、戦後の開墾等によって大半が調査を経ないまま消滅したようである。なお、4号墳丘下層を調査した際に石蓋土壙墓が発見されたことがきっかけで、穴ヶ葉山3号墳と4号墳との間に80基を超える数の石



図 515 穴ヶ葉山古墳群・穴ヶ葉山南古墳群位置図 (1/25,000)

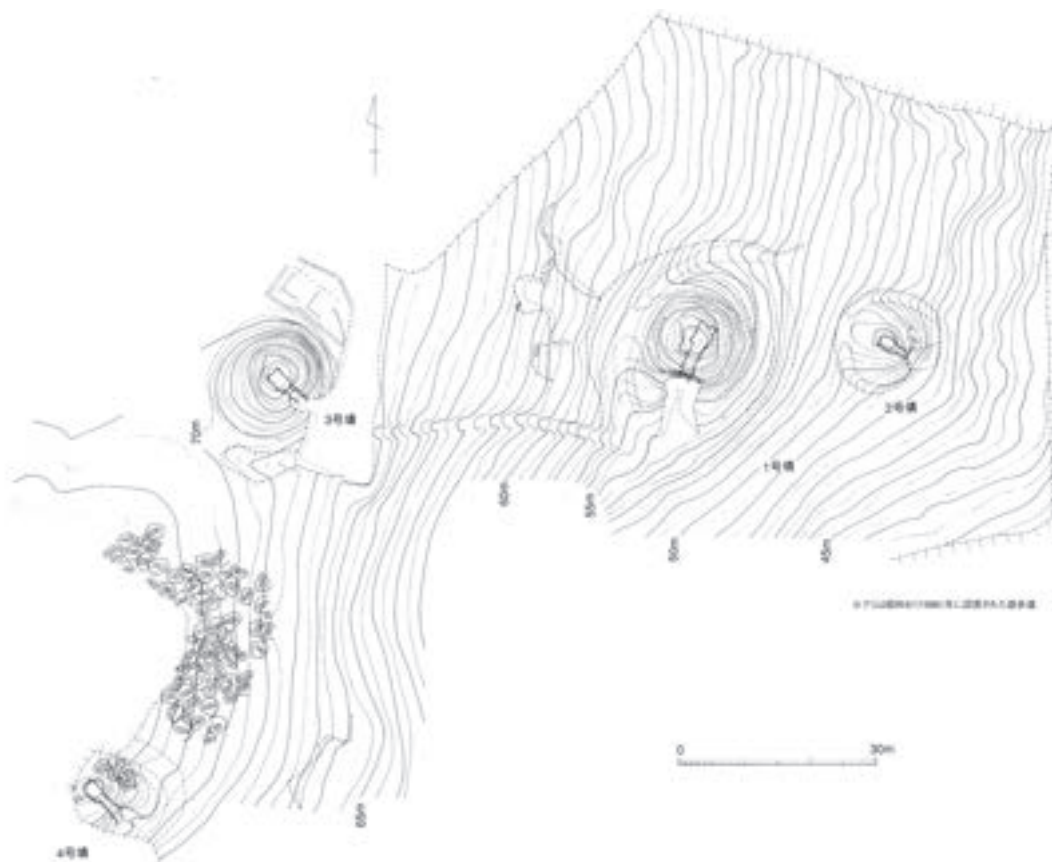


図 516 穴ヶ葉山古墳群地形測量図 (1/1,200)

蓋土墳墓群が分布することが判明したため、「穴ヶ葉山遺跡」として発掘調査が行われた。

**経緯** 穴ヶ葉山古墳石室内に線刻壁画があることは早くから注目されており、昭和4年『史蹟名勝天然紀念物』に吉村鐵臣が報告した「豊前国唐原村下唐原発見の装飾古墳に就て」には、地域住民が石室内に彫刻（線刻）があるという談をもとに吉村が昭和3年9月下旬に現地を確認、その後、福岡縣嘱託の島田寅次郎を現地に案内し、同年11月には線刻壁画の拓本を採取したことが記される。同誌には3点の線刻拓本の外、墳丘断面図や石室見取図も掲載されている。なお、『福岡縣 1939』で島田が県内にある装飾古墳の一つとして「築上郡吉富村古墳」と紹介し、「木葉と虫との陰線彫刻明瞭他は不明、追て報告説明あるべし」とあるのは、この古墳であろう。

本古墳は豊前地域で初めて確認された装飾古墳であり、施文は線刻によるものであることが重要視され、昭和14年に国史跡に指定された。

指定後、暫くは本格的な調査を経ないままだったが、昭和45年に大平村（現、上毛町）が史跡地周辺の公有化を実施、昭和46年2月には小田富士雄が石室内の実測調査を実施した。

昭和58年12月から翌年1月までの間、開発事業に先立って穴ヶ葉山南古墳群4基の発掘調査が実施されたが、その際に穴ヶ葉山南3号墳の石室内にて線刻壁画が確認されたため、調査後、同施設の敷地内に移築が図られることとなった。

その後、大平村教育委員会では昭和59年11月から12月にかけて周辺村有地を伐採し、地形測量を実施したところ、新たに3基の円墳（穴ヶ葉山2～4号墳）を発見した。その際に石室内の調査を実施し、昭和46年の調査成果や線刻壁画に関する考察所見と共に『大平村教育委員会 1985』にて報告を行った。

平成3年の台風17・19号来襲の際、穴ヶ葉山1号墳墳丘の樹木が倒れて石室羨門部が損傷したことが契機となり、平成5・6年に保存修理を目的とした事前確認調査を大平村教育委員会が実施、平成7～10年度に周辺環境整備も含めて穴ヶ葉山古墳群3基の整備事業が実施された。



図 517 穴ヶ葉山古墳測量図 (1/500)



図 518 穴ヶ葉山古墳全景

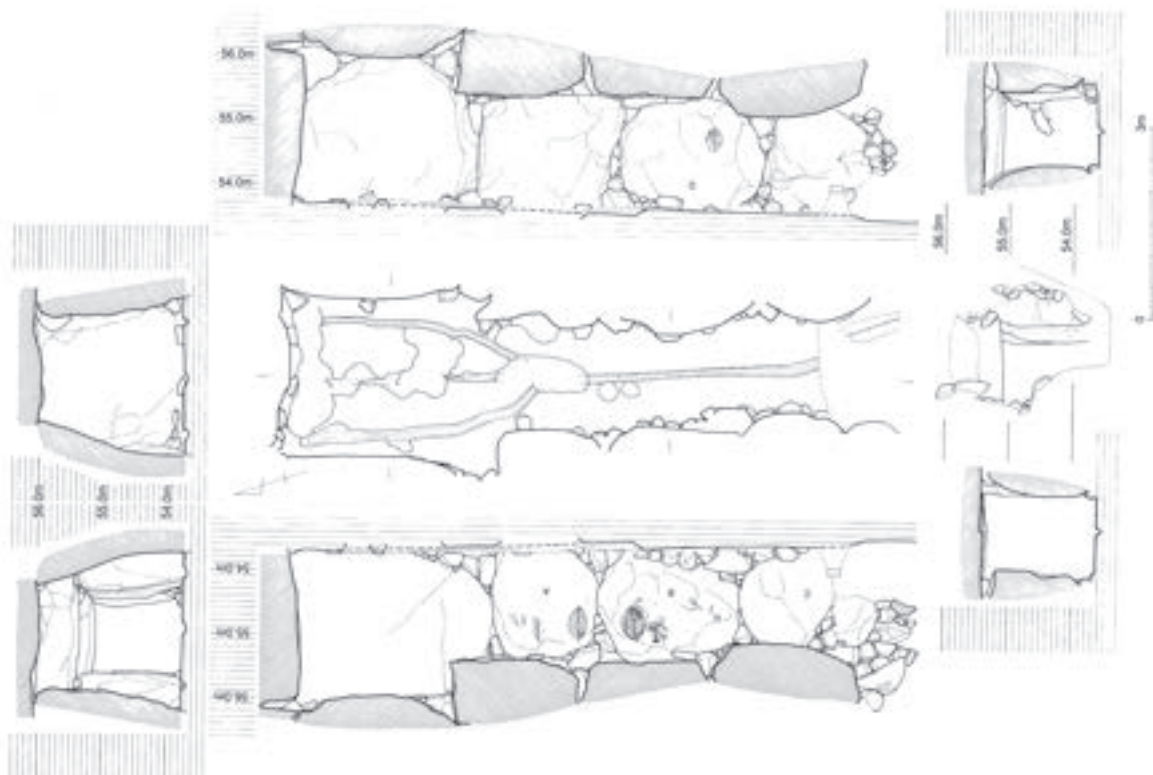


図 519 穴ヶ葉山古墳石室実測図 (1/120)

所在地 築上郡上毛町大字下唐原

〈穴ヶ葉山古墳〉

名称 唐原村下唐原 穴ヶ葉山にある円墳（無名墳）（『史蹟名勝天然紀念物』1929）

穴ヶ葉山古墳（1939 指定名称）

穴ヶ葉山北古墳群 穴ヶ葉山古墳（『大平村教委 1984』）

穴ヶ葉山古墳群 穴ヶ葉山 1 号墳（『大平村教委 1985』）

穴ヶ葉山古墳群 穴ヶ葉山古墳（『大平村教委 1999』）

指定 国指定史跡（昭和 14 年 9 月 7 日）

墳 丘 円墳（径 23 m）

主体部 横穴式石室（無袖・南西方向に開口・安山岩系石材使用）全長 10 m、玄室長 3 m、玄室幅 2.4 m、玄室高 2.2 m

装飾 墓道左壁最上石及び羨道両壁で線刻による壁画が確認されている。玄室壁面には確認されていない。

墓道左壁最上の三角形の石には魚の線刻がある。線は細く浅く彫り込まれ、頭部は左（墓道）側を向き鋭く尖る。羨道左壁最奥の石材の左側には、葉先を下に向けた木葉が 1 点描かれる。刻線は比較的太く、浅く刻まれるが、これは石材表面が他と比較して軟らかいことに起因すると考えられる。木葉の右側には複数の縦線が追刻されるが、その中に綾杉文が 2 点描かれる。左側下段の短斜線は木葉の輪郭と交差してお



図 520 墓道線刻拓本 (1/6)



図 521 羨道の木葉文拓影 (1/6)



図 522 石室全景



図 525 枝と鳥拡大



図 523 木葉文拡大



図 526 木葉の先端と虫 (1/2)

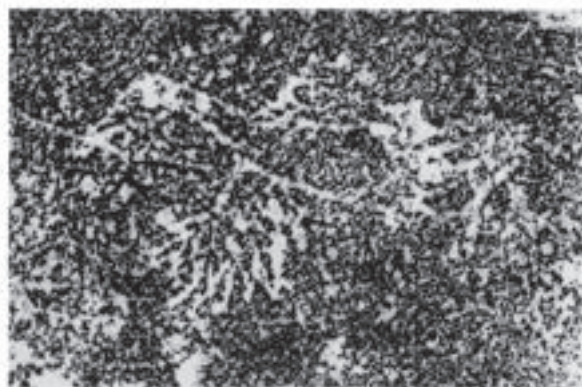


図 524 飛翔する鳥 (1/2)

り、刻線は細く浅く、力強さに欠けるため落書きの可能性もある。

右側中段には凸レンズ断面状の刻線が二重に刻まれる。一見すると木葉状に見えるが葉脈は描かれず輪郭線のみである。

羨道左壁最奥から二番目の石材には木葉・鳥・人物の線刻画が認められるが後世の落書きも多い。石の表面は描画前に手斧状の工具で表面を削っており、凸凹を均一にした痕跡が認められる。さらに玄室側には木葉文が描かれる。刻線は細線と太線の二種類があり、後世に細線の上を辿りながら太線が追刻されたと考えられている。

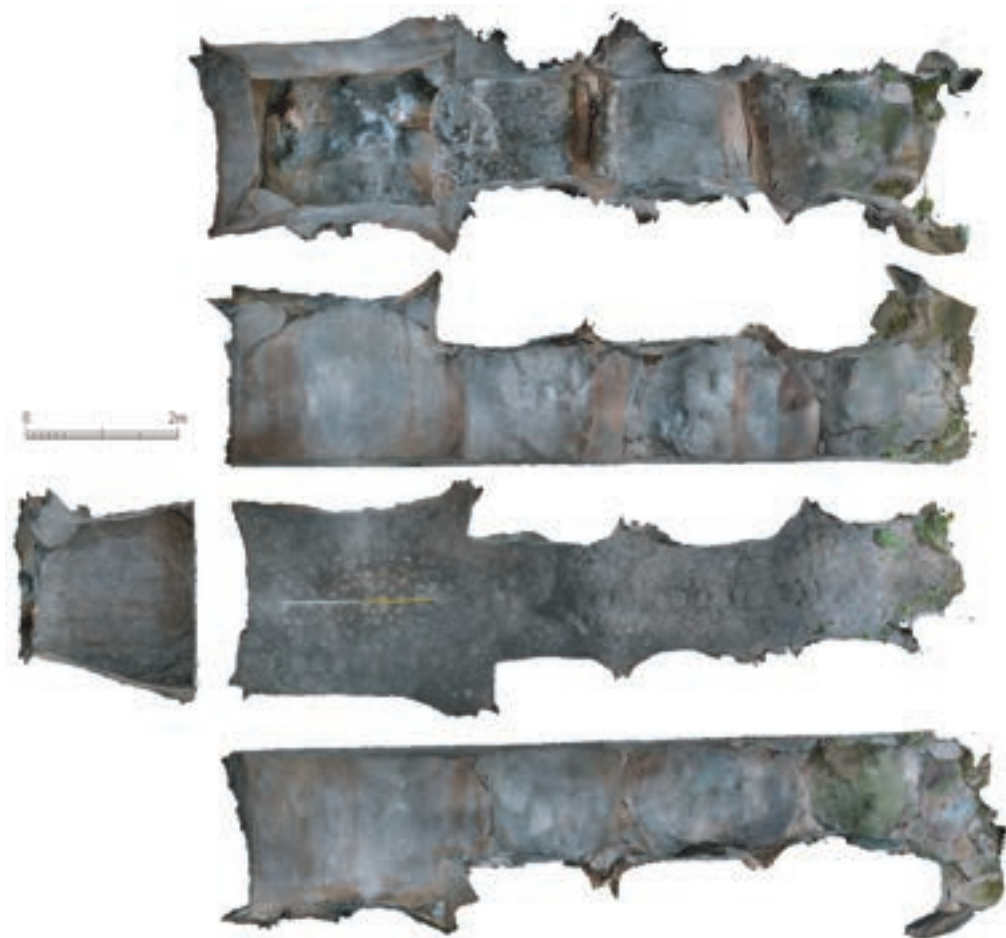


図 527 穴ヶ葉山古墳石室正射投影画像 (1/100)

木葉の先端には昆虫のようにも見える線刻があるが、他と比較して線が明らかに太く、刻み込むように描かれている。同じく木葉の下 10cm 程のところ左側へ向かって飛翔する鳥が描かれるが、他の線刻には見られないほど写実的で細部まで表現される。

羨門側の下部にある落書き「東」の両側には鳥と人物が描かれる。右側に描かれた鳥は左側を向き、頭部は口端が細く尖った二等辺三角形で、後頭部には冠羽を表す二本の線刻が後ろに向かって伸びる。

左側には人物 3 点が描かれているが、人物の上には縦線や文字などの落書きが多く、線刻画を抽出することは困難な状態にある。

羨道右壁の奥壁から二番目には木葉が 1 点描かれる。石面が他と比較して硬く、凸凹があるにもかかわらず表面調整されていないため刻線の明瞭さや力強さに欠ける。

**遺物** 昭和 59 年度調査時に墓道から須恵器出土 (上毛町教育委員会)

平成 5・6 年度調査時に須恵器・装身具 (上毛町教育委員会)

**年代** 6 世紀末～7 世紀初頭

**調査歴** 昭和 3 年 11 月 吉村鐵臣らによる測量調査 (1929 『史蹟名勝天然紀念物』)

昭和 46 年 2 月 小田富士雄らによる石室内実測 (『大平村教育委員会 1985』)

昭和 59 年 11・12 月 地形測量・墓道一部掘削 (『大平村教育委員会 1985』)

平成 5・6 年度 保存修理に伴う墳丘規模等確認調査 (『大平村教育委員会 1999』)

**現況** 現状保存後、保存修理事業実施。

**図面等** 墳丘断面図・石室見取図・線刻壁画拓本（「吉村鐵臣 1929」）

古墳群見取図・墳丘断面図・石室見取図（昭和 14 年国史跡指定時）

平成 5～7 年度 墳丘測量図・石室実測図・線刻文様拓本（大平村教育委員会）

（写真計測）九州歴史資料館 2024. 1. 10 計測

**写真** 九州歴史資料館 1977 撮影 4×5 カラーリバーサル 10 点、カラーネガ 7 点

九州歴史資料館・大平村教育委員会 1995 撮影 4×5 カラーリバーサル 16 点

九州歴史資料館撮影 4×5 カラーリバーサル「図文拡大」2 点

九州歴史資料館 1977 撮影 35mm カラーリバーサル 26 点

九州歴史資料館・大平村教育委員会 1995 撮影 35mm カラーリバーサル 71 点

九州歴史資料館 2024 撮影デジタル写真データ

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 35 点  
（No. 0029～0044、No. 0543～0561）

**パネル** 九州歴史資料館 1 点（86×106）

<穴ヶ葉山 3 号墳>

**名称** 穴ヶ葉山古墳群 穴ヶ葉山 3 号墳（大平村教育委員会 1985）

**墳丘** 円墳（19m）

**主体部** 横穴式石室（複室構造・南東方向に開口・安山岩系石材使用）全長 6.6m、玄室長 3.1m、玄室幅 2.0m、玄室高 2.6m。

**装飾** 玄室右側壁の玄門部側最下段石材表面に線刻による施文が確認された。

長さ 54 cm、幅 29 cm の木葉で、中央の葉軸から上向きに葉脈と思われる細かい刻線が数条伸びている。葉の先端は上方を向く。

**年代** 6 世紀末～7 世紀初頭

**調査歴** 昭和 59 年度 発掘調査（大平村教育委員会）

**現況** 現状保存後、保存修理事業実施。

**図面等** 昭和 59 年度調査時、周辺地形図・墳丘測量図・石室実測図・線刻壁画拓本



図 528 穴ヶ葉山 3 号墳墳丘測量図（1/400）



図 529 穴ヶ葉山 3 号墳石室実測図（1/120）



図 530 玄室線刻拓影 (1/10)

(写真計測) 九州歴史資料館  
2024. 1. 10 計測

写真 九州歴史資料館・大平村教育委員会 1995 撮影 4 × 5 カラーリバーサル 16 点  
九州歴史資料館・大平村教育委員会 1995 撮影 35mm カラーリバーサル 71 点  
九州歴史資料館 2024. 1. 10 撮影デジタル写真データ

<穴ヶ葉山南3号墳>

名称 穴ヶ葉山南古墳群  
穴ヶ葉山南3号墳 (大平村教育委員会 1984)

墳丘 円墳 (径 16m)

主体部 横穴式石室 (両袖単室構造・南東方向に開口・安山岩系石材使用・羨道部損壊)  
全長 5m、玄室長 2.2m、幅 1.9 ~ 2.1m

装飾 奥壁上半部と羨道部  
左側壁腰石で線刻による装飾

が確認された。奥壁では上半部に長い縦線と斜行線を組み合わせた綾杉文様が3ヶ所で認められる。右肩部に施文された文様が最も長く、明瞭である。

羨道部左側壁に遺存する石材のうち、墓道側に位置する側壁腰石の右肩部には、長さ 20 cm の縦線の両側に綾杉状の斜行線を5~6条刻む。これらは葉脈を表現したものと解釈されている。



図 531 穴ヶ葉山3号墳全景



図 532 穴ヶ葉山3号墳石室正射投影画像 (1/100)



図 533 穴ヶ葉山南3号墳全景

年代 7世紀前半

調査歴 昭和58年度 開発事業に伴う発掘調査

現況 事業地内に移築保存

図面等 昭和58年度調査時、周辺地形図・墳丘測量図・石室実測図・線刻壁画拓本作成

写真 昭和58年度調査時撮影（『大平村教委1984』）

整備歴 平成7～10年度環境整備事業

平成7年度 除草・樹木撤去・盛土成形・張芝

平成8年度 石室入口部墳丘盛土・石材積み替え・門扉設置・墓道部盛土成形等

平成9年度 指定地までの園路設置・駐車場案内板設置

平成10年度 穴ヶ葉山古墳墓道先端部東側に説明板設置

文献 吉村鐵臣 1929「豊前國唐原村下唐原発見の装飾古墳に就て」『史蹟名勝天然紀念物』第四集第二号 史蹟名勝天然紀念物保存協会

大平村教育委員会 1984『穴ヶ葉山南古墳群』大平村文化財調査報告書第2集

大平村教育委員会 1985『穴ヶ葉山古墳群』大平村文化財調査報告書第2集

大平村誌編集委員会 1986『大平村誌』大平村

大平村教育委員会 1991『土佐井ミソソデ遺跡・穴ヶ葉山4号墳・穴ヶ葉山墳墓群』大平村文化財調査報告書第7集

大平村教育委員会 1993『穴ヶ葉山遺跡』大平村文化財調査報告書第8集

大平村教育委員会 1999『史跡穴ヶ葉山古墳』大平村文化財調査報告書第10集

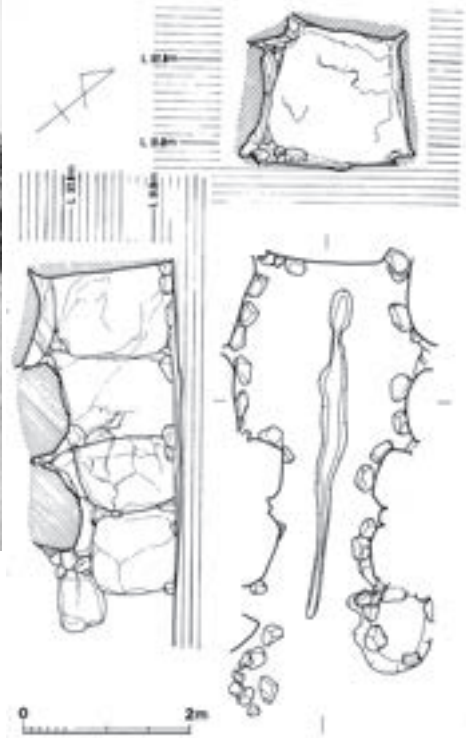


図 534 穴ヶ葉山南3号墳石室実測図 (1/100)

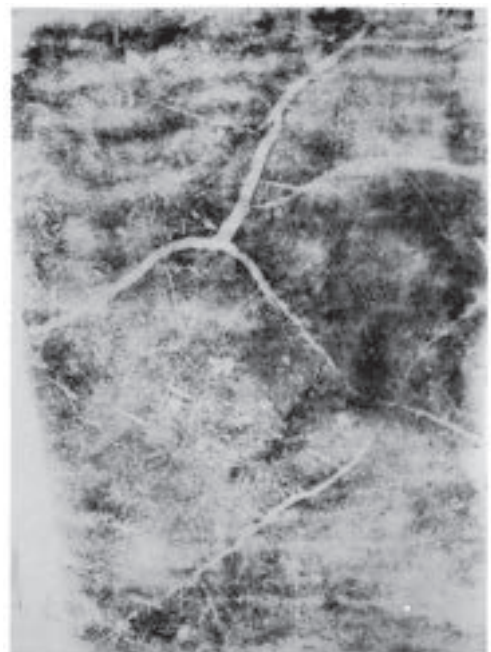


図 535 穴ヶ葉山南3号墳石室線刻拓影 (1/8)

76 百留（ひやくどみ）横穴墓群 1号墓

77 百留（ひやくどみ）横穴墓群 6号墓

**立地** 百留横穴墓群は福岡県の東部、山国川の中流域左岸にある横穴墓群である。山国川の開析作用によって形成された段丘崖面は「中津面」と呼ばれる安山岩円礫を含んだ砂礫層であり、この掘削しやすい砂礫層崖面を利用して、標高 30 m 付近に横並びで多数の横穴墓群「百留横穴墓群」が造営される。

2 km ほど下流側には金居塚横穴墓群が、そこから山国川を挟んだ対岸の大分県中津市には上ノ原横穴墓群が、やはり砂礫層崖面を利用して造営されている。

**経緯** 百留横穴墓群の発見は古く、明治 44 年『築上郡誌』には豊前国にある複数の穴居の跡の一つとして「唐原の百穴」の名を掲げ、「往古の儘にして、精巧に出来たること、宛も印度の石殿を少にせる、思ひあらしむ」とし、また「近来、學説に穴居と葬坑との二様ありて、紛々の論、未だ孰れとも定め難きが、事実上より云はば、葬所に用ゐたる形跡の外、他に証拠を示すこと能はざる也。」としている。『史蹟名勝天然紀念物』第四集第二號で吉岡鐵臣は穴ヶ葉山古墳の近隣にある遺跡として「百留二百穴」を取り上げるが、ここには装飾古墳としての認識はない。また、昭和 9 年に刊行された『福岡縣史蹟名勝天然紀念物』第九輯（史蹟の部）では、調査委員の島田寅次郎が実見した福岡県内の横穴の一つとして「百留横穴」を掲げるが、やはり装飾古墳としての記述はみられない。



図 536 百留横穴墓群位置図 (1/25,000)

百留横穴墓群に装飾が見出された時期は定かではないが、森貞次郎 1985『装飾古墳』に掲載された「装飾古墳地名表」には「百留横穴一号墓」「同二号墓」「同三号墓」とある。また、『大



図 537 百留横穴墓群配置図 (1/800)

平村誌編集委員会 1986』には、入口（飾り縁）に朱による円心文（同心円文）、入口上壁には木の葉文の装飾が発見された旨の記載がある。

平成 18・19 年度に上毛町教育委員会が実施した確認調査では、合計で 47 基の横穴墓が調査された。この時の調査では、1 号墓と 6 号墓の 2 基で装飾の存在が確認された。

**名 称** 唐原村の百穴（『築上郡誌』上巻）

百留二百穴（「吉村鐵臣 1929」）

百留横穴（『福岡縣 1934』）

百留横穴墓群（『上毛町教委 2010』）

**所在地** 築上郡上毛町大字百留

**指 定** 上毛町指定史跡 昭和 49 年 11 月 25 日  
 < 1 号墓 >

**主体部** 横穴墓（東南方向に開口・平面隅丸方形・ドーム形天井・両袖式玄門・羨道部二段構造・羨門部一段の庇構造（飾り縁）・床面排水溝）  
 全長 4.4 m、玄室長 1.57 m、玄室幅 2.25 m、  
 玄室高 0.96 m

**装 飾** 羨門部飾り縁に赤色顔料による施文が見られる。剥落が著しく、具体的な文様として確認できるのは左壁の単円文と底部内側の二つの単円文のみである。その他、飾り縁の上部や左側壁、底部内側に赤色顔料の塗布が確認され、縁取りを行っているものと思われる。

なお、森貞次郎 1985『装飾古墳』では「百留横穴一号墓」について、赤・黄色の顔料を用いて入口周辺部に縁取り・円文の施文がある、と記載される。他の二基には円文が見られないことから「百留横穴一号墓」は当横穴墓とみられる。『大平村誌編集委員会 1986』記載の木葉文は、平成 18・19 年度の発掘調査では確認されていない。

**顔 料** 赤・黄（『教育社 1985』森貞次郎）

赤（『上毛町教育委員会 2010』）

**年 代** 古墳時代後期～終末期

< 6 号墓 >

**主体部** 横穴墓（東南方向に開口・平面隅丸方



図 538 百留横穴墓群

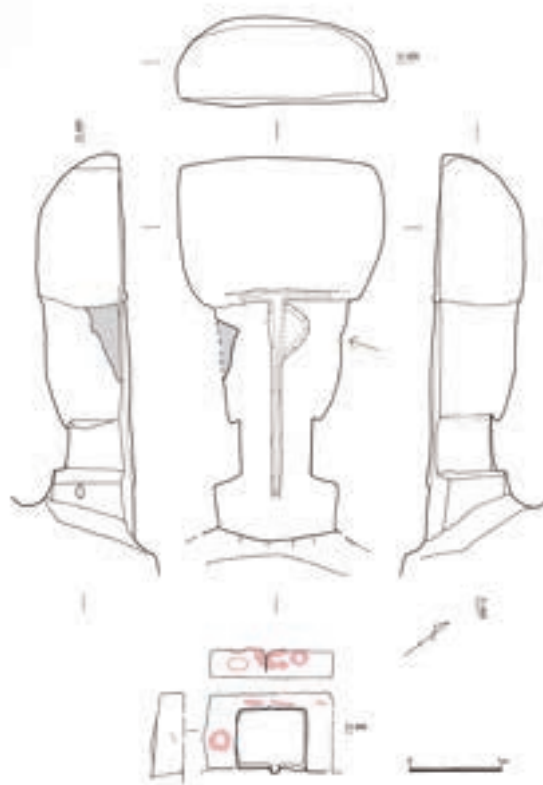


図 539 1 号墓実測図 (1/80)



図 540 1 号墓入口全景

形・ドーム形天井・両袖式玄門・羨門部一段の庇構造) 全長 3.0 m、玄室長 2.15 m、幅 2.48 m、高さ 1.32 m、羨門部高 1.1 m、幅 1.08 m。

**装飾** 羨門部は大きく剥離しているが、飾り縁の上方に赤色顔料が残る。現状では文様を構成しているように見ることができない。

『森貞次郎 1985』では「百留二号墓」「百留三号墓」について、どちらも赤・黄色の顔料で入口周辺縁どり、とあり、この二つのうちのどちらかが当横穴墓に相当するものと思われる。飾り縁に見られる赤色顔料は「入口周辺縁どり」である可能性が高いが、黄色顔料は確認できないようである。

**顔料** 赤・黄 (『教育社 1985』森貞次郎) 赤 (上毛町教育委員会 2010)

**年代** 古墳時代後期～終末期

**調査歴** 平成 18・19 年度 自然崩壊に伴う範囲内容確認調査 (上毛町教育委員会)

**現況** 開口状態で現状保存

**図面等** 遺構配置図・横穴墓実測図

**写真** 九州歴史資料館 1980 撮影 4×5 カラーリバーサル 4 点

九州歴史資料館 1980 撮影 35 mm カラーリバーサル 15 点

九州歴史資料館 2001 撮影 35 mm カラーリバーサル 1 点

九州歴史資料館撮影 35 mm カラーリバーサル「遠景」他、15 点

H14 北部九州装飾古墳画像データベース 12 点 (No. 0045・0046、No. 0562～0571)

**パネル** 九州歴史資料館 1 点 (85×106)

**文献** 福岡県築城教育支会 1911『第日本地誌大系 築上郡誌』上巻 昭和 47 年雄山閣復刻版  
吉村鐵臣 1929「豊前國唐原村下唐原発見の装飾古墳に就て」『史蹟名勝天然記念物』第四集第二号 史蹟名勝天然記念物保存協会

福岡縣 1934『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第九輯

森貞次郎 1985『装飾古墳』教育社

上毛町教育委員会 2010『百留横穴墓群』上毛町文化財調査報告書第 13 集

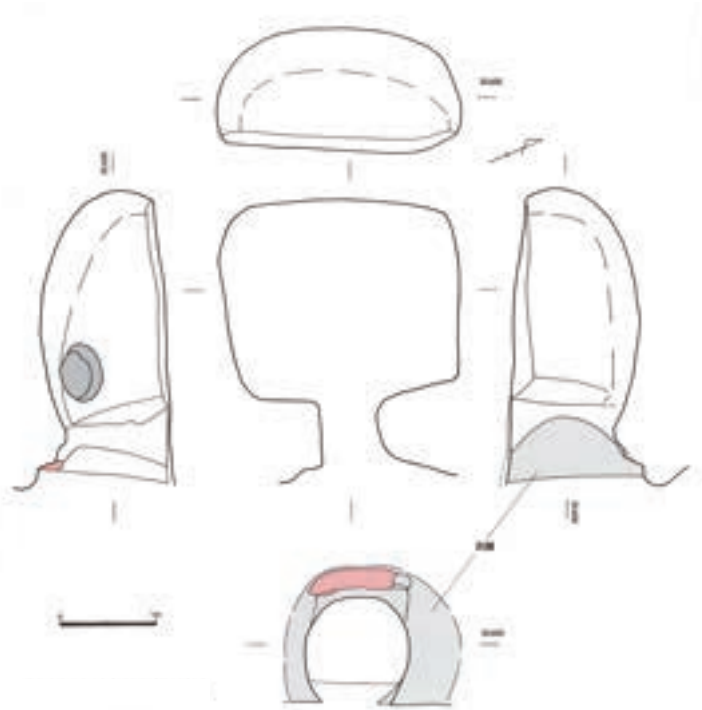


図 541 6号墓実測図 (1/80)



図 542 6号墓入口拡大

## 78 山田（やまだ）1号墳

**立地** 福岡県の東部、周防灘沿岸にあり、犬ヶ岳、求菩提山系から長く続く丘陵の先端に位置する。付近には山田 2 号墳の存在も確認されており、古墳群を形成していたことが知られる。同一丘陵上には山田窯跡や山田瓦窯跡が、さらに 500m 南には友枝瓦窯跡（国史跡）があるなど、一帯には古代の窯跡・瓦窯跡が分布する。2.3 km 南東の方向には穴ヶ葉山古墳がある。

**経緯** 開口時期は不明だが、かなり以前から石室入口側が削平され、開口していたらしい。現状では羨道から墓道にかけては石材が既に失われ、玄室のみ残された状態である。稲荷社として信仰を受けており、石室内には御神体が置かれ古墳までの参道には赤色の鳥居が複数建てられる。

昭和 53 年に福岡県教育委員会が現地を確認した際、線刻壁画が確認された。

**名称** 山田 1 号墳（『福岡県教委 1976』）

山田古墳（1 号墳・2 号墳）（指定名称）

山田古墳（『新吉富村 1990』）

**所在地** 築上郡上毛町安雲

**指定** 上毛町指定史跡 昭和 55 年 4 月 1 日

**墳丘** 円墳（径 10m）

**主体部** 横穴式石室（南側に開口・玄武岩石材使用・羨道・墓道部損壊）現存長 5.6m、玄室長 2.9m、幅 2.1m、高 1.8m

**装飾** 玄室左側壁に線刻による装飾が認められる。

巨石を使用する左側壁腰石、奥壁から約 2m 手前側の床面から 70～90 cm の位置には、細線で多数の線刻が見える。長さ 30 cm、幅 12 cm 程の範囲で左上から右下に緩やかな弧を描きながら描画されており、これが木の葉を描いているように見えなくもないが、これには葉脈らしきものは描かれていない。その他、同位置の下から 120～130 cm の付近にも二つの三角形を描いた線刻が明瞭に確認できる。そのすぐ上には長さ 10 cm、幅 7 cm 程の木の葉状の文様がある。線は細く不明瞭だが、一見して木の葉を描いたものと



図 543 山田 1 号墳位置図 (1/25,000)



図 544 山田 1 号墳全景



図 545 文様拡大①

理解することができる。

奥壁から1m手前、高さ110～130cmの位置にある下から2番目の石材表面にも線刻がある。これは横方向と左上から右下方向への斜方向の線があるが、具体的に何を表現したものかは不明。また、玄門部に近い左側壁、床面から110～130cmの位置に、縦・横・左上から右下方向に数条の線刻があり、これらは互いに交差している。何を表現するものかは不明。比較的明瞭に視認できる。

右側壁の腰石で奥壁から2m手前、高さ40～50cmの位置にも太い線刻があるが、内容は不明である。

**年代** 7世紀前半

**調査歴** 昭和53年度 福岡県教育委員会による現地確認

**現況** 開口状態で現状保存、祠として使用。

**図面等** (写真測量) 九州歴史資料館

2024.1.10 計測

**写真** 九州歴史資料館 1980 撮影4×5カラーリバーサル4点

九州歴史資料館 1981.3 撮影35mmカラーリバーサル「山田1号墳」12点

九州歴史資料館 撮影35mmカラーリバーサル「山田1号墳装飾拡大」4点

九州歴史資料館 2023.1.10 撮影デジタル写真データ

H14 北部九州装飾古墳画像データベース9点 (No.0047・0048、No.0572～0578)

**文献** 福岡県教育委員会 1976『福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編)』

新吉富村誌編集室 1990『新吉富村誌』新吉富村



図546 山田1号墳石室正射投影画像(1/100)



図547 文様拡大②

## IV 福岡県の装飾古墳に関する基礎研究

装飾古墳にかかる考古学研究は、学際的な領域にわたるものが多く、かつ論者の立場により評価や歴史的背景を巡って様々な意見があり、装飾古墳に対する当時の人々の意識が明らかでない以上、考古学的な解釈まで総体的に取り扱おうとすると多くの課題が生じる。

そこで、本章では、前章の各装飾古墳の考古学的な基礎情報から、いくつかテーマを切り取って基礎的な検討を行い、装飾古墳の包括的な流れを読み取れるようにする。

まず1・2では県内の装飾古墳に関する考古学研究史、保存管理史という県内の装飾古墳に関する研究履歴をまとめた。次に装飾古墳は普遍的に存在するものではなく、分布が偏在し、かつ早くから開口していたものがほとんどで、副葬品については不明なものが多い。そのため、3では現状のデータに基づき、地域や古墳群ごとの主に石室構造から導き出された時間軸から各地の装飾古墳の時間的な前後関係を明らかにする。

### 1. 装飾古墳研究史

福岡県内の装飾古墳については、すでに100年以上の研究の蓄積があり、研究史も各段階で先学により既にまとめられている。県を代表する装飾古墳である王塚古墳の現在に至るまでの保存の歩みは装飾古墳の歴史そのものであるとの指摘もあるほど(藏富士2014)研究史の蓄積は厚い。このように県内の装飾古墳を理解する上では、歴史的に装飾古墳がどのように取り扱われてきたかを知る必要がある。福岡県では1960年代まで地方自治体の文化財保護体制が整備されておらず、主に大学・高校等に所属する研究者による調査研究が主体であったが、1970年代半ば以降、福岡県に文化財専門職員が本格的に配置されたことにとともに、県が市町村の要請に応じて確認調査や整備などの支援にあたった。また1990年代半ば以降は、市町村に配置された文化財専門職員が史跡指定や史跡整備を目的に確認調査を実施し現在に至っている。このため、1980年代以降の地方自治体による調査・整備の履歴は前章の個別古墳の中で説明することとし、ここでは、それ以前の装飾古墳の研究史と課題を学術的な側面をふくめて記述する。

#### 1 研究史

##### 1) 黎明期の考古学研究

福岡県下で装飾古墳が初めて認識されたのは江戸時代の嘉永年間で、久留米藩学者の矢野一貞による。矢野は、国学者の平田篤胤が「筑後ノ國石窟ノ文字」として『神字日文傳』(文政2年(1819))に紹介したうきは市重定古墳の事例について、天保11年(1840)に著した「宮田石窟朱象圖考」(若林1902の報文に掲載)のなかで、文字とする平田の見解を否定した。そして矢野は横穴式石室の玄室壁面に整然と並んだ鞞・靱・同心円文などの「朱像」を器物の文様と認識し、『筑後将士軍談』



図548 『筑後将士軍談』に記された重定古墳石室の図面

(1853) に詳細を記録した。

明治期には、明治20年(1887)、東京帝国大学の坪井正五郎が、隣接するうきは市月岡古墳との関係の解明に端を発した日岡古墳の発掘調査をおこなった。これは県内での専門家による学術調査としては初の事例で、「天井も壁も朱色の紋様を以て装飾して有らん」と横穴式石室の壁面における彩色の状況が報告されている(坪井1889)。

大正期には、大正5年(1916)に京都帝国大学による熊本・福岡県下の調査がはじまった。その成果は『肥後に於ける装飾ある古墳』(濱田・梅原1917)に続いて『九州に於ける装飾ある古墳』(濱田・島田・梅原1919)に報告された。この調査は日本初の本格的学術調査に位置づけられる大正元年(1912)からの宮崎県西都原古墳群の調査とともに、考古学的手法に基づく歴史の解明という大きな画期となった。福岡県下の装飾古墳では、大正6年(1917)の報告に久留米市日輪寺古墳の石障に刻まれた同心円文と鍵手文が、大正8年(1919)の報告では同市浦山古墳の家形石棺内面の直弧文が紹介されるとともに、文様の分析と年代的な考察がおこなわれている。こうした流れを受けて大正末期に福岡県でも学務部社寺兵事課嘱託の島田寅次郎らにより「史蹟名勝天然紀念物」の調査がはじまった。その対象は史跡等全般におよぶが、うきは市重定古墳、塚花塚古墳、日岡古墳、富永古墳、八女市乗場古墳、久留米市下馬場古墳(以上、彩色系)、浦山古墳、日輪寺古墳(以上、彫刻系)など、全国的にみても石室彩色系古墳が集中する筑後川中流域左岸の耳納山麓や八女丘陵の古墳をはじめとする装飾古墳の報告(第1輯:「石室内に装飾あるもの」、第13輯:「水繩山麓の装飾古墳」など)がふくまれ、16巻(史蹟の部は計12巻)にわたり調査報告書が刊行された(島田1925、石野・武藤・宮崎1939ほか)。

大正11年(1922)3月8日には日輪寺古墳、重定古墳、乗場古墳が、装飾古墳としては県内で初めて国史跡に指定され、同年10月12日にも塚花塚古墳が指定されるなど、大正8年(1919)に施行された史蹟名勝天然紀念物保存法の指定制度による保護の網がかけられた。

昭和期に入ると昭和9年(1934)の鉱害復旧の際に未盗掘の状態で見つかった桂川町王塚古墳について、福岡県と京都帝国大学の調査成果が、それぞれ『筑前王塚古墳』(川上1935)、『筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳』(梅原・小林1940)として公表されることになる。特に京都帝国大学による報告書は、正射投影図法による石室実測図、色分けした図面、写真など、現在の遺跡発掘の記録手法の基礎となる点で、その後の調査研究に大きな影響を与えている。

## 2) 戦後の考古学研究

戦後、食糧増産のための土地造成等の開発に伴い遺跡の破壊が



図549 『福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告』



図550 王塚古墳実測図  
(梅原・小林1940)

進むが、昭和22年(1947)3月には筑紫野市五郎山古墳が発見され、11月には鏡山猛・森貞次郎・小林行雄によって調査が行われた。その翌年の3月16日には仮指定、昭和24年(1949)7月13日に史跡指定されていることは戦後の混乱期の中での保護の取組として注目できる。

昭和25年(1950)にはうきは市珍敷塚古墳と鳥船塚古墳が田中幸夫により発見された。同年発見された北九州市日明一本松塚古墳が小倉高校考古学部により調査され、戦後から行政の体制が整う昭和50年代まで高校の教員が主導した高校の部活動で発掘調査が盛んに行われている。

昭和25年に文化財保護法が施行されるが、昭和27年(1952)3月29日には王塚古墳が県内初の特別史跡に指定され、また昭和28年(1953)には「珍敷塚古墳 附鳥船塚古墳」「同 附古畑古墳」が史跡指定をうけている。王塚古墳については、文部省(文化財保護委員会)による装飾古墳の壁画模写事業の一環で、昭和30年(1955)11月から東京藝術大学の日下八光らにより壁画模写が開始された(計3回、昭和32年まで実施)。続いて昭和32年(1957)に宮若市竹原古墳が発見され、県教育委員会の委嘱を受けた森貞次郎らによって調査が実施されている。

次第に類例が増加した装飾古墳は、斎藤忠と小林行雄によって体系的・網羅的に整理される(斎藤1952、小林1964)。小林は古墳装飾を埋葬施設と装飾手法から石棺系・石障系・壁画系・横穴系に分類するとともに時期的な変遷として捉えた。その変遷について、5世紀前半に石棺の内外面に直弧文などを浮彫・線刻するものを初現に、横穴式石室内の石障・石屋形に直弧文・武具などを浮彫・線刻・彩色し、6世紀前半には横穴式石室や横穴墓の壁面に彩色を施す技法の出現を経て、6世紀後半から7世紀初頭にかけて線刻をおこなうものが盛行するとした。小林の成果をまとめた『装飾古墳』は計45基の事例を解説するが、福岡県内は装飾古墳22基が個別に取り上げられ、要覧において45基の装飾古墳の所在、埋葬施設と分類などが示された。なお、県下での装飾図文の構成は時期が下るにしたがって肥後地域由来の幾何学文から具象文を多用する割合が高くなる傾向にあるものの、依然として幾何学文を主体とする事例も少なくない。

その後、小田富士雄、森貞次郎、斎藤忠、藤井功、石山勲、高木恭二らにより、福岡県を含めた九州の装飾古墳の地域色、図文の系譜と装飾手法の変遷に加え、編年観など体系化が図られた(小田1966、森1970・1985、斎藤1973、藤井・石山1979、高木2002)。小田富士雄・森貞次郎の論考は状況の提示にとどまることなく、築造の背景にまで言及している。そして藤井功・石山勲は福岡県と熊本県の装飾古墳を通観し、地域性と交流についてまとめた。また朝鮮総督府古蹟調査に携わった斎藤忠の研究は大陸の壁画古墳の様相を認知せしめ、その後の装飾古墳の出自にかかる情報を広く研究者に提供することとなった。

昭和45・46年(1970・1971)には文化庁と福岡県が費用を負担して、「装飾古墳保存対策研究会」(会長：佐藤敬二、西日本短期大学・九州大学名誉教授)に装飾古墳の調査研究を委託した。その研究は考古学・保存科学・土木工学など多岐にわたり、現在の各分野協業による装飾古墳保存対策の検討のさきがけとなったものである。この成果は昭和50年(1975)3月に福岡県教育委員会が刊行した報告にまとめられた(福岡県文化財調査会1975)。また昭和45(1970)3月、広川町の弘化谷古墳が不時発見され、4月より広川町教育委員会が発掘調査を行ったが、調査の実際は福岡県教育委員会からの職員派遣によって実施された。これまで自治体が委嘱した専門家や高校教諭等によって発掘調査がおこなわれていたが、以降は行政機関が発掘調査を直接手掛けることが増えていく。

この前後、装飾古墳が濃密に分布する北部九州各県では、昭和 48・49 年度（1973・1974）と昭和 56・57 年度（1981・1982）、平成 24 年度から令和元年度（2012～2019）に熊本県教育委員会が県下の装飾古墳の総合調査を実施し（高木 1984、古城 2020）、大分県教育委員会も平成 5・6 年（1993・1994）の 2 か年にわたり保護対策の策定にむけて装飾古墳の調査をおこなった（村上 1995）。福岡県下の状況に関して悉皆的な調査で行政資料化されたものは昭和 14 年の福岡県報告（島田 1939）のみで、ここでは 19 例があげられるとともに、浮羽地域を中心とする筑後地域に分布が偏在する状況について言及されている。その後、熊本県立装飾古墳館が全国の装飾古墳調査研究の一環で福岡県の装飾古墳を取り上げた『福岡県の装飾古墳』（熊本県立装飾古墳館 1997）が刊行された。行政以外で県下の古墳を通観し地域色をまとめたものは、藤井功と石山勲の著書『装飾古墳』と吉村靖徳の報文（藤井・石山 1979、吉村 2017）がある程度で、後者においては 72 遺跡 80 基が示され、主要古墳の概要と地域性が記されている。なお今回の総合調査では 78 基を装飾古墳と認定した。また 1980 年代後半には、既知の事例のうち明治期に調査された日岡古墳の再調査と詳細実測図作成ほか基礎資料の充実が図られ（児玉 1989）、その後も宗像市桜京古墳や大牟田市萩ノ尾古墳など墳丘形状と規模に関する再調査も進んでいる。

この時期を考古学的研究の側面から概観すると、装飾古墳に関する基礎的な研究が確立された時期といえる。斎藤忠と小林行雄の業績を基礎とし、地域的な展開の枠組みも把握された。また個別文様論では小林行雄による直弧文の研究を嚆矢に、小田富士雄や乙益重隆、日下八光ほか、1970 年代に活発化し多数の考察がなされた（小林 1964、小田 1974、乙益 1974、斎藤 1973、日下 1978 など）。個別文様のうち連続三角文や円文・同心円文、蕨手文、双脚輪状文などの幾何学文の源流と意味、あるいは横穴式石室の壁面に描かれた図文群の理解については現在でも諸説が唱えられ、解釈が出尽くした感もあるが、その論証が困難なこともあっていまだ見解の一致をみない図文も多い。

文様系譜や施文手法、図文の意味などの基礎研究が進む一方で、装飾古墳にかかわる歴史的背景を追究した論考もみられる。森貞次郎の研究は個々の古墳の検討に留まることなく、装飾古墳からみた有明海沿岸地域の政治的統合体の存在に言及するとともに、磐井の乱前後の変化と位置づけ、小林の研究とともに今日の中後期古墳研究の礎となった点でも特筆すべき業績といえる（森 1970）。また小田富士雄は装飾古墳について、磐井の乱を契機に石製表飾という墳墓装飾が政権によって禁圧された結果、地下空間で再現されたとみた（小田 1980）。その後の調査の進展により、八女丘陵では磐井の乱後も石製表飾を樹立する風習が存続することが明らかにされたものの、森の研究と同様に装飾古墳に歴史的な解釈を付与した業績は大きい。

### 3) 1990 年代以降の考古学研究

1980 年代までに既知の資料による基礎研究はおおむね落ち着きをみせ、2000 年前後の装飾古墳研究は停滞した感もある。しかし近年でも、久留米市西館古墳、飯塚市山王山古墳、みやこ町皆見大塚古墳、北九州市下吉田古墳群 2・4 号墳、久留米市益生田古墳群 A 群 12 号墳など新発見の装飾古墳の類例も追加されている。そうしたなか、山王山古墳での敲打技法による円文の発見を契機として、八木健一郎・小田富士雄らにより敲打技法による施文が筑後川流域を中心に展開する状況が明らかにされ、敲打技法単独もしくは彩色技法と併用される手法の展開を再検討す

る必要性も再認識された（八木 2011、小田 2014）。また京都平野は、従来、瀬戸内ないしは山陰系の線刻手法に由来する 6 世紀後半以降の装飾古墳の分布域であったが、皆見大塚古墳の発見により彩色系装飾の分布論に一石を投じることとなった。

福岡県域を含む広域的な研究には、平成 14 年（2002）に開催された埋蔵文化財研究会による成果がある。ここでは装飾古墳が全国集成され、福岡県を中心とする彩色系装飾古墳の地域性および個々の装飾文様の分析がおこなわれた（埋蔵文化財研究会 2002 所収、藏富士・神保・堤・八木・丸林・尾園の各論考）。この成果のなかで丸林禎彦は、彩色された同心円文に規格が存在したことを示しつつ、整った同心円文と歪みのある同心円文の間に階層差を見出し、停滞していた個別文様の検討から新たな情報を引き出した。

また近年では装飾古墳を生み出した集団から政治的・社会的背景に迫ろうとする新たなステージに至っている。藏富士寛は、装飾の担い手について、石棺・石障の製作工人与石室構築工人の手によるものの間に画期を設け、これが有羨道化・複室構造化など埋葬施設上の大きな変化と汎列島の墓制の変革と関わることを指摘した（藏富士 1999）。墓制の変革といえば、玄界灘沿岸地域における横穴式石室の導入は葬送観念と、それを反映する古墳装飾にも大きな変化を及ぼすことになる。河野一隆は、列島の視点からわが国の装飾古墳を俯瞰し、かつて和田晴吾が指摘した観念（和田 2014）、つまり九州と近畿の横穴式石室の構造と当時の概念の相違を、政権の葬送イデオロギー「隠された死者」に対する九州系イデオロギー「飾られた死者」と表現した（河野 2021・2023）。そして分布論から吉村靖徳は、装飾古墳の築造者の意識と磐井の乱後の社会情勢の変化を具体的に紐づけ、那津官家が所在する福岡平野周辺域が彩色系装飾古墳の分布の空閑地となっている状況について、倭政権による中央集権化にむけた北部九州統治の過程での九州的観念の排除の意図が反映されたという背景を想定した（吉村 2024）。また辻田淳一郎は、博多湾岸地域とその周辺地域における装飾古墳の築造動向に着目しつつ地域の首長墓系譜のあり方と装飾古墳導入の状況を類型化し、福岡平野・早良平野およびその以西の地域における選択の抑制、周辺地域での主体的な選択という、装飾の有無に二つのパターンがあったことを指摘している（辻田 2024）。また政治的な側面から、柳澤一男は、6 世紀前葉に九州中北部首長間の連合関係を背景に、朝鮮半島南部勢力との複雑な外交による装飾古墳の拡散を指摘した（柳澤 2022）。このように近年は、文様論や編年論、系譜論にまだ課題を残しつつも、装飾古墳を築いた集団の動向や背後にある精神的・政治的側面から古墳時代社会の復元を試みる手段とする研究が散見される。

このほか山崎純男は、宗像市桜京古墳の帆船の線刻が後世の描画であることを具体的事例にもとづいて証明し（山崎 2019）、また宇野慎敏は、筑紫野市五郎山古墳ほか彩色図文における追葬時の追描の可能性を示した（宇野 2020）。いずれにせよ、藏富士寛の「どの段階で、どのような人物が、どの装飾を施したのかは、装飾古墳に関する検討を行う上で前提となる」（藏富士 2014）という指摘は重要であり、研究の時点はもちろんのこと、基礎資料となる調査の過程において強く意識し、観察記録を残しておくことが求められる。

#### 4) 装飾古墳の系譜について

これまで装飾古墳の研究史について概述してきたが、ここで、装飾古墳をめぐる根幹的な課題のひとつとなっている系譜に関してまとめておく。

萌芽期の装飾古墳である石棺等にレリーフもしくは線刻された初期の装飾様式の祖型は大阪や福井など九州外に求められ、伝播後には在地化し九州独自の変容を遂げていく。そして横穴式石室の導入は墓室を会葬者に見せる空間へと転換させ、こうした葬送観念の変化に連動して、石障や石屋形、横穴式石室壁面への装飾など、手法と施文箇所の間を有しながらも漸移的に展開する。このようにわが国の装飾古墳は、出現期以降に中北部九州で展開した古墳装飾の脈絡のなかで理解することができる。一方で、特に後半期に関しては、中北部九州の有力豪族と、高句麗あるいは朝鮮半島との交流を通じて、単発かつ局所的に高句麗系統の装飾古墳の影響を受けつつ画題が成立する事例がみられる。こうしたふたつの様相を俯瞰するならば、わが国の装飾古墳は横穴式石室の導入に連動し、東アジアのグローバルスタンダードな墓制の一形態として位置づけることが可能であろう。ただ体系的な理解をするには、今後の朝鮮半島の調査研究の動向を注視しなければならない状況である。

わが国における彩色系装飾古墳の系譜と大陸的要素の導入経路の問題については、彩色系装飾古墳の隆盛期に出現した竹原古墳の四神の描画（森・榊 1972）や、珍敷塚古墳の日象の鳥と太陽、月象の蟾蜍と月の共存がすでに馬王堆漢墓の帛画に描かれていることから理解されるように、6世紀後半段階には高句麗など大陸的思想の影響が確実におよんでいることが知れる。特に高句麗壁画古墳との関係は先学によっても折々に触れられてきた（斎藤 1973、金 1980、佐田 1991、柳澤 2004）。最近では高句麗の装飾古墳に描かれた星宿図と王塚古墳の珠文によりあらわされた北斗七星や南斗六星との類似性から、彩色系装飾古墳の初期段階における大陸からの直接的な影響が明かされつつある（平井 2003、柳澤 2022）。こうした状況について柳澤一男は、王塚古墳に描かれた騎馬群像や星宿図と高句麗系絵師の関与を想定する。また直近では、中北部九州勢力を介した初期段階の装飾古墳の伽耶地域への伝播を示す事例が確認されている（柳澤 2024）。このように相互交流の痕跡が徐々に明らかにされてはいるものの、中北部九州に通有の連続三角文や同心円文といった個別文様自体の系譜が、高句麗や経由地の朝鮮半島などに求められるのか否かはまだ詳らかにされてはいない。さらには前代までにはみられなかった赤以外の青や黄の顔料の使用に関しても、外的な影響を考えざるを得ないだろう。いずれにせよ高句麗からの直接的な影響以外に朝鮮半島を経由する経路、そして九州の有力氏族や民間交渉もふくめた錯綜した複雑な流入の背景など、早くに斎藤忠によって指摘された様相（斎藤 1973）の解明は、朝鮮半島の資料の蓄積を待たねばならない。

一方、国内における系譜論では、遠隔地域に共通した画題の存在意義と背景について、旧来からの大きな課題として残っている。たとえば北部九州と関東北部から東北南部に存在する彩色の共通性と「多氏」など特定氏族の移動を関連づけた大場磐雄の論考（大場 1974）に端を発する系譜論や、豊前地域での線刻装飾と瀬戸内海沿岸や山陰地域と共通する図文との関連性（小田 1986）などである。また九州島内における彩色系装飾古墳の個別図文の出自や、それらの図文を用いた集団の葬送観念の復元、交流関係と導入の背景なども引き続き考察を重ねる必要がある。

## 2 今後に向けて

装飾古墳研究は、1980年代までに個別文様論から死生観をめぐる活発な議論がおこなわれた。その後、研究の停滞期はあったが、近年では国内外の古墳時代社会の政治史や地域間交流史の復

元にかかわる観点での知見にもとづく研究が活発化してきた感がある。しかしながら、装飾の採否の基準や図文群の解釈といった、古墳時代の人々の意識にかかる基本情報が詳らかにされているとはいえない。その要因には死生観という精神面の論証がともなうことがあげられるだろう。そうしたなか、近年のデジタル化の波に伴い、装飾古墳を立体構造物として客観的に記録した三次元計測の成果に基づき、平面的検討から立体的検討への流れが顕著になってきた。例をあげるなら、彩色がどのような過程、あるいはどのような状況下で施文されたのか（自然光か松明か）や、施文箇所の疎密や精粗の比較検討による装飾を「みせる」対象への理解などは、三次元データの取得によるシミュレーションがもたらせた新たな視点の最たる事例といえる（池内 2015）。なお、こうした検討の際には、前述した追描の有無の精査をあわせておこなわないと、描写の意図と異なる解釈が導かれる可能性がある点は注意を要する。

また装飾図文研究は、長年にわたり個々の図文モチーフを抽出した解釈論が主体であったが、三次元計測の普及から研究の方向性は広がったとみている。これまでの方法による個別文様の解釈や系譜論、編年的研究が一定程度の到達点に達した感もあるが、石室を三次元的な視点で類型化し、古墳装飾を空間設計範型における一つの要素として俯瞰的に捉えるなかで、集団関係や横穴式石室墳築造過程における装飾の導入経緯を探る手法（本章第3項、小嶋篤論考など）に、三次元計測で得られたデータを組み合わせて総体的かつ多角的に検討する流れもできつつある。こうした装飾古墳に描かれた図文群を適切に解釈する際には、和田晴吾による、遺体を密閉する畿内の「閉ざされた棺」と遺体を密閉することのない北部九州の「開かれた棺」という他生観・死生観の違いが装飾図文の有無に現れているという指摘（和田 2014）は重要な視点となる。あわせて、民俗例をふくめた世界史的な図文の用例の観点からの検討も有効だろう。

三次元計測技術は日進月歩であり、今後も新技術を注視し、学術研究の深化や、古墳情報の保存と連動して積極的に取り入れることが求められる。同時に関係者は、見慣れた装飾であっても新たな視点と観察力によって対象物に向き合う意識を再確認しなければならない。

## 2. 装飾古墳保存管理史

装飾古墳の保存管理の歴史は、学術的な研究史に連動するように、福岡県と熊本県を中心とする北部九州地域の取り組みを国内の保存管理の歴史に置き換えることが可能であり、「わが国の装飾古墳保存をとりまく文化財保護行政の縮図」（柳澤 2004）といえる。したがって、福岡県の装飾古墳がどのように取り扱われてきたのかは、保存管理の今後の方向性を見定める上で理解しておく必要がある。

保存管理にかかる本格的な取り組みは、1950年代の浮羽地域の覆屋設置を嚆矢として、1960年代以降は王塚古墳の継続的なデータ収集と保存管理など、複数の古墳で進められた。近年、過年度に設置した保護施設の老朽化にともなう計画策定と再整備が複数自治体で進められている。これら装飾古墳の保存・管理、活用の在り方については、後述する昭和50年（1975）の文化庁文化財保護部長通知に拠ることを基本としている。また、平成22年（2010）に文化庁が「古墳壁画の保存活用に係る調査研究について」（平成22年4月1日 文化庁長官決定）をもとに和田晴吾を委員長とするワーキンググループを立ち上げて検討をはじめ、『古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ報告書』で報告された。なお全国的な視座からの保存に対する取り組みの歴史は朽津信明によって整理されている（朽津 2013）。

一方、古墳自体や環境測定データの保存管理はもちろんのこと、今では得られない様々な情報をふくみこむフィルムや写真、図面の保存管理も喫緊の課題である。くわえて、公開活用は前提となる保存管理と密接に関わるため、以下では、将来にそなえてこれまでの取組を列挙しておく。

## 1 保存管理史

### 1) 保存施設の設置

装飾古墳は発見と同時に温湿度や光、空気汚染、カビやコケ、墳丘上の樹木の成長、虫害などの生物、さらには地震や水害といった自然災害、あるいは人為的な毀損などによる劣化が進む。装飾古墳の保存対策はすでに明治期の日岡古墳の発掘調査時に行われている。調査者の坪井正五郎は、発掘調査時に開口していた羨道部分について人の出入りを遮断するために石積みをしつつ石室上部の石積みの補修もおこない、同時に覆屋を建てて装飾の保護措置をはかった。昭和4年（1929）3月に県の奨励金を受け、保護施設としての覆屋が完成している。県下における現状の保存のあり方は、①開口したまま、②開口部に扉等を設置したもの、③密閉し温湿度管理をしているもの、④開口部を土嚢などにより閉塞したものがある。内部観察ができるガラス窓がついた密閉式の覆屋構造は、昭和50年代以降に用いられるようになる。

保護につながる先駆的な現状の確認と情報の集約は、昭和48年（1973）に九州大学の鏡山猛を会長に、写真家の榊晃弘を事務局長として発足した「装飾古墳を守る会」の活動による。民間レベルではあったが、県下の装飾古墳30基の保存状況と保存施設・管理状況の調書を悉皆的に作成し（装飾古墳を守る会1974）、国や県に保存を訴えた。その活動は文化財保護行政を動かし、後述する福岡県による『王塚古墳の保存』報告書の刊行や文化庁文化財保護部長通知など公的機関による保存方針の発出につながった。また会が刊行した報告書は現在の保存状況調書にかかる様式の雛形となるとともに、状態の経年変化を知るうえでも貴重な記録となっている。

覆屋や管理用扉設置など行政によるハード的な保存措置は、福岡県内では昭和28年（1953）の珍敷塚古墳、原古墳、鳥船塚古墳を嚆矢に、昭和39年（1964）には王塚古墳の保存施設設置による措置が講じられている（乙益1971）。また文化庁では昭和44年（1969）に考古学ほか微生物学、構造力学、土木工学などの専門家からなる「装飾古墳保存対策研究会」を組織し、昭和44年（1969）から3ヶ年にわたって石室内温度測定、微生物調査、石材表面の保護措置、石室の保存にかかる土木工学的保存に関する現地の実態調査をおこなって保存にかかる提言をした。これにもとづいて福岡県では、昭和27年（1952）に装飾古墳としては初の特別史跡指定をうけた王塚古墳に関して、石室内温湿度測定、微生物調査、石材表面処理方法などの環境面の調査および、すでに亀裂を生じていた石材に関する構造力学的調査研究（福岡県文化財調査会1975）による



図 551 移築された日岡古墳の明治期の覆屋



図 552 日岡古墳の保護施設  
（明治期の覆屋と遮蔽扉）

基礎データを取得し、保存管理計画（昭和 51 年）と整備計画（昭和 61 年）を策定した。そして平成 3 年（1991）に観察室に空調を備えた石室保護施設と墳丘復元を含む保存修理事業がようやく完了した。なお、このときに設置された鉄製支柱は劣化のため令和 6 年（2024）から取り換えられ、令和 8 年（2026）までに環境調査関係機器や照明の更新がおこなわれる予定である。なお、王塚古墳の保存に関しては、古墳に多大な影響をおよぼす石炭採掘を迫る炭鉱主と向き合って保存に尽力した、地元村会議員の西村二馬の業績（玉利 1984）を忘れてはならない。昭和 45 年（1970）の土取り工事により損壊した広川町弘化谷古墳も昭和 60 年度から建築工学・考古学・環境設計学など各分野の参画による調査の後に、昭和 62 年度に石室補修復元、昭和 62・63 年度に石室保護施設の整備をおこなった。



図 553 『特別史跡王塚古墳の保存』

その間、昭和 50 年（1975）9 月 1 日付で、文化庁文化財保護部長より「装飾古墳保護管理の当面の取扱いについて」（庁保記第 164 号）が、史跡指定された装飾古墳がある 11 府県教育委員会あてに通知された。この通知文は同年 10 月には史跡指定されていない装飾古墳を抱える 14 の県教育委員会あてにも発出された。通知の中では、施設及び措置について、原則として遮蔽するものとして保護施設の整備すること、公開に関しても原則として説明板等で行い一定期間を除いて非公開とすることなどが明示されている。この



図 554 鳥船塚古墳覆屋（昭和 58 年）

方針に基づき、県内の装飾古墳の保存施設は前室ないしは羨門部に、保存と公開の両立を目的としたガラス窓付の密閉扉を備えた保存施設が設置されることとなる。なお、同年、久留米市日輪寺古墳・大牟田市萩ノ尾古墳・宮若市竹原古墳・うきは市珍敷塚古墳、昭和 52 年（1977）にうきは市塚花塚古墳・重定古墳の保存施設が整備されている。

平成・令和に至ると昭和期に設置された覆屋などの経年劣化に伴い、筑紫野市五郎山古墳（平成 9 年度～平成 12 年度）、屋形古墳群（平成 26 年度～令和 11 年度予定）、竹原古墳（平成 29 年度～令和元年度）、王塚古墳（令和 4～令和 8 年度）の施設整備がおこなわれ、横穴では鞍手町古月横穴（平成 6 年度～平成 15 年度）が史跡指定拡張を契機として保存修理されている。こうした取り組みに連動し、埋葬施設優先で指定された古墳について墳丘規模確認の調査等も進められているが、悉皆的に保存が必要な範囲の確定と保護措置が求められる。さらには墳丘や石室に多大な悪影響を及ぼす樹木の取り扱いも中長期的な課題である。

## 2) 近年の取組

平成 16 年（2004）に奈良県高松塚古墳壁画の劣化問題が浮上し、保存管理が問題になる中で、翌平成 17 年（2005）には王塚古墳を擁する桂川町教育委員会を事務局に、「装飾古墳保存連絡協議会」を立ち上げて研修会を行うなど装飾古墳を擁する県内各自治体間の緊密な連携を図っている。たとえば平成 20 年（2008）年に、うきは市珍敷塚古墳において白カビの大量発生という事

態に至った際も情報交換をおこなうなどの機能を果たした。以降、協議会設置がひとつの契機となり、定期的な肉眼観察や記録写真の撮影など問題点の早期把握と対応に努めるとともに、各管理団体が定期的に内部の点検を行いつつカビ対策としてクレゾールなどによる消毒を実施するなど必要な処置を講じている。しかしながら日常管理という対応の一方で、調査後に土嚢等で羨門部を閉塞したみやま市成合寺谷古墳、筑紫野市殿様塚1号墳など常時の保存状態や経年劣化の確認ができない事例もあり、その扱いが今後の課題となっている。

これら福岡県下の装飾古墳保存の取り組みに関しては、玉利勲や、長年わたり調査と保存措置に携わってきた石山勲により概要がまとめられている（玉利 1993、石山 2009）。その後、奈良県高松塚古墳やキトラ古墳の壁画の劣化問題や、本県の珍敷塚古墳の生物被害が契機となり、文化庁では壁画の保存・活用に関する検討会の下に平成 24 年（2012）「装飾古墳ワーキンググループ」を設置し、全国の装飾古墳の保存・管理状況の実態調査をもとに保存対策の原則的な課題の抽出と対応が整理された（古墳壁画の保存活用に関する検討会 2014）。こうした流れのなかで、福岡県下の装飾古墳も保護措置を講じるための現状調査、温湿度の管理、経過観察を継続して行っているものの、調査担当者の個人的な観察力に頼っており、分析についても個々に条件が異なるため汎用性のあるデータとして活用しにくく、個別の対象ごとに対応に差が認められる状況である。装飾古墳は個々の古墳で諸条件が大きく異なり、ある古墳での保存措置の成功事例が全てにおいて該当することはなく、蓄積されたデータに基づいた石室内の環境変化の対応や組織的な管理がますます重要になっている。

### 3) 二次資料の保存

一次資料の保存にくわえ、刻々と褪色していく装飾古墳の保存や研究には二次資料である写真や模写の存在が欠かせない。全国的には藤本四八や榊晃弘らによる写真記録としての保存や、昭和 30 年（1955）から文化庁の委嘱を受けて、王塚古墳を手始めに二十数年来にわたり装飾古墳の模写を行った東京藝術大学の日下八光の手による記録がある。これらは、褪色が進む装飾の研究に有益な情報を与えてくれる。福岡県の動きでは、昭和 49 年（1974）以来、県下の装飾古墳を撮影し続けた九州歴史資料館の石丸洋の写真による記録の蓄積という業績も記しておかねばならないだろう。

近年、三次元データでの形状記録とデジタル化をおこなう手法が、産学連携事業のもとで提唱された（池内 2015）。この手法を用いると現地赶赴ことなく保存にかかる状態の把握、研究、活用を行うことができる。これは装飾古墳の保護に関する有効な手法で、その先鞭をつけた試みと評価できる。同時に情報のデジタル化は、平成 28 年（2016）の熊本地震が井寺古墳ほか熊本県下の装飾古墳などに大きな損傷を与えたなか、災害時の修復に備えることができるとともに、公開活用にかかる環境変化と劣化のリスクを抑える効果もある。今後、データ化と公開による研究資料としての情報提供、そして新たな手法を含めた活用が求められる。

上記のデジタル技術の進化はフィルムなどの撮影媒体の保存と活用にも資する。これらもまた劣化が進むが、九州国立博物館では、主として九州歴史資料館が原版を所蔵する福岡県を中心とした北部九州の装飾古墳の撮影フィルムについて開館前からデジタル化に着手した。デジタル化の作業は、①非加工のマスターデータ作成、②褪色フィルムの色復元および簡易補正と、傷・ゴ

ミ・指紋等を修正した第二マスターデータの作成、③三種類の解像度を変えた非圧縮データの作成、④画素数を変えずに解像度を 72dpi に固定した四種類の圧縮データの作成である（赤司・河野 2009）。このうち④については九州歴史資料館でもデータを保管している（装飾古墳データベース作成委員会 2003）。こうした取り組みは公的機関等が過去に撮影した写真フィルムの一部でしか対応していないため、悉皆的な所在調査と管理状況の把握、確実な保存措置が急務となる。

## 2 保存と活用

確実な保存に向けた方策の一方で、近年の活用の機運の高まりにより、条件が整った一部の装飾古墳を積極的に公開する動きがある。その事例のひとつが「古墳同時公開」である。平成 10 年（1998）から王塚古墳を擁する遠賀川流域の自治体主導のもと、石室内の温湿度が安定し装飾への影響が少ない春と秋の年に二度の一斉公開日を設定し、広く一般に公開しはじめた。この事業の計画策定にあたっては福岡県教育庁筑豊教育事務所と同北九州教育事務所も参画した。そして平成 13 年（2001）には日岡古墳や大分県日田市ランドヤ古墳を擁する筑後川流域でも同時公開が開始された。こうした流れは熊本県にもおよび、現在では両県の連携・交流もはかれるようになってきている。このほかに定期的な公開日を設定している事例もある。

一方、装飾古墳自体に公開制限がある状況下ではレプリカを用いる活用の手法が有効である。王塚装飾古墳館では同古墳の原寸大レプリカほか福岡県内を中心とする石室縮小レプリカが展示され、五郎山古墳の場合は古墳に併設されたガイダンス施設「五郎山古墳館」（筑紫野市歴史博物館分館）で原寸大のレプリカを活用し、薄暗い古墳の雰囲気を感じられるようカンテラを持って石室と装飾を観察する仕組みを導入している。今後は制約の多い実物公開に代えて、博物館や学校にも持ちこむことができるレプリカや SfM 技術により取得した画像、VR の教材化など、三次元データを積極的に用いた普及活用のニーズが、さらに高まっていくものと思われる。

装飾古墳の公開については、装飾の状態に加えて、装飾古墳の保存施設・設備の多くが「昭和時代」の保存優先の設備の仕様に左右されるため一律な対応が難しい。装飾古墳の恒久的な保存を優先して公開を制限している例も少なくはない。一方で、文化財保存の本質的な目的を鑑みると、公開による装飾への影響を踏まえた保存を前提としつつも、可能な限り国民への公開の道を探ることが行政の責務といえる。そのためには日常的な点検や環境データの取得と分析が必要条件となる。保存と活用のバランスを取りながら、対応していくことが求められている。



図 555 筑後川流域装飾古墳同時公開のチラシ

### 3 今後に向けて

福岡県は王塚古墳をはじめとする保存管理の歴史が物語るように、全国的にも早い段階で施設を設置し、対応の先駆的な役割を果たしてきた。したがって過年度に設置した施設の老朽化による再整備においてもまた主導的な役割を担う責務が付与される。あわせて、県内に所在する装飾古墳の数が熊本県とともに全国的にも圧倒数を誇る本県は、データの取得や分析をふまえた公開・活用面でも先進的な取り組みが求められる。

福岡では平成13年(2011)1月に県の文化財保護審議会から『福岡県重要・大規模遺跡の保存活用基本計画』が建議された。この前文において、「地域の特色を生かした保護対策の推進」がうたわれている。そして福岡県の8つの地域ごとの特色のひとつとして装飾古墳群に関して、学術的な調査研究と体系的な整備活用を課題にあげた。前者については本報告書の刊行で責務の一端を果たし得たと考えるが、後者については上述したように課題の提示にとどまっている。令和3年(2021)3月にまとめた『福岡県文化財保護大綱』は、計画的な保存活用による文化財保護の充実を図る方針を示し、価値を伝える活用として情報の発信、効果的な公開、教育普及を掲げている。これらの指針を体系的に実践するためには活用制限のある一次資料はもとより、二次資料についても適切に保存管理することが前提となる。公開活用に関しても調査研究と同様に体系的な取り組みが求められており、県もしくは、「装飾古墳保存連絡協議会」を核として検討を行いつつ具体策を講じていく必要がある。

#### 参考文献

- 赤司善彦・河野一隆 2009「九州国立博物館による装飾古墳のデジタルアーカイブ」『月刊文化財』547号 文化庁文化財部
- 池内克史 2015『九州装飾古墳のすべて』東京書籍
- 石野義助・武藤直治・宮崎勇蔵 1939「水縄山麓の装飾古墳」『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第13輯 史蹟之部 福岡県
- 石山勲 2009「九州の装飾古墳(福岡県・熊本県)」『遺跡学研究』第6号 日本遺跡学会
- 宇野慎敏 2020「装飾古墳における追葬時の追描の可能性について」『福岡大学考古学論集』
- 梅原末治・小林行雄 1940『筑前国嘉徳郡王塚装飾古墳』京都帝国大学文学部
- 大場磐雄 1974「古氏族の移動と装飾古墳」『どるめん』4 JICC 出版局
- 尾園晃 2002「その他の抽象文」『装飾古墳の展開』埋蔵文化財研究会
- 小田富士雄 1966「古墳文化の地域的特色」『日本の考古学』河出書房新社
- 小田富士雄 1974「図形文様の種類とその意義」『古代史発掘』8 講談社
- 小田富士雄 1980「壁画古墳と石人石馬の地帯」『ゼミナール日本古代史』下 光文社
- 小田富士雄 1986「福岡県・穴ヶ葉山古墳の線刻壁画」『古文化談叢』16 九州古文化研究会
- 小田富士雄 2014「山王山古墳における円文系装飾と敲打技法」『山王山古墳』飯塚市教育委員会
- 乙益重隆 1971「九州における装飾古墳」『埋蔵文化財白書』日本考古学協会 学生社
- 乙益重隆 1974「彫刻と彩色壁画」『古代史発掘』8 講談社
- 川上市太郎 1935『筑前王塚古墳』福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書第11輯 福岡県
- 河野一隆 2021『王墓と装飾墓の比較考古学』同成社
- 河野一隆 2023『装飾古墳の謎』文春新書
- 日下八光 1978『装飾古墳の秘密』講談社
- 熊本県立装飾古墳館 1997『福岡県の装飾古墳』
- 金基雄 1980『朝鮮半島の壁画古墳』六興出版
- 朽津信明 2013「装飾古墳のおかれた「環境」と保存の歴史」『保存科学』53 国立文化財機構東京文化財研究所
- 蔵富士寛 1999「装飾古墳考」『先史学・考古学論究』Ⅲ 龍田考古学会

蔵富士寛 2002 「装飾古墳の展開 - 菊池川流域 -」『装飾古墳の展開』埋蔵文化財研究会  
 蔵富士寛 2014 「装飾古墳の保存と活用」『古墳時代の研究』3 同成社  
 児玉真一 1989 『若宮古墳群 I』吉井町文化財調査報告書第4集 吉井町教育委員会  
 小林行雄 1964 『装飾古墳』平凡社  
 古墳壁画の保存活用に関する検討会 2014 『古墳の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ報告書』  
 同検討会・装飾古墳ワーキンググループ  
 斎藤忠 1952 『装飾古墳の研究』吉川弘文館  
 斎藤忠 1965 『古墳壁画』日本原始美術5 講談社  
 斎藤忠 1973 『日本装飾古墳の研究』講談社  
 佐田茂 1991 「彩色壁画の出現と筑後の彩色壁画古墳」『交流の考古学』肥後考古学会  
 島田寅次郎 1925 『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第1輯 福岡県  
 島田寅次郎 1939 「県内に在る装飾古墳」『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第13輯 史蹟之部 福岡県  
 神保公久 2002 「筑後川流域」『装飾古墳の展開』埋蔵文化財研究会  
 装飾古墳データベース作成委員会 2003 『北部九州装飾古墳壁画データベース』日本学術振興会平成14年度科学  
 研究費補助事業  
 装飾古墳を守る会 1974 『装飾古墳白書—福岡県下における保存の現状—』  
 高木恭二 2002 「九州の装飾古墳」『東アジアと日本の考古学』Ⅲ 同成社  
 高木正文 1984 『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告書第68集 熊本県教育委員会  
 玉利勲 1984 『装飾古墳紀行』新潮社  
 玉利勲 1993 「装飾古墳・保存の足どり」『装飾古墳の世界』朝日新聞社  
 辻田淳一郎 2024 「北部九州における装飾古墳の築造とその背景」『前方後円墳研究論集』九州前方後円墳研究会  
 堤伴治 2002 「八女」『装飾古墳の展開』埋蔵文化財研究会  
 坪井正五郎 1889 「筑後国日ノ岡古墳にて古代紋様の発見」『東京学芸雑誌』6-88  
 埋蔵文化財研究会 2002 『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』埋蔵文化財研究会  
 濱田耕作・梅原末治 1917 『肥後に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学  
 濱田耕作・島田貞彦・梅原末治 1919 『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学  
 平井正則 2003 「古墳天井画の数値的同定」『福岡教育大学紀要』52-3 福岡教育大学  
 福岡県文化財調査会 1975 『特別史跡王塚古墳の保存—装飾古墳保存対策研究報告書—』  
 藤井功・石山勲 1979 『装飾古墳』日本の原始美術10 講談社  
 古城史雄 2020 『八代海周辺の装飾古墳 - 発生と展開』熊本県教育委員会  
 丸林禎彦 2002 「円文・三角文」『装飾古墳の展開』埋蔵文化財研究会  
 村上久和 1995 『大分県の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92集 大分県教育委員会  
 森貞次郎 1970 「装飾古墳の発生と展開」『古代の日本3』角川書店  
 森貞次郎・榊晃弘 1972 『装飾古墳』朝日新聞社  
 森貞次郎 1985 『装飾古墳』教育社  
 八木健一郎 2002 「筑前」『装飾古墳の展開』埋蔵文化財研究会  
 八木健一郎 2011 「敲打技法を有する古墳」『古文化談叢』65 九州古文化研究会  
 矢野一貞 1972 『筑後國史 - 筑後将士軍談 -』下巻 名著出版  
 柳澤一男 2004 『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社  
 柳澤一男 2017 「九州の装飾古墳」『4-5世紀東北アジア高句麗壁画古墳の理解』(韓国語) 仁荷大学古朝鮮研究  
 叢書 I 周留城社  
 柳澤一男 2022 『装飾古墳ガイドブッケー九州の装飾古墳—』新泉社  
 柳澤一男 2024 「筑紫君磐井の墓(岩戸山古墳)の石製表飾と装飾古墳の展開」『筑紫君磐井の乱の実像に迫る』  
 九州歴史資料館  
 山崎純男 2019 「福岡県宗像市桜京古墳にみられる船の線刻壁画をめぐって」『郵政考古学紀要』大阪・郵政考古学会  
 吉村靖徳 2017 「福岡県の装飾古墳」『4-5世紀東北アジア高句麗壁画古墳の理解』(韓国語) 仁荷大学古朝鮮  
 研究叢書 I 周留城社  
 吉村靖徳 2024 「筑紫における彩色系装飾古墳の出現と磐井の乱」『九州歴史資料館研究論集』49 九州歴史資料館  
 若林勝邦 1902 「九州の考古家(續)」『考古界』第貳篇第壹号 考古学会  
 和田晴吾 2014 「古墳の他界観」『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館

### 3. 古墳築造技術に基づく装飾横穴式石室墳の時期変遷

古墳築造年代の分析視点・手法を整理した上で、福岡県内の装飾横穴式石室墳について時期変遷を明らかにする。そして、装飾横穴式石室墳の時期変遷をふまえて、古墳築造技術という視点から装飾壁画の共有状況を検討する。

#### 1 古墳築造年代の分析視点

古墳築造年代を把握する上で、まず重視すべきは、「①遺構間の層位関係」である。次いで着目するのが、「②古墳自体の構造物（墳丘・主体部・周溝等）」であり、墳丘表飾である埴輪も該当する。最後に積み上げる情報が「③古墳の副葬品・供献品」である。

以上の情報を総合して、古墳の築造年代を把握するが、①～③の情動的価値は等価ではない。また、「④墓域形成」は直接証拠にはならないが、古墳築造年代把握の補強材料にはなる。

#### 2 装飾横穴式石室墳の編年手法と資料的制約

##### 1) 横穴式石室墳の分析

横穴式石室墳の分析では、層位論に基づいた「古墳築造の作業手順」と石室構築の難作業である天井石架構と直結する「石室立体空間（立体的構造認識）」を検討し、「Ⅰ：古墳築造範型（古墳をつくる際の集団行動方式）」を把握する必要がある。しかし、装飾横穴式石室墳の大半は古墳保存の必要性から、墳丘・周溝等の層位情報を欠くことが多く、層位論を用い得ない事例が多い。このため、装飾横穴式石室墳の「古墳築造の作業手順」については、現地地形観察・周辺古墳の調査事例から情報を補完していく必要がある。また、装飾横穴式石室墳も含め、九州の横穴式石室墳では単室・複室に加え、羨道分割による前室的利用といった「Ⅱ：石室空間設計」も把握しなければならない。石室空間設計は、特定の古墳築造範型と有機的に結び付くだけでなく、古墳築造範型の差を横断する形で共有されることが多い。このような実態に即した整理を行うためには、横穴式石室墳の築造範型と石室空間設計を別個に分類した上で、両者を組み合わせて把握する分類方法が有効である（図 556・557）。

横穴式石室墳の相対編年構築では、無形条件（ソフト面）である「古墳築造の範型」の共有とともに、有形条件（ハード面）である「地質環境」や「造墓動員の重複」を注視しなければならない。本分析視点を物理的に実現するものが「④墓域形成」であり、多くの装飾古墳を内包する群集墳分析が重要な役割を果たす。また、「④墓域形成」をふまえることで、「②古墳自体の構造物」に属する装飾壁画の文様構成から、より効果的に相対編年の補強・検証が可能となる。

##### 2) 墳丘表飾の分析

装飾壁画は上位階層墓で用いられる傾向にあり、墳丘表飾（埴輪・石製表飾）を併用する事例が複数見られる。墳丘表飾は製作技術の系統・系譜関係をおさえることで、相対編年の構築とおおよその広域編年の把握に有利な資料である。横穴墓を除くと、九州北部では古墳築造後に一定期間を経て、墳丘表飾を加飾した事例は確認されていない。

##### 3) 副葬品・供献品の分析

装飾横穴式石室墳は古墳時代後期後半に盛行し、追葬と後世の盗掘が普遍的に認められる。こ

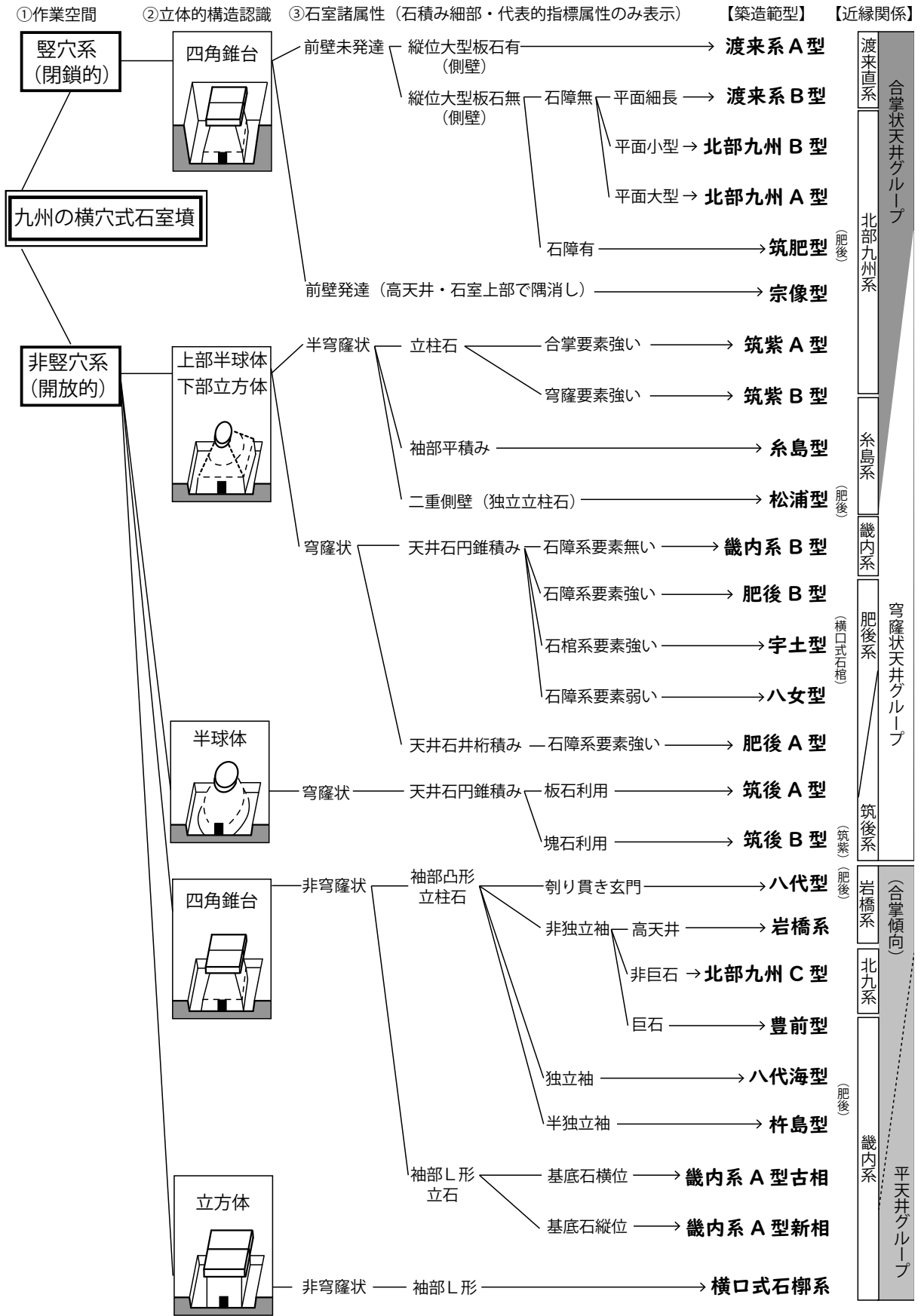


図 556 九州における横穴式石室墳の築造範型分類と近縁関係

のため、出土須恵器・土師器等を古墳築造年代に直結することはできず、層位的検証を経た資料の量的確保と型式学的位置づけをふまえないといけない。

### 3 「横穴式石室」分類と「横穴式石室墳」分類

上記の方法論で提示した「古墳築造範型の分類（横穴式石室墳の分類）」は、先行研究の蓄積を基盤としつつも、既存の横穴式石室分類とは分類体系が異なる。本点を説明することで、より編年手法が明確となる。

横穴式石室分類では、石室平面形態（前室の有無等）を主要属性に据える研究が多い。これは石室平面形態が図面上で識別しやすく、かつ「横穴式石室の構築の最初の段階で決定され、その後の構築技術をも規定する」からである（重藤 1999・2020）。また、九州では複室、羨道分割・拡大といった前室空間の創出が存在するため、石室空間を体系的に整理する必要があった（藏富士 2020 等）。そして、埋葬施設に棺を納めない「開かれた棺」という葬送観が主要な研究対象に加わったことで、「石障」・「石棚」・「石屋形」・「閉塞石」といった諸施設、すなわち石室空間についての研究が大幅に進展した（藏富士 2010、吉村 2001、和田 1989 等）。これらの研究視点・成果を継承するものが、上記分析手法で提示した「Ⅱ：石室空間設計」の把握である。

一方で、石室平面形態を主属性として系列把握を行うと、異なる古墳築造技術（古墳築造の作業手順、石室立体空間）の古墳を横断的にまとめたり、同じ古墳築造技術の古墳を分断する事象が生じる。古墳の型式変化・相対編年を理解するためには、「古墳築造技術の連続性・断絶性」を最重要視しなければならない。このために必要なのが、墳丘構築と石室構築の双方を視野に入れた「Ⅰ：古墳築造範型」の把握である（小嶋 2023a）。石室平面形態は石室上部石積みの規定要因となるが、古墳全体から見れば、墓坑平面形態・掘削深度が石室平面形態の規定要因となる。つまり、古墳築造手順（掘削・盛土・石積みの層位関係）はより上位の属性に位置づけられる。

以上を概括すると、石室空間設計の分類は横穴式石室分類と連続するが、古墳築造範型の分類は横穴式石室分類と不連続であり、分類体系自体を違えると結論できる。

## 4 福岡県下における装飾横穴式石室墳の様相

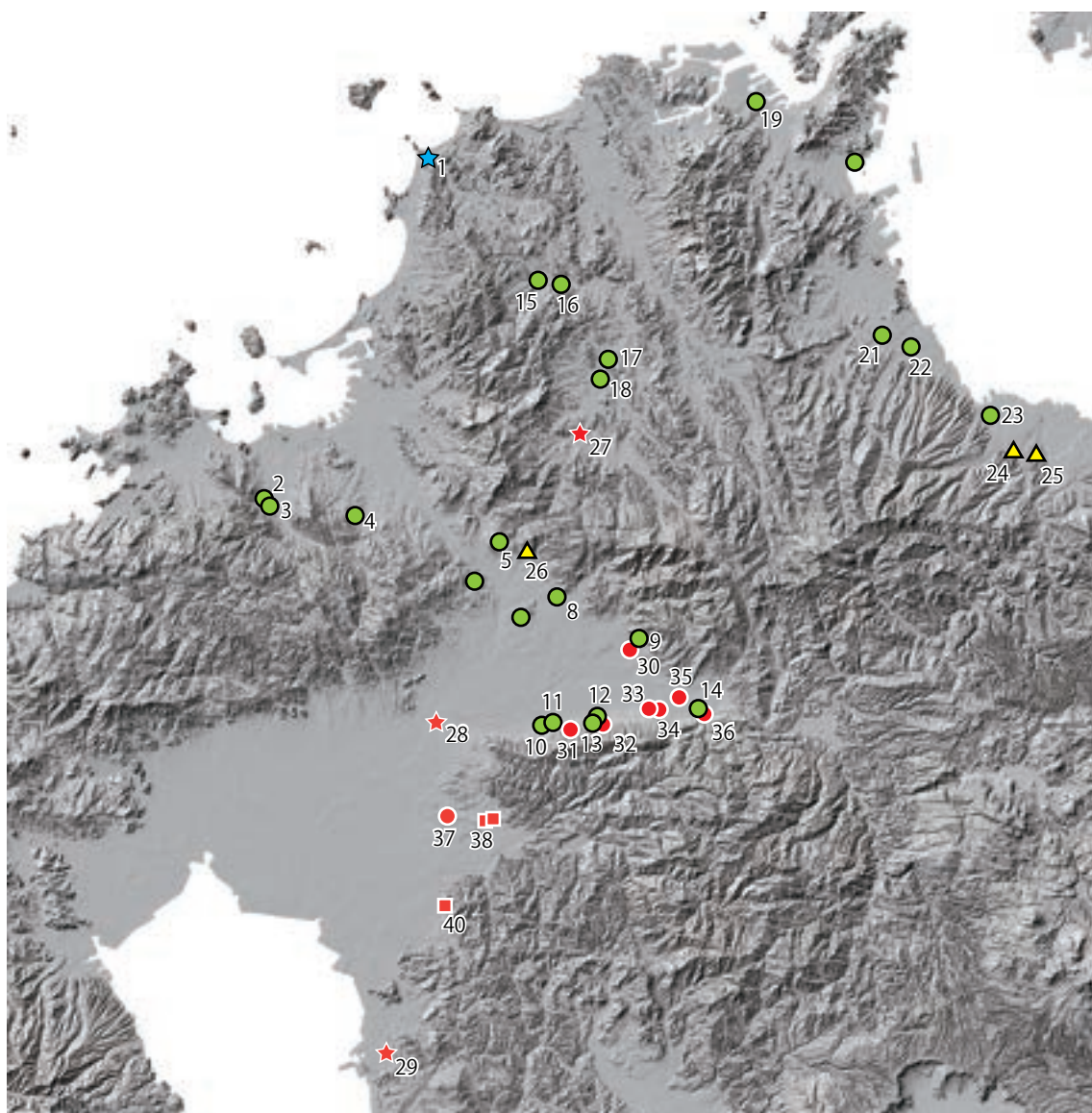
### 1) 南筑平野

**装飾壁画の成立と展開** 日本列島における装飾壁画の歴史は、近畿地方等に見られる刳抜き式石棺にはじまり、宇土半島・八代海沿岸域に成立した肥後 A 型初期横穴式石室墳を構成する石障装飾へと展開する（柳澤 2022）。次いで、「棺空間の拡大（石障系腰石の出現）」に伴って、「石障壁面→石屋形内壁→石室内壁」へと装飾範囲を広げるとともに、彩色表現も加えられた。本動態とも連動する形で、石棺においても「石棺蓋石・外壁面→石棺内壁面」へと装飾範囲の変動が認められる。

**横口式石棺と装飾** 福岡県下における最古の装飾古墳は、横口式石棺と北部九州型石室を組み合わせる石人山古墳（TK216 型式期）・浦山古墳（TK208 型式期）である。石人山古墳は横口式石棺蓋石・外壁面（横口袖石）、浦山古墳は横口式石棺内壁面への施文である。装飾古墳の定義において、埋葬施設内壁面（遺体側壁面）への施文を重視すると、浦山古墳のみが狭義の装飾古墳となる。

横穴式石室墳の分類		横穴式石室の分類			
<小嶋分類 (小嶋 2023 等)> 古墳築造類型と石室空間の組成分類		<重藤分類 (重藤 2020)> 石室平面形態・区画石に基づく分類		<藏富士分類 (藏富士 2011・2020 等)> 石室平面・天井形態に基づく分類	
<b>【古墳築造類型】</b> 渡来系 A 型 渡来系 B 型 北部九州 A 型 北部九州 B 型 北部九州 C 型 宗像型 筑肥型 筑紫 A 型 筑紫 B 型 糸島型 松浦型 八女型 筑後 A 型 筑後 B 型 肥後 A 型 肥後 B 型 岩橋系 八代型 八代海型 豊前型 杵島型 畿内系 A 型 畿内系 B 型 横口式石槨系	<b>【石室空間】</b> 無羨道単室 短羨道単室Ⅰ類 短羨道単室Ⅱ類 長羨道単室Ⅰ類 長羨道単室Ⅱ類 複室Ⅰ類 複室Ⅱ類	Ⅰ類：北部九州型初期横穴式石室 A 類 Ⅱ類：北部九州型初期横穴式石室 B 類 Ⅲ類：単室無羨道横穴式石室 Ⅳ類：単室両袖型横穴式石室 Ⅴ類：複室両袖型横穴式石室	北部九州系今宿・唐津型 北部九州系糸島型 北部九州系福岡型 北部九州系宗像型 肥後系 筑後・北肥後系 (室空間創設型) 筑前系 (羨道拡大型) 西北部九州系 (羨道分割型)		
		小嶋分類	北部九州 A 型無羨道単室	北部九州 C 型無羨道単室	北部九州 C 型複室Ⅰ類
		重藤分類	Ⅰ類：北部九州型初期横穴式石室 A 類		Ⅰ類 (Ⅴ類の影響を受けたⅠ類)
		藏富士分類	北部九州系糸島型	北部九州系	筑前系
1：釜塚古墳 (半地下式石室構築) 2：カクチガ浦 10 号墳 (地上式石室構築) 3：大塚 2 号墳 (地上式石室構築) 4：中有木中ノ浦古墳 (半地下式石室構築) 5：西館古墳 (地上式石室構築) 6：原古墳 (地上式石室構築)					
		小嶋分類	宗像型複室Ⅱ類	筑後 B 型複室Ⅱ類	筑後 B 型長羨道単室Ⅱ類
		重藤分類	Ⅴ類 (複室両袖型横穴式石室)		Ⅳ類 (単室両袖型横穴式石室)
		藏富士分類	筑後・北肥後系	筑後・北肥後系	西北部九州系

図 557 横穴式石室墳分類と横穴式石室分類の対応関係 (1/250)



※国土地理院地図利用

【★ 宗像型】

1：桜京古墳

【● 筑紫型】

2：吉武熊山古墳 3：浦江古墳群 4：丸ノ口古墳群 5：殿様塚古墳群 6：五郎山古墳 7：花立山穴観音古墳  
 8：仙道古墳 9：湯の隈古墳 10：下馬場古墳 11：薬師下北・南古墳、前畑古墳 12：寺徳古墳  
 13：中原狐塚古墳 14：重定古墳 15：竹原古墳 16：損ヶ熊古墳 17：川島古墳群 18：山王山古墳  
 19：一本松塚古墳 20：下吉田古墳群 21：皆見大塚古墳 22：三ツ塚古墳群 23：黒部古墳群

【▲ 畿内系・石郭系】

24：穴ヶ葉山古墳群・穴ヶ葉山南古墳群 25：山田1号墳 26：砥上観音塚古墳

【★ 肥後系】

27：王塚古墳 28：日輪寺古墳 29：萩ノ尾古墳

【● 筑後型】

30：狐塚古墳 31：隈3号墳 32：益生田古墳群・西館古墳 33：屋形古墳群 34：(参) 安富古墳  
 35：日岡古墳 36：塚花塚古墳 37：弘化谷古墳

【■ 八女型（筑後型との折衷事例含む）】

38：乗場古墳 39：丸山塚古墳 40：成合寺谷古墳

図 558 福岡県の装飾古墳分布図

**横穴式石室と装飾** 福岡県下において、石棺部材ではなく、石室部材に装飾を施した最古の横穴式石室墳は、筑後川下流南岸の日輪寺古墳である。石室上部および墓坑・裏込め盛土の情報を欠くが、肥後型横穴式石室墳（石障系石室）に連なるのは確定である。肥後型横穴式石室墳の編年に照らし合わせると、国越古墳やチブサン古墳よりも古く、井寺古墳・千金甲1号墳・伝左山古墳に近い（小嶋 2020a）。石室構築の細部を見ると、袖石側では石障設置面と壁面構築面が同一面にあることが確認できるため、石障系石室としては新相の石室構築手順に位置づけられる。日輪寺古墳出土埴輪はIV群A類に属するものであり、近隣の御塚古墳・権現塚古墳出土埴輪と比較すると、御塚古墳出土埴輪と型式学上は近い。以上を総合すると、日輪寺古墳は古墳時代中期後半～後期前半（TK47 型式期新相～MT15 型式期古相）築造と評価できる。

**筑紫と火の結合** 上記のように、筑紫（福岡県）における装飾古墳の出現は、火（熊本県）との墓制共有（「有明首長連合」と称される墓制共有）に契機がある。次いで、古墳時代後期においては筑紫平野と菊池川流域間で多面的な繋がりが存在し、横穴式石室では「複室構造（複室Ⅱ類）」の共有が全域的に認められる（図 559）（藏富士 2020 等）。菊池川流域と隣接する南筑平野南端では、萩ノ尾古墳で肥後A型菊池川系列4式（MT85～TK209 型式期）が用いられる。

**筑後・八女型石室と装飾壁画** 立山山古墳群・日岡古墳の様相から「胴張り式石室（穹窿状天井・ドーム形天井石室）」と称される筑後型横穴式石室墳はMT15 型式期に成立する（小嶋 2020b・2023b）。岩戸山古墳をはじめMT15 型式期における首長墓の様相は不明だが、一段階新しい筑後A型2式の弘化谷古墳（TK10 型式期）では石屋形に彩色壁画が認められる。石屋形と彩色壁画の組み合わせから見て、菊池川流域との交流が八女古墳群における彩色壁画の起源と見てよい。現状、八女古墳群では最後の前方後円墳である乗場古墳（八女型・MT85 型式期）と中位階層となる大型円墳の丸山塚古墳（MT85 型式期）で彩色壁画が認められる。乗場古墳と丸山塚古墳はともに、石屋形ではなく、石室壁面に施文される。

## 2) 両筑平野

**壁画系装飾と日岡古墳** 壁画系装飾の最古例に位置づけられるのが日岡古墳である。日岡古墳は筑後川流域における最古相の筑後型横穴式石室墳（筑後B型若宮・屋形系列1式）でもある（図 560）。北部九州型横穴式石室の要素を色濃く継承した系列であり、天井高が低い段階で複数枚の天井石で架構する手順を採る。このため、石室平面形である「胴張り長方形」が天井構造にも反映され、石室壁面が合掌傾向となる特徴がある。加えて、石室開口部が狭く有段状になる玄門構造も北部九州型石室の要素である。

石室構造から、日岡古墳はTK10 型式期の筑後型横穴式石室墳よりも一段階古く位置づけられる。その上限は、若宮古墳群の墓域形成から塚堂古墳築造（TK23 型式期）以後と確定でき、墳丘表飾からさらに絞り込むことが可能である。日岡古墳出土埴輪はIV群系A類で、前代の塚堂古墳出土埴輪（IV群、TK47 型式期）と突帯間隔や底部径等の規格を共有する。一方で王陵系埴輪からの離脱（B種ヨコハケの欠落・板状工具タテナデ主体）は顕著で、埴輪製作の経験が乏しい製作者が主体的に携わっていることがうかがえる。したがって、日岡古墳造営集団は塚堂古墳との系譜関係を有するものの、古墳築造ユニットを解散した後に、一定期間の間隔を経て古墳築造ユニットを再結集したと判断できる。以上を総合すると、日岡古墳は古墳時代後期前半（MT15 型式期新相）築造と評価できる。

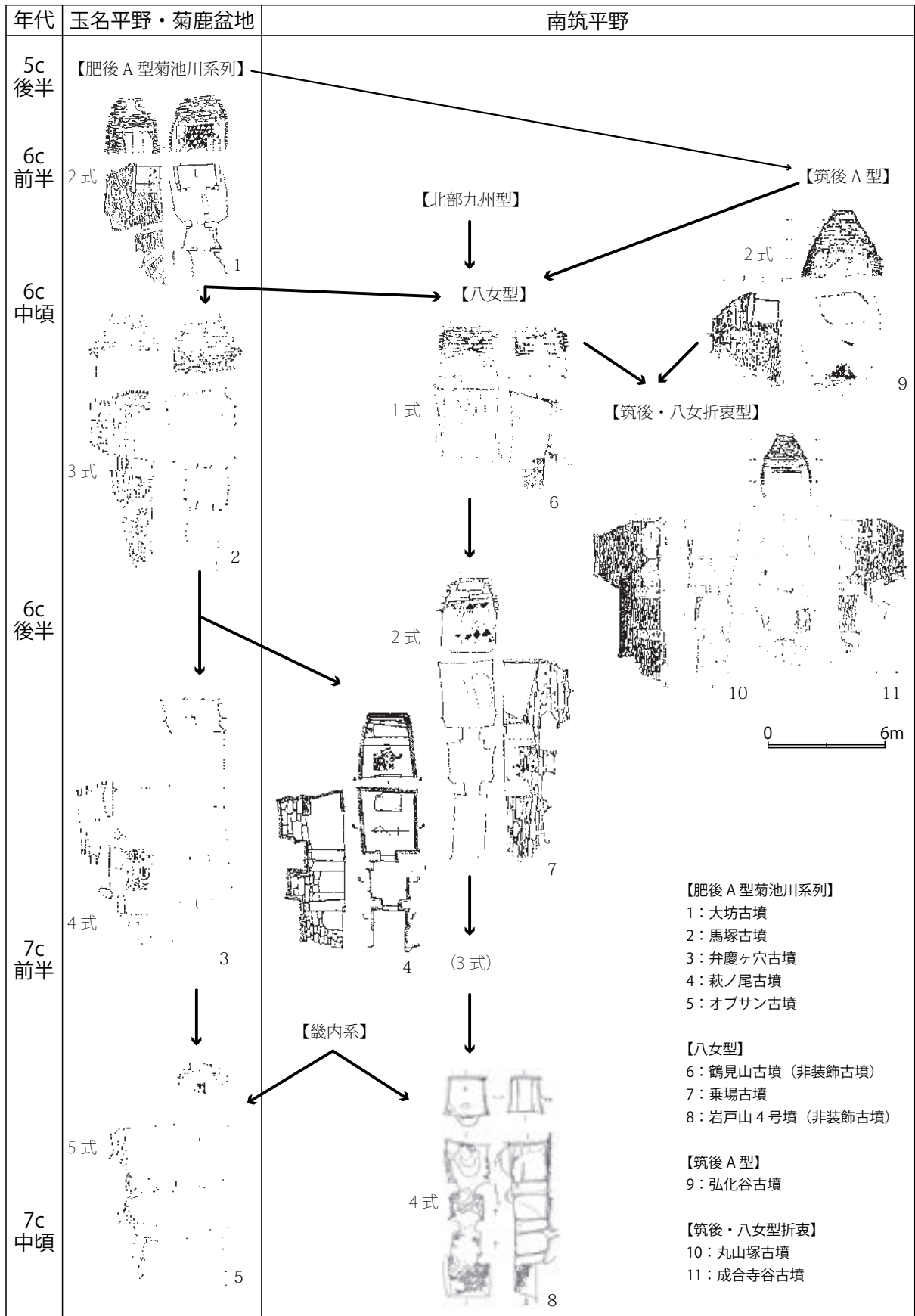


図 559 南筑平野の装飾古墳

**筑後 B 型若宮・屋形系列の特徴** 日岡古墳と同じく北部九州型要素を複合する筑後型横穴式石室墳が「古畑古墳・鳥船塚古墳・原古墳・珍敷塚古墳」の 4 古墳で、これらは墓域を共有する関係にある。4 古墳の古墳築造技術の最大の特徴は、合掌状天井を取り込んだ穹窿状天井の構築にあり、石室平面形態も西北九州で多用される長羨道を基軸とする。石室上部が失われる珍敷塚古墳も石室平面形態から見て、同様の石室立体空間を有していたと考えられる。珍敷塚古墳は筑後型腰石の多面展開で側壁を構築することから、4 古墳内では最新相に位置づけられる。また、4 古墳の装飾壁画は絵柄が似通っており、最古の原古墳は日岡古墳と同じ「同心円文」が主要題材、鳥船塚古墳以後は「船・鞆」が主要題材となっている（図 561）。

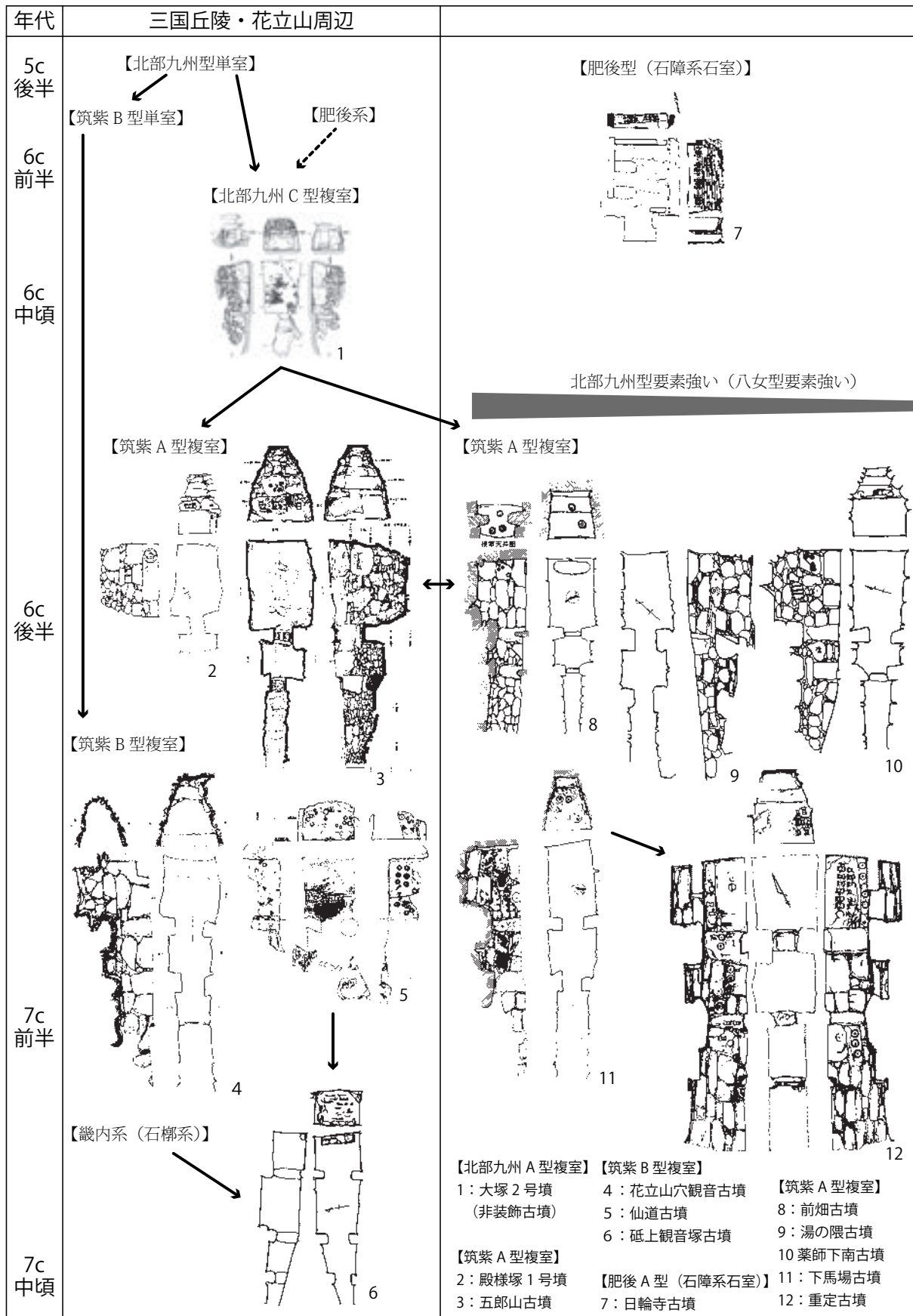
これら 4 古墳（筑後 B 型若宮・屋形系列）は最古相の古畑古墳（TK10 型式期・IV 群系 A 類埴輪樹立墳）が尾根最上方に位置し、最新相の珍敷塚古墳（TK209 型式期）が尾根最下方・平野側に位置しており、耳納山麓の東西山裾道に徐々に近づくように墓域が形成されている。

**典型的な筑後 B 型と装飾壁画** 造墓動員数が相対的に少ない古墳（直径 10 m 程度の円墳主体）では、小型石材の石室構築に長けた「天井石円錐積み架構」による穹窿状天井を多用する。このような筑後 B 型横穴式石室墳が古墳時代後期後半の筑紫平野東部で最も数多く築かれるが、下位階層墓での採用率が高くなるため、筑後 B 型横穴式石室墳に占める装飾古墳の比率は小さくなる。

**上位階層墓における筑紫型・八女型の採用** 筑後 B 型横穴式石室墳と対照的に、装飾壁画の占める比率が高いのが筑紫型横穴式石室墳である。筑紫型は脊振山系の花崗岩地帯で成立した古墳築造範型で、大型塊石の運搬・積み上げに長ける。両筑平野南部では造墓動員数を多く確保できる上位階層墓が積極的に筑紫型を採用した。筑紫型は筑後型に比して、相対的に奥壁腰石を大型化できることから、壁画キャンパスに適した石室構造であったとも評価できる。筑紫型と同じく石室立体空間が立方体に近い八女型も上位階層墓の一部（前畑古墳等）に用いられ、同地における複室Ⅱ類（二室構造）の採用契機の一つとなっている。筑紫型・八女型の序列的採用は、上位階層墓での造墓経験を通じて、下位階層墓の造墓にも影響を与えており、筑後 B 型の折衷事例（寺徳古墳等）も生じさせた。このような折衷事例を評価するためにも、墓域別（造墓集団別を射程）の相対編年構築が求められる。

**北部九州型分布のドーナツ化現象** 北部九州 A 型初期横穴式石室の分布核であった糸島周辺において、地上式石室構築でつくられた「穹窿状高天井石室群（糸島型・朝鮮半島からの第二波及）」が急速に普及し、連鎖的に福岡平野・筑紫平野等でも北部九州 C 型から「筑紫型」へと移行する。この連鎖現象は地理的傾斜を反映しており、もともと北部九州型分布の外縁域であった宗像地域・筑紫平野・響灘沿岸域・周防灘沿岸域以東に北部九州型要素が色濃く残存した（小嶋 2021・2022）。その分布はまさしく中心部を欠落した「ドーナツ」状となる。

筑紫平野では大塚 2 号墳（TK10 型式期）で複室化した北部九州 C 型が見られる他、その平面形態・合掌天井構造を継承した筑紫 A 型が古墳時代後期を通じて展開する。装飾古墳として著名な五郎山古墳（MT85 型式期）も、北部九州型を継承する筑紫 A 型に連なるため、「古風」な横穴式石室のように見える。すなわち、筑前と筑後の境界「鞍轡尽しの坂」に位置する五郎山古墳は、彩色壁画・複室構造という要素だけでなく、古墳築造技術自体も筑後側に属すると評価できる（小嶋 2024）。また、筑紫平野南方における首長墓の主要築造範型である八女型も、北部九州型の系譜に連なる存在でもある。



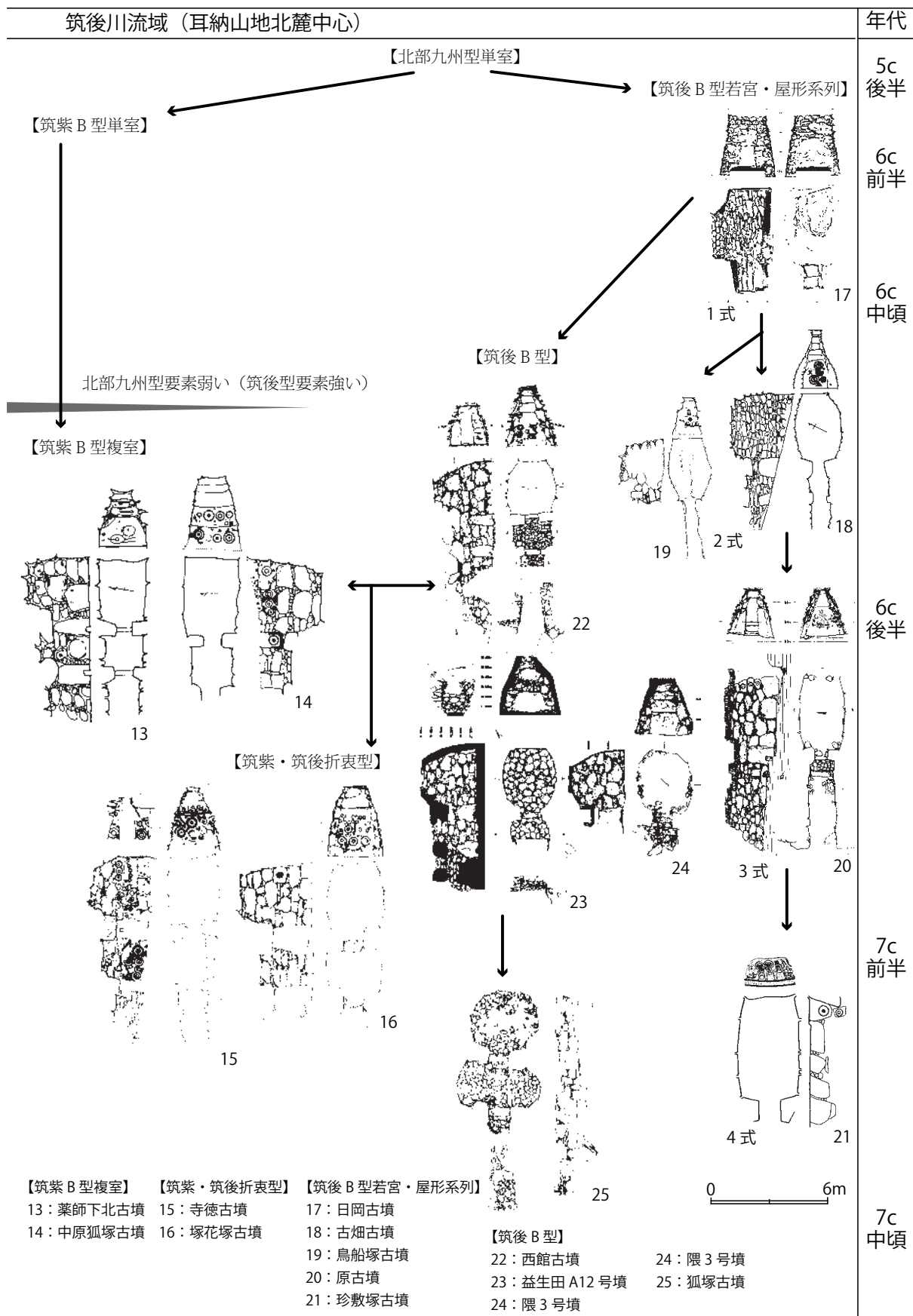
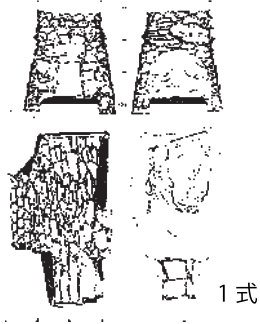


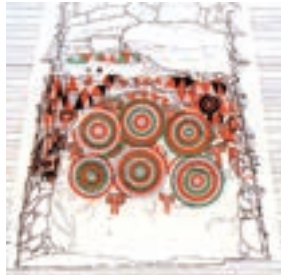
図 560 両筑平野の装飾古墳

年代

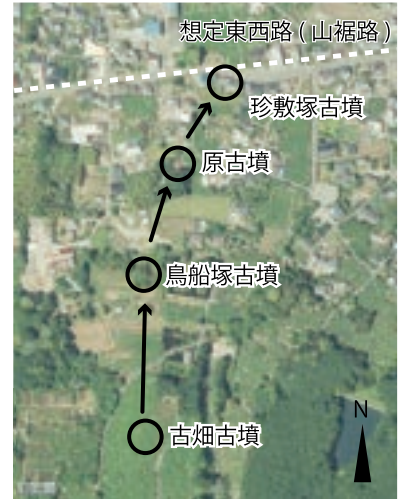
6c  
前半



主要題材：同心円文

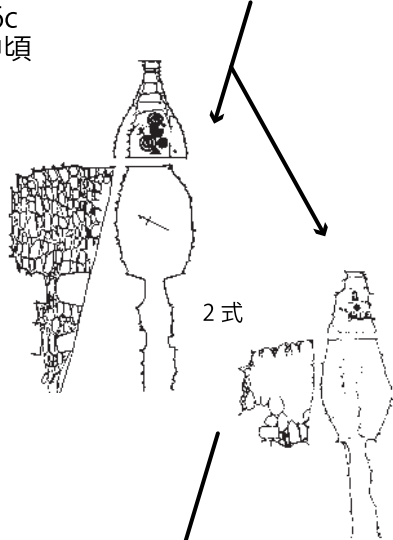


日岡古墳



屋形古墳群における上位階層墓域

6c  
中頃



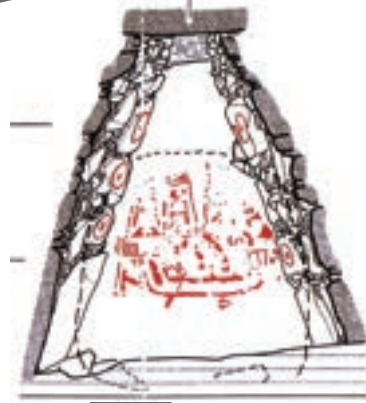
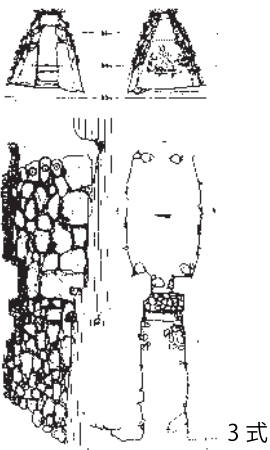
古畑古墳

主要題材：船→鞍



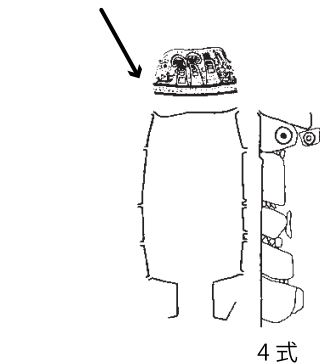
鳥船塚古墳

6c  
後半



原古墳

7c  
前半



珍敷塚古墳

図 561 筑後B型若宮・屋形系列の石室と彩色壁画の連動変遷 (石室 S=1/240, 壁画縮尺任意)

### 3) 玄界灘沿岸域

**宗像型と彩色壁画** 「北部九州型分布のドーナツ化現象」の一角を占める宗像地域では、北部九州 A 型宗像系列を基礎に高天井化した「宗像型」が古墳時代後期に排他的分布域を形成する（小嶋 2022）。宗像型では彩色壁画は客体的存在であり、首長墓である桜京古墳（TK10 型式期）の石屋形のみ認められる。津屋崎古墳群では肥後南部型埴輪が飛び地的に分布する等、航路を通じた古墳築造の相互補助関係が認められる。桜京古墳の石屋形・彩色壁画についても、有明海沿岸域からの直接導入と見てよく、宗像型横穴式石室墳の付加的要素として組み込まれる（図 562）。

**福岡平野の彩色壁画** 福岡平野においても彩色壁画は客体的存在である。石室がほぼ完存する吉武熊山古墳（MT85 型式期）も、石室構造自体は筑紫 B 型長羨道石室 II 類（羨道分割型石室）であり、彩色壁画は付加的要素である。

### 4) 遠賀川流域・響灘沿岸域

**多要素混在の桂川王塚古墳** 九州島内でも傑出した壁画系装飾をもつ王塚古墳は、装飾古墳分布域を俯瞰すると外縁域に位置する。墳丘構造を欠くが、石室構造から評価すると、北部九州 C 型と肥後 B 型（天井石円錐積み架構）を融合させた古墳である。つまり、高天井石室群である筑紫型は、糸島型・肥後 A 型・肥後 B 型等の異なる天井石架構方法の導入により成立しており、多系列的に把握する必要がある。王塚古墳を初現とする筑豊系列は、石棚付与例が多く見られる他、複室構造の採用率が高い特徴がある。王塚古墳は周辺首長墓の様相から、小正西古墳（北部九州 C 型・MT15 型式期古相）よりも新しく、火打塚古墳（筑紫型・TK10 型式期）よりも古い。墳丘表飾は一部に日置荘西町窯系埴輪を含む点もふまえると、王塚古墳の築造時期は TK10 型式古相に位置づけられる。

**境界域の装飾古墳** 鞍手地域をはじめとする遠賀川流域西部は、隣接地域である宗像地域との相互交流が盛んである。彩色壁画が著名な竹原古墳（MT85 型式期）も同地の歴史的風土が反映されており、宗像型と筑紫型筑豊系列の折衷形態をなす。古墳時代後期後半の宗像型横穴式石室墳では彩色壁画は欠落するが、石棚・複室構造という要素については遠賀川流域と共有する。装飾古墳として飛び地的に分布する一本松塚古墳（TK209 型式期）も、遠賀川流域と同様に複室構造を採用する。

### 5) 周防灘沿岸域

**彩色壁画分布の外縁域** 皆見大塚古墳（MT85 型式期古相）は、周防灘沿岸域における唯一の彩色系装飾古墳である。石室下部の石積みから筑紫 A 型複室と見てよく、彩色壁画が付加的要素であると判断できる。周防灘沿岸域は防長地域も含め、北部九州 A・C 型が色濃く残存しており、皆見大塚古墳の石室構造は同系譜に連なる。

**畿内系石室と装飾古墳** 周防灘沿岸域は彩色壁画分布の外縁域である一方で、「木の葉文」主題とする線刻壁画の分布核でもある。同文様は瀬戸内海沿岸域に展開する畿内 A 系石室と強い相関関係が認められる（小嶋 2021）。その初現となるのが首長墓である穴ヶ葉山古墳（TK209 型式期）であり、周辺群集墳でも畿内系用石（腰石縦位配置・谷積み）とともに共有される。本共有現象から見て、同族・従属関係を基軸とした分布域形成と把握できる（図 558・562）。

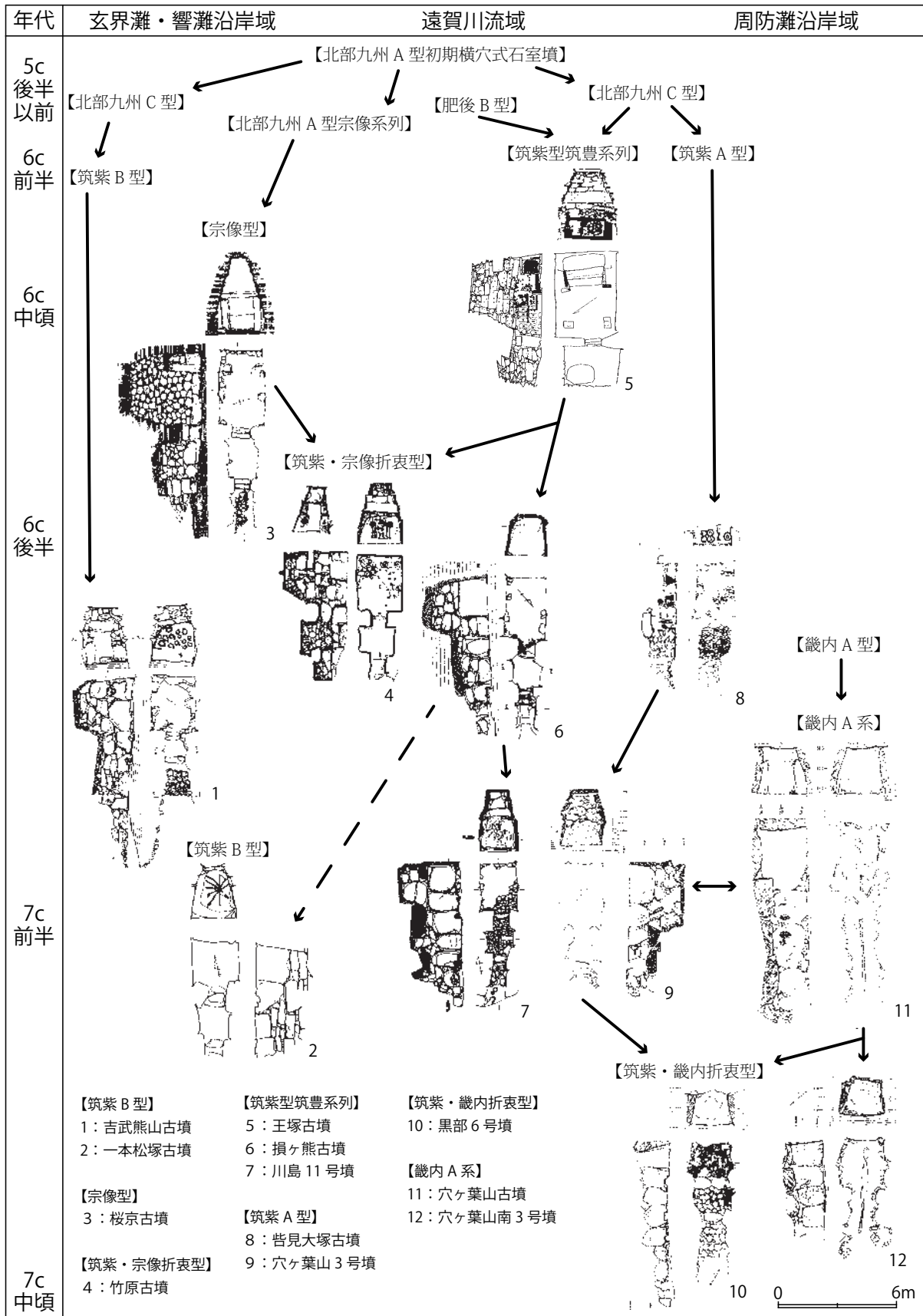


図 562 筑前・豊前の装飾古墳

## 5 古墳築造範型から見た装飾壁画の共有状況

福岡県下における装飾壁画の共有状況は、「①古墳築造範型と装飾壁画の双方を共有」する場合と、「②古墳築造範型は非共有で、装飾壁画のみを共有」する場合の二相が存在する。

筑紫平野における装飾古墳の展開は、肥後地域との関係に目を配らなければならないが、福岡県下における肥後型自体の分布は散発的である。日輪寺古墳（MT15 型式期）・萩ノ尾古墳（MT85 型式期）は、肥後型と装飾壁画の組成を保つ限られた事例と評価できる。また、周防灘沿岸域に展開する線刻壁画（木の葉文）についても、畿内 A 系石室との相関を認めてよい。同様に日岡古墳を初現とする筑後 B 型と同心円文多用彩色壁画についても、古墳築造範型と装飾壁画の双方を共有する事例と評価できる。とくに筑後 B 型内部の若宮・屋形原系列は、同族内における世代をまたいだ共有事例であり、約 100 年にわたって累代的に継承されていると評価できる。壁画作者は少人数（または一人）と判断できるため、その役割は同族内でも特定集団（血脈）に固定されていた可能性もある。

一方で、初期の彩色壁画に見られる石屋形の導入は、筑紫平野南部で展開する筑後型横穴式石室墳、宗像地域の宗像型横穴式石室墳に要素として組み込まれたものであり、古墳築造範型は非共有と判断できる。彩色壁画分布の外縁域に位置する吉武熊山古墳（筑紫 B 型・MT85 型式期）、皆見大塚古墳（筑紫 A 型・MT85 型式期）、一本松塚古墳（筑紫 A 型・TK209 型式期）も、在来の古墳築造範型に装飾壁画を組み合わせた事例と評価できる。特殊例が王塚古墳であり、肥後型そのものではないが、在来の古墳築造範型（北部九州 C 型）とも断絶が大きい。石室設計者と壁画作者（同一人物含む）がともに遠隔地移動したと考えられる。

### 参考文献

- 藏富士寛 2010 「石屋形・石棚」『先史学・考古学論究』V 龍田考古会  
藏富士寛 2011 「玄界灘沿岸」『九州島における古墳埋葬施設の多様性』第 14 回九州前方後円墳研究会  
藏富士寛 2020 「複室構造横穴式石室—九州地域の横穴式石室に対する構造的理解に向けて—」『横穴式石室の研究』同成社  
小嶋篤 2020a 「火国の領域設定と鞠智城」『鞠智城と古代社会』第 9 号 熊本県教育委員会  
小嶋篤 2020b 「筑後の横穴式石室墳—筑後型石室と八女型石室—」『福岡大学考古学論集』3 武末純一先生退職記念事業会  
小嶋篤 2021 「瀬戸内海西端における横穴式石室墳の様相」『古文化談叢』第 87 集 九州古文化研究会  
小嶋篤 2022 「宗像型横穴式石室墳の研究—石室構築と墳丘構築の調査視点—」『九州歴史資料館研究論集』47 九州歴史資料館  
小嶋篤 2023a 「九州の横穴式石室墳」『令和 5 年度九州考古学総会研究発表資料集』九州考古学会  
小嶋篤 2023b 「筑紫君の墓域と開発」『九州歴史資料館研究論集』48 九州歴史資料館  
小嶋篤 2024 「筑紫君と「鞍鞆尽しの坂」」『九州歴史資料館研究論集』49 九州歴史資料館  
重藤輝行 1999 「北部九州における横穴式石室の展開」『九州における横穴式石室の導入と展開』第 2 回九州前方後円墳研究会  
重藤輝行 2020 「九州における横穴式石室の展開—編年・地域性・階層性の概観—」『横穴式石室の研究』同成社  
柳澤一男 2022 『装飾古墳ガイドブック 九州の装飾古墳』新泉社  
吉村靖徳 2001 「石棚の系譜と伝播に関する試考」『古文化談叢』第 47 集 九州古文化研究会  
和田晴吾 1989 「墳墓と葬送」『古墳時代の王と民衆』古代史復元 6 講談社

## 4. 装飾古墳関連データ

### 1) 写真

装飾古墳が社会的ブームになるきっかけとなったのは、平凡社 1964.2『太陽』「特集 日本の原始絵画」にて、複数枚のワイドカラーグラビアによる装飾古墳写真が詳細な解説とともに紹介されたことによる。写真を撮影したのはフリーランスのカメラマンとして著名な藤本四八である。彼は昭和 37 年（1962）10 月から 2 年間にわたって装飾古墳の写真撮影にあたり、同年 10 月には小林行雄の解説・論考を加え、平凡社から『装飾古墳』として刊行された。同書の刊行が火付け役となり、その後、昭和 30 年代後半から 40 年代にかけて、大判のカラーグラビアに解説を加えた装飾古墳の書籍が次々に刊行された。藤本四八が撮影した装飾古墳写真フィルムの一部は、現在、長野県飯田市美術博物館が所蔵する。今回の調査にあたり、飯田市美術博物館から福岡県内装飾古墳写真フィルム一覧表の提供を受け、表 3 に掲載した。

装飾古墳が社会的に広く知られるようになった 1960 年代後半以降、各地の装飾古墳を撮影する写真家も増えていった。当時、(株)テレビ西日本(TNC)に勤務していた榊晃弘は 1968 年頃以降、撮影許可が得られた装飾古墳の写真撮影を重ねた。その時に撮影された写真は朝日新聞社 1972『装飾古墳』（森貞次郎編集）や、泰流社 1977『装飾古墳』により書籍として刊行された。

装飾古墳が認知度を高めていく一方、装飾古墳の劣化や置かれている保存環境もまた、喫緊の課題として急速に人々の関心を集めていった。昭和 48（1973）年 4 月には任意の民間団体「装飾古墳を守る会」（会長：鏡山猛、昭和 52 年度より副会長：岡崎敬、昭和 60 年度より会長：小田富士雄、事務局長：榊晃弘）が発足し、官学を巻き込んだ保存運動を推進していった。昭和 49 年には文化庁・福岡県に対して王塚古墳学術調査の成果の公表と装飾古墳に対する保護措置の実施を要請する要望書を提出、同年 12 月には福岡県内装飾古墳の実態調査成果をまとめて『装飾古墳白書 福岡県下における保存の現状』を刊行、昭和 53 年 10 月には『装飾古墳白書 熊本県下における保存の現状』を刊行した。また、昭和 57 年 1 月には装飾古墳を紹介するスライド構成『装飾古墳の世界』（計 50 点、解説：小田富士雄、写真撮影：榊晃弘）を制作した。装飾古墳を守る会が行政に与えた影響は大きく、会の積極的活動が一つの契機となって県下の装飾古墳保存施設の設置が推進された一面もある。

今回の調査では、写真撮影当時の状況や装飾古墳を守る会の活動内容を榊晃弘から聞き取ることができた。会の活動は同会が発行した機関紙「船と太陽」第 1～37 号に詳しい。また今回、榊晃弘が撮影し、その後デジタル化を行った写真リストの提供を受け、表 4 に掲載した。

なお、朝日新聞記者の富重安雄が昭和 30～40 年代に撮影した装飾古墳写真フィルムについては現在、北九州市立自然史・歴史博物館が寄贈を受け、保管している。

装飾古墳保護に対する社会的背景もあり、九州歴史資料館では 1975 年以降、1985 年頃までを中心に、劣化の進行が懸念された装飾古墳の記録作成を目的として福岡県内外の装飾古墳の写真撮影を進めた（撮影者は石丸洋）。また、装飾古墳の維持・管理については当該市町村が主体となって進めているが、それらに関する助言・支援や新たに発見された場合の評価、保護に関する連絡調整、装飾古墳に関する広域的な情報共有等については、九州歴史資料館がその役割を担ってきた。九州歴史資料館では、日常的な維持・管理や新たに発見された装飾古墳の状況確認等に際し

て撮影した記録写真を保管している（撮影者は石山勲、他）。

撮影写真はその時点での状態を示す重要な記録であり、九州歴史資料館ではその写真を保管し、出版物への掲載や写真パネルの作成を行うなど活用を図ってきた。九州歴史資料館が所蔵する福岡県内装飾古墳写真については、表 5 に掲載した。また、撮影写真をもとに九州歴史資料館・九州国立博物館が作成した写真パネルについては、表 6 に掲載した。なお、両館が作成し所蔵する写真パネルには他県の装飾古墳も含むため、それらも併せて掲載した。

全国の装飾古墳に関する調査研究等を担う熊本県立装飾古墳館では、奈良文化財研究所の牛嶋茂（当時）に委託して、平成 10（1998）～13（2001）年度に福岡県内の各装飾古墳の写真撮影を実施した。その時に撮影された 4×5 カラーリバーサル・モノクロフィルムは現在、熊本県立装飾古墳館にて保管されている。今回の調査にあたり、福岡県内装飾古墳撮影写真一覧表の提供を受け、表 7 に掲載した。

## 2) 模写

カラー写真撮影技術が普及する以前の昭和 30 年、文化財保護委員会（現、文化庁）では東京藝術大学の日下八光に国内装飾古墳の模写を委嘱し、退色や損壊が危惧されていた装飾古墳の記録作成に努めた。日下八光は昭和 30 年度から王塚古墳の模写に着手し、以降、福岡県内外の装飾古墳の模写を実施した。

現在、日下八光が製作した模写絵（現状模写・復元模写）は国立歴史民俗博物館が所蔵し、概要が公開されている。その一覧表を表 8 に掲載した。

伊勢幸平は明治 37 年（1904）福岡市生まれの画家である。東京美術学校（現、東京藝術大学美術学部）西洋画本科を昭和 3 年に卒業後、昭和 10 年（1935）福岡縣学務部社寺兵事課の委嘱を受けて藤野不二男とともに王塚古墳石室内の装飾を模写したことで知られる。描かれた模写は、福岡縣 1935『福岡縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書 第十一輯 筑前王塚古墳』にカラー図版として用いられた。現在、伊勢幸平・藤野不二男による王塚古墳の模写絵は東京藝術大学大学美術館が多くを所蔵する他、桂川町所蔵品がある。これらを表 9 に掲載した。

## 3) デジタルデータ

東京大学大学院池内克史研究室では、コンピュータセンシング技術の進歩に伴い文化遺産をデジタル化してゆこうとする試みに基づき、九州にある装飾古墳の形や色をセンサーを使って記録し、コンピュータで処理するデジタル化プロジェクトを実施した。この時にデジタル化されたデータは e-Heritage と呼ばれている。

プロジェクトの第一の目的は九州にある装飾古墳の e-Heritage としての保存で、写真による色彩情報記録だけでなく形状情報の記録作成が実施された。第二の目的は精密なデジタル映像の制作で、一般的な公開が制限されている装飾古墳に対し、鑑賞の機会を増やすための AR コンテンツの製作が行われた。第三の目的は得られた e-Heritage を用いて精密な解析を行うことで、現地では困難な精密解析を e-Heritage として持ち帰り、コンピュータを使用して拡大・縮小や画像処理を施すことにより新たな情報を入手することが試みられた。

池内研究室が実施した福岡県内装飾古墳の調査を表 10 に掲載した。これらの調査内容について

ては、東京書籍 2015『九州装飾古墳のすべて』に紹介されており、また今回の調査に際して東京大学大学院大石岳史研究室の協力を得て e-Heritage の画像を提供いただき本書に掲載した。

九州国立博物館設置時、東京国立博物館内に設置された九州国立博物館（仮称）設立準備室の装飾古墳データベース作成委員会（委員長：三輪嘉六 九州国立博物館（仮称）設立準備室長）が主体となり、九州歴史資料館（主として石丸洋撮影）・福岡県文化財保護課が所蔵する装飾古墳写真真原板をもとに、平成 14 年に写真のデジタル化が実施された。

作成ファイルは管理・活用の利便性を測るために以下のとおり 12 桁の半角英数文字によるファイル名が与えられている。ex) 九博 (Q) ・DB 名 (001) ・250dpi (d) ・個別写真番号 (00001) ・写真サイズ (a) ・第二マスター (2) ・圧縮画像 (.jpg)

画像サイズは a: (72dpi 相当)、b: (125dpi 相当)、c: (200dpi 相当)、d: (250dpi 相当)、e: (300dpi 相当)、f: (400dpi 相当)、g: (500dpi 相当)、h: (1000dpi 相当)、i: (2000dpi 相当)、j: (3000dpi 相当)。個別写真番号は 5 桁数字によって表示され、入力写真リスト番号に対応する。

画像データは 11 桁の半角英数文字によって以下のとおりボリューム名が与えられている。ex) 北部九州装飾古墳データベース (DWPNK) ・第二マスター画像 (B) 00001 番 (00001)

ファイル識別は A (ノーマル第一マスター) ・B (第二マスター及び非圧縮データ) ・C (圧縮データ) ・D (復元第一マスター)。

DWPNK は The Database of the Wall Paintings of the Decorative Ancient Tombs in Northern Kyusyu, Japan の正式略称である。5 桁数字は通し番号で設定したものである。

データについては現在、九州国立博物館・九州歴史資料館が所蔵する。一覧表を表 11 に掲載した。

近年のデジタル技術の進歩により、デジタル写真撮影による三次元写真測量が比較的容易に実現できるようになった。福岡県の装飾古墳に関しては、科研費（基盤研究 (A) 「VR 画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」(1922026) 2007～2010 年 研究代表者：河野一隆にて先駆的に実践された経緯があり、今回、当該研究の共同研究者である (株) とっぺんからデジタルデータの提供を受け、本書に正射投影画像を掲載した。また、今回の調査でも同様の手法を用いて新たに幾つかの装飾古墳の三次元計測を実施した。デジタル写真撮影による三次元写真測量を実施した福岡県内の装飾古墳については、表 12 に掲載した。なお、朝倉市湯の隈古墳・狐塚古墳、うきは市安富古墳については近年、藤沢敦・田尻義了らによる基盤研究 (A) 『石材構築文化財の保全のための 3 次元デジタルアーカイブの標準化の研究』2020～2024 年度でも SfM 法による高精細三次元計測が実施されている。

#### 4) 顔料分析

彩色系装飾古墳の中には、肉眼観察による色調の所見に加えて、自然科学的手法を用いた顔料分析が行われてきた経緯がある。最も早い事例としては小松利三郎が大正 5 年 (1916) に中原狐塚古墳で実施した成分分析があり、戦後では山崎一雄が昭和 24・25 年に調査を実施し 26 年に発表した、装飾古墳顔料の化学的分析成果がある。その後、国立歴史民俗博物館研究報告に掲載された永嶋正春の報告や、朽津信明による従来の「青」を「灰」と呼ぶ方が妥当とする報告などの新知見が加えられている。それらの科学的所見も含め、これまでの彩色系装飾古墳等の色調に関する所見を表 13・14 に掲載した。また、併せて自然科学的分析所見の出典を記載した。

表3 藤本四八撮影 装飾古墳写真フィルム一覧（長野県飯田市美術博物館所蔵 福岡県内装飾古墳のみ）

	原番号	ネガ番号枝	名称	種類
1	18-1	338115	竹原古墳「朱雀の壁画」(前室奥壁) 2A	4×5カラーリバーサル
2	18-2	147.256	竹原古墳「馬を引く人などの彩画」(後室奥壁 細部)A	4×5カラーリバーサル
3	18-3	985	竹原古墳「馬を引く人などの彩画」(後室奥壁 細部)B	4×5カラーリバーサル
4	18-4	1572	竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁)1A	4×5カラーリバーサル
5	19-1	147.256	日ノ岡古墳「幾何学的文様の彩画」(前壁)B	4×5カラーリバーサル
6	19-2	147.256	日ノ岡古墳「盾と同心円の彩画」(通路左側)	4×5カラーリバーサル
7	19-3	147.256	日ノ岡古墳「連続三角文の彩画」(奥壁上部)	4×5カラーリバーサル
8	19-4	147.256	日ノ岡古墳「同心円の彩画」(奥壁)	4×5カラーリバーサル
9	20-1	862	珍敷塚古墳「月をあらわす蟾蜍の彩画」(奥壁 細部)A	4×5カラーリバーサル
10	20-2	147.256	珍敷塚古墳「月をあらわす蟾蜍の彩画」(奥壁 細部)B	4×5カラーリバーサル
11	20-3	905	珍敷塚古墳「月をあらわす蟾蜍の彩画」(奥壁 細部)C	4×5カラーリバーサル
12	20-4	862	珍敷塚古墳A	4×5カラーリバーサル
13	21-1	147.256	珍敷塚古墳「鳥船と靱などの彩画」(奥壁)A	4×5カラーリバーサル
14	21-2	1572	古畑古墳「同心円の彩画」(奥壁)C	4×5カラーリバーサル
15	21-3	142.75	珍敷塚古墳「太陽と鳥船の彩画」(奥壁 細部)C	4×5カラーリバーサル
16	21-4	862	珍敷塚古墳「太陽と鳥船の彩画」(奥壁 細部)A	4×5カラーリバーサル
17	22-1		珍敷塚古墳「太陽と鳥船の彩画」(奥壁 細部)D	4×5カラーリバーサル
18	22-2	862	珍敷塚古墳「太陽と鳥船の彩画」(奥壁 細部)B	4×5カラーリバーサル
19	22-4	142.75	珍敷塚古墳B	4×5カラーリバーサル
20	24A-1		王塚古墳「彩画のある石屋形」(後室奥壁) 2C	4×5カラーリバーサル
21	24A-2	453	王塚古墳「壁面をおおいつくす彩画」(後室前壁)A	4×5カラーリバーサル
22	24B-1	147.256	珍敷塚古墳「鳥船と靱などの彩画」(奥壁)C	4×5カラーリバーサル
23	24B-2		珍敷塚古墳「鳥船と靱などの彩画」(奥壁)D	4×5カラーリバーサル
24	24B-3	862	珍敷塚古墳「鳥船と靱などの彩画」(奥壁)B	4×5カラーリバーサル
25	24B-4	142.75	珍敷塚古墳「鳥船と靱などの彩画」(奥壁)E	4×5カラーリバーサル
26	25-1	322	王塚古墳「鏡」A	4×5カラーリバーサル
27	25-2	322	王塚古墳「鏡」B	4×5カラーリバーサル
28	25-3	322	王塚古墳「出土品」1	4×5カラーリバーサル
29	25-4	322	王塚古墳「出土品」2	4×5カラーリバーサル
30	26-1	147.256	王塚古墳「騎馬像の彩画」(前壁奥壁左石)A	4×5カラーリバーサル
31	26-2	147.256	王塚古墳「蕨手文の彩画」(前室奥壁上部) 1	4×5カラーリバーサル
32	26-3	147.256	王塚古墳「蕨手文の彩画」(前室奥壁上部) 2B	4×5カラーリバーサル
33	26-4	147.256	王塚古墳「壁面をおおいつくす彩画」(後室前壁)B	4×5カラーリバーサル
34	28-1	147.256	王塚古墳「彩画のある石屋形」(後室奥壁) 1	4×5カラーリバーサル
35	28-2	147.256	王塚古墳「靱と連続三角文の彩画」(後室右壁部分)	4×5カラーリバーサル
36	28-3	147.256	王塚古墳「彩画のある石屋形」(後室奥壁) 2D	4×5カラーリバーサル
37	28-4	147.256	王塚古墳「蕨手文の彩画」(前室奥壁上部) 2A	4×5カラーリバーサル
38	29-1	45	王塚古墳「壁面をおおいつくす彩画」(後室前壁)C	4×5カラーリバーサル

表3 藤本四八撮影 装飾古墳写真フィルム一覧（長野県飯田市美術博物館所蔵 福岡県内装飾古墳のみ）

	原番号	ネガ番号枝	名称	種類
39	29-2	147.256	王塚古墳1	4×5カラーリバーサル
40	29-3	147.256	王塚古墳「彩画のある石屋形」(後室奥壁) 2A	4×5カラーリバーサル
41	29-4	147.256	王塚古墳「右側の灯明台石」	4×5カラーリバーサル
42	31-1		竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 1C	4×5カラーリバーサル
43	31-2	147.256	竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 1D	4×5カラーリバーサル
44	31-3		竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 2F	4×5カラーリバーサル
45	31-4		竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 2B	4×5カラーリバーサル
46	32-1	81503	竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 2E	4×5カラーリバーサル
47	32-2	905	竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 2C	4×5カラーリバーサル
48	32-3	303.164	竹原古墳「出土品」1	4×5カラーリバーサル
49	32-4	303.164	竹原古墳「出土品」2	4×5カラーリバーサル
50	34-1	147.256	重定古墳「靱の彩画」(後室右壁 部分)	4×5カラーリバーサル
51	34-2	147.256	楠名重定	4×5カラーリバーサル
52	34-3		竹原古墳「朱雀の彩画」(前室奥壁) 1B	4×5カラーリバーサル
53	35-1	1572	王塚古墳「騎馬像の彩画」(前室奥壁左右)B	4×5カラーリバーサル
54	35-3	1572	王塚古墳「彩画のある石屋形」(後室奥壁) 2B	4×5カラーリバーサル
55	35-4	147.256	五郎山古墳「前室から見た奥壁の細部」	4×5カラーリバーサル
56	37-1	147.256	五郎山古墳「様々な形象の壁画」(後室奥壁 下部)	4×5カラーリバーサル
57	37-2	147.256	五郎山古墳「家屋の彩画」(後室奥壁 細部)A	4×5カラーリバーサル
58	37-3	147.256	五郎山古墳「様々な形象の彩画」(後室奥壁)	4×5カラーリバーサル
59	37-4	147.256	五郎山古墳「家屋の彩画」(後室奥壁 細部)B	4×5カラーリバーサル

表4 榊晃弘撮影 装飾古墳写真一覧（デジタル化分 福岡県内装飾古墳のみ）

番号	報告番号	名称	所在地	種別	点数
1	3	五郎山古墳	筑紫野市原田	彩色	7
2	5	桜京古墳	宗像市牟田尻	彩色・線刻	3
3	21	竹原古墳	宮若市竹原	彩色	7
4	32	浦山古墳	久留米市上津町	浮彫	2
5	33	下馬場古墳	久留米市草野町吉木	彩色	2
6	46	珍敷塚古墳	うきは市吉井町富永	彩色	4
7	48	鳥船塚古墳	うきは市吉井町富永	彩色	1
8	49	古畑古墳	うきは市吉井町富永	彩色	1
9	51	日岡古墳	うきは市吉井町若宮	彩色	12
10	53	塚花塚古墳	うきは市浮羽町朝田	彩色	2
11	55	萩ノ尾古墳	大牟田市東萩尾町	彩色	2
12	62	石人山古墳	八女郡広川町一條・筑後市一条	彫刻・線刻	5
13	69	王塚古墳	嘉穂郡桂川町寿命	彩色	16

表5 九州歴史資料館所蔵 装飾古墳写真フィルム一覧

	古墳名	4×5カラー リバーサル (1975～85年)	35mmカラー リバーサル (1975～85年)	35mmカラー リバーサル 管理記録、他 (1980～2005年)	35mmカラー リバーサル (貸出・発表用 複写)	その他 (4×5カラーネガ ブローニー、紙焼)	合計	
1	吉武熊山古墳(吉武K7号墳)				1		1	
2	浦江1号墳	6	29	2	5		42	
参1	東光寺剣塚古墳	5	2				7	
3	五郎山古墳	45	66	36	44	2	193	
4	殿様塚古墳群1号墳			25	4		29	
参7	上の浦古墳		38				38	
5	桜京古墳	7	6	8	10	5	36	
参8	久戸10号墳	11	25			5	41	
参8	久戸11号墳	10				9	19	
6	権現塚古墳				3		3	
7	丸ノ口古墳群V群5号墳			2	3		5	
8	丸ノ口古墳群VI群2号墳			8	3		11	
9	日明一本松塚古墳	6	8	1	3		18	
10	相坂14号横穴墓				1		1	
14	水町A13-I号横穴墓			4	5		9	
15	水町B18-I号横穴墓				1		1	
16	垣生羅漢山ⅢA-1号横穴墓		9	8	2		19	
20	瀬戸14号横穴墓			2			2	
21	竹原古墳	76	94	350	53	41	614	
22	損ヶ熊古墳	6	19	3	1		29	
23	古月2号横穴		18		1		19	
25	古月横穴群9号横穴	17	26	26	6	7	82	
27	観音塚古墳	6	27	17	7	3	60	
28	仙道古墳	24	48	14	13	9	108	
29	湯の隈古墳(宮地獄古墳)	4	14	3	2		23	
30	狐塚古墳	6	22	2	2		32	
31	日輪寺古墳	15	10	32	33	13	103	
32	浦山古墳	23	30	2	14	3	72	
33	下馬場古墳	10	35	1	13	2	61	
34	前畑古墳		24		9	1	34	
35	薬師下南古墳				1		1	
36	薬師下北古墳				1		1	
37	隈3号墳				1		1	
38	中原狐塚古墳			23	1		24	
39	寺徳古墳	18	36	73	11	11	149	
40	益永支群9号墳(益永古墳)				2		2	
	益生田古墳				1		1	
44	西館古墳	15	87		11		113	
45	大塚8号墳石材(清長橋古墳)				3		3	
46	珍敷塚古墳	27	28	52	20	39	166	
47	原古墳	6	63	116	21	11	217	
48	鳥船塚古墳	12	28	35	7	4	86	
49	古畑古墳	6	8	17	12	7	50	
51	日岡古墳	68	69	24	41	31	233	
52	重定古墳	44	87	55	29	12	227	
53	塚花塚古墳	26	76	46	10	27	185	
54	盾古墳(一ノ瀬10号墳)			3			3	
55	萩ノ尾古墳	8	8	43	20	20	99	
56	倉永古墳	8	12	18	5		43	
58	丸山塚古墳	21	52	9	14	10	106	
59	乗場古墳	19	37	37	10	8	111	
61	成合寺谷古墳	12	19	34	4		69	
参6	石神山古墳			5			5	
62	石人山古墳	8	41	8	18	5	80	
63	弘化谷古墳	17	51	71	15		154	
64	川島古墳(川島11号墳)	7	53	8	6		74	
65	城腰1号横穴墓	3	32	3	2		40	
69	王塚古墳	66	228	613	92	25	1024	
70	皆見大塚古墳	九州歴史資料館2009・2011年度調査時に4×5モノクロ・カラーリバーサル、35mmモノクロ・カラーリバーサル、デジタル写真撮影、調査後は九州歴史資料館に保管						
72	黒部古墳群6号墳				2		2	
73	穴ヶ葉山古墳	28	97	1	11	7	144	
76	百留横穴墓群1号墓	4	15	15	1		35	
78	山田1号墳	2	12	1	7		22	
	合計	702	1689	1856	618	317	5182	

表6 九州歴史資料館・九州国立博物館所蔵 装飾古墳写真パネル一覧

九州歴史資料館		九州国立博物館	
タイトル	サイズ	タイトル	サイズ
1 吉武熊山古墳(吉武K7号墳)	高106×幅126		
2 五郎山古墳(奥壁)	高181×幅227	1 五郎山古墳奥壁	高127×幅158
3 五郎山古墳(奥壁)	高108×幅135	2 五郎山古墳船	高102×幅128
4 桜京古墳	高85×幅137		
5 一本松塚古墳	高106×幅126		
6 竹原古墳(奥壁)	高108×幅134	3 竹原古墳壁	高158×幅198
7 竹原古墳(奥壁)	高166×幅206		
8 竹原古墳(朱雀)	高106×幅86	4 竹原古墳朱雀	高127×幅102
9 竹原古墳(玄武)	高106×幅86	5 竹原古墳玄武	高さ127×幅102
10 古月9号横穴	高107×幅127		
11 下馬場古墳	高109×幅181		
12 前畑古墳	高107×幅127		
13 浦山古墳	高133×幅106		
14 日輪寺古墳	高107×幅134		
15 寺徳古墳	高177×幅156		
16 珍敷塚古墳	高106×幅141	6 珍敷塚古墳奥壁	高158×幅198
17 原古墳	高107×幅117	7 原古墳奥壁	高127×幅158
18 鳥船塚古墳	高108×幅121	8 鳥船塚古墳奥壁	高127×幅158
19 古畑古墳	高161×幅131	9 古畑古墳奥壁	高158×幅127
20 日岡古墳(奥壁)	高108×幅134	10 日岡古墳奥壁	高158×幅198
21 日岡古墳(奥壁)	高148×幅186	11 日岡古墳玄門(中から)	高128×幅102
22 重定古墳	高137×幅187	12 重定古墳 側壁	高127×幅158
23 塚花塚古墳	高210×幅200	13 塚花塚古墳奥壁	高158×幅127
24 仙道古墳	高107×幅127		
25 狐塚古墳	高80×幅110		
26 萩ノ尾古墳	高132×幅165	14 萩ノ尾古墳奥壁	高127×幅158
27 倉永古墳	高125×幅110		
28 丸山塚古墳	高127×幅167		
29 乗場古墳	高151×幅191		
30 石人山古墳	高206×幅186	15 石人山古墳石棺	高158×幅127
31 弘化谷古墳	高88×幅131		
32 弘化谷古墳	高103×幅135		
33 川島11号墳	高108×幅134		
34 王塚古墳(玄門外から)	高130×幅160	16 王塚古墳玄門(外から)	高127×幅158
		17 王塚古墳玄門(中から)	高127×幅102
		18 王塚古墳双脚輪状文	高127×幅102
35 穴ヶ葉山古墳	高86×幅106		
36 百留横穴墓群1号墓	高85×幅106		
37 土器田横穴	高108×幅130	19 千金甲1号墳	高127×幅158
38 鬼塚古墳	高110×幅130	20 釜尾古墳 奥壁	高127×幅158
39 西隈古墳	高107×幅117	21 井寺古墳 石障	高102×幅127
40 穴観音古墳	高106×幅131	22 弁慶ヶ穴古墳 船・馬	高102×幅127
41 ガランドヤ1号墳	高111×幅130	23 ガランドヤ1号墳 奥壁	高158×幅127
42 法恩寺3号墳	高110×幅130	24 チブサン古墳 石屋形	高さ127×幅158
43 千代丸古墳	高60×幅110	25 チブサン古墳 装飾拡大	高さ127×幅102
44 田代太田古墳	高165×幅196	26 田代太田古墳 奥壁	高127×幅158
		27 鍋田横穴 外壁	高127×幅158
		28 玖珠鬼塚古墳 奥壁	高158×幅127

表7 熊本県立装飾古墳館撮影・所蔵 福岡県内装飾古墳写真一覧

	古墳名	撮影日	番号	タイトル	フィルム	カット数
1	五郎山古墳	00.5.15	318-01～09	古墳外観	4×5カラーリバーサル	2
		00.5.15	318-01～09	石室内部	4×5カラーリバーサル	7
		00.5.15	318-01～09	石室内部	4×5モノクロ	4
2	仙道古墳	01.5.24	317-01～06	整備後古墳外観	4×5カラーリバーサル	1
		01.5.24	317-01～06	石室内部	4×5カラーリバーサル	5
		01.5.24	317-01～06	整備後古墳外観	4×5カラーリバーサル	1
		01.5.24	317-01～06	石室内部	4×5カラーリバーサル	3
3	狐塚古墳	01.5.17	303-01～10	石室内部	4×5カラーリバーサル	11
		01.5.17	303-01～03・05～10	石室内部	4×5カラーリバーサル	9
4	日輪寺古墳	00.5.21	301-01～05	石室上面	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.21	301-01～05	石室内部	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.21	301-01～05	石室上面	4×5モノクロ	1
		00.5.21	301-01～05	石室内部	4×5モノクロ	1
5	浦山古墳	00.5.21	300-01～03	家形石棺正面	4×5カラーリバーサル	2
		00.5.21	300-01～03	家形石棺内部	4×5カラーリバーサル	5
		00.5.21	300-01～06	家形石棺正面	4×5モノクロ	1
		00.5.21	300-01～06	家形石棺内部	4×5モノクロ	5
6	下馬場古墳	01.5.22	302-01～15	石室内部	4×5カラーリバーサル	15
		01.5.22	302-01～05・07	石室内部	4×5モノクロ	6
7	隈3号墳	00.5.17	309-01～05	古墳外観	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.17	309-01～05	石室入口	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.17	309-01～05	石室内部	4×5カラーリバーサル	3
		00.5.17	309-01～05	石室内部	4×5モノクロ	2
8	寺徳古墳	00.5.17	304-01～10	石室内部	4×5カラーリバーサル	10
		00.5.17	304-01・02・05	石室内部	4×5モノクロ	3
9	珍敷塚古墳	00.5.23	306-01	奥壁	4×5カラーリバーサル	3
10	原古墳	00.5.22	305-01～03	古墳・覆屋外観	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.22	305-01～03	石室内部	4×5カラーリバーサル	2
		00.5.22	305-01～03	古墳・覆屋外観	4×5モノクロ	1
		00.5.22	305-01～03	石室内部	4×5モノクロ	2
11	鳥船塚古墳	00.5.22	307-01	奥壁	4×5カラーリバーサル	1
12	古畑古墳	00.5.24	308-01～06	古墳からの景観	4×5カラーリバーサル	2
		00.5.24	308-01～06	石室入口	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.24	308-01～06	石室内部	4×5カラーリバーサル	3
		00.5.24	308-01～06	古墳からの景観	4×5モノクロ	1
		00.5.24	308-01～06	石室入口	4×5モノクロ	1
		00.5.24	308-01～06	石室内部	4×5モノクロ	2
13	日岡古墳	00.5.23	310-01～21	石室内部	4×5カラーリバーサル	21
		00.5.23	310-01～21	石室内部	4×5モノクロ	6
14	重定古墳	00.5.16	311-01～08	古墳外観	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.16	311-01～08	石室内部	4×5カラーリバーサル	12
		00.5.16	311-01～08	古墳外観	4×5モノクロ	1
		00.5.16	311-01～08	石室内部	4×5モノクロ	4
15	塚花塚古墳	00.5.16	312-01～07	古墳外観	4×5カラーリバーサル	1
		00.5.16	312-01～07	石室内部	4×5カラーリバーサル	8
		00.5.16	312-01～07	古墳外観	4×5モノクロ	1
		00.5.16	312-01～07	石室内部	4×5モノクロ	3
16	萩ノ尾古墳	98.10.12	315-01～04	石室内部	4×5カラーリバーサル	4
		98.10.12	315-01～04	石室内部	4×5モノクロ	4
17	(参考) 石櫃山古墳 2号石棺	00.12.2	316-01～04	石棺	4×5カラーリバーサル	1
18	乗場古墳	01.5.25	314-01～10	石室内部	4×5カラーリバーサル	10
		01.5.25	314-01～10	石室内部	4×5モノクロ	5
19	(参考) 石神山古墳	00.12.2	316-01～04	石人	4×5カラーリバーサル	3
		00.12.2	316-01～04	石人	4×5モノクロ	1
20	石人山古墳	01.5.18	313-01～06	覆屋遠景	4×5カラーリバーサル	1
		01.5.18	313-01～06	石棺	4×5カラーリバーサル	4
		01.5.18	313-01～06	石人	4×5カラーリバーサル	2
		01.5.18	313-01～06	覆屋遠景	4×5モノクロ	1
			313-01～06	石棺	4×5モノクロ	2
		01.5.18	313-01～06	石人	4×5モノクロ	2

表8 日下八光福岡県内装飾古墳模写絵一覧（国立歴史民俗博物館所蔵）

	番号	資料名	サイズ	材質	
1	A-216-1-1	王塚古墳 後室石屋形架石裏面 現状模写	縦81.00 cm 横211.00 cm	模造：紙	
2	A-216-1-2	王塚古墳 後室石屋形右支柱 現状模写	縦104.00 cm 横143.00 cm	模造：紙	
3	A-216-1-3	王塚古墳 後室右屏風石 現状模写	縦55.00 cm 横95.00 cm	模造：紙	
4	A-216-1-4	王塚古墳 後室石屋形右燈明台 現状模写	縦86.00 cm 横66.00 cm	模造：紙	
5	A-216-1-5	王塚古墳 後室石屋形左燈明台 現状模写	縦83.00 cm 横74.00 cm	模造：紙	
6	A-216-1-6	王塚古墳 後室前壁戸口上マグサ石 現状模写	縦42.00 cm 横133.00 cm	模造：紙	軸装
7	A-216-1-7	王塚古墳 後室前壁下部 現状模写	縦135.00 cm 横305.00 cm	模造：紙	
8	A-216-1-8	王塚古墳 後室前壁上部（中央） 現状模写	縦148.00 cm 横202.00 cm	模造：紙	
9	A-216-1-9	王塚古墳 前室正面戸口左側壁 現状模写	縦116.00 cm 横111.00 cm	模造：紙	軸装
10	A-216-1-10	王塚古墳 後室前壁左側壁 現状模写	縦118.00 cm 横157.00 cm	模造：紙	軸装
11	A-216-1-11	王塚古墳 後室奥壁 現状模写	縦183.00 cm 横294.00 cm	模造：紙	軸装
12	A-216-1-12	王塚古墳 後室前壁上部（左側） 現状模写	縦152.00 cm 横63.00 cm	模造：紙	
13	A-216-1-13	王塚古墳 後室前壁上部（右側） 現状模写	縦152.00 cm 横48.00 cm	模造：紙	
14	A-216-1-14	王塚古墳 後室左側壁 現状模写	縦152.00 cm 横399.00 cm	模造：紙	
15	A-216-1-15	王塚古墳 後室石屋形架石上面及縁 現状模写	縦96.00 cm 横207.00 cm	模造：紙	
16	A-216-1-16	王塚古墳 後室棺床前方側面 現状模写	縦76.00 cm 横189.00 cm	模造：紙	
17	A-216-1-17	王塚古墳 後室左屏風石 現状模写	縦54.00 cm 横90.00 cm	模造：紙	軸装
18	A-216-1-18	王塚古墳 後室石屋形左側支柱 現状模写	縦105.00 cm 横143.00 cm	模造：紙	
19	A-216-1-19	王塚古墳 前室正面戸口マグサ石 現状模写	縦45.00 cm 横126.00 cm	模造：紙	軸装
20	A-216-1-20	王塚古墳 前室正面戸口右側壁 現状模写	縦103.00 cm 横133.00 cm	模造：紙	軸装
21	A-216-1-21	王塚古墳 後室前壁右側壁 現状模写	縦103.00 cm 横133.00 cm	模造：紙	
22	A-216-1-22	王塚古墳 後室右側壁 現状模写	縦155.00 cm 横410.00 cm	模造：紙	
23	A-216-1-23	王塚古墳 後室石屋形架石上面及縁 復元模写	縦96.00 cm 横220.00 cm	模造：紙	
24	A-216-1-24	王塚古墳 後室石屋形右支柱 復元模写	縦105.00 cm 横151.00 cm	模造：紙	
25	A-216-1-25	王塚古墳 後室棺床右屏風石 復元模写	縦68.00 cm 横105.00 cm	模造：紙	
26	A-216-1-26	王塚古墳 後室石屋形右燈明台・左燈明台 復元模写	縦96.00 cm 横151.00 cm	模造：紙	
27	A-216-1-27	王塚古墳 後室石屋形架石裏面 復元模写	縦111.00 cm 横212.00 cm	模造：紙	
28	A-216-1-28	王塚古墳 後室棺床左屏風石 復元模写	縦79.00 cm 横95.00 cm	模造：紙	
29	A-216-1-29	王塚古墳 後室石屋形左支柱 復元模写	縦106.00 cm 横152.00 cm	模造：紙	
30	A-216-1-30	王塚古墳 後室棺床側面（前方） 復元模写	縦96.00 cm 横185.00 cm	模造：紙	
31	A-216-1-31	王塚古墳 後室左側壁 復元模写	縦152.00 cm 横399.00 cm	模造：紙	
32	A-216-1-32	王塚古墳 後室右側壁 復元模写	縦154.00 cm 横408.00 cm	模造：紙	
33	A-216-1-33	王塚古墳 後室奥壁 復元模写	縦177.00 cm 横304.00 cm	模造：紙	
34	A-216-1-34	王塚古墳 前室正面戸口右側壁 復元模写	縦111.00 cm 横126.00 cm	模造：紙	
35	A-216-1-35	王塚古墳 前室正面戸口マグサ石 復元模写	縦44.00 cm 横150.00 cm	模造：紙	
36	A-216-1-36	王塚古墳 前室正面戸口左側壁 復元模写	縦105.50 cm 横143.00 cm	模造：紙	額装
37	A-216-1-37	王塚古墳 後室前壁 復元模写	縦153.00 cm 横410.00 cm	模造：紙	
38	A-216-1-38-1	王塚古墳 後室奥壁上部（石棺と石棚の間） 現状模写	縦75.50 cm 横209.00 cm	模造：紙	円文
39	A-216-1-38-2	王塚古墳 後室奥壁上部（石棺と石棚の間） 現状模写	縦75.00 cm 横50.50 cm	模造：紙	円文
40	A-216-1-39-1	王塚古墳 後室奥壁上部（石棚上面） 現状模写	縦64.50 cm 横207.00 cm	模造：紙	円文
41	A-216-1-39-2	王塚古墳 後室奥壁上部（石棚上面） 現状模写	縦64.50 cm 横43.00 cm	模造：紙	円文
42	A-216-1-40-1	王塚古墳 後室奥壁上部（石棚下面） 現状模写	縦48.00 cm 横207.50 cm	模造：紙	円文
43	A-216-1-40-2	王塚古墳 後室奥壁上部（石棚下面） 現状模写	縦86.00 cm 横87.00 cm	模造：紙	円文
44	A-216-1-41	王塚古墳 後室奥壁上部（上部石組） 現状模写	縦128.00 cm 横152.00 cm	模造：紙	円文
45	A-216-1-42-1	王塚古墳 後室右側壁上部石組 現状模写	縦112.50 cm 横270.00 cm	模造：紙	円文
46	A-216-1-42-2	王塚古墳 後室右側壁上部石組 現状模写	縦283.50 cm 横141.50 cm	模造：紙	円文
47	A-216-1-42-3	王塚古墳 後室右側壁上部石組 現状模写	縦155.00 cm 横272.50 cm	模造：紙	円文
48	A-216-1-42-4	王塚古墳 後室右側壁上部石組 現状模写	縦151.50 cm 横25.50 cm	模造：紙	円文
49	A-216-1-43-1	王塚古墳 後室左側壁上部石組 現状模写	縦208.50 cm 横98.50 cm	模造：紙	円文
50	A-216-1-43-2	王塚古墳 後室左側壁上部石組 現状模写	縦207.00 cm 横86.00 cm	模造：紙	円文
51	A-216-1-43-3	王塚古墳 後室左側壁上部石組 現状模写	縦144.00 cm 横208.50 cm	模造：紙	円文
52	A-216-1-43-4	王塚古墳 後室左側壁上部石組 現状模写	縦150.00 cm 横208.00 cm	模造：紙	円文
53	A-216-1-43-5	王塚古墳 後室左側壁上部石組 現状模写	縦104.00 cm 横49.50 cm	模造：紙	円文
54	A-216-1-43-6	王塚古墳 後室左側壁上部石組 現状模写	縦99.00 cm 横57.00 cm	模造：紙	円文
55	A-216-1-44	王塚古墳 後室天井 現状模写	縦270.00 cm 横151.00 cm	模造：紙	円文
56	A-216-1-45-1	王塚古墳 前室正面上部石組（立面） 現状模写	縦151.00 cm 横208.00 cm	模造：紙	赤彩
57	A-216-1-45-2	王塚古墳 前室正面上部石組（立面） 現状模写	縦67.50 cm 横38.00 cm	模造：紙	赤彩
58	A-216-1-45-3	王塚古墳 前室正面上部石組（立面） 現状模写	縦17.00 cm 横37.50 cm	模造：紙	赤彩
59	A-216-1-46	王塚古墳 前室正面上部石組（石組下面） 現状模写	縦150.00 cm 横208.00 cm	模造：紙	赤彩
60	A-216-1-47-1	王塚古墳 前室右側壁 現状模写	縦208.00 cm 横150.00 cm	模造：紙	赤彩
61	A-216-1-47-2	王塚古墳 前室右側壁 現状模写	縦107.00 cm 横56.50 cm	模造：紙	赤彩

表8 日下八光福岡県内装飾古墳模写絵一覧（国立歴史民俗博物館所蔵）

	番号	資料名	サイズ	材質	
62	A-216-1-47-3	王塚古墳 前室右側壁 現状模写	縦59.00 cm 横115.00 cm	模造：紙	赤彩
63	A-216-1-48-1	王塚古墳 前室左側壁 現状模写	縦208.00 cm 横150.50 cm	模造：紙	赤彩
64	A-216-1-48-2	王塚古墳 前室左側壁 現状模写	縦145.00 cm 横62.50 cm	模造：紙	赤彩
65	A-216-1-48-3	王塚古墳 前室左側壁 現状模写	縦38.00 cm 横104.50 cm	模造：紙	赤彩
66	A-216-1-48-4	王塚古墳 前室左側壁 現状模写	縦73.00 cm 横40.00 cm	模造：紙	赤彩
67	A-216-1-49-1	王塚古墳 前室前壁 現状模写	縦149.50 cm 横207.00 cm	模造：紙	赤彩
68	A-216-1-49-2	王塚古墳 前室前壁 現状模写	縦157.50 cm 横75.50 cm	模造：紙	赤彩
69	A-216-1-49-3	王塚古墳 前室前壁 現状模写	縦208.00 cm 横52.00 cm	模造：紙	赤彩
70	A-216-1-50	王塚古墳 前室天井 現状模写	縦96.50 cm 横96.50 cm	模造：紙	赤彩
71	A-216-2-1	重定古墳 後室右側壁 現状模写	縦160.00 cm 横400.00 cm	模造：紙	額装
72	A-216-2-2	重定古墳 後室奥壁 現状模写	縦210.00 cm 横354.00 cm	模造：紙	額装
73	A-216-2-3	重定古墳 前室正面戸口通路左側壁 現状模写	縦198.00 cm 横176.00 cm	模造：紙	額装
74	A-216-2-4	重定古墳 前室正面戸口通路右側壁 現状模写	縦140.00 cm 横200.00 cm	模造：紙	額装
75	A-216-2-5	重定古墳 後室前面右側壁 現状模写	縦207.00 cm 横101.00 cm	模造：紙	額装
76	A-216-2-6	重定古墳 後室右側壁上部（中） 現状模写	縦58.00 cm 横174.00 cm	模造：紙	額装
77	A-216-2-7	重定古墳 後室右側壁上部（左） 現状模写	縦60.00 cm 横155.00 cm	模造：紙	額装
78	A-216-2-8	重定古墳 後室左側壁下部 現状模写	縦150.00 cm 横390.00 cm	模造：紙	額装
79	A-216-2-9	重定古墳 後室左側壁上部（左） 現状模写	縦70.00 cm 横193.00 cm	模造：紙	額装
80	A-216-2-10	重定古墳 後室左側壁上部（右） 現状模写	縦63.50 cm 横175.00 cm	模造：紙	額装
81	A-216-2-11	重定古墳 後室右側壁上部（右） 現状模写	縦88.00 cm 横61.00 cm	模造：紙	額装
82	A-216-2-12	重定古墳 後室右側壁下部 復元模写	縦162.00 cm 横406.00 cm	模造：紙	
83	A-216-2-13	重定古墳 後室前壁左側壁 現状模写	縦112.00 cm 横211.00 cm	模造：紙	額装
84	A-216-3-1	竹原古墳 前室正面戸口左側壁 現状模写	縦90.00 cm 横110.00 cm	模造：紙	額装
85	A-216-3-2	竹原古墳 後室奥壁 現状模写	縦148.00 cm 横205.00 cm	模造：紙	額装
86	A-216-3-3	竹原古墳 前室正面戸口右側壁 現状模写	縦89.00 cm 横109.00 cm	模造：紙	額装
87	A-216-3-4	竹原古墳 前室正面戸口右側壁 復元模写	縦117.00 cm 横90.00 cm	模造：紙	額装
88	A-216-4-1	日ノ岡古墳 玄室左側壁（奥壁側） 現状模写	縦210.00 cm 横295.00 cm	模造：紙	
89	A-216-4-2	日ノ岡古墳 羨道左側壁・現状模写	縦166.00 cm 横153.50 cm	模造：紙	
90	A-216-4-3	日ノ岡古墳 玄室左側壁・現状模写	縦212.00 cm 横149.00 cm	模造：紙	
91	A-216-4-4	日ノ岡古墳 羨道右側壁・現状模写	縦142.00 cm 横155.00 cm	模造：紙	
92	A-216-4-5	日ノ岡古墳 玄室奥壁・現状模写	縦205.00 cm 横224.50 cm	模造：紙	
93	A-216-4-6	日ノ岡古墳 玄室右側壁・現状模写	縦210.00 cm 横433.00 cm	模造：紙	
94	A-216-4-7	日ノ岡古墳 羨道天井 現状模写	縦182.00 cm 横103.50 cm	模造：紙	
95	A-216-4-8	日ノ岡古墳 玄室奥壁石棚（玄室天井（奥壁側）） 現状模写	縦98.00 cm 横224.50 cm	模造：紙	
96	A-216-4-9	日ノ岡古墳 玄室奥壁 復元模写	縦211.50 cm 横223.00 cm	模造：紙	
97	A-216-4-10	日ノ岡古墳 玄室奥壁石棚 復元模写	縦103.50 cm 横149.50 cm	模造：紙	
98	A-216-5	古畑古墳 後室奥壁 現状模写	縦170.00 cm 横125.00 cm	模造：紙	額装
99	A-216-6	鳥船塚古墳 玄室奥壁 現状模写	縦122.00 cm 横148.00 cm	模造：紙	額装
100	A-216-7-1	塚花塚古墳 後室奥壁・現状模写	縦270.00 cm 横186.00 cm	模造：紙	
101	A-216-7-2	塚花塚古墳 後室左側壁（部分） 現状模写	縦87.00 cm 横97.00 cm	模造：紙	
102	A-216-7-3	塚花塚古墳 後室右側壁（部分） 現状模写	縦48.00 cm 横100.00 cm	模造：紙	
103	A-216-7-4	塚花塚古墳 後室右側壁（部分） 現状模写	縦100.00 cm 横121.50 cm	模造：紙	
104	A-216-8-1	珍敷塚古墳 後室奥壁 現状模写	縦150.00 cm 横221.00 cm	模造：紙	額装
105	A-216-8-2	珍敷塚古墳 玄室右側壁 現状模写	縦154.00 cm 横100.00 cm	模造：紙	
106	A-216-8-3	珍敷塚古墳 後室奥壁 復元模写	縦152.00 cm 横223.00 cm	模造：紙	
107	A-216-9-1	五郎山古墳 後室左側壁下部 現状模写	縦144.00 cm 横211.00 cm	模造：紙	
108	A-216-9-2	五郎山古墳 後室奥壁上部 現状模写	縦138.00 cm 横152.00 cm	模造：紙	
109	A-216-9-3	五郎山古墳 後室奥壁下部 現状模写	縦152.50 cm 横282.00 cm	模造：紙	
110	A-216-9-4	五郎山古墳 後室右側壁上部 現状模写	縦140.00 cm 横181.50 cm	模造：紙	
111	A-216-9-5	五郎山古墳 後室右側壁下部 現状模写	縦115.50 cm 横180.00 cm	模造：紙	
112	A-216-9-6	五郎山古墳 後室奥壁下部 復元模写	縦146.00 cm 横277.00 cm	模造：紙	
113	A-216-9-7	五郎山古墳 後室奥壁上部 復元模写	縦138.50 cm 横150.00 cm	模造：紙	
114	A-216-22	原古墳壁画模写			
115	A-216-23-5-1	日輪寺古墳 玄室内左石障 二重円文その他	縦46.00 cm 横173.00 cm		
116	A-216-23-5-2	日輪寺古墳 玄室内奥石障 二重円文と鍵手文	縦47.50 cm 横173.70 cm		
117	A-216-23-5-3	日輪寺古墳 玄室内右石障 二重円文と鍵手文	縦43.00 cm 横175.70 cm		
118	A-216-23-6-1	石人山古墳 石棺蓋短側面 直弧文（台紙は三角形）	縦76.00 cm 横159.00 cm		
119	A-216-23-6-2	石人山古墳 石棺蓋長側面 直弧文と二重円文	縦80.00 cm 横273.00 cm		
120	A-216-23-7	浦山古墳 石棺内面 直弧文と二重円文	縦77.50 cm 横164.00 cm		

表9 伊勢幸平・藤野不二男 王塚古墳模写絵一覧

	資料名	サイズ	材質等	所蔵	番号	目録情報
1	筑前王塚古墳壁画 王塚羨室羨門南壁南壁	102.3×108.9	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4666	東洋画模本V(1999/299)
2	筑前王塚古墳壁画 王塚羨室羨門北壁(1935年)	108.8×93.9	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4667	東洋画模本V(1999/300)
3	筑前王塚古墳壁画 王塚羨室羨門楣石 両面	36.7×239.7	紙本着色 卷子装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4668	東洋画模本V(1999/301)
4	筑前王塚古墳壁画 王塚羨室羨門楣石 両面	36.7×239.7	紙本着色 卷子装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4669	東洋画模本V(1999/301)
5	筑前王塚古墳壁画 王塚羨室羨門南壁	107.0×95.7	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4670	東洋画模本V(1999/302)
6	筑前王塚古墳壁画 王塚羨室羨門北壁	98.9×142.4	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4671	東洋画模本V(1999/303)
7	筑前王塚古墳壁画 王塚灯明台(南北)	166.5×72.4	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4672	東洋画模本V(1999/304)
8	筑前王塚古墳壁画 王塚灯明台(南北)	166.5×72.4	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4673	東洋画模本V(1999/304)
9	筑前王塚古墳壁画 王塚屏風石	57.8×94.1	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4674	東洋画模本V(1999/305)
10	筑前王塚古墳壁画 王塚屏風石	57.8×94.1	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4675	東洋画模本V(1999/305)
11	筑前王塚古墳壁画 王塚床棺仕切及前方段面	50.2×185.9	紙本着色 卷子装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4676	東洋画模本V(1999/306)
12	筑前王塚古墳壁画 王塚床棺仕切及前方段面	50.2×185.9	紙本着色 卷子装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4677	東洋画模本V(1999/306)
13	筑前王塚古墳壁画 王塚玄室南壁(其一)	74.1×75.2	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4678	東洋画模本V(1999/307)
14	筑前王塚古墳壁画 王塚玄室南壁(其二)	29.0×225.3	紙本着色 卷子装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4679	東洋画模本V(1999/308)
15	筑前王塚古墳壁画 王塚玄室南壁(其三)	61.0×360.5	紙本着色 卷子装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4680	東洋画模本V(1999/309)
16	筑前王塚古墳壁画 王塚玄室北壁	114.3×158.1	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4681	東洋画模本V(1999/310)
17	筑前王塚古墳壁画 王塚屋形南支柱石	91.4×121.2	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4682	東洋画模本V(1999/311)
18	筑前王塚古墳壁画 王塚屋形北支柱石	92.6×118.1	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4683	東洋画模本V(1999/312)
19	筑前王塚古墳壁画 王塚屋形屋根石	215.8×93.0	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4684	東洋画模本V(1999/313)
20	筑前王塚古墳壁画 王塚玄室奥壁	239.8×162.4	紙本着色 掛幅装	東京藝術大学大学美術館	物品番号4685	東洋画模本V(1999/314)
21	王塚古墳羨室右騎馬面壁画一部	60.5×72.5	カンバス 額装	桂川町		
22	王塚古墳羨室右壁模写	80×100	カンバス 額装	桂川町		

表10 東京大学池内研究室 e-Heritage プロジェクト調査古墳一覧 (福岡県内装飾古墳のみ)

番号	報告番号	古墳名	所在地	種類	記録作成年 / 月
1	5	桜京古墳	宗像市牟田尻	彩色・線刻	2010年1月
2	46	珍敷塚古墳	うきは市吉井町富永	彩色	2012年2月
3	51	日岡古墳	うきは市吉井町若宮	彩色	2007年1月
4	59	乗場古墳	八女市吉田	彩色	2009年2月
5	62	石人山古墳	八女郡広川町一條・筑後市一条	彫刻・線刻	2014年1月
6	63	弘化谷古墳	八女郡広川町広川	彩色	2013年2月
7	69	王塚古墳	嘉徳郡桂川町寿命	彩色	2005年2月

表11 九州歴史資料館所蔵 福岡県内装飾古墳写真デジタルデータ一覧 (DWPKNB)

番号	古墳名	4×5カラーリバーサルをもとにデジタル化	点数	35mmカラーリバーサルをもとにデジタル化	点数	35mmカラーリバーサルをもとにデジタル化	点数	合計
参1	東光寺剣塚古墳	0080~0083	4	0605~0615	11			15
3	五郎山古墳	0085~0103	19	0619~0643	25			44
4	殿様塚古墳群1号墳					1436~1441	6	6
5	桜京古墳(桜京2号墳)	0084	1	0616~0618	3			4
参7	上の浦古墳	0326・0327	2	0955~0960	6			8
参8	久戸10号墳	0311~0318	8					8
参8	久戸11号墳	0319~0325	7					7
9	一本松塚古墳	0072・0073	2	0590~0592	3			5
16	垣生羅漢山ⅢA-1号横穴墓			0593~0600	8			8
21	竹原古墳	0049~0071	23	0579~0589	11	1332・1333・1363~1367	7	41
22	撰ヶ熊古墳	0104~0106	3	0644~0647	4			7
23	古月横穴群9号横穴	0075~0079	5	0601~0604	4	1368・1369	2	11
27	観音塚古墳	0256~0258	3	0850~0861	12			15
28	仙道古墳	0241~0255	15	0835~0849	15			30
29	湯の隈古墳	0239・0240	2	0830~0834	5			7
30	狐塚古墳	0233~0238	6	0820~0829	10			16
31	日輪寺古墳	0223~0226	4	0805~0809	5	1429~1431	3	12
32	浦山古墳	0227~0232	6	0810~0819	10			16
33	下馬場古墳	0214~0222	9	0789~0804	16			25
34	前畑古墳	0209~0213	5	0778~0788	11			16
39	寺徳古墳	0197~0208	12	0761~0777	17	1353~1362・1410~1428	29	58
44	西館古墳	0306~0310	5	0939~0954	16			21
46	珍敷塚古墳	0172~0179	8	0723~0732	10	1348~1352・1387~1395	14	32
47	原古墳	0180~0188	9	0733~0751	19	1396~1402	7	35
48	鳥船塚古墳	0189~0194	6	0752~0757	6	1403~1405	3	15
49	古畑古墳	0195・0196	2	0758~0760	3	1406~1409	4	9
51	日岡古墳	0149~0171	23	0685~0722	38	1345~1347・1383~1386	7	68
52	重定古墳	0118~0148	31	0659~0684	26	1339~1344・1379~1382	10	67
53	塚花塚古墳	0107~0117	11	0648~0658	11	1334~1338・1370~1378	14	36
55	萩ノ尾古墳	0299~0301	3	0934~0938	5	1432~1435	4	12
56	倉永古墳	0298	1	0929~0933	4			5
57	倉永茶臼塚1号墳	0302~0305	4					3
58	丸山塚古墳	0283~0297	15	0912~0928	17			32

番号	古墳名	4×5カラーリバーサル をもとにデジタル化	点数	35mmカラーリバーサル をもとにデジタル化	点数	35mmカラーリバーサル をもとにデジタル化	点数	合計
59	乗場古墳	0269～0282	14	0895～0911	17			31
62	石人山古墳	0259～0261	3	0862～0871	10			13
63	弘化谷古墳	0262～0268	7	0872～0894	23			30
64	川島古墳	0025・0026	2	0536～0538	3			5
65	城腰1号横穴墓	0027・0028	2	0539～0542	4			6
69	王塚古墳	0001～0024	24	0424～0535	112			136
73	穴ヶ葉山古墳	0029～0044	16	0543～0561	19			35
76	百留横穴墓群1号墓	0045・0046	2	0562～0571	10			12
78	山田1号墳	0047・0048	2	0572～0578	7			9
	合計		320		536		110	966

表 12 写真計測による正射投影画像製作一覧

番号	古墳名	製作者等	調査年月日等
1	五郎山古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成19年11月6日～15日
2	桜京古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成22年1月22日～27日
3	一本松塚古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年3月10日
4	下吉田2号墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年2月6日
5	下吉田4号墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年2月6日
6	竹原古墳	宮若市教育委員会	(石室)平成28年9月20・26日 (墳丘)平成28年12月7日
7	花立山穴親音古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年4月11日
8	観音塚古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年4月11日
9	湯の隈古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年5月11日
10	狐塚古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年5月11日
11	月読神社御神体	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年5月2日
12	日輪寺古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年1月11日
13	浦山古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年1月11日
14	下馬場古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成19年7月18日～23日
15	前畑古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成19年7月23日～29日
16	中原塚塚古墳	田主丸町(現、久留米市)教育委員会	平成14・15年度(発掘調査時)
17	寺徳古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成19年7月31日～8月6日
18	益生田A12号墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年5月11日
19	日岡古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年2月21日
20	重定古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成19年10月16日～24日
21	塚花塚古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成19年10月10日～15日
22	(参)安富古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年2月21日
23	萩ノ尾古墳	大牟田市教育委員会	令和4年1月21日
24	乗場古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年1月26日
25	稲荷山横穴群第18号墓	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和5年4月18日
26	山王山古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年2月26日
27	経塚横穴墓群第110号墓	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年4月25日
28	王塚古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成20年3月6日
		桂川町教育委員会	令和4年12月12日 令和5年3月18日
29	皆見大塚古墳	科研費(基盤研究(A)) 「VR画像を活用した日本装飾古墳デジタルアーカイブの構築」 (1922026)2007～2010年 研究代表者:河野一隆	平成22年2月15日～17日
30	三ツ塚古墳群2号墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年7月25日
31	穴ヶ葉山古墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年1月10日
32	穴ヶ葉山3号墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年1月10日
33	山田1号墳	九州歴史資料館調査「福岡県装飾古墳総合調査」	令和6年1月10日

表 13 彩色系装飾古墳の色調所見一覧

		小松利三郎 1918	山崎一雄 1951・1987 山崎一雄 1974	平凡社1964	日下八光 1967	斎藤忠 1973 (地名表)	乙益重隆 1974 (地名表)	歴博 1993	永嶋正春1999	発掘調査報告書等
参1	東光寺剣塚古墳									石室内に赤(ベンガラ)塗布(本田光子) 『福岡市教委1991』
1	吉武熊山古墳									赤(肉眼観察でベンガラと推測) 『福岡市教委1981』
2	浦江1号墳									赤 『福岡市教委2005』
3	五郎山古墳		赤黒(2) 緑黄	赤黒緑 (森貞次郎)	朱黒緑黄	赤黒緑	赤黒緑	赤黒緑 (石山勲)	赤(ベンガラ) 緑(海緑石と推定) 黒(墨ではない炭素) 一部の石材面に黄色～黄褐色の下塗りが観察される 油(乾燥油)を使用して塗布された可能性	赤黒緑 『筑紫野市1998』
4	殿様塚古墳群1号墳									赤・緑(『筑紫野市2001』)
5	桜京古墳					赤緑	赤緑	赤緑(青) 黄 (石山勲)		赤(ベンガラ) 緑(セラドナイト) 白(白土(白色顔料)) 朽津信明・中牟田義博(『宗像市2012』)
6	権現塚古墳									赤
9	一本松塚古墳					赤	赤			朱 『北九州市1985』
20	瀬戸14号横穴墓					赤	赤			赤(『中間市1978』)
21	竹原古墳		赤黒(2)	油脂の類で練ったような赤と黒 (森貞次郎)	朱黒	赤黒	赤黒			赤黒 『若宮町教委1982』
22	損ヶ熊古墳									赤 『若宮町教委2003』
25	古月横穴群9号横穴				朱					朱(『鞍手町教委2004』)
27	観音塚古墳			赤 (森貞次郎)		赤	赤	赤 (石山勲)		朱(丹?)(『福岡県1933』)
28	仙道古墳									赤・緑(『三輪町教委2001』)
29	湯の隈古墳					赤青	赤青			赤(『朝倉町1986』)
31	日輪寺古墳		赤							朱(『京都帝國大學1917』)
32	浦山古墳								赤(色調からベンガラと判断)	朱(丹)(『京都帝國大學1919』)
33	下馬場古墳		赤	赤青 (渡辺正気)	朱(弁柄) 青(鼠色に近い青色・顕微鏡検査で岩群青)	赤青	赤青	赤青 (石山勲)		2種類の赤(パイプベンガラ・不純物が入るベンガラ) 青 『久留米市教委2014』
34	前畑古墳		赤	赤 (渡辺正気)		赤	赤			朱・青(『福岡県1928』) 朱(『福岡県1931』)
35	薬師下南古墳			赤 (渡辺正気)		赤	赤			朱(『福岡県1928』) 朱(『福岡県1939』)
36	薬師下北古墳		赤	白土の上に赤・青 (渡辺正気)		赤	赤			朱(『福岡県1928』) 赤・朱・白・青(『福岡県1939』)
参12	若宮古墳					赤	赤			僅かに斑紋ノ跡トモ見ユル裝飾アリ 『福岡県1928』
参13	鹿毛塚古墳					赤青	赤青			内面ニ文様濃シ(『福岡県1928』)
参14	上諸富古墳(上緒富古墳)									内壁僅かに紋様ヲ見ル 『福岡県1928』
参15	上江下小路古墳									朱青ノ紋様ヲ僅かに残ス明瞭ナラズ 『福岡県1928』
参16	山ノ下古墳					赤	赤			朱(『福岡県1928』)
参17	特別ノ名称ナシ(発心)									朱(『福岡県1928』)
参18	森崎古墳					赤青	赤青			
参19	中馬場古墳					赤	赤			
参20	中馬場2号墳									
参21	合原4号墳									
37	隈3号墳									赤(『田主丸町教委2002』)
38	中原狐塚古墳	赤緑	赤 (緑の記述なし)		朱	赤青	赤青			2色の赤(純粋なベンガラ・不純なベンガラ) 緑 青(灰) 『田主丸町教委2004』
39	寺徳古墳		赤緑	赤青黄 (渡辺正気)	朱緑	赤黄青	赤黄青	赤黄青 (石山勲)		赤緑 『田主丸町教委2001』
41	益生田古墳群益永支群18号墳					赤青白	赤青白			赤・青(『1954・1962埋蔵文化財包蔵地調査カード』)
44	西館古墳									赤緑 『田主丸町教委1996』
45	大塚8号墳石材									赤・緑(『田主丸町教委2004・2014』)

		小松利三郎 1918	山崎一雄 1951・1987 山崎一雄 1974	平凡社1964	日下八光 1967	齋藤忠 1973 (地名表)	乙益重隆 1974 (地名表)	歴博 1993	永嶋正春1999	発掘調査報告書等
参22	大橋寺古墳					赤青	赤青			
参23	清長橋古墳					赤青	赤青			
46	珍敷塚古墳		赤青 (不明瞭)	赤青 (森貞次郎)	朱青	赤青	赤青	赤青 (石山勲)	赤(ベンガラ)・ 地塗りの部分の灰色～緑灰色(青灰色) 現時点では素材不明、日ノ岡と同じものの可能性	赤青 (うきは市教委2007『』)
47	原古墳		赤		朱	赤	赤	赤 (石山勲)	赤	赤『吉井町1984』 赤『うきは市教委2007』
48	鳥船塚古墳		赤	赤 (森貞次郎)	朱	赤	赤	赤 (石山勲)	赤	赤 (うきは市教委2007『』)
49	古畑古墳		赤	赤・黄? (渡辺正気)	朱	赤	赤	赤 (石山勲)		赤 (『うきは市教委2007』)
50	富永古墳					赤青白	赤青白			朱・藍・退色せる一種の色彩 (白と云ふ人多し) (『福岡県1925』)
参28	紋塚古墳					赤青	赤青			
51	日岡古墳		赤緑	赤青黄 (森貞次郎)	白色を地塗りした上に 朱・緑	赤青黄	赤青黄	赤白 赤青 赤青 (石山勲)	赤(ベンガラ) 白 白緑(淡青灰色:銅系ではない 天然鉱物の粉末) 青	赤白 赤青 赤青 (『吉井町教委1989』)
52	重定古墳		赤	赤青 (森貞次郎)	朱 緑鼠～薄墨 (黒)	赤青	赤青			赤 緑 (『浮羽町教委1984』)
53	塚花塚古墳		赤緑	赤青 (森貞次郎)	朱 緑	赤青 緑	赤青 緑			赤 緑 (『浮羽町1984』)
55	萩ノ尾古墳		赤	赤 (渡辺正気)	朱	赤	赤	赤 (石山勲)		赤『大牟田市教委2001』
58	丸山塚古墳					赤	赤			赤 緑 黄『八女市1992』
59	乗場古墳			赤青黄 (渡辺正気)	朱 鼠	赤青黄	赤青黄	赤青黄 (柳澤一男)		赤白 赤青 赤青 赤青 黄 (『福岡県1928』) 赤青 黄 (『八女市教委1972』)
参29	釘崎11号墳									赤(『江口寿高1984』)
61	成合寺古墳									赤(バイブ状ベンガラ) 白(白土) (『瀬高町教委2004』朽津信明)
62	石人山古墳									朱(丹)を蓋の全面に塗布 (『福岡県1937』)
63	弘化谷古墳							赤 緑 (柳澤一男)	赤(観察ではベンガラ)(薄い 赤を加えて3色とみる場合も ある) 緑(観察では判断不可)	赤 緑? (『広川町1991』弘化谷古墳『』)
参32	磯良塚傍の採集石材									朱・白?『大川市教委1994』
64	川島11号墳							赤(背景 風) 青味を 帯びた 黒 (石山勲)		赤(赤鉄鉱を含む粘土) 青味を帯びた黒(緑泥石・黒雲母) (『飯塚市教委1991』江本義理)
69	王塚古墳		赤白 黒(1) 緑 黄	赤黒 緑 黄 (小林行雄)	朱 黒 緑(岩緑青) 黄	赤青 白 黒 黄等	赤 黒 緑 黄	赤白 黒 緑 黄 (石山勲)	赤(ベンガラ) 白(白土) 黒(非晶質のマンガン化合物 を含む粘土) 緑(海緑石) 黄(黄土) 油様の展色材(顔料の接着 剤)使用による塗布	赤(α-赤鉄鉱を含む粘土または その焼成物) 白(白土(白色粘土)) 黒(非晶質のマンガン化合物を 含む粘土) 緑(海緑石) 黄(黄土(黄色粘土)含水酸化物を 含む粘土) (『福岡県教委1975』江本義理)
70	皆見大塚古墳									赤(ベンガラ、被熱?) 黒(マンガン土) (『九歴2015』朽津信明・中牟田義博)
76	百留横穴墓群1号									赤(ベンガラ)『上毛町教委2010』
77	百留横穴墓群6号									赤『上毛町教委2010』

表 14 彩色系装飾古墳の顔料分析詳細所見一覧

	小松利三郎 1918	山崎一雄 1951 (山崎一雄 1987)『古文化財の科学』	山崎一雄 1974『彩色壁画の顔料』乙益重隆編『装飾古墳と文様』古代史発掘8所収	江本義理 1975『壁画の老化に関する調査研究』福岡県教育委員会編『特別史跡 王塚古墳の保存』	日下八光 1967『装飾古墳』朝日新聞社顕微鏡・電子顕微鏡使用結果を併用	永嶋正春 1999『装飾古墳の色彩と素材』『歴博研究報告』第80集	朽津信明・川野邊渉 2000『九州装飾古墳の緑と「青」について』『保存科学』No. 39	朽津信明 2009『装飾古墳の顔料』『月刊文化財』547号
赤(朱)色	赤:酸化鉄	赤:酸化鉄(ベンガラに相当 朱すなわち硫化水銀は全く用いられていない)	赤色:主成分は酸化鉄。赤鉄鉱を含んだ赤色の粘土などを焼いてつくったものと思われる。赤色は全部の装飾古墳に使われている。	α-赤鉄鉱を含む粘土またはその焼成物	朱(赤):酸化鉄(顔料としてはたして何を使用したかは不明)	赤:ベンガラ (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> 、赤色酸化鉄)		赤(針状の赤鉄鉱(酸化第二鉄)結晶の集合体、いわゆる「パイプ状ベンガラ」):純粋で発色の良いベンガラ
								赤(不純なベンガラ):発色が悪く不純物を豊富に含んだベンガラ
黄色		黄:含水酸化鉄を含む黄色粘土	黄色:黄色の粘土。含水酸化鉄による色。黄色を使用した古墳は王塚、五郎山、千金甲など少数。	黄土(黄色粘土)含水酸化物を含む粘土	黄:黄色粘土	黄:黄土(黄色粘土)		黄:黄土(黄色粘土)
白色		白:白色粘土	白色:白色の粘土。白色を使用した古墳は王塚、釜尾、チブサンなど比較的少数。	白土(白色粘土)	白:白色粘土(白土)	白:白土(白色粘土)		白:白土(白色粘土)
黒色		黒(1):鉄・マンガンを含む黒色の鉱物(二酸化マンガンを主成分とする軟マンガン鉱と推定される)	黒(1):王塚、チブサンなどのものは鉄とマンガンを含む黒色鉱物である。	非晶質のマンガン化合物を含む粘土	黒:王塚古墳の黒色顔料は粗い楡目のあるタッチで黒色顔料が盛り上がり、砂のような粒がキラキラ黒光りしている。普通の黒色ではなく、石炭の粉末ではないか。	黒:マンガン土(非晶質マンガン化合物を含む粘土)		黒:マンガン土のような粘土質の黒色物質
		黒(2):炭素(墨ではないようである)	黒色(2):この方は炭素であって、五郎山、竹原古墳などに使われている。炭素ではあるが墨ではないようである。木材などを焼いてつくったものであろう。		黒:炭素を使用(五郎山・竹原・太田・桂原)竹原は炭素粒が堅く重なり合っている。古墳のものは煤を油でいて用いたものと思われる。	黒:炭素		黒:炭素(木炭が用いられた可能性)
緑色	緑:緑青?(未分析)	緑:緑色岩石(珍敷塚を除く。岩緑青すなわち孔雀石のような銅化合物は検出されない)(珍敷塚は明瞭な緑色の鉱物は認め難く、僅かに青灰色の絹雲母を認めるのみ。緑色岩石の粉末が使用されたと思われ、あるいは最初から絹雲母を用いて不鮮明な青灰色で描かれた?確定できない)	緑色・青色:ともに緑色-青色の岩石を粉末にしたもの。とくに青色は不明瞭で、はっきりした色が認めにくい。	海緑石	緑:岩緑青(孔雀石)多年の熱の蓄積によるためか新しい緑青と比較すると古色がついている。重定古墳の後室入口袖石の緑青は全く黒変している。	緑:海緑石(確実に分析された例では海緑石だが、緑色の変色の可能性を考えた黒色の一部箇所については、あらかじめ考え直す必要が生じている)	緑色のスペクトルが得られた部分(緑)から海緑石様鉱物を検出	緑:セラドナイト(緑色の粘土鉱物、緑土)
青色					青:青群青(弁慶ヶ穴)、色が淡く現在の白群青とほとんど同様(大坊・珍敷塚・下馬場)	青:青色岩石の粉末?(灰色味の強い青色)	肉眼的にはやや青みがかった感じられるような灰色の顔料(灰)から、雲母類かと推定される粘土鉱物、石英、長石を含む多結晶の集合体	青(「灰色顔料」):銅を全く含まない何らかの粘土質の物質
その他					接着剤:荏(エゴマ)の油を用いたとしても大した誤りではないのではないか。			
					相当精巧な筆や刷毛の大小のものが揃っていたのではないか。			
					円文・同心円文にはコンパスを使用。			

顔料分析引用文献

- 小松利三郎 1918 「筑後國知徳古墳石櫛文様赤色顔料の成分に就て」『考古学雑誌』第九卷第一號  
 日下八光 1967 『装飾古墳』朝日新聞社  
 山崎一雄 1974 『彩色壁画の顔料』乙益重隆編『装飾古墳と文様』古代史発掘8 講談社  
 江本義理 1975 『壁画の老化に関する調査研究』『特別史跡王塚古墳の保存-装飾古墳保存対策研究報告書-』福岡県教育委員会 のち福岡県文化財調査会により増刷・頒布  
 山崎一雄 1987 『装飾古墳の顔料』『古文化財の科学』思文閣出版  
 永嶋正春 1999 『装飾古墳の色彩と素材』『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 装飾古墳の問題 国立歴史民俗博物館  
 朽津信明・川野邊渉 2000 『九州装飾古墳の緑と「青」について-福岡県下の例-』『保存科学』第39号 東京国立文化財研究所  
 朽津信明 2009 『装飾古墳の顔料』『月刊文化財』547号 文化庁文化財部

## V 総括

ここでは総括として、1. 装飾古墳の認定に係る課題、2. 県内装飾古墳の分布と特徴、3. 装飾古墳の保存活用、の3つについて、今後の方向性を示す。

なお、本書では装飾古墳として78基を認定し、図文の内容や刻まれたタッチ等から報告書等により評価がなされているものは装飾古墳として扱った一方、評価が不安定な38基は装飾古墳の可能性のあるものとして参考資料として示した。

このうち、装飾古墳78基について、柳澤一男氏の分類（柳澤2022）を参考に、墳丘規模で分類すると、前方後円墳9基、径25m以上の大型円墳9基、径25m以下の中小円墳34基になる。埋葬施設で分類すると、石棺3基、横穴式石室（彩色37・線刻10・敲打9・浮彫3・線刻+彩色1・彫刻+彩色1）、横穴墓（彩色2・線刻13・彫刻+彩色1・線刻+彩色1）になる。

### 1. 装飾古墳と非装飾古墳

装飾古墳の図文については、それが何を示しているが、現在の我々では理解が難しい。調査指導委員会においても、装飾古墳か、非装飾古墳かの認定にあたっては議論があった。II-1で装飾古墳の定義を示したが、彩色や彫刻、敲打で明確で描かれた図文を有する装飾古墳は認定が容易であるが、線刻や赤一色で塗られたものは認定が難しい。彩色系の装飾については、意図的に塗り分けられた図文を抽出できないものは現時点では装飾古墳としては取り扱っていない。

敲打による装飾は、近年久留米市益生田古墳群A群12号墳、飯塚市山王山古墳など類例が増えており、6世紀後半の筑後川流域に始まり、遠賀川流域、福岡地域と彩色系分布域とほぼ一致する。益生田古墳群例は同一古墳群中に彩色系装飾古墳もあり、近隣の久留米市西館古墳と図文構成の類似から、彩色系→敲打装飾への変遷が示されている。

一方、線刻については、描かれた時代が確実に古墳時代に遡るかの判断は難しい。近年、山崎純男が彩色系装飾（平行線とX印を組み合わせた浅い割付線有）を有する宗像市桜京古墳の石室に描かれた船の線刻について、近世の絵馬との比較から、江戸時代に描かれたとした（山



図 563 装飾古墳ではないと判断された古墳  
（筑紫野市 上の浦古墳）



図 564 敲打による装飾  
（久留米市 益生田古墳群A群12号墳）

崎 2019)。線刻による図文については、どのような図文か、それをどのように描いたのかを見出し、広く他の画題と比較検討し、それが古墳時代に遡る可能性があるかどうかの検証作業を進める必要がある。

なお、装飾古墳においては、薄暗かったり、開口して時間が経っていること等から、装飾が見えづらかったり、肉眼では見えなくなっているものも少なくない。既知の非装飾古墳を含めて、赤外線計測、ひかり拓本等、新たな技術による観察手法の進展で新たな装飾図文や装飾古墳が発見される可能性は十分にある。本章 3. で検討した石室築造工と図文の描き手の問題の追求に加え、土器等による葬送儀礼等と連動しているのか、図文の表現や配列、顔料の共通性から描き手が移動したかなど、結論に至るまで難しい課題が多く、今後新たな技術や観点を取り入れた、学術的な検討を積み重ねる必要がある。

## 2. 福岡県内の装飾古墳の分布と特徴

県内の装飾古墳は、5世紀前半の広川町・筑後市石人山古墳を最古例として、群集墳の築造停止に軌を一にするように7世紀前半～中頃に終焉を迎える。筑後川流域をはじめとする県内でも特定地域に分布し、全く同じ図文構成の装飾古墳がないように、地域毎、地域内で葬送儀礼が異なる特徴を有する。

県内の装飾古墳の特徴は多岐にわたるが、分布が偏在すること、装飾の採用も首長墓級の古墳に主に採用される地域と、首長墓+群集墳レベルの中小規模の群集墳にも採用される地域がある。これは、死生観や埋葬習俗の違いなどの地域事情だけではなく、527年の磐井の乱、その後の536年の那津官家の設置に対する各地域社会の対応状況、宮若市竹原古墳にみられる大陸系画題からみえる対外関係等、様々な要因が複雑に関係することが予想される。このうち、筑後川流域は装飾古墳発生地ではないものの、全面彩色と敲打、多種多様な図文とその構成、密集度、中小古墳までの広がり、他地域への影響力も考え合わせると、装飾古墳の展開、地域社会での在り方等を探る上で非常に重要な地域であるため、ここではその在り方を中心にみていくこととする。

県内の装飾古墳は、5世紀前半の石人山古墳の妻入式横口式石棺への彫刻を最古例として、久留米市浦山古墳・日輪寺古墳と、いずれも前方後円墳に施される。施文方法は基本石棺に彫刻を施したもので、鏡を示した円文や直弧文、その系譜上にある斜格子文や連続三角文など、旧来の伝統的な図文が刻まれる。

6世紀前半になると、筑後川流域のうきは市日岡古墳を初現として彩色系装飾古墳が出現する。日岡古墳より若干築造が遅れる遠賀川流域の桂川町王塚古墳とともに、石室全面に多様な彩色による図文を施す点で、装飾古墳の展開の画期となる。日岡古墳は、連続三角文を多用する点で、肥後地域の影響が見受けられると同時に、石室全体を埋め尽くすように大型の同心円文や蕨手文、各種具象文が広がり、自由度が増している(丸林 2002)。その後、筑後川流域で



図 565 日輪寺古墳石障の文様拡大

は同心円文を主文様とし、三角文などの幾何学文に加え、武器・武具が多用され、人物や船、鳥など、物語性を帯びた具象文も描かれるが、円文を使用する頻度が高く、共通する図文が古墳築造範型とセットで累代的に継承されていたと想定できる。ちなみに、日岡古墳、久留米市下馬場古墳、寺徳古墳では石室構造や規模は異なるが、図文の主文様は大型・多重の同心円文で、同一の規格であること、蕨手文、靱を描き続けていることから、同一の構図に基づいた描き手の作による可能性が高いことが指摘されている（丸林 2002）。

また、筑後川流域では、日岡古墳等、当初は首長層に彩色系装飾古墳の風習が浸透するが、6世紀後半～末の耳納北麓の吉井地区と田主丸地区では比較的中小規模の群集墳にまで浸透して多くの彩色系装飾古墳が築造される。江戸時代の記録によれば、各字に1・2基は装飾古墳が存在したとされる。田主丸地区西側の草野地区では、下馬場古墳という大型円墳に彩色系装飾が描かれていること、吉井地区のうきは市古畑古墳・鳥船塚古墳・原古墳・珍敷塚古墳は至近距離に築造されるなど、装飾古墳の採用の在り方にも小地域性が認められる。

さらに、群集墳における彩色系装飾古墳は、非装飾古墳よりも墳丘や石室、立地などである程度優位性がみられると考えられてきたが、益生田古墳群の敲打を有する装飾古墳は、持たない古墳に比べ必ずしも優位性が認められない。

近接する彩色系装飾古墳である西館古墳（現在は単独で存在）も同様に、群集墳中で墳丘規模や石室構造から顕著な優位性が認められないと推測される。

このように、6世紀後半～末の耳納北麓の彩色系装飾古墳は、他地域と比べ、中下位の階層まで装飾という行為が浸透、装飾技法も共有するという、地域的な特徴を認めることができる。加えて、同じような図文構成が6世紀という時間幅で、規模を問わず一定程度共有される。この耳納北麓の在り方は、当初は首長間交流というある程度の政治的な関係も窺えるが、6世紀後半～末の耳納北麓の群集墳展開期には単なる政治的な関係だけでない在り方も想定しうる。

一方、田主丸地区と一部の吉井地区、福岡地域以外の遠賀川流域、京築地域は、基本的に首長級の古墳に彩色系装飾が採用されており、群集墳の中小古墳にまで浸透せず、その分布も散在す



図 566 日岡古墳の具象文（舟）



図 567 多重同心円文  
（久留米市 下馬場古墳）

る。これは基本的に装飾を石室に描くという風習や情報は知っていたものの、装飾図文の地域差も含めて装飾古墳を受容する背景が各地域により異っていたことを示す。

6世紀後半、福岡地域の装飾古墳では、同心円文や円文、敲打技法などの面で田主丸地区との関係性が認められる。また福岡市吉武熊山古墳にある全周しない円文は、飯塚市川島古墳と共通するなど、広域的な地域間交流が想定できる。この背景の一つとして考えられるのが、福岡地域では528年に糟屋屯倉、536年に那津官家が設置され、倭王権の直接的な支配が強まったことも影響している可能性があるものの、装飾を描くという行為に対し、特定の地域集団が主導する形ではない。5世紀からの継続性も含めて、装飾古墳の展開に倭王権が直接関与した積極的な証拠はなく、各地域集団が選択的に石室



図 568 西館古墳後室奥壁

室に装飾を行う行為を導入し、主体性を保持しながら導入した姿がみえる。

装飾図文からみえる地域間交流については、筑後川流域では円文が主体となるが、鳥栖市田代太田古墳は奥壁を連続三角文で埋め、南筑後地域は連続三角文を多用するなど、熊本県の菊池川流域の影響が看取できる。五郎山古墳奥壁中央の水鳥？は、珍敷塚古墳の大型蕨手文に形態上似ている。黒色の強調する古墳としては、王塚古墳、川島古墳、竹原古墳、田代太田古墳がある。みやこ町皆見大塚古墳の赤一色の「×」の装飾は、連続三角文の退化したものと捉えられるが、宗像市桜京古墳の平行線とX印を組み合わせた浅い割付線による三角文を始まりとし、宮若市損ヶ熊古墳、北九州市日明一本松塚古墳に類例があり、京築地域と遠賀川流域との関係が窺える。このように、葬送儀礼という場面では首長間の遠隔地交流が存在していたと想定できる。

その中で、中間市瀬戸横穴墓群 14 号墓では彫刻と彩色を併用し、馬に乗り矢を射る騎射人物や動物、鳥、船、円、三日月、格子目文を表現しており、県内でも稀有な装飾が孤立的に存在する。この系譜については明らかではなく、今後追求すべき課題の一つである。

また、桂川町天神山古墳、損ヶ熊古墳、皆見大塚古墳では台付短頸壺、装飾付器台を用いた葬送儀礼が認められる。このような関係は装飾古墳の展開にも通じ、須恵器や土師器などの遺物とそれを用いた行為の復元と相関させることで、装飾図文からみえる地域間関係が、描き手の派遣のみの事象なのか、葬送儀礼が総体的に影響しあっているのか把握できる可能性がある。

加えて、耳納北麓の装飾古墳は、西側に開口するものが多い。河野一隆は、羨門から光が差し込むことで同心円文を浮かび上がらせる演出が取られていた可能性を指摘する（河野 2021）。非装飾古墳では、葬送儀礼の場面で布幕を垂らした、タペストリー的なものが存在した可能性など、考古資料からは実証が難しいが、様々な可能性を考慮した視点も重要である。



図 569 田代太田古墳（佐賀県鳥栖市）

### 3. 装飾古墳の保存活用

装飾古墳の保存・管理、活用の共通的な課題・方針については、平成 26 年（2014）の『古墳壁面の保存活用に関する検討会 装飾古墳ワーキンググループ報告書』で整理されている。装飾古墳は発見された後は経年劣化を防ぐことは難しく、経年劣化にどう対応するか、福岡県として取組の方向性を整理する。

#### （1）積極的な保護とモニタリング

今回 78 基を認定した装飾古墳は貴重なだけでなく、本書でも示したように、当時の人々の死生観や他界観、地域間交流、社会構造の実態をより一層深く理解する上で重要な資料であり、原則指定等の保護の対象とすべきである。平成 27 年（2015）に飯塚市山王山古墳、令和元年（2019）にみやこ町皆見大塚古墳が福岡県指定史跡、令和 6 年（2024）に益生田古墳群が国指定史跡となっており、今後も価値付けが図られた装飾古墳については、指定に取り組んでいく。

また指定等の保護措置が図られている装飾古墳でも、装飾図文周辺に対応が偏りがちである。装飾の保存に関しては、墳丘の流出等が装飾の保存に影響が出ているか確認するとともに、保護を必要とする範囲を明確にするため、装飾に影響がない範囲での埋葬施設を含めた墳丘全体に対する対応も必要である。例えば、王塚古墳では、令和 2 年度に『特別史跡王塚古墳保存活用計画』を策定し、今日的な視点での保存・管理の現状の整理と課題を抽出し、保存・活用を図るための必要な事業等の実施計画を定め、温湿度計測の強化、支柱の取り換え等による保存環境と活用の幅を広げる取組を行っている。装飾古墳は、保存・活用に関する基本的な考え方や保存・管理的確化、中長期的な観点での取組が特に必要であることから、国指定だけでなく、地方指定を含

めて、保存活用計画の策定が求められる。

一方、指定の有無に限らず、十分な保存施設を持たないものや体制・施設が整備されるまで土嚢などで密閉するなどの措置は、壁面に異常が生じたとしても気づかれないまま、被害が進行してしまうリスクがある。全ての装飾古墳に求められる条件に応じた保存施設の早急な整備は現状難しく、かつ墳丘・石室構造や周囲の環境など個々で条件が大きく異なるため、一律的な保存・管理はできない。モニタリングも含めて膨大な人的・費用的なコストが継続的にかかる



図 570 王塚古墳石室内の支柱

が、放置しておくとなり返しのつかない事態になる。モニタリングが図れていない古墳についてどのように対応していくか、今後対応策の検討を進める必要がある。

さらに近年、敲打による装飾古墳の事例が増えているが、石室の石材や鉄分の析出など保存自体にも問題があり、かつ凹凸が少なく、デジタルを用いても記録自体も難しい部分があり、記録方法も含めてどうやって保存していくか検討する必要がある。

装飾古墳のモニタリングは、地元の教育委員会等の管理団体が主にカビを対象に目視や写真により情報を蓄積してきた。ただし、保存施設があるところはガラス越しの観察であること、個人の観察力に頼るため、限界があり客観的な分析も難しい。すでに保存施設が完成している装飾古墳についても、可能な限り装飾の劣化の進行を遅らせることが重要で、定期的に石室内だけでなく、墳丘周囲も含めた記録をとりながら監視し、変化が生じないように対処することが重要である。

その中で三次元計測による定期的な経過観察と温湿度データの双方の蓄積は、十分とはいえないが装飾古墳の変化や劣化の原因に対する対応策と予防策を検討することができる基礎資料となる。またモニタリングによる客観的なデータを蓄積しても、モニタリングはあくまでも結果なのでその形成要因を調べる必要があるが、適切な分析手法やそれを実施する機関が全国的に見ても少なく、データが十分活用されていないものも少なくない。このため、実施可能なモニタリング手法と結果の分析方法の確立、加えて効率的な新たな測定機器と技術の導入等の必要性がある。特に、三次元データと温湿度データのリアルタイムでの統合モニタリングによるデジタルツインは今後有効な対策となりうるものであり、その動向を注視していく。

加えて県内の装飾古墳は、基本的に保存施設が完成しているものが多いが、多くの古墳で老朽化が問題点となっている。保存施設は装飾古墳全体の保護に極めて重要な役割を果たしているため、気密性の高い扉の設置等の現状で速やかに対応可能な対策、保存施設の点検やメンテナンス、改修に関する方法論を検討する必要がある。

以上のような石室内の環境を安定させるための必要な措置、公開の具体的な方法、保存整備後に生じた問題などの共有など、市町や県、関係機関を含めた組織的な古墳管理が必要である。

古墳管理を行うにあたり、横断的な組織レベルで情報交換が有効であり、福岡県装飾古墳連絡協議会のような横断的な情報交換の場を利用し、課題や事例を関係自治体と共有していきたい。

## (2) 三次元計測の有効性と課題

今回三次元計測による石室の図化を行ったが、従来の実測図作成と比較すると、必要とする時間・経費のコストが飛躍的に抑えられるだけでなく、図文と石室の関係を客観的に三次元の位置情報として記録できる。定期的に三次元計測による記録をとれば、装飾だけではなく、石室自体の経過観察の基礎資料、デジタルアーカイブとして極めて有効である。

また石室という立体的な構造物のどの位置にどのように装飾が描かれているか、どのようにみえたのか、様々な場所や角度から切り取り、室内の施文位置と装飾モチーフとの関係などを立体的に検討ができる三次元データは非常に有効である。短時間で保存への影響も低くかつ低コストであることから、多くの装飾古墳を対象に今後取組が求められる。

ただし、水系で割付をし、残された顔料を拾い上げ、図化した従来の石室実測に比べ、三次元計測は観察・熟覧という点では格段に劣る。これまでの研究では調査担当者が長時間図文と向き合い、観察することで、図文の種類、構成などが明らかにされてきた面は大きい。当然、装飾の保存という面で石室に長時間滞在する従来の図化方法は当然保存という面では問題があるが、三次元データでどこまで考古学的な進展が図れるのか、装飾古墳に対する問題意識の低下（蔵富士2014）という指摘にどうこたえるのか、大きな課題である。

## (3) 装飾古墳の活用

装飾古墳は常にモニタリングとその対応が求められ、体制とランニングコストがかかり、地元住民の関心を持ってもらうためには、さまざまな形で「情報の発信」が必要であり、装飾古墳の持つ遺跡としての価値を高めるための実践的な活用と保存との両立を考える必要がある。

県内の彩色系装飾古墳で常時公開可能な装飾古墳は竹原古墳のみであるが、実物大模型を博物館・資料館に設置している事例としては、五郎山古墳、日明一本松塚古墳、竹原古墳、仙道古墳、王塚古墳がある。現地保存の原則を貫く限り、装飾古墳の保存と公開の両立は常に付きまとう問題であり、活用のため、装飾古墳を抱える県内の市町が共同で一斉に同時公開する事業などを行ってきた。この一斉公開は活用に資する反面、密閉された保存施設内に大人数が一時期に立ち入る機会が促進されているという面がある。一回あたりの公開人数を限定して公開する方法など、最終的にどちらかが古墳への負担を軽減できるのか、今後モニタリングを進めながら、議論を進める必要がある。

保存のためには公開はしないという考え方もあるが、永続的に保存していくためには地域住民の理解と協力が必要である。地域住民自らが地域の文化・歴史を深く知り、地域の魅力を考えるきっかけになるような取組が、地域の誇りやまちづくりに繋がり、最終的には文化財を将来にわたって確実に遺していくことにも繋がる。三次元データは、web上でオープンデータとして公開



図 571 実物大模型（可動式）  
（筑紫野市 五郎山古墳館）

することで、地域住民に対して装飾古墳に対する意識を高めることができ、今後の保存活用の面でも不可欠なものである。本事業による三次元データを公開することで、立体画像として装飾古墳を体験することができ、情報発信の面でも大きな威力を発揮すると考える。

ただし、近年奈良文化財研究所と産業技術総合研究所が共同で開発した「全国文化財情報デジタルツインプラットフォーム」は、三次元データと三次元地理空間情報を統合表示可能である。本事業での三次元データを登録し、広く公開することで、誰もが容易に装飾古墳に関する情報にアクセス可能な環境づくりを目指していく。

最後に、装飾古墳はこれまで先人たちによって、様々な課題を抱えながら永年培われてきた装飾古墳の保存活用の取組を基礎として今日まで貴重な文化遺産として保存活用されてきた。近年では地域によっては観光資源としての要請も高まっている。

装飾古墳の保存活用にあたっては、多くの専門的な知識・経験・技術を有するため、各自治体に配置された文化財専門職員のみでは対応できないことも多い。そのために、本県では『福岡県文化財保護大綱』で示した方針に基づき、本県の文化財専門職員の専門性を生かし、各自治体と現状や課題を共有し、方針や計画の策定について、必要に応じて支援していくこととする。

さらに、装飾古墳の調査・保存に関する技術的助言・支援、公開方法や教育普及、防災対策等への助言を行い、それを実行していくための推進体制の充実についても促していく。また、市町の文化財専門職員間で保存活用に関する情報を共有できるよう、装飾古墳連絡協議会以外でも様々な機会を捉えて連携を促すことで、県内の装飾古墳全体の保護の基盤強化につなげ、保護に必要な資質や能力の向上を図っていく。

これまで福岡県の文化財保護行政は、直接地域で文化財保護の重要な役割を担う市町村との連携によって歩んできた。文化財保護課と九州歴史資料館は、装飾古墳の情報収集・研究・保存のための拠点機関として市町村等地域からの要請に答えると共に、県民一人ひとりが装飾古墳に親しみ、認識を深めていくことができる取組を展開していく。

#### 引用・参考文献

- 河野一隆 2021『王墓と装飾墓の比較考古学』 同成社
- 古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ 2014『古墳壁画の保存活用に関する検討会装飾古墳ワーキンググループ報告書』
- 蔵富士寛 2002「装飾古墳の展開 - 菊池川流域 -」『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第 51 回埋蔵文化財研究会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 九州国立博物館誘致推進本部
- 蔵富士寛 2014「装飾古墳の保存と活用」『古墳と現代社会』古墳時代の考古学 10 同成社
- 蔵富士寛 2023「九州の装飾古墳」『九州考古学の最前線 1 縄文～古墳編』季刊考古学別冊 43 雄山閣
- 神保公久 2002「筑後川流域の装飾古墳」『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第 51 回埋蔵文化財研究会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 九州国立博物館誘致推進本部
- 八木健一郎 2002「筑前地域の装飾古墳」『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第 51 回埋蔵文化財研究会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 九州国立博物館誘致推進本部
- 丸林禎彦 2002「円文・三角文の展開」『装飾古墳の展開～彩色系装飾古墳を中心に～』第 51 回埋蔵文化財研究会発表要旨集 埋蔵文化財研究会 九州国立博物館誘致推進本部
- 柳澤一男 2022『装飾古墳ガイドブック 九州の装飾古墳』新泉社
- 山崎純男 2019「福岡県宗像市桜京古墳にみられる船の線刻壁画をめぐって」『郵政考古紀要』辻尾榮市氏古稀記念歴史・民族・考古学論攷（I）

# 報告書抄録

ふりがな	ふくおかけんのそうしょくこふん							
書名	福岡県の装飾古墳							
副書名								
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書							
シリーズ番号	第288集							
編著者名	大庭孝夫・岸本圭・吉村靖徳・吉田東明（編集）・進村真之（編集）・小嶋篤							
編集機関	福岡県教育委員会							
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7番7号 Tel : 092-651-1111（代表）							
発刊年月日	2025年（令和7年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふくおかけんない そうしょくこふん 福岡県内に所在 する装飾古墳	ふくおかけんないかくしちょうそん 福岡県内各市町村					20220401 ） 20250331		福岡県 装飾古墳 総合調査
所収遺跡名	種別	おもな時代	おもな遺構	おもな遺物	特記事項			
福岡県内に所在 する装飾古墳	墳墓	古墳時代	古墳・横穴墓					
要約	<p>福岡県では令和4年度から6年度の三ヵ年間に、県内に所在する装飾古墳を対象として考古学的な情報の収集と整理を実施した。対象とした古墳・横穴墓は115基を数え、そのうち装飾古墳として認定したのは78基である。</p> <p>調査にあたっては、福岡県装飾古墳総合調査基本方針に基づき、第一次調査として既存情報の収集と整理を実施した。第一次調査の成果に基づき、第二次調査として現地確認と三次元計測作業を実施した。</p> <p>調査成果をまとめるに際し、既存情報と今回の調査所見とを総合して県内装飾古墳の情報を整理し、考察を加えた。それらの成果を報告書にまとめた。</p>							

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
J H	2120253
登録年度	登録番号
6	0001

福岡県の装飾古墳  
福岡県文化財調査報告書第 288 集  
(下 巻)

令和 7 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会  
〒 838-0106 福岡県小郡市三沢 5208-3  
印刷 株式会社 三光 福岡営業所  
福岡県福岡市博多区山王1丁目14番4号



